玉句集

2001 RENKU NENKAN

連句協会

連句年鑑

平成十三年版

連句年鑑（平成十三年版）目次

「第十九回連句協会全国大会の記」……8
「第二〇回連句協会全国大会の記」……11
「第十五回国民文化祭　広島２０００連句大会」……12

評論　エッセイ

『芭蕉自筆　奥の細道』を読む
〝かるみ〟への道をたずねて……森山昌枝……13
連句の評論と実践……二村文人……41
近衛中将藤原実方……狩野康子……48
連句のコスモロジー―言語と唯識と―……矢崎硯水……52

回顧

平成十二年の連句界……土屋実郎……64

〈表紙題字・今泉宇涯〉

〈カット・磯　喜雨〉

作品

青葉城連句会
「冬囲い」……68
青葉連句会
「小春日」……69
あこね連句会
「川開き」……70
あした連句会
「流し雛」……71
「流燈」……72
「翁より」……73
「時雨ごと」……74
「淑気かな」……75
「芽吹き」……76
「秋燕や」……77
「蟻走る」……78
「雪を蹴飛ばす」……79
あした連句会えびね支部
「走り梅雨」……80
あしべ俳諧塾
「鷹舞へり」……81
亜の会
「歩む人形たち」……82
「海の底」……83
天霧連句会
「参籠や」……84
天の川連句会東京支部
「猿に着せたき」……85
彩連句会
「寒牡丹」……86
鮎倉橋連句会
「七夕竹」……87
鮎須川連句会
「葛咲いて」……88
鮎連句同好会
「菖蒲咲く」……89
「雨のつくし」……90
「菊晴れ」……91
あるふぁ会
「梅雨晴」……92
伊賀連句会・西之丸座
「獅子の舞」……93
伊賀連句会・高旗の座
「木の芽吹く」……94
伊賀連句会・花菖蒲の座
「つばくらめ」……95
池袋連句会
「大瑠璃や」……96
「玫瑰や」……97
伊豆芭蕉堂連句会
「烏賊釣舟」……98
伊勢原連句会
「神在す」……99
市川俳諧教室
「捨田水田」……100
「裏見の滝」……101
「佛頂面」……102
一粋会
「百合鷗」……103
いなみ連句会
「あの岬」……104
茨の会
「首尾一巻」……105
「風交や」……106
「最終講義」……107
「蟬時雨」……108
「琥珀」……109
WEBめぎつね座
「連句KUSARI」……110
NHK文化センター青山
「冬萌」……111
「初旅」……112
桜花学園大学連句研究会
「イルボン（日本）」……113
丘の上連句会
「戦無き」……114
桶川連句会
「芭蕉一叢」……118
小野連句会
「鍬の柄に」……119
おぼろ連句会
「旱り梅雨」……120
「颱風の眼」……121
海市の会
「神戸ルミナリエ」……122
解纜
「美は乱調に」……123
香川県連句協会
「胡砂昏く」……124
香川連句会
「綿津見の」……125
河童連句会
「小雨坊」……126
勝山連句会
「焚火守」……127
桂の会
「春風や」……128
かびれ連句会
「遠山」……129
「山繭」……130
「老の口笛」……131
「植田」……132
「蜘蛛の糸」……133
「おぼろ夜」……134
苧庵連句会
「兎小屋」……135
歌林連句会
「傘がない」……136
川内連句会
「百年の計」……137
神田川連句会

「初山河」……138
神田義仲寺連句会
「秋の蟬」……139
きさらぎ連句会
「草萌」……140
木の会
「病懶に」……141
岐阜県連句協会・加納連句会
「草餅」……142
岐阜県連句協会・源氏連句会
「支考忌」……143
岐阜県連句協会・朱の会
「助命壇」……144
岐阜県連句協会・花のわさび
「陣屋の松」……145
岐阜県連句協会・みよし野連句会
「朴香り立つ」……146
錦心会
「うつせ貝」……147
くさくき
「冬鷗」……148
「鴛鴦」……149
「カーネーション」……150
「春帽」……151
「寒明け」……152
「滝涸れて」……153
「絵日記」……154
「秩父連山」……155
くさくき北九州支部
「新涼や」……156
「大残暑」……157
「石礫」……158
興聖寺連句会
「愛宕石仏」……159
ころも連句会
「永き日を」……160
「返り梅雨」……161
「曲家」……162
「冬日」……163
さくら草連句会
「桜しべ」……164
「おこり炭」……165
佐久良連句会
「十薬の花」……166
「鯛」……167
三尺童
「旅の糸」……168
「匂い幽かに」……169
鹿の会
「三ガ日」……170
「秋深む」……171
「夏燕」……172
「桜紅葉」……173
慈眼舎連句会
「涼風や」……174
獅子門
「寒さかな」……175
「啼く千鳥」……176
「埋火や」……177
「世界遺産」……178
「冬桜」……179
「美濃言葉」……180
下町連句会
「三年目」……181
「斑鯉」……182
紫薇の会
「雲湧いて」……183
紫冥庵連句会
「斑雪」……184
「運河」……185
「牛の艶」……186
樹氷連句会
「郭公や」……187
湘南吟社
「遠富士に」……188
「鶴岡八幡宮奉納俳諧之連歌」……192
上毛連句会
「澄む水を」……194
しらぎく
「一筆箋」……195
しらさぎ
「汐入川」……196
尋牛会
「地名バーチャル紀行
安芸・備後」……197
新庄北陽社
「市芸術祭参加正式俳諧」……198
「社創立記念正式俳諧」……199
深大寺連句会
「無人是貴人」……200
「キムチ屋」……201
青宵俳諧柴庵
「節分けて」……202
「バーミアン」……203
「南天に」……204
清流連句会
「法師蟬」……205
浅春連句会
「秋立ちぬ」……206
せんだい座
「面白屋」……207
創の会
「型か形か」……208
草門会
「時に娼婦」……209
連句啐啄会
「春の空」……210
「老夫婦」……211
「秋灯」……212
大智院連句会
「踏青」……213

第六天連句会
「初　詣」……214
「風炎ゆる」……215
「平和の碑」……216
「榊　の　実」……217
多度津連句会
「風　光　る」……218
多摩連句会
「冴え返る」……219
中央連句会
「初　秋」……220
「渡　し　舟」……221
「大　花　火」……222
土筆・有楽帖三吟会
「雀　来　て」……223
筑波連句会
「黒潮の沖」……224
「白銀の富士」……225
「草萌ゆる」……226
「銀座極月」……227
「浅　間」……228
津幡連句クラブ
「縄　電　車」……229
「佛　の　日」……230
「銭五の碑」……231
「寒九の水」……232
つらつら吟社
「ほととぎす」……233
手児奈連句会
「明　易　し」……234
天神連句会
「馬賊芸者」……235
東京義仲寺連句会馬山人記念会
「踏みなさい」……236
「立秋の翅」……237
道後連句会
「冬ぬくし」……238
桃天樹唫聚
「下　萌」……239
徳島連句懇話会
「時　雨」……241
「公　達」……243
都心連句会
「初　波」……244
「青時雨忌追善俳諧連歌」……245
「大山阿夫利神社奉納
俳諧之連歌」……246
栃木県連句協会
「山あげ祭り」……247
富山県連句協会
「ターバンの少女」……248
長尾連句会
「蛍　狩」……249
渚　の　会
「寒　玉　子」……250
習志野連句会
「初　花」……251
南草連句会
「寒　梅　に」……252
にほんご連句会
「風成樹形」……253
俳諧工房
「既静けく」……254
俳諧接心
「夢を紡げば」……255
「いとけなき」……256
「春は愛し」……257
「下　町　の」……258
白水台連句会
「初　音」……259
芭蕉記念館連句会
「初　鴉」……260
「秋　寺　の」……261
「桜　吹　雪」……262
「侘　助　や」……263
巴世里連句会
「立侍の月」……264
「黄　水　仙」……265
「梅雨深む」……266
はねだ連句会
「花百句（花づくし）」……267
B　面
「八つ手花」……268
東松山連句会
「狸　罠」……269
BIGLOBE電脳連句
「ゴールデンウイーク」……270
「薔薇胸に」……271
「淑　気」……272
日の出連句会
「野ざらしや」……273
ひよとり連句会
「秋　蝶」……274
「初　景　色」……275
「沈　丁　花」……276
広野連句会
「比良ふところ」……277
風蘭社
「初しぐれ」……278
「野　焼　き」……279
富士裾野連句会
「高橋路草先生追悼　笹子鳴く」
……280
「高橋路草先生追悼　寒鼎」……281
北杜連句塾
「牧　の　牛」……282
「原　爆　忌」……283
勾玉の会
「胎児まがたま」……284
松山連句協会
「陶　芸　展」……285
松山連句教室

「七　日　粥」……286
窓連句会
「太　平　洋」……287
摩耶連句会
「蕪　風　や」……288
丸亀連句会
「茄　子　漬」……289
三重県連句協会
「夕　端　居」……290
水無月連句会
「面輪良き雛」……291
「初　暦」……292
「煉　瓦　蔵」……293
宮城県連句協会
「人　間　に　褒」……294
未来図連句会
「切株に座す」……295
「町淑子さん追悼　銀砂灘」……296
木曜会
「真薦敷けば」……297
杜の会
「詩嚢まで」……298
八千草連句会
「王様クレヨン」……299
「縞　馬　の」……300
山国連句の会
「鳶　の　空」……301
瑶沙連句会
「石　地　蔵」……302
「梅　雨　寒」……303
葉門連句会
「藍文字の」……304
「新　涼　や」……305
よみうり文化センター川口
「白　牡　丹」……306
よみうり文化センター京葉
「春　一　番」……307
竜神連句会
「七　味　や」……308
「芽吹くもの」……309
連句会ひらめき
「無告の市民」……310
「鬼やらい」……311
連句会「遊」
「秋ざくら」……312
連句会遊子座
「日本丸満帆」……313
「もう師走」……314
「ものの芽に」……315
連句倶楽部
「斎藤八千代雅姉追善　雪女郎」……316
連句研究会
「良　寛　忌」……317
連句〝な〟の会
「銀座即事」……321
連句パワー
「大正の裸」……322
連楽会
「枯　菊」……323
若泉連句会井
「炎　昼　や」……324
若笹連句会
「鰯　雲」……325
和光大学
「二〇〇〇年度和光連句」……326

全国連句グループ概況……3
連句協会会員名簿……27
〈編集後記〉……磯　直道／小川廣男

第十九回連句協会全国大会の記

第十九回総会・全国大会は、平成十二年六月二十五日(日)日本青年館ホールに於いて開催された。当日は総選挙の投票日と重なり、また今にも降り出しそうな梅雨空にもかかわらず、本大会始まって以来の百八十名に近い出席者となった。

受付の総元締めは、いつものように式田和子常任理事。開会の一時間半ほど前には既に準備に取りかかられたとのこと。大会等の行事は、当日の昼食・茶菓の調達ばかりでなく、会場の確保にはじまり大会の通知、講師の依頼、会場で使用する名札・諸用紙に至るまで実に多くの準備と手続きのもとに成り立つ。

さて、第一部の司会は総務を担当し協会の運営に積極的にかかわっておられる小林しげと常任理事。式次第により、開会のことば、会長挨拶と続く。開会のことばは、宇咲冬男副会長。上田渓水会長は、五分間との前置きで、兎に角変化に富んだ連句をたのしく巻きましょう、と先達の言葉を引いてぴったり五分のスピーチ。日本人の挨拶はとかく長過ぎると言われているが、短いばかりでなく無駄がない。総会の定番である議案の事業報告や決算報告等は用意さ

れたペーパーに基づき、土屋実郎副会長兼理事長から提案・報告され了承された。

連句協会会報が、これをお一人で編纂されていた宮下太郎常任理事に代わって、引地冬樹常任理事を主任格とした六人体制になったこと、決算書の年会費収入の次年度以降分を、収支勘定と区分して、新たに預り金勘定として整理するようにしたことなどが主な改正点である。

連句実作会は、十一時三十分から昼食を挟んで十五時までの三時間三十分。俳席は予定の二十五卓より三卓増えて二十八卓。型式は捌きに任される。隣席の立句を覗かせていただく。やはり梅雨空や選挙を句材にしたものが多いようだ。テーブルの中央に据えられているのは「たてばやし」。来年の国民文化祭の開催地・群馬県館林市の地酒である。初対面の挨拶や再会をよろこぶ談笑。時々起こる愉しそうな笑い。捌きの真剣な声など、熱気の中にも連句会ならではの刻の流れと独特の盛り上がりはいつもと同じである。

講演会は定刻の三時から。講師は、大手前女子大学教授であり、大阪天満宮鷺の会の会長を務めている鈴木亨先生。島根大学で教鞭をとり、早くから学生と連句を楽しんでいるよし。俳号の長軀とは、職業柄黒板に書き付けるあの白墨のことで、白墨亭長軀（ハクボクテイ・チョーク）として多くの方がご存じの先生である。

演題は「西山宗因のめざしたもの」で、講演用のリーフレットに基づき懇切に解説。四十三歳にして大阪天満宮連歌所の宗匠となり、大阪俳壇の指導者となった宗因について、「去来抄」や「三冊子」などからの抜粋を介して、縦横にして且つ楽しく、研鑽の深さを十二分に披露される。不易流行の論考は芭蕉のイデアではなく、宗因であったことなど改めて認識するところであり、先生を生業としているだけにサービス満点のぴったり一時間の授業！　であった。

閉会の挨拶で近松寿子副会長は、連句という素晴らしい文芸にかかわっていることを心新たにしたと、連衆のここ ろを代弁して締めくくる。

第二部の懇親会は会場を移し、四時過ぎからベテランの中尾青宵常任理事の司会で進行。乾杯の音頭は、遠路福岡県から出席された八木紫暁理事。特別ゲストスピーチは、今秋の〝第十五回国民文化祭ひろしま二〇〇〇〟の開催県

出身であり、大会のために何かとご尽力をいただいている元「酒」の編集長・佐々木久子先生。スピーチによると、会場となる竹原市は酒処であり、市長さんは酒造屋出身であること。そして瀬戸内だけに魚が旨く、着物の似合うところであるとも言う。だから文化祭には是非着物でいらっしゃーい、と会場を盛り上げる。パーティは立食形式ながら、ゴージャスな雰囲気。佐渡の銘酒「天の川」はこちらに鎮座。あちらこちらで交歓の輪が生まれ、思いおもいに交流を深めているのはいつもの風景。

時あって、解説付きの一本締めは伊藤薮彦常任理事。いつものことながら梅雨空を吹きとばし、お開きまで充実したひとときを過ごさせて戴く関係者のご苦労に心から感謝を申し上げる。

なお、最後となりましたが、次の国民文化祭の開催地である群馬県・館林市から、市の紹介とともに、文化祭を単なる式典に終わらせることなく市民に理解を深めながら盛り上げてゆきたい、との力強い挨拶があった。また、群馬県プレ大会の実施について実行委員会議長の笠原氏から、フェステイバル・ギフ大会の実施について伊藤白雲氏から、天の川連句大会の実施について福田眞空氏から、地球連句シンポジウムの開催について臼杵游児氏から、それぞれ紹介があったことを付記しておく。

（福田太ろを）

第二十回連句協会全国大会の記

平成十三年四月十五日(日)、例年より二月繰り上げ、代々木の日本青年館・国際ホールに於て、記念すべき第二十回標記大会が全国から百四十余名の連句人を集めて開催された。因みに第一回全国大会は、連句懇話会発足の翌年、昭和五十七年に京都・延暦寺会館に於て開催されている。

第一部は、十一時から小林しげと氏の司会、近松寿子副会長の開会の言葉に始まり、上田渓水会長の酒脱な挨拶のあと、土屋実郎理事長（兼副会長）による平成十二年度事業報告と収支決算報告および平成十三年度事業計画案・収支予算案の説明があり、すべて原案通り承認された。次いで、本年度の「国民文化祭・ぐんま」への参加要請が伊藤稜志担当理事からなされた後、会場は、昼食のお弁当を広げながらの賑やかな一期一会の連句実作に移った。

第一部のとりは、光田和伸氏の講演〈蕉風俳諧の真価〉。二条良基の百韻その後の歌仙を連歌式目の視点から詳細に分析なさり、部立（素材分類）、句数（連続制限）、句去（間隔制限）の三項目について、例えば句去は広い世界を見よということであるなど興味深い知見を披露して戴いた。

第二部の懇親会は、恒例となった中尾青宵氏の名司会で始まり、佐々木久子氏、磯直道氏らの挨拶などを交えて賑々しく和やかに進んだ。名残尽きない面々も伊藤薮彦氏の一本〆で、又の再会を約しての散会となった。（小川廣男）

第十五回　国民文化祭広島2000
連句大会

平成十二年十一月四日、第十五回国民文化祭広島2000連句大会は「瀬戸内の風　そこにうたがある」のもとに広島県竹原市に於いて開催。募吟六五五巻。竹原町並み散策、前夜祭約二百名、大会当日三百名。ねじり鉢巻きの幼稚園児による竹原音頭の幕開けに始まり、郷土出身エッセイスト佐々木久子さんの「酒と旅と私流連句」と題しての歯切れよい講演会、連句実作会は四六席を数えた。

大会直前に竹原女子高校一年生五名、教諭二名の見学申入れあり、急遽これを実作会に切りかえて、いきなり連句を巻くことに。その後、半歌仙「普明閣の巻」首尾のため、三度高校を訪問、交流をあたためているが、先ずは学生の歳時記のある暮らしの必要性を強調しておいた。今後の学生、若者への連句普及に得るところ大であった。

国民文化祭を終えての感想は、行政・協会・地元担当者三位一体の難しさを痛感した。又、万全を期したつもりだが、宿泊関係に混乱とご迷惑をおかけしたことを反省している。

末筆ながら、作品応募に、又大会に多くのご参加頂いた全国の皆様に厚くお礼を申し上げます。

（広島県連句協会会長　高橋昭三）

『芭蕉自筆奥の細道』を読む

〝かるみ〟への道をたずねて

森山昌枝

（連句の基本的性格である）即興的・機智的・共有空間の三条件と共に、脈々と伝わっているはずの批判精神、反骨精神、遊びの精神を失ってほしくないと切に思うのである。

昨年度の本年鑑の冒頭に、尾崎左永子氏はこのように述べて居られる。尾崎氏が昨秋、朝日新聞に寄せた〝ひとこと〟欄のことばも忘れがたい。

……言葉のもつ香気、格みたいなものがどんどん失われていく。心配なの……日本語を大切にする心を育てなければ……

（二〇〇〇年一〇月二七日）

この二つの呼びかけに共感を覚えるとともに、課題の大きさ、問題の深さに、今いささかたじろいでい

る。しかし、言葉が人間や社会のありようをそのままに反映する文化であるとするならば、この文化の危機的状況に対して　どのような対応をいま迫られているのか。日本語を愛し、母国語文化を育くむ者への真摯な提言に応え、私自身の課題として取りくみたい。尾崎氏の主張を発句とし、それに付句してゆく力はいまだしである。しかし一座の末席につらなる一人でありたいとねがいつゝ、『おくの細道』の芭蕉自筆本（野坡本）と向き合ってゆきたいと考えている。

発見の報道を聞いたのは一九九六年一一月二五日、眼にしたのは、岩波書店刊行の『芭蕉自筆奥の細道』（一九九七年一月二四日）に依ってである。丁度その頃、私は芭蕉晩年の〝かるみ〟について、とつおいつしていた。芭蕉が『おくの細道』の執筆、推敲に精根をかたむけていた時期は、彼が〝かるみ〟への歩みを進めていた時期と重なる。推敲の跡をたどることで、その道の一端がつかめるのではないか。そう考えたことが、改稿の問題に取りくんだ動機である。

『おくの細道』の執筆が、いつ始められ、どのような過程をへて今日の姿をなしたか。それはまだ明らかではない。「成稿に達したのは、おそらく素龍に浄書を托した元禄七年四月をあまり隔たらぬ以前のことであったにちがいない」（潁原退蔵・尾形仂訳注『おくの細道』角川文庫一九六七年）というのが、通説である。推敲の過程については、「芭蕉は、自らいったん『奥の細道』の清書をした（今回発見された「自筆本」＝筆者注）が、縦横無尽の訂正をなしたために、改めて誰かに写しなおさせた。それが、現在「曽良本」と称されるものである。そして、手元に返ってきた「曽良本」を、芭蕉自身で誤写を直したり……何度目かの推敲を加えたりして、素龍に渡して清書を委ねたのであろう」（前掲『芭蕉自筆奥の細道』解説）とさ

れている。一六八九（元禄二）年、「細道」の旅に出立して以来、成稿にいたる約五年間の芭蕉文学の展開と、その時期のもつ意味について、熊谷孝氏はこう述べている。

蕉風の到達点のひとつは、『奥の細道』の旅の後、『猿蓑』の興行（一六九〇・九一、『七部集』第五編）において示された「さび」の伝統につながり、それに媒介されつつ、封建的な人間疎外に苦悩する元禄期民衆の悲哀を、離俗の姿勢において歌いあげようとするものである。しかも、そのような哀感を、俳諧が体質的にもつ「をかしみ」の中にとらえようとするのである。さらに、そうした「さび」に徹し、そこを越えたところに、やがて「軽み」の境地が生まれる。『七部集』の第六編『炭俵（すみだわら）』（一六九四）は、蕉門の人々が最後に到達した、そのような俳境の所産であった。かれのことばを引いていえば、「俳諧の益は俗語を正（ただ）す」点にある。それは、「実ありて、しかもかなしびを添ふる」ものでなければならない。しかし、「高く心を悟りて俗に帰る」こと、すなわち、「浅き砂川を見る如く、句の形、付心ともに軽き」句境こそ、風雅究極の理想にほかならない。「門しめてだまって寐たる面白さ　芭蕉」の境地である。（『世界思想教養辞典　日本・東洋編』東京堂出版　一九六五年刊所収）

〝かるみ〟をどう捉えるかについては議論のあるところであるが、私はここを原点として考えてゆきたい。またこの稿では、自筆本において訂正、挿入、削除など重要な改稿がおこなわれた個所の中から、いくつかのくだりを取り上げ、その改稿のあらましと、それがどの方向にむけられ、どのような意味をもつもの

であるのかを、〈印象の追跡〉によってうかがってみたいと考えている。

ただ、『おくの細道』については、一通り読んだことがあるに過ぎない。熊谷孝・尾形仂・山本健吉の諸氏をはじめとする多くの研究、示教に負うところが大きいことを申し添えておきたい。

テキストは、「芭蕉自筆『奥の細道』」〝本文編〟を使用した。ただし読みがなは原則として省略。自筆本のなかでの改稿は、その順にしたがって初稿、再稿、三稿とよぶことにする。

歌枕を探る　遊行柳

又清水流るゝの柳は、芦野の里にありて、田の畔（くろ）に残る。此所の郡守、故戸部某（こほうなにがし）の、「此柳見せばや」など、折〳〵（をりをり）の給ひこえ給ふを、「いづくのほどにや」とおもひしを、けふ、この柳のかげにこそ、立寄侍（はべり）つれ。

田一枚植て立去ルル柳かな

（原文には句読点、「　」はない）

このくだりは、自筆本において大幅な改稿が加えられた個所の一つで、初稿は次のとおりである。

芦野（ママ）ゝ里に清水流るゝの柳有／田の畔に残る此所の郡守常に（たひく）／かたりきこえ給ふをいつくの程にや／

とおもひ侍しにけふこの柳の／かけにこそ立寄○(侍)つれ

水せきて早稲(苗)たはぬる柳陰・（→柳哉・）

書かれている事柄それ自体はほとんど変わっていない。「此所の郡守」芦野民部資俊の民部の唐名をそえ、「故戸部某」と書き加えられていることが目をひくくらいである。（その中の「故」は、曽良本への「書込」において削られる。）

しかし、文体的発想の面では一新されているといえよう。初稿は、説明的、それゆえ静的であって、書き手の思いが充分に伝わってこないうらみがある。それに対し再稿は、心の起伏――「いづくのほどにや」とかねて思いを馳せていた西行の歌枕の地への足どり、心の躍動が文のリズムに表れている。目読では感じとれないものが、声に出して読み、初稿と対比することによって心にくいほど伝わってくる。「又清水流るゝの柳は」と強い響きをもって言いおこされ、「芦野の里にありて」とリズミカルにつゞき、「田の畔に残る」と結ばれる。「此柳見せばや」と「いづくのほどにや」とが対をなして、二人の対話のありようが髣髴とし、文にもめりはりが生まれ、イメージを豊かなものにしている。こうした地の文のリズムが「田一枚」の句のそれと見事に呼応していることも見逃せない。これによって読み手もまた、その世界へといざなわれる。ともに佇み、思索に誘われる。そのような動的な文体に生まれ変わっている

道の辺に清水流るゝ柳蔭しばしとてこそ立ちどまりつれ　西行

かたわらを涼やかな水が流れ、爽やかな風が吹きわたり、葉ずれの音さえ聞こえてくる。心和む風景である。ひとつの思いを胸にしている旅人。その人の感動が、読み手の胸にすっと入ってくる。巧んだところが微塵もない。西行が古典を媒介に自然に迫っていった詩人達とは異なり、対象にじかに向きあった詩人といわれる謂れが肯ける。

この歌枕の地に立って、芭蕉は何を受け止め、それをどう「すり上げ」て俳諧に受け継いだのであろうか。

初稿　水せきて早稲（早苗）たはぬる柳陰
再稿　水せきて早稲（早苗）たはぬる柳哉
三稿　田一枚植て立去ル柳かな

初稿「柳陰」の句からは、柳の蔭で西行の世界に思いを馳せながら、眼前の農民の手わざに見入っている姿が思い浮かぶ。この時季の彼らの営みを、その手順に随って素朴に言い重ねるところに、農民の暮らしへの視線も感じとれる。「清水」が田を潤す水となって蘇っている。しかし、「柳陰」の一語がしめすように、詠み手はまだ西行の世界に身を浸しているといってよい。

しかし再稿では、「柳哉」と詠みかえられ、「哉」一語の変化が一句を俳諧に転ずる大きな一歩となった。西行の歌が媒介した現実がつき放され、対象と詠み手との関係が一新されている。「哉」によって余情が深まり、かつ詠嘆に流れることからすくわれている。読み手のイマジネーションも、それによって解放され

（『新古今和歌集』日本古典文学大系（岩波書店）による）

る。だが、この句によっても「しばし……」に托された西行の思いが、充分に汲みあげられたとはいえない。

たしかに初稿、再稿の二句では、中世の和歌で素材になることの殆んどなかった農民の生活の実景が捉えられている。しかし、この二句は元禄期に流行をみたといわれる景気の句――風景などを興ある様に詠んだ句――と大差ないのではないか。柳の一語によって、西行への挨拶がかろうじて果されている。

「田一枚」の句ではどうであろうか。歌の抒情が確かに受けとめられ、かつ新しい俳諧に飛躍した。歌枕の地に立ち、思いをめぐらす詠み手の心の動きが、上五、中七によって象徴的に表現されている。単なる懐旧、慨嘆でなく、西行の詩心に触発され、己の課題に思いをめぐらしている心の動きが、放心の時の経過とともに読者のイメージにゆさぶりをかける。詠み手は、柳に思いをのこしつつ、前途への覚悟を新たにして立ち去ったのであろう。「立去ルル」の語の響きがそれを感じさせる。と同時に、農民の働くリズムと詠み手の心のリズムとが、響き合っているように感じられる。動詞が活きている。西行の歌には、彼以外の人影はない。芭蕉の句には、近世社会の基底を担う人々の姿が生動している。雑階級者として、自己の立場を自覚し、その立場にたつものにして初めて見得るものを徹底して見ぬき、聴きとめようとしている。そうした創造主体の姿勢をこのくだりの改稿は感じさせる。

ところで、「立去ルル」は西行の「立ちどまりつれ」をふまえた表現であり、「一句全体が西行の歌に和した挨拶の句とされている。それにしても、和するといゝ、挨拶するというのは、作者の内面に即していうと、どういうことになるのであろうか。私は、そこに芭蕉の俳諧の精神、方法が息づいていると考えたい。他者の世界を感情ぐるみまるごと受けとめる。そこでの鑑賞＝印象の追跡＝批評を媒にして、自己の「世代」

の現実を対象化する。新しいことば（発想・表現）による真の挨拶とは、他者への付和、叩頭でなく、対象との深い対話、対決、内なる格闘に裏づけられたものであろう。そうした自立した自己と他者の関係による酬和こそ、「細道」の旅において芭蕉が自らに課した姿勢であったにちがいない。歌枕に因む諸先達は、この時期の芭蕉にとって、連衆以上の「連衆」として、かけがえのない〝内なる対話〟の相手であったと思われる。

のちに「芭蕉去てそのゝ(の)ちいまだ年くれず」（『蕪村句集』一七八四（天明四）年）と詠んだ与謝蕪村（一七一六～一七八三）は、五十数年後（一七四三（寛保三）年）にこの地を尋ね、「遊行柳のもとにて」と前書きして、次の発句をのこしている。

柳散(ちり)清水涸(か)れ石処(ところ)〳〵

（『蕪村自筆句帳』一七八三年以降頒布）

蕪村の眼に映じた「封建制の解体期へ向けての動揺期」（熊谷孝「近世文学における異端の系譜」〈講演レジュメ〉一九八一年）の現実、文学への反映をそこに見ることができる。と同時に、蕪村の句から逆に照し返すことによって、「田一枚」の句に反映された元禄期の民衆世界のさまを、より生き生きと想像できるのではないだろうか。

興ずる心　笠嶋

「歌枕見てまいれ(ママ)とて、陸奥ノ守になしてつかはされ、つゐにめしかへさ
細道菅菰抄』岩波文庫『おくのほそ道』所収）反俗、風流の貴人、王朝歌
けた西行のまなざし、それはまた芭蕉にも通じるものであったにちがいな
家集』『新古今集』等に、芭蕉にあっては〝あさか山〟〝笠嶋〟のくだりに

みちのくににまかりたりけるに、野中に、常よりもとおぼしき塚の見
将の御墓と申すはこれが事なりと申しければ、中将とは誰がことぞと
りと申しける、いと悲しかりけり。さらぬだにものあはれにおぼえけ
渡りて、後にかたらむも、詞なきやうにおばえて

朽ちもせぬ其名ばかりをとどめ置きて枯野の薄かたみにぞ見る

西行

（『山家集』岩波文庫）

「釈阿・西行のことばのみ、かりそめに云ちらされしあだなるたはぶれご
れらは歌に実(まこと)ありて、しかも悲しびをそふる」（『許六離別ノ詞』　一六九
思い起こされる。西行の実方への思慕の念が、これらの言葉の通りに表現
詞なきやうにおぼえて」西行は和歌に思いを托す。彼にとって和歌（詩）

三（元禄六）年）とのことばが
されている。「後にかたらむも、
とは一体何であったのか、その

一端が自ら語られているように思われる。

一方、笠嶋のくだりは、和歌の詞書にみられる主情性が払拭され、抑制の利いた表現になっている。五月雨どきの行脚の労苦、めざす歌枕を指呼の間にのぞみながら、むなしく通りすぎねばならない無量の思いをさらりと句に托している。

あぶみ摺（ずり）、白石の城を過て、笠じまの郡（こほり）に入れば、「藤中将実方の塚は、いづくの程ならん」と、人にとへば、「これより遥右に見ゆる山際の里を、みのわ笠嶋と云。道祖神の社、かたみの薄（すすき）、今に侍る」とをしゆ。此比（このごろ）の、五月雨に、道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながらながめやりて過るに、「みのは、笠じまも、五月雨の、折にふれたり」と、

笠嶋はいづこさ月のぬかり道

このくだりの改稿は、句のあとに記された「又狂哥して曽良に／戯ふる／旧あとの／名にもある哉みのわ笠しま」を削り、地の文の末尾に「みのは、笠じまも、五月雨の、折にふれたり」を補ったことである。後補の部分は、それ自体が句ともいえる含蓄のある表現である。実方のねむるみのわ、笠嶋の地名は、風狂の旅人にとって深い縁（えにし）が感じられ、不遇のうちに世を去った実方への思いとそれが重なるとき、思わずことばをもって興ぜずにいられなかったのであろうか。単なる縁語、ことばの洒落にとどまらない〝をかしみ〟を、この一節は感じさせる。「……五月雨の折にふれたり」という〝泣き

笑い〟をうけて、さながら連句の呼吸で、次の句が詠まれる。

笠嶋はいづこさ月のぬかり道

初稿は「笠嶋や」であった。「笠嶋は」のほうが句に流れが生まれ、切実感が深まる。実方の霊に歌を手向けずにいられなかった西行の思い、その歌に共感を禁じえない芭蕉の心、その地を踏むことができないからこそ募る思いが、「笠嶋はいづこ」の呼びかけに、思わず口をついて出たような軽やかさで表現された。

この句について、山本健吉氏はこう述べている。「曽良の『書留』にも元禄四年撰の『猿蓑』にも「笠嶋や」となっている。それが元禄六年の『奥の細道』には「笠嶋は」になった。「笠嶋や」は重く、「笠嶋は」はかるい。芭蕉は晩年にはかるみということを唱導したので、たった一字のテニヲハながらこの句でも「笠嶋は」にかるみをとったのである。」（『奥の細道』講談社一九八九年）。『おくの細道』の推敲がどの方向にむかってなされたかに言及した指摘として注目しておきたい。

詠み手の無量の思いを旅の味わいに転じてゆく〝諧謔〟の心、世の中への嘆き、悲しみ、怒り、それゆえの「倦怠」に堪え、そこからの回復を人間にもたらす〝興ずる〟精神は、俳諧のかなめであろう。（〝あさか山〟のくだりにも、同様のものが感じられる。）

西行にとって和歌は、他におきかえることのできない表現様式であった。そのことを確認しえたとき、俳諧の道一筋に生き貫いた芭蕉の文学の内実が何であったのかを、改めて問い直してみようと考える契機となった。俳諧が芭蕉にとって「他に対する闘いであると同時に、何にもまして自分に対する闘い……精神の自由を限りなく必要とし、それをこよなく愛する民衆的人間としての自己の存在証明を求め、それをこよなく愛する民衆的人間としての自己の存在証明を賭けた闘いの詩」（熊谷孝「芭蕉文学への視角」『文学と教育』一九八一年八月）であるという指摘を重く

受けとめてゆきたい。

古人の心　壷ノ碑

自筆本における壷ノ碑のくだりは、流布本とほとんど変わっていない。ところが貼紙の下に、次の草稿が隠されていた。

再稿

壷　碑　市川村多賀城に有。

つぼの石ぶみは、高さ六尺余、横三尺計歟。苔を穿て、文字幽也。四維国界之数里を印。「此城、神亀元年、按察使、鎮守苻将軍、大野朝臣東人之、所置也、天平宝字六年、参議東海東山節度使同将軍恵美朝臣朝獦、修造也。十二月一日」と有。聖武皇帝の御時にあたれり。むかしより、よみ置る歌枕、多くかたり伝ふといへども、山崩、川流て、道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り、代変じて、其跡たしかならぬ事のみ。(を)注1ここに爰至りて、うたがひなき、千歳の記念、今眼前に、古人の心を閲す。注2行脚の一徳、存命の悦、羈旅の労をわすれて、泪も落るばかり也。

注1　流布本「事のみを……」

注2　「閲す」の貼紙の下の初稿は「みる」

初稿

市川村多賀の城は往昔境守(さかいもり)の／舘舎也つほの石碑このところに／あり凡堅七尺あまり横五尺／計にみゆ苔を穿(うがち)て文字か／すかなり四維国界の道の数／里をきさむ造栄(従)鎮守苻／将軍陸奥守朝狩と有おなしく／安察使何某修造を加えて神亀／宝字六年霜月と印ス聖武／皇帝の御時にあたれりむかし（以下「みる」を除き改稿なし）

「神亀宝字」など実在しない年号が正され、「何某」が固有名詞になるなどの変更が加えられたが、何より重要な改稿は、碑文をそのまま採っていることである。（四維国界の里数、位階などが省かれているものの、曽良が『名勝備忘録』（元禄二年成立）に写し取ったものを原にしたのであろう。）この改稿は一体何を意味するものであろう。

〈改稿〉の問題を、佐藤嗣男氏は「井伏鱒二の文体――改稿の問題を中心にして」（『井伏鱒二』東郷克美他編一九九六年六月双文社出版）において、次のように整理している。

井伏の多種多様にわたる改稿過程を見て行くと、井伏の〈改稿〉は、改稿一般についても言えることだが、大要、次の三つのパターンに類別して見ることができる。

(1) 主題的発想（主題にむけての、現実把握のための発想）に変更がない限り、その文体的定着（言語媒体(メディア)による主題的発想の形象化・客観化の実現）を保障する言表（―言語表現）のより優れたものを求めての見直し。

(2) 主題的発想の深まりによる言表の見直し。
(3) 主題的発想の変更による作品全体の見直し。

（中略）作家はコトバ刺激をとおして読者にダイナミック・イメージ（典型としての現実を把握するための躍動的なイメージ）を喚起させようとする。そして、その作用因としてのコトバ（コトバ信号）のありようを検証し操作し直し続ける。そうした作家の表現過程における改稿を、〈主題的発想〉と〈文体的定着度〉との関連において問題にしたい（後略）。

氏の整理に学んでいえば、壺ノ碑のくだりを初めとする改稿は、(1)を含みつつ、その主眼は、(2)の「主題的発想の深まりによる言表の見直し」にあたるのではないか。

『おくの細道』は生前には公表されていない。素龍に清書をさせた最終稿を携えて上方への最後の旅にのぼり、それを兄の松尾半左衛門に贈ったと伝えられている。『三冊子』の「あるとしの旅行、道の記すこし書るよし物がたりあり。是をこひて見むとすれば、師のいはく、さのみ見る所なし。死て後見侍らば、是とても又あはれにて見る所もあるべしと也」（くろさうし）との記述から、その意図を推測するばかりである。しかし、全文にわたって並々ならぬ改稿の手を加え続けたことは、自身の詩精神の深化とそれに見合う表現の確立にむけての営みであると共に、未来の「読者」を内にあたためてのことであったと考えられる。

初稿の前段は、表現が不充分であるばかりか歴史的事実に誤りがある。「行脚の一徳、存命の悦……泪も落るばかり」の感激のよってきたるところが充分に伝わってこない。改稿にいたって印象は一変する。碑文をほぼそのままに写し、事実をして語らしめている。対象そのものを読者に媒介し、感動をともにしな

がら、共に古人の心を探ろうとする姿勢といえようか。遊行柳ほかのくだりの改稿においても目指す方向は同じであろう。この改稿によって「聖武皇帝……」以下にも生命がふきこまれ、作者と感動を共にする道が開かれた。前段の改稿によって、後段もまた実質的に改稿されたといえよう。また、「壺碑　市川村多賀城に有」という前書のもつ強い響きは、末尾の「行脚の一徳……」のリズムと呼応して、このくだり全体の調子をひきしめている。「古人の心をみる」が「古人の心を閲す」に改められ、この一語の変化もまた碑文の改稿を受けているのであろう。「千歳の記念」を前にして、芭蕉の脳裏にどのような「古人」が浮かび、その心を「閲」したのであろうか。読者の想像をかきたててやまないものがある。

碑文につづく「聖武皇帝の御時にあたれり」との一文は、読み返すたびにゴシック体で書かれているような強い印象をのこす。一体、〝本来の読者〟のうちに喚起された時代相はどのようなものであったろうか。東大寺の建立をはじめ、馥郁と花開いた天平の文化――。芭蕉に〝菊の香やならには古き仏達〟〝奈良七重七堂伽藍八重ざくら〟など、その時代の俤をうつした名句がある。

私には芭蕉が念頭に浮かべていたものに、『万葉集』があったように思えてならない。この後に足を向ける石巻のくだりでは、大仏鋳造に際して、時の帝聖武に献じた歌を引いて、「『こがね花咲』と、よみて奉りたる金花山……」と記している。『万葉集』編者の第一に擬せられている大伴家持は、晩年陸奥按察使鎮守将軍に任ぜられ、ここ多賀城に由縁の深い人である。関連して思い浮かぶのが、「細道」に旅立つ直前、元禄元年一二月五日、榎本其角宛の書翰である。

……湖春〈北村季吟の長子〉（に）御逢候ハバ御心得、……万葉集出来候哉、急便（に）承度候。五条之老翁〈北村季吟〉、御機嫌いぶかしく奉レ存而已。（圏点筆者）

『万葉集』とは季吟の『万葉集拾穂抄』のことをさすといわれる。「急便」にておいて『万葉集』以来の詩の歴史をふまえ、東国みちのくの自然・文化をその根底のところで探りたいという思いに駆られてのことであったのではなかったろうか。『万葉集』は芭蕉にとって、どのような内なる対話の対象であったのか。これは今後の課題としたい。

（『校本芭蕉全集』別巻一九九一年一一月富士見書房）

母国語文化への眼　奥浄瑠璃

多賀城を経て沖の石、末の松山などを訪ね、塩釜明神の社前に宿をとった「予」は、その夜、奥浄瑠璃を耳にする。

再稿

其夜、目盲法師の、琵琶をならして、奥上るりと云ものを、かたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる、調子打上て、枕ちかう、かしましけれど、さすがに、辺国（流布本　辺土）の遺風、わすれざるものから、殊勝に、覚らる。

初稿

（傍線は改稿部分）

其夜、目盲法師の、琵琶をならして、奥上るりと云もの／をかたる平家にもあらす舞にあらす／吟声わかたつ枕本ちかくかしましけれと／さすがに、辺国の遺風、わすれざるもの也と殊勝に、覚らる。

（傍線は貼紙による訂正部分）

奥浄瑠璃は、「江戸時代から昭和の初め頃にかけて、東北地方一帯に盲目の琵琶法師達によって語られてきた浄瑠璃をいう。東北訛りで語られ……領民達が親しみをこめて、御国浄瑠璃とも仙台浄瑠璃とも呼んだ。……この地方でボサマとかジョウルリさんとか呼ばれた人々が語り拡めてきたきわめて在地性の強い語り物」（阪口弘之篇『奥浄瑠璃集　翻刻と解題』一九九四年二月和泉書院）。語り手のレパートリーは「主流が軍記物で……浅野建二氏が……百十本に分類され（「国語と国文学」昭和三十九年九月号）、内容の重複するものを一曲として調査された高橋秀雄氏の報告では……（判官物　筆者注）二十一曲……計八十四曲」（同前所収　「奥浄瑠璃のテキスト」　林久美子）と報告されている。

「吟声わかたず」とどちらかといえば傍観者的な表現から「ひなびたる、調子打上て」と力強いリズムを感じとったらしい臨場感のある表現への改稿は、高館への前奏として、またみちのくの民衆の判官追慕の情を考え合せると、それは判官物であったかもしれない。語り、謡い継がれ、磨きのかかった「平家」や「舞」（幸若舞曲）、あるいは謡曲になじんだ「予」にとって、「ひなびたる」奥浄瑠璃を耳にしたことは、新鮮な驚きであったにちがいない。辺土に、そのような民衆の心と暮しに根ざした芸能が受け継がれていく事は、千歳の記念を今に伝える壺ノ碑とともに「さすがに辺土の遺風わすれざるものから」との感慨をもよおさせたのではなかろうか。この条の改稿は、民衆のなかに息づいている素朴で生命力にあふれる母国

語文化にふれ、新しい俳境を切り拓くあらたな鉱脈を探りあてたことのあらわれであろう。

蕪村の『奥の細道図』にこの奥浄瑠璃を聴く場面がある。一人の男が琵琶法師の語りに耳を傾け、陶然と聞き惚れている。二人の女も加わり、語り手も聴き手も共にノッテイル様子を絵は生き生きと伝えている。

喜劇精神　高館

ここには取りあげるほどの推敲の跡はない。ただ一ヶ所、杜甫の「春望」を引いた「城春にして草青みたり」というなじみの詩句が、ここでは「城春にして青々たり」になっている。曽良本に芭蕉が書き込みを加えた際に改められたものである。

夏艸や兵共が夢の跡

この句は自筆本にあるが曽良の『日記』『書留』になく、元禄四年刊『猿蓑』に載っているところから、それを編む段階で成った句という諦念を吐露した句とする読みが一般的である。私もそのように読んできた。しかし、作品の冒頭から印象を積みかさねるなかで、この句から見えてくるものが次第に変わってきた。無常を無常として受けとめながらも、なお信ずるところに殉じた「兵共」、彼らにある思慕を托した民衆、そしてまた詠み手自身をも突き放し、人間の営みを〝をかしさ〟として見据えている作者の眼を感じるようになったからである。歴史の場に身を置いて、曽良がそうであったように「兼房見ゆる」までイメージを深めたとき、悲哀のなかに

も或る〝をかしみ〟が感じとれてくる。それは冷たい虚無の眼ではなく、人間をまるごとに受け入れていくあたたかな眼差しである。雑階級者として、真の教養を自らはぐくんだ芭蕉にしてはじめて形成しうる視点なのであろう。

『おくの細道』の句は、それ一句を抜きだして読む場合と、地の文を承けた句として読む場合とでは、印象の異なる場合がしばしばある。この「夏艸や」の句ではどうであろうか。加藤楸邨氏は、このくだりでの句・文のありようを「高館の条の前文と交響して反歌のような働きをしている」（『芭蕉の山河』一九八〇年九月読売新聞社）と述べている。同氏をはじめとする多くの方々の示唆に富む提言に啓発されつつではあるが、ここでの鑑賞においては、一方で共感しつつも、どこかしっくりとこない部分がのこる。反歌のはたらきを一応「長歌の意を反復、補足し、また要約するもの」（「広辞苑」岩波書店）と解すれば、ここにこそ俳諧の付合の精神が生きているのではないか。「三代の栄耀一炊のうち」にして「功名一時の草むらとなる」、そうした現実に涙している自身をもまたつき放している。要約でもなく、単なる凝縮でもない。作者によって、地の文の世界が捉え直され、見立て替えられているのではないか。

「夏艸」の季語は、この句に動きと奥行をつくり出している。「草村」「草青々たり」が「夏艸」によって捉えかえされ、想像は四季の巡り、宇宙の運行にまで拡がる。そうしたはたらきをもつ詩語としての機能を果している。『万葉集』の「……夏草の思ひ萎（しな）えて偲（しの）ふらむ妹が門見（かどみ）む靡（なび）けこの山」（柿本人麻呂）、「このごろの恋のしげけく夏草の刈りはらへども生ひしくが如し」（読人知らず）と歌われた夏草の多様なイメージをも同時に喚び覚まされる。「民族語は、いわばその民族的体験の総決算の反映」（『文体づくりの国語教育』一九七〇年三省堂）されたものという熊谷孝氏の論に深く肯かされる。

「夏草や」の切字のはたらきも無視できない。眼前の風景を「や」が浮かびあがらせていく。と同時に、地の文の詠嘆的な気分を開口音の明るい響きがふっきっている。読者のイマジネーションを広い時空に解き放つ。兵どもをとらえて離さなかった「夢」に思いをいたし、掛詞のようにはたらかせながら「夢の跡」ときっぱりと言いきっていく。地の文と句とのあいだに何がしかの間をおき、付合の呼吸で読むとき、句のかもす響きにちがいが生まれてくるのではないか。

卯花（うのはな）に兼房みゆる白毛哉　曽良

義経主従、彼らをとりまく人間群像、それらの人々への共感、愛惜、所業への冷徹にしてあたたかな眼による突き放しと凝視なしには「兼房見ゆる」とはならないであろう。

言葉を重ねるが、声に出し、文のリズムに身をゆだねて読む。その時、句のもつ明るい音にすくわれて、兵どもの所業について、愛情、哀感……をこめた、熊谷孝氏の言葉を借りていえば、「フモールに包まれたサタイア」（前掲「芭蕉文学の視角」）、ある〝かしみ〟が実感されてくるのではないか。

芭蕉は白河以北、義経主従ゆかりの地を巡歴している。曽良の『日記』からもそれが窺える。『義経記』をはじめ、みちのくの民衆がはぐくんだ「兵ども」の物語に、殊のほか心惹かれていたのであろう。叢の民衆の視点を己れ自身のものとし、さらに兵どもに重ね合せ、人間の所業を歴史のなかに、また宇宙の摂理のなかにつかむ。その柔軟な視点を、「細道」の旅の体験が、そしてまた旅を通しての民族の文学との深い対話がもたらしたのではなかろうか。不易・流行の想念ともつながり、「高く悟りて俗に帰るべし」の主張への道程をうかがわせるくだりである。

「兵士が夢の跡」の感慨は、のちに「旅に病で夢は枯野をかけ廻る」の句を生涯のとじめとした芭蕉自

身に、我が「夢」への凝視をさそったにちがいない。その跡を慕ってみちのくを経めぐった榎本馬州（尾張蕉門の雄、露川の高弟。師露川は「盛（さかり）ニいさみ、俳諧もことのほか情（精）出し候故、よほどかろみを致候」と最晩年の芭蕉をして言わしめた人。一七〇二（元禄一五）年～一七六三（宝暦一三）年）は、『奥羽笠』（一七四〇）に次の句をのこしている。

いにしえのありさま目前に古翁の行脚しきりにさへぎる
聞べしは此夏草の夢二つ

内なる芭蕉と心からの対話を交わしえた人ならではの句として印象にのこる。

高悟帰俗　中尊寺光堂

自筆本の二堂開帳のくだりに

五月雨の降（ふり）のこしてや光堂

の句はなく、記されているのは次の二句である。

五月雨や年（とし）〳〵降て五百たび
蛍火の昼は消つゝ柱かな

曽良本への書入れの際に後の二句を削り、両句を「五月雨の」一句に昇華させている。「夏艸や」は前述の

ように『猿蓑』期の詠句であり、「五月雨の」は、元禄六年頃の作ということになる。七部集第五編『猿蓑』から第六編『炭俵』へと展開する時期に成った句として注目される。それは〝かるみ〟へと集約される時期だからである。

「五月雨の年〳〵降て五百たび」の句は単純にして明快であり、人間のにおいのしみ込んだ自然のみならず、奥州五百年の歴史も想像されて親しみをおぼえる句である。が、この句の軽さは〝かるみ〟とはちがう。いかにも理にはまっている。「降て」が「降も」に改稿されたものの結局削除されたのも、もっともであろう。季感が生きている。「昼は消えつつ」は本歌取りのようだが、どうすり上げられているのか。「柱かな」という光のあて方に面白さを感じるものの象徴の域にはとどいていない。

「五月雨の降のこしてや光堂」の句にいたって印象は一変する。「金の柱、霜雪に朽て、既、頽廃空虚の草村となるべきを、四面、新に囲て、甍を覆て風雨を凌、暫時、千歳の記念とはなれり」。この感動を五月雨のなかの光堂というイメージ、その一点に凝縮している。光堂は単に歴史の遺物としてでなく、五百年の風雪に耐え、大切に守り伝えてきた人々の営為の象徴、民族の文化そのものに転化されている。初めに文化ありきではない。文化を所与のものとして、受け身に考えてしまいがちな俗念に衝撃を与える力を、句のイメージは持っている。人間とは、文化とは、という限りない思索に誘う力を秘めた形象にまで高められている。しかも「腸の厚き所より出て、一句の上に自然ある事」（『俳諧問答』）につながる〝かるみ〟の大事な側面が顕れており、『おくの細道』の改稿がめざしたものの一つの典型がここにあるように思われる。より豊かな母国語による

文化を、よりリアリスティックな文学の創造をとねがう芭蕉の〝夢〟が実感される句である。ちなみに、曽良の『日記』によれば、「(五月)十三日、天気明。……平泉に趣。……光堂……秀平やしき等ヲ見ル」とある。その日、平泉は晴れであった。

見立てとしての虚構　市振

象潟より市振への北陸道は、

象潟や雨に西施(せいし)がねぶの花

波こえぬ契ありてやみさごの巣

文月や六日も常の夜(よ)には似ず

荒海や佐渡によこたふ天河

と句を中心に綴られ、艶な雰囲気が漂っている。歌仙では恋の座にあたると受ける位置にある。「恋句なければ一巻といはず、はした物とす」の言葉が示座は一巻の出来映えを左右する要の場である。

「曽良にかたれば、書とゞめ侍る」とある遊女との出会いは、『日記』『書だ「市振ニ着、宿。十三日　市振立。虹立。」とあるのみ。

自筆本では「この一丁が、前丁とは違った条件の下に書かれた徴証が見えし替えられた一丁なのではなかろうか。……差し替えられたのではなかろうか。あるいは、とわたくしはさらに思うより

も、この丁の文章・句の全体が、まったく新しく書き加えられて、最後の段階でこの位置に挿入されたのではなかろうか」（「芭蕉自筆『奥の細道』の謎」二見書房一九七年七月）と鑑定にあたった上野洋三氏は述べている。同感である。

揺曳する前句の情趣を承けながら、「荒海や」の句懐を受け、恋の座のかなめに位置するこの場面において、どのようなイメージを提示しうるか、虚構（見立て）に腸をしぼったことであろう。

北陸一の難所、名さえ恐ろしい親知らず子しらず……。その宿で出会ったとされるのは、「新潟と云処の遊女」である。彼女たちは、宿場の飯盛ふうの安女郎とは勿論、三都の太夫などとも異なるメンタリティの持主として描かれている。『撰集抄』（平安末期～鎌倉初期に成立）の「江口ノ遊女歌之事」に媒介される遊女像にイメージとしては重なりつゝも、歴史的普遍性をもつ人間像として形象されているように思われる。

「……女はことに罪ふかきとうけ給はるに、このふるまひをさへし侍る事、げにさきの世の宿習のほど、おもひ知られ侍りて、うたてしく侍りしが、この二三年は此心いとゞふかくなり侍りしうへ、としたけ侍りぬれば、ふつにそのわざをもし侍らぬに侍り。」

（『撰集抄』岩波文庫）

「江口ノ遊女」は出家譚へと展開する。一方市振では、身の境涯を嘆きつつも「この世」で生きぬこうとする遊女を描く。それゆえ彼女たちは、「定めなき契、日々の業因」を重ねざるをえない。「このふるまひ」

を江口の遊女は、女人であることの罪業とともに、「さきの世の宿習」として出家を遂げる縁にしている。市振ではどうであろうか。

「定めなき契、日々の業因、いかにつたなし」と嘆くことばから、「宿習」、業報の苦悶を読みとるのが一般である。しかしそれだけであろうか。たしかに、「つたなし」は「汝の性のつたなきを」、「拙き身の上」のように、前世からの宿縁をなげく言葉として用いられる。近世という時代からいっても、因果応報の思想が支配する世の中である。しかし、「定めなき契、……」というその措辞、リズムを味わうとき、そうした一義的な読みを超えたものが伝わってこないだろうか。「定めなき契」を重ねることによって、日々つくり出している現世の「業果」にも遊女達の思いは及んでいるのではなかろうか。それは「……あまの子の浪の枕に袖しほ(を)れて、家をうり身をうしなふためし」(『閉関之説』)に言及した芭蕉の言葉とも重なる。

このように読むとすれば、この遊女達から廓という柵のなかで業因を重ねながらも、苦界の穢れに染まりきらない、どこか善良な魂、「気禀(きひん)の清質」を宿した人間味が伝わってくる。それは自然と人間を相手に、力を合せ、額に汗して働く、その暮しのなかで自らに培った民衆の心の「実」に通じるものであろう。芭蕉は、遊女の本情を汲みあげつつ、近世的な民衆像として、この遊女を描きあげているといえるのではなかろうか。

翌朝、僧形の二人を見とめ、彼女らは結縁の願いをこめ、同行を懇願する。切実な願いがわかる予であるだけに困惑はひとしおであったろう。しかし、ただ行手の恙ないことを念ずる精一杯のことわりを「云捨」、別れるほかはない。「あはれさ……」は読者をも「不便」との思いに誘うとともに、困惑の姿を思い浮かべると、思わず微苦笑をさそわれる場面でもある。

一家に遊女も寝たり萩と月

軽やかな句である。〝遊女〟〝寝る〟の語から連想される俗な〝をかしみ〟を生かし、また和歌の伝統的美意識、作法をつき破っている。意表をつく取り合せ、対比の妙も〝をかしみ〟を生む重要な要素となっていよう。これらは、「夏草や」、「荒海や」の句にみられない特徴であり、軽やかさの一つの側面をになっているといえる。しかし、この句は単に軽いのではない。

市振のくだりは、『野ざらし紀行』の富士川の場面としばしば対比され、幕藩制社会の矛盾の捌け口として、体制を下支えする役割を担わされ、社会の最下層に生きる身の上である。それは、肉親と体制の両面から二重に「捨子」された存在である。懇願を振りきって出立する際の「あはれさしばらくやまざりけらし」の感慨はいかばかりであったか。それは単なる感傷、無力感、あるいは傍観者的な諦念と受けとるべきではあるまい。相手の思いを充分に汲みとりながらの、くみとった上での感慨、己れの課題を自覚し、自他の〝定め〟を見据えての感慨であろう。

中身の重さにも拘らず、市振には、富士川のくだりの悲壮感や肩肘はった気負いは感じられない。「事は鄙俗の上に及ぶとも懐しくいひとるべし」(『去来抄』)、ともそれらのものを生の形で出してはいる。それはまた高悟帰俗「浅き砂川を見る如く、句の形、付心ともに軽き」(『別座鋪』)の姿勢に徹している。の精神に裏うちされたものであろう。近世のあるべき文学の姿として〝かるみ〟の俳境をめざす芭蕉の課題意識が伝ってくるくだりである。

遊女の像は、『細道』の旅で巻かれた歌仙にも詠みこまれている。たとえば大石田での「五月雨を集て涼し最上川」を発句とする四吟歌仙にある。

星祭ル髪は白毛のかるゝ迄　ソラ
集に遊女の名をとむる月　翁

「山中三吟」においても有名な付合がある。

霰降左の山は菅の寺　北枝
遊女四五人田舎わたらひ　曽良
落書に恋しき君が名も有て　翁

（『校本芭蕉全集』第四巻　富士見書房一九九〇年）

（「俳諧書留」前掲『おくのほそ道』所収）

曽良の句は、初め「役者四五人」であったが、芭蕉の捌きによって「遊女四五人」に詠みかえられた。遊女の影をもつ句はほかにもある。さらに、大石田での「集に遊女の名をとむる月」の付合から、『猿蓑』における次の「唱和連作」にも思いが及ぶ。

心なき代官殿やほとゝぎす　去来
こひ死ば我塚でなけほとゝぎす　遊女奥州
松嶋や鶴に身をかれほとゝぎす　曽良

これらの句からもうかがえるように、芭蕉は、当時の民衆のさまざまな現実を――それは今日の状況とも重なる――、日頃、そしてこの旅において痛切に体験し、心に刻みつけてきたに相違ない。であればこ

そ、古典に媒介され、それへの思索を通して、さらに共同の制作過程を経ることで、自分たち「世代」が直面している現実を典型化して捉え、現実以上に現実的な世界として描くことができたのであろう。〝かるみ〟は、単に句境、表現形式など創作方法にとどまるものではないであろう。己れ自身の生き様の問題として考えられていたのではなかったか。

勿論、文学者として、その課題意識の前提になるのは、当時の社会、時代の人々の要請であったにちがいない。そうした俳諧の「文体」変革の歴史を、「封建制動揺期の端緒的段階」（前掲　熊谷孝「近世文学における異端の系譜」）を生きた人間芭蕉の精神の格闘の歴史として、またそうした芭蕉の、内なる連衆、また、ジャンルこそちがえ、井原西鶴が浮世草子に、近松門左衛門が浄瑠璃において、内なる読者との対話の歴史として息づかせてみたいと願っている。

――「人間疎外に苦悩する元禄期民衆の悲哀」（前掲）を、その根源においてつかみとろうとした彼らの近世文学の創造の必然性を、芭蕉の俳諧のなかに、人間回復の拠り所として探りもとめたいとねがっている。

この稿は『おくの細道』芭蕉自筆本刊行の直後、ノートとして記したもの。今回、多くの方々の研究に学んで書き改めたいと考えていたが、不慮の事態、体調が災いし、果せなかった。

執筆にあたり、一九九九年度の本年鑑に「西鶴と芭蕉――同時代人の芸術感覚」を書かれた荒川有史氏に懇篤な助言、励ましをいただいたことを記し、心からの感謝を申し上げたい。

連句の評論と実践

二村文人

この原稿の締切り直前になって、いろいろな意味で興味深い連句に関する著作が二点公刊されたので、予定を変えて、それを取り上げることにする。

一つは、饗庭孝男『芭蕉』（集英社新書）で、先祖して西行論の大著もある饗庭氏は、大津の展開に、私は違和感を持った。例えば、には芭蕉の流れをくむ膳所の人達と親交のあった俳人がおり、また明治時代の劇評家饗庭篁村も一族だという。

その饗庭氏が芭蕉を論じると言い、しかも「内実としてとくに強い関心の対象は芭蕉の考え方である。連句を支える『座』の意識、も、連句がつくり出す、個性的な美意識、気づける連衆の即興性、ひらめき、連句の中で流動し、変容し、しかも形をかえない雰囲気と流れに惹かれた。二句を一対としながらも組合せの妙の面白さの中に、日本の心性の相互関係性の働きを見た」とあれば、いやが上にも期待は高まる。私は待ち兼ねて、第十一章「連句『冬の日』」から読み始めた。以下、「軽み」「連句『ひさご』」「連句『猿蓑』（1）」「同（2）」と続く中で、「狂句木枯の」「木のもとに」「鳶の羽も」「市中は」の歌仙を取り上げている。

しかし、その論の展開に、私は違和感を持った。例えば、「狂句木枯の」の巻については、次のように進められる。

「狂句木枯の身は竹斎に似たる哉

この発句は名古屋にいた彼ら（野水や荷兮たち名古屋の連衆・注）への芭蕉の挨拶である」として、竹斎が仮名草子の主人公であること、その竹斎に自身の姿を重ねていることなどが述べられたあと、「脇はこの風態の人をうけて、たそやとばしるかさの山茶花　野水

と詠まれたのである。（中略）それをうけて、

有明の主水に酒屋つくらせて　荷兮

と詠む。（中略）つづけて、

かしらの露をふるふあかむま　重五

と詠む。（中略）これに対して、

朝鮮のほそりすゝきのにほひなき　杜国

と詠む。」

途中省略した部分には、簡単な解釈と付けに関する説明が添えられている。私は、殊更に説明の部分を省略して、同じ言い回しが繰り返されることを揶揄しているのではないかと危惧するのである。本書には、三句目の転じについて触れるところが一切ない。転じという言葉が初めて用いられるのは、「木のもとに」の巻の名残の表の二句目、「文書ほどの力さへなき」のところで、しかも「前句から転じて」とあるので、所謂転じの意味ではない。

また、

日のちり〳〵に野に米を刈

わがいほは鷺にやどかすあたりにて（「狂句木枯の」）

の付合について、「労働する人に対して庵をむすぶ隠者の姿が見えるが、その仮住まいのつつましさが『鷺にやどかす』となったのであろう。寂蓼の感あたりにみちていよう。この隠者に、発句の姿の風狂人の遠い反映を見ることができる」と述べている。「わがいほは」の句は、裏の折立である。この一巻が暗く重い気分に支配されているのは周知のことだが、それだからと言って、「発句の姿の風狂人の遠い反映を見る」のは、連句が付けと転じによって成り立っていると考えるならば、恣意的な読み方と言わざるを得ない。「狂句木枯の」の巻の後半は、芭蕉の付合だけを追っている。「今は芭蕉が受けて、つなぐ様子をのみ見てゆきたい」という言い回しの「受けて」や「つなぐ」が、付合を前句と付句の足し算と考えているようで、釈然としない。句と句は、ぶつかり合わなければ、足しただけでは詩にならない。更に、付けや転じとともに一巻全体の変化と調和が大切であると理解している私には、紙幅の制約は勿論承知しているけれども、芭蕉の付合だけを取り出すことに、どういう意味があるのか、やはり疑問が残る。或は、筆者は飽くまでも付合、それも芭蕉の付合の中に、「文芸的対話」（第十八章「芭蕉の芸術論」）を読み取ろうとして、敢て転じや一巻全体の構成に触れなかったのかも知れない。

しかし、次の例は明らかに連句のルールを逸脱している。

西日のどかによき天気なり

旅人の虱かき行春暮て　（「木のもとに」）

について、筆者は「その花見の風景を見、風をかきながら旅に立って行く人の姿も見える。飛びまわって花の下に語らう人々もいれば旅立つ人もいる。いずれも時の流れの中の花見の人々の変化である」と説明する。これは、打越の「木のもとに汁も鱠も桜かな」と三句がらみの解釈である。旅人は西日の差す街道を行くのであって、花は見ていないはずである。また、

月見る顔の袖おもき露

秋風の船をこはがる波の音　（同）

について、「心が繊細になり恋やせする程のものは旅に出ても物おじをする。涙にぬれて恋する女の、なれない船旅の風景が思いやられたのであろう」と言うが、これも打越の「物おもふ身にもの喰へとせつかれて」と三句がらみで解釈している。船旅を怖がっているのである。

批判的なことばかりを記したけれども、西行論の延長線上にある筆者の芭蕉理解は、示唆に富むもので、和歌の伝統の中にあった俳諧的要素の領域を開拓し、それを独創的なものとして表現しながらも、芭蕉の思考の力点は「高く悟る」ところにあり、「俗に帰る」点で「軽み」を出し、和歌のもっていた俳諧的要素に市民権を与えたと考えることができるのである。そうでなければ、どうして芭蕉がつねに範として、『古今和歌集』や西行のことをつねにもち出したのか、という理由が納得できないであろう。（「芭蕉の芸術論」）

という指摘は、興味深い。

読者は、饗庭孝男氏の評論に、詳細な注釈や式目に忠実な解釈を求めているわけではない。饗庭氏が連句を含めた芭蕉の全体をどのように把握したか、どのように読み解いたかというところに注目しているはずである。ただ、オビに「『連句』への強い関心と執着」とあり（この主語は、当然芭蕉ではなく饗庭氏だと思われる）、しかも新書判というハンディーな読み物であれば、連句愛好者に広く普及することが予想される。本書が連句の読み方の典型として流布することにより、連句に対する大きな誤解の生じることが案じられる。

さて、もう一つは相原裕美「授業実践『連句を楽しもう』の一考察」（『国語教育実践研究』創刊号、愛媛大学国語教育研究会）である。私は面識がないけれども、相原氏は愛媛大学大学院教育学研究科に在籍している。内容は、同大教育学部附属中学校の三年生を対象に、四時間にわたって行った連句の実作と鑑賞の報告である。授業の展開は、おおよそ次のようなものだった。

一時間目　連句について知ろう
二時間目　連句（十韻）を作ろう
三・四時間目　連句作品の鑑賞会をしよう

一時間目は、筆者が自身で作成した「連句ハンドブック」をもとに、付けと転じなど、連句のごく基本的な約束事を解説している。また、ワークシートを用いて、「秋深き隣は何をする人ぞ」の発句に、脇と第三を付けさせている。二時間目には、その第三に続けて、十韻を完成させている。ここでも、ワークシートを用意して、季節の変化や恋句に関する指示を与えている。三・四時間目は、出来上がった作品について、付けと転じ、全体の流れや音読したときのリズムの良さなど、アピールポイントをまとめさせ、それを踏まえて、お互いの作品を鑑賞している。参考までに作品の一つをあげておく。

十韻　脇起「想い」の巻

秋深き隣は何をする人ぞ　芭蕉
うさぎ見上げる月光の中
晩秋やよいつぶれてるサラリーマン
家路がこいしいプラットホーム
ゴミ箱の中に空き缶捨てて行く
遠く聞こえる子供らの声
夏の恋日焼けの肌が熱くなる
夢大きくて夢はかなくて
花開く思いをはせて我は行く
卒業式の後の静けさ

筆者は、手作りのハンドブックやワークシートを利用して連句への理解を深めるなど、さまざまな工夫をこらしている。しかし、必ずしも順調に運んだわけではなかったようで、「反省と課題」の項には、それが具体的に指摘されている。殊に鑑賞会については、「それまで高まっていた連句に対する生徒の興味・関心を半減させてしまうものであっ

た」と言い、「そもそも鑑賞会を行う必要性があったのかというこことが考えられる。生徒は連句の実作を通して相互交流を楽しみ、連句作りそのものも楽しんでいた。敢えて鑑賞会の中でコメントを発表し合う必要性はなかったのかもしれない」とまで述べている。けれども、私は満尾した作品を読むことに、実作とは別の意味があると考える。連句を巻いている途中では、当然のことながらその後どのように展開するかは、全くわからない。巻き終わった作品を鑑賞するときには、既に全体の姿が明らかになっている。同じ一句でも、まだ次の句が付かない状態と、付句が付き、更に一巻が満尾した状態では、句の持つ意味が違ってくるはずである。

このようなことを、中学校の教室での鑑賞に求めるのは難しいかも知れない。しかし、やや余談にわたるけれども、近年の全国大会などの応募作品を見ると、て留めや同字の打越など、満尾した作品を捌き手がどこまで校合したのか、ひょっとすると出来上がったものをそのまま投稿しているのではないかと疑いたくなるような作品も見受けられる。とかく、連句は実際に作るのが楽しいと言われ、私もその通りだと思うが、完成した作品を読み、批評することも、それはそれで面白くあげている事柄で、私が何よりも共感したのは、「作品集が配られた時点での生徒たちの最大の関心事は、同じ発句と脇句で始まった連句が他のグループではどのようにできあがったかであっただろう」という指摘である。事実、生徒の感想の中にも、「(同じ発句と脇句で始まったのに)三句目で同じようなのがなかったのはすごい」という声があった。私は、授業に連句を取り上げることの最大の意義は、正解主義からの脱出にあると考える。殊に、受験勉強に追われていると、文学作品などを読んでいても、唯一絶対の正しい解釈があると信じて疑わない若者が少なくない。しかし、脇に第三を付けるとき、例えば十人の連衆がいるとき、十通りの全く異なった句が詠まれる。それらには、表現の巧拙はあっても、どれが正しくてどれが間違っているということはない。前句に対して、十人が十通りの解釈をした結果である。正解主義から解放され、詠むことがいかに豊かな行為であるかを知る契機になり得ると思われる。ついでに言うと、即興を前提にしている連

句では、マニュアルが通用しないことがしばしばあるけれども、それ自体がマニュアルのあふれる現代に対する批評になっていると見ることが出来よう。

この文章を書いている途中で、『連句協会会報』第一二〇号が届いた。その中に、「明日へはばたく連句」という特集があり、小学生の実作教室に参加した感想や、大学生の作品と並んで、富山県井波町の吉藤一郎氏が、「中学生と連句を楽しむ」という一文を寄せている。全国大会を前に、中学生に連句の手ほどきをする様子は、私も近くにいてよく承知しているが、なかなか気苦労が多く、とても「楽しむ」というようなものではなかったはずだ。

私も勤務校で、大学生に連句の実作を試みているが、一通りのルールを理解することにも、実作そのものにも、ある程度の時間がかかる。しかし、中学校や高校の五十分、大学の九十分という授業時間は、いかにも不自由である（歌舞伎や文楽などの古典芸能を教室で取り上げるときにも、同様の困難が生じる）。第二に、同じ年齢で、しかも同じ空間で一日の大半を過ごしている生徒や学生ばかりでは、どうしても発想が限られてしまう。むしろ、連想の手がかりを示し、緩やかな方向づけをするなど、捌き手（指導者）の力量が問われるところだろう。第三に、あまり季節感に自覚的でない若い世代が、伝統的な季語を入れて句を詠むのは容易でない。これらの課題を克服するには、やはり実践を積み重ねなければなるまい。

もう一つ、国語教育の実践報告を読んで、いつも思うのは、どうやって詩性を保証するか、言い換えると初心者の句をどうやって詩の表現に高めていくかということである。アイディアとして提出された、新聞の見出しやポスターの標語のようなフレーズが、捌き手が一直することによって、素晴しい詩の表現に生まれ変わったとしたら、生徒や学生は、まさに創作の妙味を目の当たりにすることになろう。

私は、一年生の一般教養の授業で、数年来久保田万太郎や富田木歩の俳句、山之口貘の詩など、自分の好きな詩や短歌・俳句を読んでいる。いずれも、文学史の教科書にはほとんど載ることのないマイナーな存在である。けれども、

殊に万太郎の俳句などは、学生の人気が高い。実作と並行して、優れた（と言うよりも、身近にあって共感の出来る）短歌や俳句、或は付合などを鑑賞することも、連句に対する関心を深めることにつながるだろう。

近年、『連句協会会報』をはじめ、さまざまなところで、連句の形式や式目を問い直す議論が盛んになりつつある。確かに、創立二十年を迎え、連句協会が裾野を広げる仕事は一段落したと思う。ここに紹介したような評論や実践の成果を取り込みながら、連句の方法に関する研究がなお一層進むことを期待したい。私にもいささか考えるところがあり、多少の準備をしていたが、冒頭に述べたような事情で、それは稿を改めることにする。

少し予告めいたことを付記すると、最近（現代連句）或は（現代の連句）という言葉をしばし目にするけれども、私は自分が連句を作るときに、格別（現代の）ということを意識したことはない。勿論、江戸時代の連句と全く同じとは思わないにしても、ゆるやかにつながっていると考えているのだろうか。短歌や俳句でも、詩や小説でも、その他演劇や芸能、どんなジャンルのどんな様式でも、あらゆるものを表現するのは不可能である。それぞれの様式には、表現出来ることと出来ないことがある。決して連句の可能性を否定するものではないが、（現代）は連句に過大なものを背負わせようとしてはいないだろうか。

同時に、歌仙をはじめとする連句の形式そのものが問題にされている。しかし、すべての様式は、ある時代を背景に成立している。例えば、歌舞伎や文楽は時に新作が上演されるけれども、江戸時代からせいぜい明治の初期までに、その表現様式は完成している。連句も、今更百韻や五十韻に戻ることはないとしても、歌仙が芭蕉やそれ以降の時代背景とともに定着してきたことを忘れてはなるまい。様式を議論するときには、それを成立させた時代背景が前提になると考えている。

近衛中将藤原実方

狩野康子

笠嶋の郡に入れば、藤中将実方の塚はいづくのほどならんと、人にとへば、「是より遥、右に見ゆる山際の里を、みのわ・笠嶋と云、道祖神の社、かた見の薄、今にあり」と教ゆ。此比の五月雨に道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながら眺めやりて過るに、蓑輪・笠嶋も五月雨の折にふれたりと、

笠嶋はいづこさ月のぬかり道

おくのほそ道の一文です。笠嶋郡は現在の宮城県名取市にあたり実方の墓は、東北本線名取駅から北へ車で約一〇分。名取市愛島（めでしま）塩手に祀られています。

結局、芭蕉は西行の歌、実方の故事を思いやりつつ、心ならずも墓に詣でることをあきらめています。

藤原実方は清少納言・藤原公任と親交があり、一条天皇の御世の九九五年、陸奥守に任ぜられました。中古三十六歌仙の一人として歌集「実方朝臣集」があり、勅撰集に六十四首入集しており、歌人としても名を馳せた人です。

中でも私たちに一番馴染みの深いのは、百人一首の歌でしょう。

かくとだにえやはいぶきのさしも草
さしも知らじな燃ゆる思ひを

（女にはじめて遣はしける　後拾遺集・六一二）

恋一見して豊かな言葉の技法を駆使しており上句がなよやかな恋情を示すに比して、下句がすっきりと燃える心を一気にはき出す趣向でとしてきます。そのあるのでしょうか。

そこで実方に関する多くの説話を検証してみます。

ある時殿上のをのこどもが、東山で花見に興じていたところ、にわか雨が降ってきた。人々は騒いだが実方中将だけが悠然と桜のもとに佇み、

さくらがり雨はふり来ぬおなじくは濡るとも花の陰に

と詠み、人々をして風流人と感嘆させた。その話を天皇に奏上しているのを聞いた藤原行成が「歌はおもしろし。実方は痴なり」と漏らした。このことが実方にも伝わり、行成を恨んだという。

その後、殿上で実方と行成が口論になり、実方は先の恨みも手伝って、行成の冠を取って庭に投げ捨ててしまった。行成は静かに主殿司（とのもづかさ）を呼んで、冠を取り寄せ砂を払って着け「不謹慎な公達かな」と言った。主上（一条天皇）がこれを窓からご覧になっていて、行成は態度良しとして蔵人頭に補せられ、ひきかえ実方は「歌枕みて参れ」と陸奥守に任ぜられたと説話は伝えている。研究者によるとこの事は首をひねる個所もあるらしいが、実方の事蹟や性格から導き出されたものが物語り風に伝えられたのであろう。史実、実方は長徳元年九月二十七日、陸奥守赴任奏上のため内裏に参内し、酒肴の接待にあずかった上、正四位下に昇進し禄を与えられている。

かくして実方ははるばる陸奥守として都より下向してきた。赴任年九九五年といえば、鎮守府は胆沢城（岩手県水沢市佐倉河）であるが、移転前の多賀城（宮城県多賀城市浮島）がその後も陸奥国府として東北支配の拠点であったことから、実方もここに着任したものと思われる。荒々しい武者の多い地に実方のような物怖じしない性格の美男貴公子が来たのだから、地元民は大いに敬い、大いにもてなしたようだ。一方実方も、文字通りみちのくの歌枕を見に遠く出羽国までも馬を駆った。

そして問題の地、名取郡笠島の道祖神の前を騎馬で通りかかったのである。これを里人が制して「この神は霊験あらたかであるから、下馬再拝してお通り下さい」と言うと「どういう神なのか」と実方が問う。「この神は京の賀茂川原の西、一条の北の出雲路の道祖神のおん娘ですが、親の許さぬ商人の男に嫁ぎ、勘当されてここに追放の身となられました。土地のものが崇めて女神としてここへお祀りしたのです。霊験あらたかな神ですから、あなた様も早く都へ帰ることが出来るよう再拝なさいませ」という。すると実方は「さては此神下品（げぼん）の女神にや　我下馬に及ばず」と馬を打って通ったところ、神明怒りを成して馬をも主をも罰して殺しておしまいになった、と伝えられています。

後年、このあたりを通りかかった西行が、実方中将の墓と知って

さらぬだにものあはれに覚えけるに霜枯れ枯れの薄ほのぼの見えわたりて

朽ちもせぬその名ばかりをとどめ置きて

枯野の薄かたみにぞ見る

筆者も連句会の連中と、実方の墓を訪れました。辺りは田園地帯、農家の裏山は竹林が茂り、仙台七夕の竹も多くはここから切り出されるようです。実方中将の墓という標柱をたよりに小道を入ると、ここも欝蒼とした竹林を切り開いた一角。ほの暗い正面には小さな塚があり、中将実方朝臣之墳と石碑の字、五月陽春、まむし草があたかも墓守草のようです。そばの石碑には、実方の「さくらがり……」の歌が彫られ、私共は皆だまりこくって塚に手を合わせました。帰り際、見落としたかたみの薄の小さな一叢を見、不運の貴公子に思いをめぐらしたものです。

そんな思いを忘れかけていた折も折、連句大会にて石飛千可良氏と同席してひょんなことから藤原実方の話となり、後日氏の論文「藤原実方小考」が私のもとに届けられました。それを一読して我が身の不明を恥じるばかりでした。氏の論を借りると、実方は短連歌の名手であったといいます。

六月つこもり御はらへの日、あるやかきのまへをわたれば

さをしかのみゝふりたてゝ神もきけ

といふ人あれば、いととく

をもとをかせるつみはあらじな

くにへくだるとて、まかり申しに、女院にまいりたるに、ものかつくるまゝに、侍従の典侍

みちのくにころものせきはたちぬれと

といひもはてぬに

またあふさかはたのもしきかな

あるところにまいりて、みすのうちにわかき人ゝものいふをききて

すのうちにつつめくひなのこゑすなり

といへど、いらふる人もなければ

かへすほどこそひさしかりけれ

打てば響く付けは実方の面目躍如、恋歌で浮名を流した

彼の生き生きした側面が見えてきます。しかも短連歌といえば、鎖連歌、長連歌を導いた俳諧の連歌の祖。死後、彼は歌の神として加茂の橋神社に祀られたことは諾なるかなと思われます。

幸い、近年は実方の墓にお参りする人が増え、地元でも墓へ続く小堰に赤い橋を懸けたり、更には※「さくらがり」の歌にちなみ、「実方ゆかりの地を桜で埋めよう」と会が結成され、そのことが少しづつ成果を上げているようです。私もこの稿に携わったことをきっかけに、来年は花の咲く時期に参ってみたいと思っております。

※地元の碑には、「桜がり雨は降りきぬ同じくは　ぬると も花の陰にかくれむ」とある。

連句のコスモロジー
―言語と唯識と―

矢崎硯水

連句の楽しさ面白さはどこから来るのだろうか。捌や校合など悩みは多いのだが、おもしろくて漫ろに楽しい連句の源泉はいったいどこに存在し、何と名状されているものだろうかと考えることがある。連句には不思議な力がひそむものらしく、魔力、連句力ということばを耳にするがそれは果たしていかなるものか。

連句の式目や作法は煩瑣（はんさ）でわかりにくく、わたしの携わる現代詩の仲間たちは連句には初心なので、連句人ならとうに承知のことを訊ねてくる。

たとえば折や面について、フォルムに境界を設けて折端、折立という必然性はなにか。神祇だ旅体だ人名だと項目（アイテム）から句づくりさせ、発想の妨げになるようなことをするのはなぜか。恋の句を出せと強要するが、詠み手にまかせたらどうか。さらに夏の句のあとに春の句が付けられると自然の法則に反するという。これらに対して縷縷述べると得心がいくようだし、季節の不順ということも。句と句の間は三年否千年経過しているかもしれず、自然のめぐり通りでないと教えると理解してくれる。

さて、連句に少なからざる興味を示すかれら詩人たちのためにもいささかふれて置きたい。

ご承知のように「三句の渡り」は、「A句～B句～C句」の三句のつながりをいうが、これがもっとも難しいところであり面白いところでもある。AとBは何らかのかたちで付いている必要があり、BとCも付いていなくてはならないが、AとCは逆に離れていなくてはならない。

ここは磁場にたとえることができる。ことばの語感や意味等が互いに引きあう磁力と斥（しりぞ）けあう磁力となっている場所で、しかも定められた長句、短句という形体のボリュームを保ちながらそれぞれのエネルギーがぶつかり合い与奪しあい、収まるべきところで渦巻きをおこす。科学的な原理なら一定方向をさすが、付句は独特のハドロン・レプ

トンの相互作用から予期しない変転をみせ、凝縮された語というほかに、つながりとしての変節を余儀なくされ、慣用になれきらない異化効果を生むこととなる。ここでは散文はむろんのこと短歌などの韻文にもみられない気韻が生動し、新しい詩的発酵が醸しだされるのである。

決められた方角でない走り方、飛び超えた句を認識するむすびつき方は、じつは連句が擁する固有のメカニズムで、三つ物などの短い形体であれすべてこの力学のもとに収斂される。ここは真髄というべきところで、作品のどこをカットしてもそうした姿が眺められ、歌仙ならば三十六歩、一歩も後退せずに進行するのがよろしいというのである。もっとも、そんな作品に出会うことはきわめてまれなのであるが…。

頌歌や牧歌の類でヨーロッパやアジアにも短い詩は認められるが、このようなメカニズムの詩形はなく、その意味で連句は世界的に稀有な文芸といえよう。しかしメカニズムがいかに優れていてもメカニックがへぼでは成功はおぼつかなく、わたしたち連句人一人ひとりは「パロール・メカニック（言葉の匠）」を目指さなくてはならない。

去嫌だ留め字だ自他場だとか、初心ならずも煩わしいものだ。しかしひとたび修得してしまえば手がかり足がかりとなって想が発しやすく、すでに抽出しのありかが分かっているのだから、自分の抽出しをかき回して自分らしい個性が取り出せるし、名付句もうまれるというもの。

式目については古人のさまざまな教えがあり、書き残されている。現代の連句人も連句グループもまたさまざまな考え方があって主張をする。その主張のもとで連句ライフをエンジョイしているのだが、他派と一座して考え方の相違に気づくことがあり、そんなときは垣根を低くして相手と歩調を合わせもする。「でも、わたしはこんなふうに思うのです」などと言いつつ…。

連句大会で意見の違いから刃傷沙汰におよんだという話は聞かないし、極端な違いでないからひと括りにくくったらどうか。現代人にわかりやすい統一したものを作り、簡略なハウツー本を出したらどうかという話もある。それも一面ではたしかによい。しかしながら、矛盾することながら、式目に対するグループや個々人の考え方の乖離と反発、

そしてそれへの対応の仕方は、じつは連句の営為にとって大変重要なものだとわたしは考える。

式目はいうなればカノン（基準）だが、連句人は堅持するにせよ異論をさしはさむにせよ大いに関心をもっている。季の句数や五句去りのこと、観音開きのこと、どんな類例でもよいのだが、古来より俳書や口授を通してあまた残されてきた。そして現代でも多くの意見が述べられ、見解に対して異を唱える人びとやグループがある。

年月をかさねて検証されてきたはずが強固な俳諧の礎とならず、おおよその潮流として小異を残し、中異を抱え、大同につく流れのもとに淘汰される。それは揺揺するやわらかな物体のようだ。こちらから突けばゆらゆらと揺れて向こうへ、向こうが押し戻せばぐらりとこちら側に傾いてくる。形状はたしかに確認できるが摑みどころがなく、仮に摑んだところで確固たる手応えもない、喩えればこんにゃくみたいなもので、「こんにゃくカノン」といえる。

このような可塑性が不確かさ曖昧さにつながり、解釈次第でいかようにも解釈できるファジーな「装置」となり、これが連句を連句たらしめる。海図なき航海、ストーリーなきドラマである連句はうっちゃって置くとあらぬ方向に向かってしまい、ぐずぐずに崩れてしまう。あまり頼りにならない「こんにゃくカノン」ではあるが、これがうまく機能することで付けと転じがスムーズにゆく。

わたしたちは日日の暮らしのなかで憲法を気にかけて生きているわけでなく、六法全書に抵触せぬようにけんかを控え、悪さをセーブしているわけでもない。願わくは法律はいらないが法律がなかったらどうなるか、心配の点なしとしない。へんな言い方だが意に介しないように在るというあり方もある。連句の法律である式目もこれに似ていて、首っぴきで照合・検証するのでなく、座右からすこし離して横目でちらちらと確かめるくらいのスタンスがよろしいのでは。式目を必要以上にあげつらうことは式目のための式目になってしまい、詩の活性をそぐこととなる。—重視と軽視とジレンマがあるのだが…。

韻文は散文にくらべてメッセージの送り手と受け手のあいだが比較的濃密である。マイナーな詩誌や歌・句の結社など、かぎられた仲間への配布、一部公器への宣伝活動くらいのものだが、連句はさらに極端で小さなパイの狭い間

口（奥行きは深いが）からの媒介だ。したがって読み手の享受能力にゆだねられる部分が多く、読み手とのイマジネーションの共有によって成り立つ。（座の文学については、ここでは置くとして）作品としての文学性は解釈や評釈によって引き出され、位置付けられるといっても過言ではない。選句が作句に劣らぬ創造といわれるように、連句の読み手もまた創り手でなくてはならず責任がきわめて重い。連衆が丁々発止とやりあうさまをよく格闘技にたとえるが、連衆はむしろみえない読み手との格闘技といったほうがよい。

ことばは近時、「一次的には音声、二次的には文字を用いて、感情、情報、要求などを伝える機能を果たす、社会習慣的に定められた記号の体系」といわれている。言語史のよりはじめを探ることで言語のいまに光が当てられることがある。

ジャン・ジャック・ルソーは『言語起源論』のなかで次のように述べる。

「最初の人間達の言語活動は幾何学者の言語であったとされるが、我々はそれが詩人の言語であったと見る。なぜならば、人はまずはじめに推理したのではなく、感じたのである。具体的な必要を表わすために人間は言葉を造り出したと主張されているが、そうした考え方は私には支持し難いように思われる」。

さらにルソーは次のように叙述する。

「人間にものを言わせる最初のきっかけとなったのは情念であったのだから、最初の表現は転義的であった。比喩による言語活動が最初に生まれ、本来の語の意味は最後に見いだされたのである。人は事物をその本当の姿で捉えるまでは、真の名で呼ぶことはなかった。人は初め詩的に語るだけだったのであり、論理立てて考えることを思いつくのはずっと後になってからだった。…人々が言葉を置き換えるのは、観念をも置き換えているからにほかならないからであり、さもなければ比喩的な言葉の用い方はなんの意味もないだろう」。

「最初の表現は転義的であった」「人は初め詩的に語るだけだった」とは、たいへん示唆に富む。

コミュニケーションの手段はことば以外にもいろいろあ

るが、ことばは他の方法よりも深遠な意味や内容の伝達性・媒体性にすぐれている他面で、機能が複雑で入り組んだ構造をしている。確実に伝えるためになされた表明がときによって意図に反する方向に向かったり、過不足になったり誤作動が生じる。そして多くの同義語をしたがえて反義語を背後にちらつかせ、両義語で意味を左右にゆらしながら反語であざやかな一撃を食らわす。逆説を弄し文節をがらりと組み換え、たとえれば、リバーシブル・ブルゾンのように両面のおしゃれができる恣意的怪物なのである。

言語や文節、なかんずく単語は体系というツールボックスのなかにあって任意に引き出しやすい「インデックス機能」が備わっているもののようだ。知識、情報、歴史の取り出しや貼り付け絞込みもたやすくできるのだが、連句という表現運動にからめて考えてみるに、連句のモチベーション機能がことばの擁するインデックス機能とうまくマッチし、現代詩、短歌、俳句etcよりも「隠匿物としての言語」という点ですぐれた有効性を発揮する。

わたしたちは事物に対してあまたの意味を付与する習性があり、本来的な語意に加えてプラスアルファーさせ増幅させる。ひとつのことばは時代とともに、使用されるごとにリニューアルされ多様性をもちはじめ（同時に欠落もみせはじめ、本来は死滅しないのだがメディア的には死語という墓場も用意され）、わたしたちの「背景知識」のチップとして積みあげられてゆく。

ルソーを援用すれば、ことばは観念（イデア）であり、その置き換え作業がすなわち詩であり連句である。比喩的な置き換えが連句ということになる…。

繰り返しになるが、深浅は当然あるけれどことばは容器であり入れ子構造であり、ＩＴ的に述べれば、コンピューターで掲示のアンダーラインの箇所をクリックしてリンクすれば、オブジェクト・プログラムに連結し実際にプログラムが使用可能になるような機能をもつ。

季題について考えてみると、季題には「時候」「天文」「地理」「生活」「行事」「動物」「植物」などに分類（別の分類法もある）されていて、多くの天然現象や動植物が列挙されている。また歴史や祭事や人間の暮らしに関わることなど広い網羅ぶり。これを糸口として自然を眺めたり、懐旧

に耽ったりできるのだが、季題の側からわたしたちに問いかけてくるテクスト、美意識のテクストであり、アクセスして表現の現場へ参加できるシステムでもあるのだ。人間が自然に目をむけ、また自然に分け入るとき動植物の多くにアニミズムに通じるものを感ずるのは、季題の果たす効のひとつともいわれている。(季題とアニミズムの委細は稿を改めるほかないが…。)

データの宝庫というべきファイル（記憶装置）で、同時に実作者にとってはツール（表現用具）でもある季題。周知のように季題とは季節を示すために詠みこむように特に定められた連句、俳句の語であるが、一俳句より四季の斡旋による有機的なつながりにおいて、連句のほうがはるかに広くて深い世界をとせるはずである。

余談になるが、さいきん新季題として「パソコン」「コンビニ」「ゲームセンター」などの無季や通ワード的な語に記が話題になっている。いまはたんにキすぎないように思われるが、生活にしみこんで煮詰められてゆくことで、概念が蓄積され内蔵されにとっては得がたい用語になるかもしれず、歓迎すべきことかもしれない。

付合は即かず離れず、不即不離がよいとされる。不即不離とは、二つのものが付きもせず離れもしないデリケートなつながりをいう。親句・疎句という語もあり、親句は前句が詠じた世界の内容にたよってつける付句をいい、疎句は前句の詠じた世界の意味や姿から離れたところにつける付句をいう。不即不離のニュアンスからは親句・疎句どちらもよろしいとはいえぬようだ。

『連歌比況集』に、「蓮の茎。……前句を離れずして、而も離れ〳〵て離れぬやうに有べし。さればこそ連歌を付けば切れ安くして而も其糸絶る事なし」。

と記述される。

また『去来抄』には、「支考曰、付句は付るもの也。今の俳諧、つかざる句多し。先師の日、句に一句も付ざるなし。去来日、付句はつかざれば付句にあらず。付過るは病也」

とある。

さらに「夜の鐘＝見えないが響きあう」、「根をきる＝前句の根っこを断つ」の口伝もあり、付合は俳諧師の心血を注ぐところであったらしい。

現在の連句は、「移り・響き・匂い・位」の芭蕉の流れをくむと考えるのが一般的だろう。しかしその理念が必ずしも理解され認識されているとはいえず、継承されているとはいいがたい。引き継いで加えるものがあればくわえてよいし、進化があってしかるべきだろう。蕉風がすばらしいことは言をまたないが蕉風一辺倒はどうか。文学に唯一絶対はあってはならず、批判性が失われてはならぬ。詩のフレーズに「文芸は神々の晩餐のデザート」と歌われるが、いろいろな食味のデザートがあって悪いわけはない。

「唯識」という仏教の述語があり、『十地経』に「この三界は心よりなるものにすぎない」ということばがある。「自己およびこの世界の諸事物は、わたしたちの認識の表象にすぎず、認識以外の事物は実在しない」の意味だ。

唯識の自己八識と称する広義の意識作用は、第一眼識(視覚)、第二耳識(聴覚)、第三鼻識(嗅覚)、第四舌識(味覚)、第五身識(触覚)、第六意識(知・情・心)、第七末那識(自覚されない意識で我執の源とも)、第八阿頼耶識(前世をふくむ記憶・経験・体験の基底)をいう。

第一の「眼識」から第五の「身識」までを五官(五感)といい、これに第六の「意識」を加えた六つを「表象の自己」とし、さらに第七「末那識」、第八「阿頼耶識」の二つの「深層の自己」をプラスして八識となる。

唯識はインド大乗仏教思想のひとつの頂点とされ、その理論は四～五世紀にかけてアサンガ(無着)とヴァスバンドゥ(世親)という二人の兄弟によって体系づけられる。

「この三界は心よりなるものにすぎない」ということ、すなわち「すべてである心」ということ。わたしたち人間の心がいかなるもので、どんな仕組みになっているかが深く追究される。

これまでも「五官」に「意識」をあわせた六識のベース以外の理解のおよばない基底がいわれてきたが、末那識や阿頼耶識がつかまえられ、深層が理論づけられ体系づけられ、心の深甚がじょじょに解明される。無意識といえばま

ず西欧の無意識が思いうかび、次にフロイトの学説が連想されるのだが、フロイトよりはるか以前に深層心理学に通じる理論が耕されていたのである。

フロイトは人間の心の深層には（イド・エス）原始のエネルギーが充ち、本能にちかく貯蔵されるそれらを性的衝動、リビドーと呼んだ。そして後期の衝動論的には自我リビドーというものが考えられるようになり、意識内で対立・矛盾する意識や前意識や個人的前意識、すなわち自我・無我のレベルの層を還流するとした。

人間の心を階層構造のモデルでとらえるという点について、フロイトと唯識ははじめから一致していると、岡野守也氏はその著書『唯識のすすめ』（日本放送出版協会）のなかで書いている。

氏は「唯識の全体像」として、「空」「一如」「二空」「三性」「四智と八識①②」「五位」「六波羅蜜」「無住処涅槃」をあげ、「空とは決して「何もないこと」ではありません。私たちのふつうの意識・常識では、何かもの（者・物）は、いつまでもあり、それ自体として、ほかのものと関わりなく、いつまでもあると思っているけれども、ものは「そういうふうには存在していない」。それが、「空」の意味だと思います」と述べる。

また「一如」とは、空とそのままつながっている真如・一如だという。「私たちが、花そのものが分離・独立して存在していると思うのは、常識的には間違いではありませんが、深く考えていくとやはり間違いである。本当によく考えていくと、ものはすべてつながり合って起こっている。このことをご存じの言葉で「縁起（えんぎ）」というわけです。……すべてのものは縁によって起こっている。つながりの中で起こっている」。

「六波羅蜜」では、自分がいて人がいて物があってという分離的なばらばらの捉え方をしがちでそれを分別知といい、いろいろな問題の根っこにある。一切を分けて捉えないで、分別しないという心の状態を体験しなければならず、それが修行であり禅定・瞑想であるとする。

「無住処涅槃」では、「自分を自分だけで捉えるという狭い見方で見ていますと、死んだらそれですべては終わりということになります。…大乗仏教―唯識は、そういう、生と死の対立・断絶のある世界や生死が果てしなく続く輪廻

の世界を超えることができるといいます。…この世とあの世、どちらをも自分の固定的な住みか・住処としてしまわない、どちらにでも自由自在にいられる、行き来できるような生き方・心のあり方があるというのです」。

そして当該書籍の小見出しに、「心があるから世界がある？」「全宇宙なしには私はいない」と書き記す。

絵画や舞踏や音楽など言語によらない表現もあるが、ことばを用いての表現はことばによるさまざまな意識が直截付帯するとともに、二歩、三歩と遊離して付帯する場合とがある。事物に対する意識とことばの機能に対する意識と、二つの構造を認めることができると思う。

わたしたちはことばを知っている人間であるがしばしばことばをうしない、五官だけの状態に置かれる。そのような状態にあるときもことばの働きを意識せざるを得ないのであり、いわば言語意識、内的表現欲求というものがあるのである。

「ことばは観念（イデア）であり、その置き換え作業がすなわち詩であり連句である」。

とわたしはさきに書いた。何かを伝えなにかを訴えるということは意識的なことだから、ことばは意識するところから発するが、わたしたちが「夢遊モード」にあるなら、いまだことばの体をなさないどろどろとしたカオスをかかえていることだろう。それは末那識や阿頼耶識の深海に錨を下ろすことかもしれないし、無意識やリビドーの森林をさまようことかもしれない。

詩は知や情や思想を伝え、テーマやモチーフをもつ。当然のことながらことばは発信者の意のままに取捨選択されるが、連句はテーマ・ストーリーがないから夢遊モードにレベルの異境にあるはずである。ことやものを考えることで引き出されることやものでなく、考えない場所、つまり言語が道断されたところから引き出される「偶発的発見」というかたちをとってくカノン」が最大のつかかりになるのであり、連句は無意識との遭遇ともいえよう。

十七音の長句、十四音の短句、この二つの器はいずれも小さいが大きなものが約められた世界だ。小さい具象の断

面から抽象を表現し、大きな抽象から小さな具象を生起させる。付合の長句と短句には広がろうとする力と狭まろうとする危うい力学の相克がある。そして句と句の間や行間には余白、余韻、セリフの間、絵画のグラデーション、歌舞伎の隈取りなど、言外に多くの趣や誇張を託してきたが、消化不良の面をなしてやまない。人間はひとつのものを見て（感じて）いるが、それとは別個の複数のものも絶えず見て（感じて）いて、空間や距離や時間など流れの「巡航」を測っている。そこに在る自分とどこかでそれを確かめている自分と…。

見えるものと見えざるものの対比、ずれやひずみや、心身の乖離、さらには自己生成へのたましいの涵養。それをとらえかたちにあらわすことが文学者やアーチストの仕事だが、言語表現の波打ち際、みぎわの先端にあるのが連句と思うがどうだろうか。

唯識の全体像が示すこととものの捉え方、フロイトがいう衝動のエネルギーの各階層への還流。この二つは交差するところが多いようであるし、ある意味では同一方向にあるようにもみえる。そして複雑な要素がからみあう人間のメンタリティーと言葉がそなえる複合構造は、こと連句にとってこの上ない力だろう。

「移り・響き・匂い・位」と「根をきる」は、連句の付合のありように関してまことにシンボリックな語だ。森羅万象を詠むとはすでに語られてきたが、消化不良の面をなしとしない。「わかってはいるが森羅万象とはいったいどこまで？とてもそこまでは詠めない」という理由で―。しかしながら移りでよく、響きでよく、匂いでも位でもよいのだし、前句の根っこを切ってもよい、切るべきだという。前句と地続きの風景や似たような場所で同一人物らしきがうろうろしていては変化に富む世界はおぼつかないが、蕉風理念であれば強力なキャパシティーを有し、広範な世界が手にできるのではないか。

文芸はドキュメンタリーではなく、リアルタイムで進行していることでも表現者の形容というかたちをとる。たとえ現実の事件であっても引用することで客観が主観となるはずだし、連句の場合はかねそなえた「装置」が作動する。風景であれ心情であれ、他者の心情をいうことであれ、心に取り込まれて付句と（広義で言語が）心になる。付句が

取り込まれたものの産物であるなら、展開がどのようであろうと許されることであり可能であるわけだ。そのような意味で付句には新も旧もなく現在過去未来もなく、すべて同一レベルといってよい。すべて並列できるといってよい。連句がこの世のこと、この世の物語を語ることだけに終始し、たかだか日本周辺の風景を眺めるだけであったなら退屈きわまりないものだろう。

たとえば、黄泉や高天原、ノアの洪水やネス湖のネッシー、エイリアンやクレオパトラ等々の地界・異界は「連句的リアリスティック」な作業場だし、空想して歓声を挙げるもよいし、異星語をしゃべり歴史上の人物の手を握ってもよい。コンドルに魂を託して飛翔し、獣や昆虫の精霊とたわむれる付句を付けてもかまわない。

このようにして仕掛けられる連句のからくりは、唯識の「宇宙意識」に類似・共通しているとわたしには思われる。自己も他者もなく、事と物のへだたりもなく、時間や空間という概念もなくすべてひとつにつながっている。ある部分ではばらばらでもある認識があっても、次につながっていることをも忘れてしまう宇宙に身をおいていることさえときに忘れる。それはパーソナル(自我の確立)のレベルを脱却して、トランスパーソナル(個の超越)の領域に入っていると考えるべきであろう。

詩のそもそもの成り立ちには呪術や祭祀の面がみられるが、詩がわたしたちを突き抜けてゆくことは、わたしたちの精神の解放であり浄化であり、呪文でもあり加持でもある。効用面から眺めれば、現代のみならず遠い時代にも俳諧の連歌にはセラピーとかカウンセリングという部面もあったろう。一部の詩人たちが「真のホモ・ルーデンス(遊びをする人)の持ち物としての連句」に興味をいだくのは、どこかでそれを感じとっているのかもしれない。

宇宙を詠むとなれば(自覚するとなれば)、限りなく疎句になってしまい曖昧の袋小路に入り込むのではないか。仲間内でしか通用しないものとなり、牽強付会や木に竹を接ぐものとなるのではないか。たしかに付かない付句は「付きすぎの病」どころの話でなく、「離れすぎの死」であり、いかんともしがたい。しかしながら蕉風の付合は本来宇宙的だったのだし、連句のメカニズムが橋掛かりの作用をし、連衆心のフィールドが、わたしたちの認識ゾーンや言語

ゾーンが、よきパートナーシップを育てることだろう。

言語学者のマリナ・ヤグェーロ氏は『言語の夢想者』（谷川多佳子＋江口修・両氏訳＊工作舎）のなかで、「「他者」を受け入れるということは、他者を自らに似た者として規定すると同時に異質なものとしても認めることで、言い換えれば、完全に同じというのでもなく、また完全に異なるものでもないというのが「他者」なのです」と書いている。

自我に対する語として「他我」があり、他人も自分と同様に我であるという意味で、他人のなかにある我を指し示す。これに優る連句の心をいう形容はないようだが、それはさておき、なぞの物体である連句のさらなる「レンクゲノム」の解読が待たれる。

回顧

平成十二年の連句界

土屋実郎

平成十二年も連句にとって多彩な年であった。新しい集りとして、松島大会、心敬祭、宗祇五百年祭があり、また先輩追善として芦丈翁三十三回忌、梅游翁十三回忌が行われたことは特筆に価する。

連句年鑑も作品が十二巻ふえて二百六十八巻を掲載することが出来た。結社数も十二ふえて二百二十七結社となったことはご同慶の至りである。

さて連句関係の出版物であるが、これも倍増の感がある。浅野黍穂『癒しの連句会』、浅沼璞『中層連句宣言』、福田眞空『地球連句入門』、安東次男『連句の読み方』、岩波文庫となった馬琴の『増補　俳諧歳時記栞草』上下、浅沼璞『「超」連句入門』、密田靖夫『芭蕉・金沢に於ける十日間』、岡本星女編『春夏秋冬』などが上梓された。

また連句作品集としては、安江眞砂女編『山法師』、吉野の会編『吉野III』、猫蓑会編『猫蓑連句集X』、佐野千遊編『摩耶連句第八集』、大島富朗編『木の会連句集』、武知千代・井上弥生両吟歌仙『にりん草』などがあり、各地連句大会での作品集としては、『松島大会作品集』『片岡白華を偲ぶ連句会作品集』『俵口第五集』『いなみ大会作品集』『津幡大会作品集』『新庄大会作品集』『芭蕉祭作品集』宗祇法師五百年祭連句大会の『奉納作品集』『当日作品集』さきたま連句大会の『俳諧彩の国』等がある。また国民文化祭ひろしま二〇〇〇は竹原市のバンブージョイハイランドで開催され、応募作品は半歌仙六五五巻、当日参会の連句人は約三百名の盛会で、安芸の小京都の雰囲気を楽しんだ。

連句掲載の月刊誌としては、『獅子吼』『あした』『くさき』『俳諧接心』『白燕』『筑波』『とらいあんぐる』『ぐろっけ』等があり、季刊誌としては、『れぎおん』『紫薇』『爛柯』『摩天楼』などが頑張っている。

なお十月、国士館大学に於て行われた『地球連句シンポジウム』は二百余名の参加と、ルーマニア・アメリカ・中国各講師の講演で国際色豊かなものであった。

平成十二年　連句行事一覧表

月	日	協会行事	諸行事
1	29	理事会（日本青年館）	
2	1	協会報（112号）	2／26　片岡白華を偲ぶ連句会（四日市市）
3	4	常任理事会（青年館）	3／5　みちのく松島連句大会（松島市） 3／19　第7回全国連句津幡大会*（津幡市） 3／26　根津芦丈翁33回忌（青年館）
4	1	協会報（113号）	4／29　第四回愛媛昭和連句草創の碑記念連句大会*（松山市） 4／30　第4回心敬祭（伊勢原市）
5	6	理事会（青年館）	5／3　第12回青時雨忌正式俳諧（東京・伝法院）
	14	関西連句を楽しむ会（神戸薬科大学）	5／28　第20回大山阿夫利神社正式俳諧（伊勢原市）
6	1	協会報（114号）	
	25	第19回全国大会総会（青年館）	
7	1	常任理事会（外語学院）	7／9　第2回全国連句いなみ大会*（井波市） 7／26　天神祭に連句船供奉（大阪）
8	1	協会報（115号）	8／23、24、25　第8回天の川を見る会（佐渡） 8／27　第11回千葉支部総会*（市川市）
9	2	理事会（青年館）	9／7、8　第12回全国連句新庄大会*（新庄市）
	30	平成12年版連句年鑑刊行	
10	1	協会報（116号）	10／7　地球連句シンポジウム（東京・国士館大学） 10／8　第7回鶴岡八幡宮正式俳諧（鎌倉市） 10／12　第54回芭蕉祭*（上野市） 10／21　飯尾宗祇500年祭連句大会*（裾野市） 10／22　第12回さきたま連句大会*（熊谷市・常光院）
11	11	常任理事会（外語学院）	11／3、4　第15回国民文化祭ひろしま*（竹原市） 11／12　第3回さぬき文芸祭* 11／23　吉岡梅游13回忌（丸亀市） 11／26　愛媛県民文化祭連句大会
12	1	協会報（117号）	12／3　俳諧時雨忌（調布市）

＊は作品公募を行っている会

作品

—連句グループ五十音順

歌仙『冬囲い』

小野寺妙子捌

この土をしばし眠らせ冬囲い　小野寺妙子
奏でる如く震う雪吊　鈴木文男
新築の青き畳を踏みしめて　小野寺信一郎
着いた猫には家内騒然　伊藤航
珍客へ手料理運び月昇る　男
指ぬめらせて衣被剝く　子
長(ウ)考し次の布石に夜を寒み　航
馬の跳ねいる調教の浜　郎
武豊ファンに女性多いとか　子
表紙を飾る超ミニの脚　男
傘借りてすぐ晴れあがり杖になる　郎
仕込みを抜きて忍者怯ます　航
舟倉の朽ちし水辺の月涼し　郎
蛞蝓匍いしあとのてらてら　男
一歩二歩孫歩み初め皆笑顔　航
眼福と言うありがたきもの　子
高層の都会(まち)の公園花盛る　航
籤を求める列のうららか　郎

鐘(ナオ)霞む上野浅草いずれとも　子
宿なし犬の巡りゆく露地　男
久に逢う膝を枕に草茵(しとね)　郎
仮の憂き世のまさにヴィーナス　航
新ドラマニューヒロインの記者会見　男
荒神輿荒れ将棋倒しに　子
昼も夜も臨界事故の続く村　航
杣人通すだけの山径　郎
炭焼きし窯は廃れて崩れたる　男
魑魅魍魎はどこへ消えたか　子
赤い月交通刑務所やや真上　航
貧乏徳利に新走り酌む　郎
店(ナウ)開き配るチラシにもみじ添え　男
名入りで豪華時計副賞　航
のど自慢予選通過の病院長　子
シーズン近しプロのスポーツ　男
上千本奥千本の花吹雪　子
行く先決めぬ春の船旅　郎

平成十一年十一月二十日首
平成十二年　三月　三日尾　（文音）

歌仙『小春日』

八島美枝子捌

小春日や五百羅漢は凡の相　八島美枝子
そぞろ歩きに茶の木咲く垣　会沢宏子
週末も部活せわしき息子にて　丸尾智恵
ひきわり納豆箸にまつはる　長谷部みつ子
露天風呂ひそと名月捉へをり　内山英子
おちこちに聞く鈴虫の声　浦田稔
木ウの実酒山家住まひの人と酌み　宏
初恋憶ふ遠き眼差し　美
ひと前はそしらぬ顔の間柄　智
昔語りを手まくらに聞く　英
自分史を記してみやうと思ひ立ち　み
しじまにひびく琴の爪弾き　稔
夏の月汀に寄する白き波　稔
広き松原テントの張られ　英
これがまあペットボトルのリサイクル　智
仲直りしておもちゃ組立て　美
ぽんぽりの誘ふ径に花万朶　宏
鮒膾もて宴をひらく　み
たをやめの稍うつむきて春ショール（ナオ）　稔
相見てのちの夢見心地に　英
美男美女結びの糸にあやつられ　智
甘え鳴きして猫の摺り寄る　美
忽然と溢るる涙冬夕焼　宏
かくすが如く引けるカーテン　稔
ぱらぱらと大人もたまに漫画本　美
レジ袋には薬いっぱい　智
雪平に粥を仕掛けて小買物　英
携帯電話留守にしておく　宏
シャンソンを流すサロンに月の影　み
木犀の香のほのと漂ふ　美
クレーン（ナウ）の伸びきってゐる秋の昼　智
気の晴れぬ身を持て余しゐて　稔
探し物探しあぐねて一と日過ぎ　英
絵付けの皿を描きて窯入れ　宏
学校の記念撮影花のもと　智
風船ひとつ山を越えゆく　み

平成十一年十二月一日
平成十二年十一月一日
日尾（文音）

半歌仙『川開き』

竹内茂翁捌

竹内茂　翁
富田定　女
伊坂兼　代

上げ潮につられ漕ぎだす川開き　翁
葭戸を通す名ばかりの風　女
住民の数ほど鯉のいる町に　代
水琴窟に心満たされ　翁
楽焼の厚手の皿に月見豆　女
チューインガムはマルメロの味　代
ッ地芝居のお噺子すこし乱れたる　翁
もも夜通ひのこの男坂　女
たおやかな夫人の玩具ロボット犬　代
コンピューターにハッカー侵入　翁
右顧左眄明日は恵比寿か荻窪か　女
馴染のバァーは次の街角　代
摩天楼寒三日月のイヤリング　翁
寒中水泳赤い褌　女
チゴイネル・ワイゼンの曲口遊ぶ　代
喋れぬ木乃伊黄金の面つけ　翁
若き鳶舞い散る花に足場組む　女
動作敏捷瑠璃蛺蝶　代

平成十二年五月十日首
平成十二年五月十五日尾

（於・勢田山荘）

歌仙『流し雛』

宇咲冬男捌

〈起〉オ 流し雛人にもありぬ浮き沈み　宇咲冬　男
うねる堤に茎立ちの彩　新井秋　芳
雀の子親の真似して鳴きぬらん　須賀金　男
老舗の銘菓いつも売り切れ　川岸冨　貴
十五夜の客晴々と大使達　後藤典　雄
深まる秋の澄みまさる嶺　冬
〈承〉ウ コスモスを泳いで来るはモネかとも　秋
ふっくらしたる裸身眩しき　金
少年の愛の目ざめの幼かり　冨
耀く未来紡ぎ続ける　典
お台場は一週間で夢世界　典
株の売買メールで勝負　冬
北極圏月を背にして駆けて　秋
寒行僧のひたひたひたと　金
猫飛んで棚からだるま転げ落ち　冨
深爪切って指を舐めおり　典
花のもと半生語る古希夫婦　秋
ロボット犬来て朝寝起こされ　冬
〈転〉オ ペンキ屋の足場組まれる日永さに　典
木登り好きな龍之助居士　典
亡国のごとき事件の続けざま　冬
新し世紀型はなに何型　秋
煮凝の方円自在固まりて　金
南天の実の重き房垂る　冨
ひっそりと紅刷いてみる夕まぐれ　典
酒飲みこぼす倫落の床　冬
それぞれの想いは苦き神詣で　秋
潮引いてゆく安芸の宮島　金
月明に黙しかげ置く新鹿の　冨
オランダ水仙匂いかぐわし　典
〈結〉ナウ 紫影忌を零雨ともども修す夏　冬
庭の飛石ゆるぎなき位置　秋
玲瓏と水琴窟の水の音　金
往きも帰りもなじみの友と　秋
七重八重花満ちあふれたる愁い　冬
「虹の座」上梓祝う春宵　冨

平成十二年三月二日首尾
（於・上野　東京文化会館）

歌仙『流燈』

角田双柿捌

〈起〉オ 流燈のふためぐりして瀬に乗りぬ　角田双柿
　敗戦の日はうたかたの夢　ひらきたはじむ
幼な子の玉兎はやして遊ぶらん　矢倉澄子
　石ころ多き土手に添う道　川上綾子
ヨットの帆自在に風を捉えけり　は
　ホテル専用ビーチパラソル　澄
〈承〉ウ 健やかに卒寿迎えし母の笑み　綾
　名跡を継ぎ芸一筋に　は
花嫁はインターネットで募集して　澄
　取り違えたる洋服の色　双
生まれたる児は二卵性双生児　澄
　解読すすむゲノム研究　綾
オハーと言うロボット人間月冴ゆる　綾
　ひっくり返す水仙の鉢　は
墨染の衣着て流す山頭火　澄
　句碑に供える地酒一本　澄
渦潮に舞い込む風に花遊ぶ　双
　祠に参いる穴を出し蛇　綾
〈転〉ナオ ほどほどの嘘なればよし四月馬鹿　は
　保身言い訳のみの政治家　澄
ライブよりモーツァルトかシューベルト　綾
　オペラハウスが街の眼玉に　は
蛍狩り千里の道も一里とぞ　双
　王妃の恋の国境を越え　澄
三面の見出し賑わすパパラッチ　綾
　突然死くるエコノミー席　は
裁判の勝訴は米国流　澄
　水に流して綺麗さっぱり　綾
辻占い銀座の月に照らされて　は
　柿の種は七いろ　澄
〈結〉ナウ 秋惜しむ路地の奥なる縄のれん　綾
　男操るキャリアウーマン　は
喜々としてペットの猫に迎えられ　澄
　庭のあちこち垣を繕う　綾
花の雲江戸を救いし西郷像　澄
　鳩の群翔つ春光の中　双

平成十二年十月一日首尾
（於・上野　東京文化会館）

歌仙『翁より』

福田太ろを捌

〈起〉オ 翁より己に還り月待てり　福田太ろを
原発の丘鶺の鳴く声　松谷雅子
菊花展色とりどりに賑わいて　江森京香
窓に飾りし優勝トロフィー　伊東康之
炎昼を子らはゲームに熱中し　京
竿竹売りの片蔭を行く　雅
〈承〉ウ 女湯のからんころんと桶の音　太
わざと転んで抱きとめられて　京
はっとする背ナに伝わる温かさ　康
瞳までも黒き飼いし黒猫　雅
ものの怪に憑かれさ迷う獣みち　美
潰えし墳墓あちこちにあり　京
寒月の砕けんばかり西安に　雅
友と酌み合う熱燗の酒　美
白秋は客好き煙草おんな好き　康
海は荒海お家に帰ろう　太
花衣母に似ているうれしさよ　京
春うららかに辻の芸人　美
〈転〉ナオ 和尚撞く鐘遠巻きに鐘供養　雅
政治の腐敗ここに極まり　美
無理心中家族崩壊次々と　京
思わず捲る雑誌新聞　康
ほととぎす忍び音発す旅の空　太
梅雨晴れの道想い出の道　康
口づけは幼なじみの味のして　京
裸身をすべる絹のさらさら　京
野ざらしになるとも千々に乱る恋　雅
頼り合いつつ挑み合いつつ　康
盆栽の松浮き立たせ望の月　美
秋の湖尻に寄するさざなみ　雅
〈結〉ナウ おおらかな市民合唱文化祭　雅
心ひとつに老いも若きも　康
脈をとるナースの笑顔頼もしく　美
ボートレースを玻璃越しに見て　康
花堤つづく限りの花吹雪　太
足軽やかに伊勢の参宮　美

平成十二年九月二十五日首尾
（於・上野　東京文化会館）

歌仙『時雨ごと』

白根順子捌

白根順子　時雨ごと茹で青菜の青さかな　〈起〉オ
篠崎ゆき　松籟を聴く炭火赫赫と　和
高尾秀四郎　街角のサンドイッチマン賑やかに　秀
桜井つばな　フリル靡かせお散歩の犬　つ
次山和子　壁の額童画に替えて良夜なる　和
つ　そろそろ早稲の出来あがる頃　〈承〉ウ
秀　爽やかに新進気鋭講演会　秀
ゆ　男女別姓どう思います？　ゆ
和　唯ひとりキャリアウーマン残業す　和
順　メールの宛名妻子ある人　順
つ　革椅子のかたき凹みの戻らずに　つ
つ　ふいにＡＩＢＯが大あくびする　つ
和　北欧の白夜を淡き月の影　和
　時鳥鳴き吊橋の揺れ
　ひたすらに千日回峰つづく山
　スポーツ選手国際化して
　花片々海に水脈曳く船の数
　志野の器に盛る若布和え　〈転〉ナオ
　少年の未来へ飛ばすしゃぼん玉
　ちちんぷいぷい骨折の足
　転地してしのぶ都の喧騒を
　臥薪嘗胆板につきたり
　温め酒飲めばこの世は極楽で
　煌めきて舞う窓の粉雪
　父知らぬゆえに熟年ばかり恋う
　肌まかせつつ欲る縫いぐるみ
　脱け殻となりて佇むターミナル
　ローズマリーの香り静謐
　月天心大聖堂の黙深く
　すだく虫の音コーラスのごと
　秋澄めるツタンカーメン蘇り　〈結〉ナウ
　世界遺産を守りきれずに
　権禰宜は三代目なり流麗な
　和服きりりと捧ぐお点前
　上梓さる句集「虹の座」花乃朶
　光あまねし下萌えの原

平成十二年十一月二十日首尾
（於・上野　東京文化会館）

歌仙『淑気かな』

成田淑美捌

成田淑美　〈起〉オ　見慣れたる樹に石にある淑気かな
三澤律乃　古き毬唄流れくる町
中尾硫苦　深々と革のソファーにくつろぎて
高橋たかえ　完成近き創始者の像
阿部朝子　月待ちのひととき夢路たどりおり
律　赤とんぼ舞う国のまほろば
硫　〈承〉ウ　願わくばピンピンコロリ秋の寺
朝　子の思惑と親の思惑
朝　歯車を十七才でかけ違い
律　電波が繋ぐゲームラブラブ
律　新婚の無論パジャマはお揃いで
た　カレーライスの匂う毎日
硫　夏の嶺仰ぐ湖畔の合宿所
硫　汗のバットはイチローのもの？
淑　お宝を探す質屋の大あくび
淑　蛇口の水のぽたりぽたりと
朝　朧夜の朧ににじむ花の雲
朝　糸の切れたる凧は何処へ
律　〈転〉オ　はるか来て不来方城に春惜しむ
律　パステル淡き旅のスケッチ
朝　老人を介護するのもボランティア
た　物干台で煙草一服
淑　忘られぬ想いに濡れる冬銀河
淑　泣いて埋める白きおとがい
硫　家捨てし不倫の果の刃物沙汰
律　北の大地にひとり佇む
朝　脱サラの牛飼いと飲むロゼワイン
淑　語りたきこと語り尽くせず
律　渡り舟ひそと舫われ望の月
律　金刀比羅祭るやや寒の海
た　〈結〉ツ　かりがねの乱れぬ列のひとすじに
朝　上梓の祝い盛会となる
朝　贈られし茶掛けの軸の墨の色
律　玻璃戸の内の縁のあたたか
硫　洗われて命かがやく雨後の花
淑　未知なるものを秘めし弥生野
た

平成十二年一月吉日首尾
（於・上野　東京文化会館）

《東京・あした連句会―その六》

歌仙『芽吹き』

中和枝捌

〈起〉オ 天を指す欅大樹の芽吹きかな　中和枝
遠足の列続く街道　新井世紫
白壁の軒に燕の通うらん　松澤晴美
歴史を語る柱時計の　篠原弘脩
祖父囲みはらから揃い良夜なる　枝
そぞろに寒し足うら耳裏　枝
〈承〉ウ 川澄みて橋くぐりゆく屋形船　美
雷おこし江戸のおみやげ　枝
羅漢像見知りの顔にはっとして　美
焼けぼっ杭に又も火のつき　紫
自ら介護人生選びたる　美
山麓に建つ欧風の家　枝
夏の霜白き遊具を玻璃越しに　紫
裸で泳ぐ教官と子等　脩
職引いて想い出たどる小豆島　紫
ベートーベンの楽の昂り　脩
散る花も残る桜も宿命なる　脩
目刺干さるる浜の遠近　紫
〈転〉ナオ 荷風忌の踊り子達の輝きて　美
厭世観のさらさらに無し　脩
気儘なる旅に地酒をたのしまん　脩
狸顔した主人ひょっこり　紫
しまく雪石垣続く三の丸　美
ひたすら語り愛を確かめ　枝
結ばれて神のみ前に読む誓詞　脩
好み拘り香るコーヒー　美
携帯の電話で交す多事雑事　脩
ファンタジックな絵画飾られ　紫
月のぼる上野の森の連句席　美
憩う初鴨揺るる池の面　美
〈結〉ナウ 冷まじや病みても学ぶ意志堅固　脩
和の食材は長生きのもと　枝
パソコンで集む情報多すぎて　紫
夢かうつつか朧なる朝　脩
花衣手になじみたる舞扇　枝
水琴窟の音色麗か　美

平成十二年三月十二日首尾
（於・上野　東京文化会館）

歌仙『秋燕や』

大豆生田伴子捌

〈起〉オ 秋燕や窓いっぱいの海の音　大豆生田伴子
鏡となりし端正の月　中野稔子
実紫鉄路に沿いて揺るるら　関根雪子
気の向くままに絵画鑑賞　谷田男児
着膨れて傘寿・米寿のはなやぎに　稔
冬のうららに届く電報　雪
〈承〉ウ おみやげの地酒いろいろ買いもして　伴
旧街道に残る道標　男
尼寺に動く影あり誰かしら　稔
犬を片方に逢瀬重ね　雪
飼いならす積もりが逆に裏切られ　稔
インドネシアで企業拡張　稔
灼くる月映して川の静かなる　男
夏期講習に集う壮年　雪
内職のワープロの目を休ませて　稔
稜線はるか雲のただよう　稔
俳諧を世界に展ぐ花の門　男
町を包みてふくる春風　稔
〈転〉ナオ 赤きシャツ赤き帽子の種案山子　雪
下校の児らの声の弾める　男
奇術師の器用貧乏芸成らず　稔
芋かりんとう頬張りながら　伴
さざ波のひたに寄せくる冬の湖　男
肌触れ合えば解ける氷像　雪
愛執の思い出きっぷ失えり　稔
十字架傾ぐ新しき墓　稔
沈黙の狐狸庵先生笑みたもう　男
机の上の石の彫り物　雪
しずしずといざよう月の光ゲを負い　稔
古城にのこる色変えぬ松　伴
〈結〉ナウ 鈴虫のフルート・ビオラ・バイオリン　男
マザーグースの夢の醒めざる　稔
くらがりの螺旋階段ひとめぐり　雪
等間隔に盛る雛市　男
花万朶あしたの苑の凜として　稔
大和島根にまろき初虹　伴

平成十二年十月十日首尾
（於・上野　東京文化会館）

《東京・あした連句会―その八》

歌仙『蟻走る』

山司英子捌

〈起〉オ 運命に疑いもたず蟻走る　山司　英子
香りほのかに山梔子の白　高橋たかえ
畳みたる扇を腰にはさむらん　蓮見　林
ラジオ体操そろう校庭　清水うた子
ビルの灯に弦月嶺へ傾きし　伊藤稜志
小枝ゆすりて小鳥群れくる　関根雪子
〈承〉ウ 手造りのレシピ通りの新豆腐　林
持ってうまれた細やかな肌　林
惚れ癖が昂じてしまい騙されて　稜
生前葬の院号を受く　稜
パソコンを打って自分史まとめ上げ　英
猿もたのしむ琉黄温泉　雪
冬ざるるシルクロードの月明り　雪
焼け焦げつけし絨緞の柄　た
看板を守り継ぎきし呉服店　稜
魔法瓶よりお湯が沸きでる　稜
風生れて八方に散る花筏　英
スケッチブック抱え遠足　林
〈転〉オ（ナオ） 岳麓の厩舎の景色暖かく　林
ルアーの糸を自由自在に　稜
空港の成田・羽田と競い合い　稜
破るためある夫の禁煙　英
別腹にぐいっと呷る生ビール　雪
傘寿の気迫木刀を振る　た
留学のイタリア娘供にして　稜
螺子のゆるんだベッドぎしぎし　稜
陋屋に貧乏神の居座れり　雪
頑なに漉く伝統の和紙　雪
望の月旧道にさす潮の香　た
籠いっぱいに秋なすび挽ぐ　う
〈結〉ウ（ナウ） 衿元をすくめてふっと炉火恋し　雪
デビュー真近かき若手語り部　た
本棚にびっしり資料並べられ　稜
拾い来し石そこらこちらに　英
長堤の限り万朶の花満ちて　う
逃げ水追ってお遍路の鈴　雪

平成十二年六月八日首
平成十二年七月十日尾
（於・熊谷市緑化センター）

歌仙　『雪を蹴飛ばす』

川岸冨貴捌

〈起〉オ 負けし子や雪を蹴飛ばす肩とがり　川岸　冨貴
　ジャングルジムに止まる寒禽　宇咲　冬男
不器用に生きて絵画を楽しまん　中　和枝
　ひねもすのたりのたりにて　江森　京香
有明の月まんまるのまま明かく　柴崎　絢子
　街道すじに色変えぬ松　栗原　英甫
〈承〉ウ 遥かきてローマの秋に佇ずめる　冨
　ヘップバーンの面影を抱き　冬
遍歴は思いの人に会えぬ故　和
　身分違いを祖母に諭され　京
マンションの螺旋階段うねうねと　絢
　坂東太郎長さ一番　英
月蒼く茅の輪くぐれば宮匂う　冨
　親鹿ぬたと森を抜け出る　冬
解らぬは十七才の胸の内　和
　ローソクの火で焼け死にしとは　京
片々と舞える落花に術もなく　英
　おたまじゃくしは手足伸ばせり　絢
〈転〉オ メーデーの声を大きく駅広場　冨
　ユーロとドルと円と競争　冬
馬主となり笑みも豊かに鐘供養　和
　慶事重なり博士号取る　京
夢食べる夢を見ている囲炉裏端　絢
　遠野の果ての冬嶺うるわし　英
パソコンで買い込んでいる吟醸酒　冨
　指が覚えたあなたのからだ　冬
何人も千夜一夜のその儘に　和
　沈んでしまう泥舟に乗る　京
鮭来たる荒瀬荒海ひたくぐり　絢
　半島の尖照るは名月　冨
〈結〉ウ 何杯もお替わりをして今年米　英
　太極拳でダイエット中　冨
囲碁将棋全く駄目で美声持ち　冬
　逃げ水追って走るB・M　和
満開の花に埋まる大都会　京
　地球の半分春がいっぱい　英

平成十二年十二月七日首尾　　執筆　京

（於・熊谷緑化センター）

歌仙『走り梅雨』

走り梅雨手織桟の杼の軋みそむ　大平美代子捌
仄と色づく紫陽花の毬　広田節子
サーカスの楽隊遠く響きいて　美節
寝かしつけたる籠のみどり児　小谷伸子　美
夕月に入江の波の平らなる　矢倉澄子　美
冷やかに鍵閉ざす小屋の戸　笠木以都子
変身(ウ)は秋のモードでぴたり決め　節
路地に迷いてボルボ飛ばせず　三橋しげ子
飽きもせず相手かえては立話　大坪万里　美
下仲人が惚れられもして　節
祝言の酒は安達太郎地酒とか　澄
唄い尽くして静もれる席　松本紀子
菩提寺の松の梢に冴ゆる月　南沢雍助　美
湯婆抱けばとろり眠たき　節
うつつなに首相退陣聞きながら　依田みどり
デフレ株安火種あまたに　雍
散り際の花を惜しみて執りし筆　米田謙次
巣立ちし鳥の余韻残れる　以
ぶらんこの空揺れやまぬ遊園地(ナオ)　節
ママはお仕事パパはスーパー　伸
釣銭のことからレジの娘にふらり　井沢政子
ごろと坐りの悪き石ころ　謙
万病に効くと清水に人の列　節
汗映しだすテレビ中継　伸
宇宙船ン十億で乗りしとう　澄
パチンコマニア小市民われ　節
白和えも胡麻和えも皆好みにて　雍
馬の肥えたる牧は広々　澄
月皓と神々の代をさながらに　節
耳を澄ませば落ちる椎の実　伸
新刊(ナウ)の本にせっせとするサイン　節
茶房の椅子にねばる半日　伸
動きだすスクランブルの交差点　節
戸惑いつつも舞える初蝶　澄
花万朶山上の城抜きんでて　伸
村興しとて春の朝市　節

平成十二年五月九日首
平成十三年五月十四日尾
（於・町田市文化センター）

吉岡梅游翁十三回忌追福興行

脇起り歌仙　『鷹舞へり』

ひきしまる男の心鷹舞へり　故吉岡梅　游
又美しき雪晴の城　片山多迦夫
寒ざらへ歌沢の三味忍び音に　今井水　映　迦
なんぢゃもんぢゃの樹を尋ねゆく　広谷青石　迦
月待ちの今宵いつもの無礼講　鎌田耕仁　迦
座右に据ゑたる濁酒一壺　松岡遼雲　迦
ッ李杜の旅遥かに偲ぶ秋風裡　蔦沢　翠　迦
悲鳴をあげて奔るＳＬ　沖津秀美　迦
うしろ指覚悟してゐるふたりです　田中一火女　迦
昔も今も愛は不条理　友永幹子　迦
床の間に躍る板画の観世音　松永静雨　迦
名代の寿司は享保創業　小林静司　迦
行水にはしゃぐ幼なに月出でて　小出きよみ　迦
アンネの薔薇のバラードを書く　原田千町　迦
ミサ曲の余韻は未だ耳にあり　名古則子　迦
潮は静かに満ちてくるらし　土屋実郎　迦
花ふぶく中に小さき母の家　矢崎　藍　迦
まあぞろぞろと仔猫八匹　東　明雅　迦
ナオ春塵にまみれ尽して市長選　松永静雨
人間の輪で基地を取り巻く　迦
戦争は二度となき世がわが祈り　小林静司
蟬は切々水は涼々　迦
総身に大夕焼の火を移し　鈴木　漠
富士の主神はさくや姫とか　迦
分校に先生ひとり米をとぐ　小出きよみ
相聞五首をe・mailにて　迦
このまんま逢はずにゐましよ冬の蝶　原田千町
インフルエンザ妙薬はなし　迦
浄土行きロケット月に途中下車　名古則子
長夜の夢を獏が貪る　迦
ナウ美濃囲ひ破り爽やか都詰め　土屋実郎
盤も狭しと走る飛車角　迦
秒針と鼓動と青き静寂と　矢崎　藍
気圧の谷に変る血圧　迦
植ゑつぎて名木の花蘇り　東　明雅
孫が覗ける蝌蚪の大国　迦

平成十二年六月一日首
平成十二年九月十一日尾（文音付回し）

歌仙　『歩む人形たち』

家霊みな目覚めていたる良夜かな　鍬塚聰子
　そぞろ身にしむやや重き桟(さん)　三木祥子
残菊は掌よりこぼれて地を染めて　前田亜弥
　猫から猫へゴムボール飛ぶ　聰子
片々の詩は鉛筆の雑記帳　祥子
　いま始まった僕たちの夏　亜弥
白妙(ウ)の衣きりりと富士詣　聰子
　標的いつもはずされており　祥子
天上も泣けとばかりに戻り川　聰子
　男はいっそ年下がよし　亜弥
御破算に願いましてのとんぼ玉　祥子
　仏相報恩信濃路は雪　聰子
凍りつく土に坐りて喰えば月　亜弥
「留守にします」と去年今年過ぎ　祥子
　なお進め求めよ欲せよ日本人　亜弥
太鼓も桴(ばち)も当たりようとか　聰子
侍従とも執事とも言い花ひらく　祥子
あれは霞か煤煙の街　亜弥
　ゆっくりと点滴落ちる遠蛙(ナオ)　聰子
故郷の乗合バスは鬼も乗る　祥子
　電話代なら節季払いに　亜弥
炎昼のそこだけ暗き傷ありぬ　聰子
　ついて来るなと時鳥鳴く　祥子
熟れすぎて平らになりし果実二個　亜弥
　君とミシンの空(から)の約束　聰子
こんなときアフリカの酒飲み干そう　祥子
　千利休の作る耳掻き　聰子
有明へ粛々歩む人形たち　亜弥
　虫籠の虫きゅっとふるえる　祥子
過疎(ナウ)の田にこれが最後の籾莚　聰子
　壁の穴から腕までの距離　亜弥
猿蓑を鞄の底に忍ばせて　祥子
　風をたたんで人の世を見し　聰子
花に雨黄色い傘の一列に　亜弥
うぶ毛光りて春惜しむ沖　祥子

平成十二年一月二十日首
平成十二年三月四日尾（文音）

歌仙『海の底』

沢　都捌

海の底今なお呻くさとうきび　　天　真実
鳥の渡りへ響く鐘の音　　沢　都
月まどかかすかに桔梗揺らぎいて　　天野おとめ
置き忘れたる友の自転車　　姫野恭子
鍵かけぬ村の戸口のひろびろと　　鍬塚聰子
消し炭の香で朝をはじめる　　貞永まこと
振(ヴ)りむけば雪より白き尾のありて　　前田圭衛子
境界線にあたる坂道　　都
今宵逢う心ふたつが羽ばたきぬ　　真実
あやしきまでの水の色文字　　恭子
純潔など今さらですとしづ子詠み　　聰子
麦藁帽の牧師先生　　おとめ
百名山山小屋を嚙む暑い月　　まこと
祝いの酒はゆるりゆるりと　　小梅わこ
審判にボークとられてしまうとは　　恭子
ワゴンに並ぶ経済効果　　都
花万朶そのひとひらを受けし地球(テラ)　　聰子
なむあみだぶつ蛙生まるる　　おとめ
永(ナオ)き日になくしたはずの高音階　　まこと
芸亭(うんてい)という最古図書館　　恭子
踏切のむこうは風が吹いている　　都
しずかなる時冬もきれいね　　わこ
乾鮭を魔除けのごとく吊り下げて　　おとめ
いつも難癖つけてくる父　　恭子
一目見て足裏に走る微電流　　まこと
急流抜けて追いかけて来よ　　圭衛子
さよならのかけらも全て埋めたる　　おとめ
世田谷公園猫のたまり場　　聰子
月光に銀杏降る夜の更けてゆく　　恭子
そぞろに寒き網棚の下　　都
遠近(ナウ)の虫の声澄む旅の宿　　聰子
はじめて混ぜた絵の具いろいろ　　わこ
仲買いは河岸をなめに飛ぶそうな　　まこと
浄き名水校庭に湧く　　真実
咲く花も散る花も花新世紀　　おとめ
夢の中まで駆けける春雷　　執筆

平成十二年九月二十四日首
平成十二年十一月十五日尾　（文音）

半歌仙　『参　籠　や』

高森秋義捌

参籠や回廊軋み明け易き　　秋　義
　燈を登れば聞こゆ滝音　　行
久しぶり友の来訪待ちかねて　　亀
　俳誌俎上に時を忘るる　　義
月港離島通いの船灯り　　行
　せきたてる如法師蟬鳴く　　亀
ウ連休は予定どおりに秋遍路　　義
　好意と恋は裏表にて　　行
将来を誓ふもたがい干渉せず　　亀
　僅かの利息出るは溜息　　義
リストラを一つおぼえの経営者　　行
　古式ゆかしく蹴鞠奉納　　義
屋台酒おでん肴に月寒し　　行
　あれこれ思案悩むお歳暮　　亀
森総理ぼろりと洩らす本心を　　義
　遠流の帝眠る陵　　行
花咲きてありし日偲ぶ雲井御所　　亀
若駒馬場を颯爽と駈け　　義

平成十二年六月十四日首尾
（於・国電多度津お客さまセンター）

歌仙　『猿に着せたき』

福田眞空捌

立冬や猿に着せたき翁の蓑　福田眞　空
初時雨来てかたむける笠　橘　朱鷺子
店先にお茶と茎漬け奨むらん　大谷似智子
気功（チーコン）の後満面の笑み　高木厚　子
パソコンの低くうなりて月淡し　内山良　子
高圧線に鵜（つぐみ）行列　芹田恵　子
美術展入選めざし大作を（ウ）　浜口泰　子
彼女の好きな赤きバンダナ　笹木睦　子
観覧車二人で乗れば恐くない　似
想ひ出の部屋鍵を残して　良
ホームレス並ぶテントは工夫され　良
キャンプの子らを目守（まも）る月影　似
水筒に山の清水を溢れさせ　恵
古代石器の跡疑はし　泰
バスジャックギリシャツアーは暗転す　空
神にすがれば百事吉祥　厚
盃に花弁浮かせ廻し呑む　睦
こころ遊ばす踏青の刻　朱
保津峡の寂びたる句碑も春の夢（ナオ）　厚
手塩にかけし娘外国（とつくに）　良
アクセント違ひ気になり老いを知り　朱
へぼな将棋に野次が耳打ち　似
宰相をひとりに出来ぬ国寒き　朱
吊し切られる巨き鮫鰐　朱
恋の果死にぞこなひのぼったくり　厚
制服脱ぎて化粧入念　良
しみじみと愛のバラード紫煙吐き　恵
引越荷物うづ高く積む　泰
月の寺唐破風の門そそり立ち　泰
葛の葉添へし精進料理　空
爽（ナウ）やかな丘のベンチにハイネ読み　厚
路地の空地で猫の集会　睦
一族が道後のお湯にのんびりと　朱
真剣を振りしゃぼん玉斬り　良
舟人の棹さす方は花の嶺　似
せはしく励む箱の蜜蜂　恵

平成十二年十一月七日首尾
（於・国士館大学鶴川校舎）

《狛江・彩(あや)連句会》

歌仙『寒牡丹』

渡辺梅子捌

寒牡丹いのち溢れて朱を解きぬ　渡辺梅子
　狭庭の隅に夜べの初雪　児玉俊子
外つ国の友にメールを送るらん　森田英子
　ロボット犬は小さきファミリー　猪俣光子
万象を鎮めて月は煌々と　梅子
　傘寿の母がつくる麦とろ　俊子
笛(ヴ)太鼓きこえて今日は村祭　英子
　心一途に想う彼の人　光子
面ざしが高倉健にどこか似て　梅子
　北の大地を走るＳＬ　俊子
広々と針葉樹林続きをり　英子
　アロマテラピー端居し乍ら　光子
打集い月に乾杯干すビール　梅子
　無党派層が制す知事選　俊子
為せば成る為さねば何も始まらぬ　英子
　発電風車聳え立つ丘　光子
海模糊と遥か煙りつ花の雨　梅子
　都踊りの噂ちらほら　俊子
朝寝して宇宙に夢を漂わせ(ナオ)　俊子
　翼無いのに私翔んでる　英子
鎮もれる古噴に柔かき日射　光子
　松の梢にからまれる雲　梅子
ギャルママはポップコーンを口にぽい　俊子
　潔き聖夜の熱い抱擁　英子
編みかけの毛糸いたずら猫じゃれて　光子
　ダッチロールの日本経済　梅子
大リーグ情報だけが愉しみに　俊子
　琵琶湖に映る比良の山脈(やまなみ)　光子
夕月にみ仏ひそと笑み給い　英子
　旅の愁いを誘う蜩　梅子
ビル(ナウ)街に林檎並木の続きたる　俊子
　ショーウインドに烏帽子肩衣　英子
殿方の料理教室盛況で　光子
　耳順過ぎたる麗かな顔　梅子
追憶の花尋めゆかん旧山河　俊子
　蝶追いかけて遊ぶ稚な児　英子

平成十三年一月二十八日首
平成十三年四月二十二日尾

（ＦＡＸ文音）

半歌仙『七夕竹』

奥田恵以子捌

駈けて子の七夕竹の撓いけり　奥田恵以子
　をどり明かせば月の眞ん丸　黒野伊久子
鰡飛んでとんで浮標過ぎ礁過ぎて　恵
　自慢の魚拓見せる縁側　伊
滴りて水琴窟の音ひそか　光
　時計草またぱっちりと咲く　子
ウモンゴルの高原はるか医療班　光
　包バオの中より熱き眼差し　伊
天が下あっけらかんと馬つるむ　恵
　地平線より砂煙立つ　尚
饒舌も時と場合よ眞紀子さん　光
　銘酒を前に奇声嬌声　尚
ひとり居の錠前下ろす寒月下　光
　精進落ちの沸るちり鍋　伊
もの好きの三日三晩を碁にいどみ　尚
　やおら立たんと歩数計さげ　光
島山は花の霞に彩どられ　美
　渚道ゆく稚き雉笛　池田尚

平成十三年五月二十五日首尾

（於・自然庵）

半歌仙　『葛咲いて』

藤本　翠捌

葛咲いて不器男生家へ灘二つ　奥田恵以子
月影そぞろ木橋土橋　藤本　翠
鳥威しからから鳴って嬰泣いて　久保富美恵
チャイルドシート付けてドライブ　石田光　子
峰雲の湧くビル街にまぎれ込み　黒野伊久子
屋台にゆれる掻き氷旗　池田尚　美
ッ下駄履の馴れずに借りる友の肩　翠
ほっとくつろぐ神の御前　光
鬢付けの匂う力士と新妻と　伊
朝な朝なの目覚し時計　伊
留守番のどっかと胡坐盗み酒　富
遺影の目玉ぎょろり動くか　富
雪やんで皓皓と照る月の道　翠
待つ者居りて熱き葱汁　尚
手を上げて小泉さんは颯爽と　尚
秋津島根にうららかな風　翠
舞い舞いて花のひとひら衿足に　光
潮光りの美し紅貝　伊

平成十三年五月二十日首尾
（於・ふれあいセンター）

半歌仙　『菖蒲咲く』

高橋昭三捌

並びくる歌のともがき菖蒲咲く　今田　進
ひげ親しくて語る梅雨晴　奥田恵以子
日時計の影よみがえる雲行きて　進
洗濯物の白く乾ける　恵
中空に月かかげたり防波堤　進
まさに聴くべし蟲の合唱　三
遊行忌の夕べ障子を新しく　高橋昭三
夜目にも著き汝がうなじよ　進
ひさびさにやわき褥の眞紅　恵
谷川縫うて現れし笹舟　三
財溜めて酒呑童子の呷る酒　三
参院選の眞っただなかに　恵
寒月の高さに足のふらついて　進
元大関のたらす水洟　三
里山のわずかの流れせせらげる　恵
ひとり佇む学舎のあと　進
鴟尾照らす陽は燦燦と花吹雪　三
龍天にして御衣さ緑　恵

平成十三年六月首尾

（於・佐伯町町民ホール）

半歌仙　『雨のつくし』

生尾さだみ捌

畦わびし雨のつくしの茎の色　高橋昭三
　遠足の子のてるてる坊主　生尾さだみ
風光る博物館のにぎはひて　久保俊子
　レトロバスにて松江散策　林哥子
鳴き砂を鳴らしてゆくは月の人　さ
　鳥の渡りの見え初めにけり　俊
縫ひ立ての秋の袷のよく似合ふ　昭
　そつと触れたしその後れ毛　さ
寝台車がたんとゆれて抱きしめる　俊
　使い果したテレホンカード　さ
おそろしき安芸灘地震おびえる日　う
　何度かけても電話通じず　マ
同胞と交す盃月涼し　藤原マサエ
　祭囃の近づきて来る　俊
隣りから民謡の声流れ来て　昭
　長野マラソンケニアがトップ　う
花散りぬいとまも二十一世紀　俊
初虹かかる学舎の丘　昭

平成十三年四月七日首
平成十三年五月十二日尾

半歌仙　『菊晴れ』

久保俊子捌

菊晴れや連句仲間に若き記者　高橋昭三
　赤い羽根つけカメラ片手に　久保俊子
十三夜明暗頭上よぎり来て　藤原マサエ
　流行色はチャコールグレイ　生尾さだみ
外套の衿立てて出る喫茶店　藤本みどり
　冬ざれの野に見しは吊橋　奥田恵以子
紋(ウ)付を着れば男の顔になり　林哥子
　あなたと呼べる声の明るし　俊子
残火といはれたくなき恋心　昭三
　肩寄せ合ってゆくルミナリエ　さだみ
神前に誓ひし指輪失ひて　俊子
　イチロー選手千金の夢　マサエ
夕月に鳴る風鈴は南部鉄　さだみ
　サマーライブの果てし山小屋　昭三
八っさんも熊さんちにも新世紀　恵以子
　囲碁をうつ手のほろ酔ひきげん　哥子
はれあがり古城の浮かぶ花の雲　俊子
　鳥の巣立ちの羽ばたきたしか　マサエ

平成十二年十月十五日首
平成十三年一月十三日尾

（於・可部公民館）

二十韻　『梅雨晴』

高津明生子捌

梅雨晴やけふ筑波嶺の親しかり　高津明生子
青葉の影に集ひ句の友　佐々木靖章
かけ声と球打つ音が聞こえきて　渡井千織
のどを潤す午後の珈琲　大山真輝
帰(ウ)り道誰かぼんやり月灯る　伊藤智之
鈴蟲鳴けば恋しさを増し　桜井美和
あなたへと想を乗せて果つる秋　智之
シドニーに向け聖火継走　千織
ダイエット励まし泣かせ目盛揺れ　矢口真理
夢にまで見たキャンパスライフ　佐々木愛
咳(ナオ)込みて一人暮しが身に応へ　玉元夏子
月の光でサンタ現る　夏子
童心に帰ったやうな同窓会　山口慎司
弥勒菩薩のおだやかな笑み　小坂谷明里
胸躍り初めて触れた君の頬　美和
電話の声を遠く感じる　木庭彰子

平成十二年六月　十六日首
平成十二年六月二十一日尾
（連衆・茨城大学教育学部学生
於・水戸市茨城大学演習室）

春の虹の輪くぐる猫の子　佐藤ひろし
見上げつつ我も歩めり花吹雪　唐木田恵子
東風(ナウ)ゴンドラの回り回って鳩遊び　上野卓哉
東(こち)風(ち)ここちよきあらたなる朝　山口裕子

歌仙『獅子の舞』

獅子の舞猛り今年の運つよく　　山村としお捌

歌留多とる子の慣れて来し嵩　　片山妙子

旅企画次世代携帯秘書として　　山村としお

通販カタログ廻し読みする　　杉本従子

町並の保存化月に障りなく　　丸木節子

靴の中より木の実ころりと　　従子と

伊勢平野屏風のごとく大根干し　　妙子

スリム一途にエステ励む娘　　節子と

メダリスト次のゴールの教会へ　　従子

女の希ひラストロマンス　　妙子

密室の絡繰ひょいと首相出て　　節子と

南国サミット蛇味線の音　　従子

若者に奪はれていし夏の月　　妙子

雪負ひし瀬に岩魚掬うて　　節子と

火の島を命からがら捨てて発ち　　従子

海図持たずに鳥帰りゆく　　妙子

花の寺ライブ佛の眼間に　　節子と

青葉若葉の合宿セミナー　　妙子

茗荷竹日向二坪ほまち畑　　従子

バスの便断ち道整備する　　節子と

この地球コンピューターが小さくし　　従子

稿料次々入る正夢　　妙子

旧石器風花の中掘返し　　節子と

皺足に効かぬ膏薬　　従子

吟上酒お局さまは味を知り　　妙子

しなやかに身を飜したる　　節子と

手鏡の瞳に決意秘めしつつ　　妙子

共に白髪の年金生活　　節子と

大き月ポンポン船の渡場に　　妙子

息せき切つて夜学生来る　　節子と

再起かけ本社手放す暮の秋　　妙子

大統領選ナショナリズムへ　　節子と

井戸端の嬌声ニュース飛散りぬ　　妙子

木の芽いただくにはまだ幼な　　節子と

離さずに花の渦中通りぬけ　　徒子

風光るとき清めらるる身　　節子と

平成十二年九月　十日首
平成十二年十二月二十日尾
（於・上野市中央公民館）

歌仙『木の芽吹く』

豊住敏子捌

四季彩の変わる背山の木の芽吹く　敏
　春風いっぱい胸の奥まで　照
武者人形早ウインドーに飾られて　弘
　靴音のして誰かくるらし　敏
舟宿に日暮れの早き月見酒　照
　さんまこんがり焼けてうまかり　弘
ゥゆきゆきて視野の広がる草紅葉　敏
　孫とゲームに猫を抱きて　弘
約束の場所セットするカーナビに　照
　額にのこる口づけの痕　照
閨に香の漂ふ中を去りゆきし　敏
　股旅演歌大絶唱す　弘
月の暈星をいたゞき晴ならん　弘
　パラリンピック汗の金メダル　敏
見通しのつかぬ経済如何せん　照
　みたらし団子焼ける匂いに　照
花堤桜千本万朵なる　弘
石垣の中通う蜜蜂　敏

永田照子
豊住敏子
恒岡弘二

ナオ淡路博チューリップの丘今盛り　弘
　寂光院の影をとゞめず　敏
世を捨てて世を捨てぬなり楽しみて　照
　ノーベル受賞夢の実現　敏
凍月の解けし南北握手して　照
　ペチカに集ひアリラン唄う　弘
同窓会ちょっと髪型変へて行く　敏
　誘わるるまま意気投合す　照
ほんのりと残るグラスのワインの香　弘
猿と狐とのっそり出て来　敏
氏神を照らし出したる秋の月　照
休耕田にコスモス揺れる　弘
ナウハンバーガー好む子鰯このまざる　敏
　三宅島へとカンパを募る　弘
名言を残しぎんさん三世代　照
　和み惜しみて春煖炉たく　敏
車椅子にぎはふ花の城山に　弘
忍者の里は陽炎の中　照

平成十二年十一月二十七日首
平成十二年十二月十一日尾

（於・上野市公民館）

歌仙『つばくらめ』

山村勝子捌

つばくらめ伊賀に外ッ国人も増ゆ　羽根千恵
　交流会の親子遠足　平島由季子
手作りの紙の雛の華やぎて　山村佳子
　ＩＴ時代が眼前に来る　山村勝子
社の砦出でて駅への月の道　佳子
　命の限り虫しげく鳴く　恵子
敬老日いきいきサロン触れ合ひて　恵子
　ガングロママの育児奮戦　勝子
あの娘へは携帯電話ワンタッチ　由子
　秘密のホクロ教えてあげる　勝子
紅の糸たぐり寄せ来て教会へ　恵子
　見切り発車の介護体制　佳子
マンションの玻璃戸いっぱい月涼し　佳子
　音頭取る衆代替りする　勝子
宰相は料亭合議茶飯劇　由子
　メダルラッシュのパラリンピック　恵子
花吹雪酒酌みてこの夢浄土　勝子
新入社員ゆとりぼっぼっ　佳子
双眼鏡コインを入れて覗だけ　山村としお
　神の手汚すニセの発掘　坂下千佳子
明日はなき我楽多市に大騒ぎ　佳子
　薩摩きりこに注ぐ一献　恵子
焚きくべて飾り減り来て口減らず　勝子
　赤字家計簿困の吹く　千恵
羽衣の松にかかりし海の青　千恵
　チークダンスに裾の恥かし　佳子
石鹸玉吹けど屋根まで届かずに　恵子
　ＩＪＦの誤審切り捨て　勝子
齢ごとに拙くなる歩月白に　千恵
　勢子四苦八苦角切りの鹿　恵子
錦繡の紅葉の湖の静まりて　由子
　帰島あてなく疎開生活　恵子
チョロＱに「くの一」号のでる噂　勝子
　我が家風味の木の芽田楽　恵子
観覧車花の中よりのぼり行く　千恵
　おぼろに浮かぶ長き吊橋　と

平成十二年十一月一日首
平成十二年十二月二十四日尾
（於・上野市中央公民館）

歌仙『大瑠璃や』

岡田透子捌

〈起〉オ 大瑠璃や柵をそびらの能舞台　岡田透子
苑の泉のこんこんと湧く　篠崎ゆき
帰省子の固太りして返るらん　宮脇美智子
読みさしの本散らばっている　桜井つばな
妊精と見紛う月の昇りきて　佐々木芳子
榠樝の蜜の濃くなれる頃　堀朱芽
〈承〉ウ 蛤となりて雀をとりに行く　透
泥舟と知り乗りし浅はか　美
ジーパンの食い込む肉にそそられて　つ
ストーカーとは誰にも言えず　芳
このところ心療内科長き列　ゆ
いつもの屋台霊園の端　朱
むささびの瞬時に消えし月の下　芳
大熊手買い始末どうする　美
皺寄せのまたも市民に被せられ　透
床に飾れる金鶏勲章　ゆ
楠公の銅像に花片片と　つ
スーパーで売る鯛の浜焼　朱
〈転〉ナオ 蜃気楼逆立ちをして見ていたる　つ
シャツのめくれて現れし刺青　透
最後には只になりそう叩き売り　朱
ＮＧ多きロケに喝采　芳
副都心こんなところに女郎蜘蛛　ゆ
裸をそっとのぞかれている　美
こうなればここまで来るは当り前　透
衝動買いの安きブローチ　芳
携帯の気になる声音ついてきて　ゆ
屈託のなき老人ホーム　朱
満月にためらいて星またたかず　美
猿酒と聞きあらたなる酔い　つ
〈結〉ナウ やや寒の枕頭にある三国志　ゆ
早立ちの服思案あれこれ　芳
身振りして異国の言葉美しく　美
横浜ナンバー続く街道　つ
花の雲曳きて回れる観覧車　透
春の潮のひたに寄せくる　執筆

平成十二年七月九日首
平成十二年八月十日尾

（於・池袋勤労福祉会館）

歌仙『玫瑰や』

〈起〉オ 玫瑰や晴れれば見ゆる北の島　朝つ
　船底走り群れる船虫　月山
　にぎやかに野外演奏開かれて　朝つ
　理想は高く遊学帰り　子
　望の月新築の門堂々と　朝
　秋の扇のはりまぜの額　月
〈承〉ウ 山頭火流浪の心冷まじく　朝つ
　サロン文学集う若者　章
　君のため爪にアートをしましたわ　つ
　二人で鳴らす幸せの鐘　朝
　磁気あらし国際電話ずたずたに　章
　乳製品の返品つゞく　章
　雪原の荒涼として月白し　月
　惠方参りに連れ立つて行く　月
　店頭に並べられいる桐の下駄　章
　集まる鳩を追いかける子等　朝
　湖めぐる花のトンネルくぐりぬけ　月
　字凧に絵凧自由に泳ぎ　つ
〈転〉オ 山間をみえかくれする遍路笠　朝
　まめの痛みにたえかねている　月
　やわらちやん柔道会の意気あがり　朝
　発明されし太陽燃料　つ
　旧家では昔ながらの繭かきを　朝
　キャミソール着る日焼けせし肌　つ
　親ほどの男に抱かれ現なに　月
　気にもとめない盲腸の痕　章
　カナダへの旅で土産を買い込んで　朝
　眞青な海に魚影ひとすじ　月
　高階で月を賞でつゝ吟醸酒　つ
　ぶらりぶらりとひさごゆれいる　つ
〈結〉ウ ひねもすを新絹織りて老いし母　月
　都会育ちが土になじみて　章
　番犬に注意と太く札のあり　朝
　自称作家はひげが御自慢　章
　大樹よりしだるる花の大地まで　つ
　ぴんと跳ねたる鯛の浜焼　朝

桜井つばな捌

桜井つばな
室伏章郎
鈴木月山
阿部朝子

平成十二年七月十二日首
平成十二年八月二十日尾
（於・池袋勤労福祉会館）

歌仙『烏賊釣舟』

石渡蒼水捌

大高サチ子　海坂へ向ふ烏賊釣舟の音
宮沢次男　浴衣の裾に絡む潮風
石渡蒼水　うつつ世を忘る静かな座敷にて
サ　花簪（かんざし）の似合ふ子の舞
財津公江　月蝕をこの目で見むと物干に
次　木の実が一つトタン屋根打つ
田中てつ　幾歳（ウ）か秋を迎へる山住ひ
サ　誘ひ電話に声のひそひそ
て　恋といふ書状に涙つつみこみ
公　熱き血潮にこがるゝ姑
〃　取りかへしばかりごろりと青畳
サ　佛陀の面なんと優しく
次　吹雪止み主峰を浮かす月あかり
美　箸に震へる煮凝の淵
中根明美　災害はオリンピックで記事小さく
サ　寝返りうてばコキと鳴る骨
美　かけ足で列島を行く花暦
公　ノートパソコン朧を叩く
て　鶯（ナオ）のこゑほしいまま峡の宿
美　経塚に積む石のいく百
サ　福祉課も市民課も混む午後三時
て　風のまにまに陶窯の煙
公　橋分けて沼と湖すべりひゆ
美　ハングライダー翔ぶ山開き
て　お揃ひの服お揃ひの靴を穿く
サ　誰かが後蹤けて来るかも
美　忍ぶ恋車の窓に顔を伏せ
公　雨の匂ひの残る街角
美　まんまるの月を掲げし島の上
て　旧家の庭に集くすず虫
水　風呂焚（ナウ）くに藁を一とくべ濁り酒
美　大黒さまの笑ふ神棚
水　兵児帯の尾の先垂れて老い兆す
美　可も不可もなく満天の空
て　ひとひらの花片肩に立ち話
美　ピアノぽろんと春の夕暮

平成十二年七月十六日首
平成十二年十月十五日尾
（於・伊東市中央公民館）

歌仙『神在す』

近藤蕉肝捌

阿夫利峰は神在すなり冬近み　厚子
　霧の水辺に駆ける鶺鴒　明水
描き上げん月出るまで画架立てゝ　徒司
　ダイエットなど三日続かず　遊
関取りの汗噴く腹に勝名乗　周子
　竹の縁台削氷あり　厚子
急な雨赤い鼻緒が飛び込んで　〃
　みのひとつだに無くてとゞまれ　遊
山姥が咥へたばこで居すわりて　徒司
　寄る年なみの瀬戸際の恋　厚子
きぬぎぬに特攻隊の歌遺し　周子
　古いカメラよハイさようなら　良
祝い酒頭上よろめく寒の月　厚子
　着がへの袖にくさめ連発　三夫
二時間も待って問診五分とは　明水
　閉店セール長き行列　千場ひで子
御佛の顔かくさむと花簪　蕉肝
　強東風に舞ふ書展案内　広重
バス停の時刻表なきのどけさに　鯛子
　流行の店に雪隠の札　明水
若旦那今日は新橋向島　遊
　午後の紅茶は少し甘すぎ　厚子
のら猫がすれつからしの横睨み　〃
　木枯抜けるのん兵衛横丁　遊
まだ少し無理なり予後の男坂　徒司
　知られちゃならぬ薬一服　厚子
密やかに保険契約あちこちと　周子
　裾にまとはる藪のみづひき　三夫
長い髪残る枕の未練月　周子
　冷まじきもの恋はすまじく　厚子
隊商のラクダも座して石窟寺　良
　子等の素足を洗ふ真清水　三夫
名物に原人といふだんご売り　明水
　疑ひもなき古里の味　千場ひで子
舟の寄る岬は花の海あかり　蕉肝
　大漁続く旗のうらゝか　広重

平成十二年十月二十九日首
平成十二年十一月十九日尾
（於・伊勢原市中央公民館）

歌仙『捨田水田』

伊藤貴子捌

捨田水田早苗田こもごも千枚田　伊藤貴子
日雀（ひがら）に和して小がら山がら　斉藤一灯
コンサート近き調弦弾みいて　伊藤薇彦
外遊の娘に便り書き出す　鈴木いと
蒼々と尖塔にあり望の月　萩谷悦子
葡萄酒醸す燻銀の町　灯
めずらしと零余子（ヮ）の飯のよろこばれ　彦
固唾をのみて速報ニュース　貴子
陰惨の世に朱鷺の雛また孵る　悦子
農継ぐ嫁が河南から来て　灯
風呂敷に大事だいじとしまう癖　貴子
置きどころなき奉納の絵馬　彦
褞袍着て川面にゆらぐ月眺め　悦子
熱燗呷り詠う牧水　灯
歌まくら跡を尋ぬる旅ならむ　貴子
薬籠ばかり太るこのごろ　い
花守は元お役所のおえらいさん　悦子
春星に見る遙かなる夢　灯
納税期政界財界智慧くらべ（ナォ）　彦
イベント業に寺が狙われ　貴子
肉桂掘るなんじゃもんじゃの木の傍に　彦
タイムカプセル寄せ書もあり　灯
目まといを払いっこして塾生の　〃
香水淡く偲ぶ年月　〃
奪われし恋に仇なすストーカー　彦
鉄の格子をよぎる白雲　悦子
マジシャンのしなやかに解く指の先　彦
キーホルダーを確かめて出て　悦子
十六夜の母郷の駅は山の端　灯
気憶まざまざ墓の萩叢　彦
角（ナウ）伐りの鹿を追い込む声興る　悦子
せせらぎを跳ぶトライアスロン　灯
召し上れ到来ものの紅茶つぐ　貴子
夕日をはじく七宝の玻璃　い
咲く花に纏太鼓を打ち鳴らす　灯
海原裂きて昇天の竜　悦子

平成十二年五月十日首
平成十二年六月七日尾

（於・市川俳諧教室）

歌仙『裏見の滝』

対面の裏見の滝も御神域　伊藤薮彦捌
　結構ずくめかざす白扇　伊藤貴子
点となり機影はるかに去りゆきて　伊藤薮彦
　とり替えられし鉢と敷物　萩谷悦子
酔えば賦す大正ロマン月仄と　貴
　児童遊園小鳥群れおり　彦
道の駅お洒落案山子に迎えられ　悦
　Uターン同志交す幼な名　貴
タレントが聞かせるプロの艶な技　彦
　二股かけて人妻に堕ち　貴
公約も政策もなき数合わせ　悦
　美しくあれ沖縄の海　斉藤一
熱帯夜記憶の底の月まっ赤　灯
　ジュージューぴりりキムチ焼肉　悦
強引にスカウトされて馬術部へ　灯
　還暦過ぎもパワー横溢　〃
ずんぐりの西郷像に花ふぶき　貴
　ひとりぼっちを揺らすふらここ　斉藤冨美子
惜春のこんにゃくえんま賑やかに　（ナオ）
　檻のゴリラが尻で辷って　冨
遁走の羽が欲しいと漁る古書　貴
　終着駅は未来都市かも　冨
蟹文字にリラックスなき寒昴　〃
　第九を唄い上ぐる聖堂　貴
恍惚の先は奈落と知りながら　彦
　夢の恋路は半歩及ばず　冨
毒薬も媚薬みんな致死量か　貴
　葦のずいから山の彼方を　冨
月過る雲幾たびぞ御師の忌　貴
　鳴かない虫の髭がゆらゆら　彦
文（ナウ）机に置かるる封書秋の風　貴
　ＮＧＯから旅の若者　彦
開くべき平和の扉どこにても　〃
　その歓迎の宴お国ぶり　貴
千年を耐えて薄墨桜咲く　冨
　予後にやさしき水草生う径　彦

平成十二年七月五日首
平成十二年八月二日尾

（於・市川俳諧教室）

歌仙『佛頂面』

雁鳴くや佛頂面の古書店主　洋々
往来うすき街の月影　悦子
庭下駄のおんぶばったはその儘に　彦
仰ぐ小枝がゆらりゆらりと　悦子
雨けむる岬の灯台おぼろなり　貴子
新入生の名札大き目　洋
ウ爛漫の花に手びねり並べ売る　彦
片道切符持ちて出向　悦
はんなりと京都になじむワンルーム　貴
ながら族にて鍋を焦がして　黍
只管に苔の紫染めあげし　富
里山遠く初恋の人　洋
釈迦に似し偏平足が自慢なの　悦
国宝展の看守居眠る　彦
止り木で介護問題酒に嘘せ　悦
マニュアル世界親もマニュアル　富
凍て月にあちら言葉の諍えり　貴
縁の下から賊のあなぐま　悦
ナオ少年は真実一路疑わず　洋
指輪はずして迫る年上　悦
磐石のはずの胸板ふるえだし　彦
ムンクのように叫ぶビーナス　悦
掘り当てし埋蔵金の白昼夢　洋
風船虫の神技を賞ず　富
朝靄に貴妃のお目覚め未草　貴
エルサレムの地迷路どこまで　洋
張り込みの刑事屈伸運動す　〃
茹蓊問答いつも火宅に　彦
琴の音に澄み切る月の大いなる　悦
吾亦紅触る風のたまゆら　貴
ナウ猿酒の思い出たのし老教授　洋
眼鏡入れ歯が金でぴかぴか　悦
靴下と女性の強さメダルにも　富
岩戸を開く神々の唄　彦
温泉どころの花のひと枝挿頭とし　貴
芝焼くけむり川向うから　筆

浅野黍穂捌

沢田洋々
伊藤薮彦
伊藤貴子
萩谷悦子
斉藤富美子
浅野黍穂

平成十二年九月六日首
平成十二年十月四日尾

（於・市川俳諧教室）

歌仙『百合鷗』

通ひ舟水脈を慕ひて百合鷗　　浜本青海捌

下の村より積荷の大根　　浜本青海

皿洗ふ夜無き街の盛り場に　　田中安芸

バンドボーイの暗き足元　　小野酔陶

袖そへてそっと差し出す月の盃　　大久保風子

濡縁に置く鈴虫の壺　　地引聡亭

ゥ木犀の香りほのかにただよひて　　土肥暢子

よりそひて行く彫刻の森　　横田思案人

灯を点す秘湯の郷に宿もとめ　　大城里水

しらぬがほとけ丑三つ参り　　中澤念魚

荒海のはてにみえたる喜望峰　　横田童子

金色の龍天空を舞ふ　　山内螺々子

夕立の去りし静けさ白い月　　品田公子

大統領選テレビ賑やか　　中村麗

穏やかに見入る夫はアルツハイマー　　杉崎迪子

招福託すＩＴ革命　　高根沢洋子

花万朶二十世紀を荘厳し　　長浜三千代

浮きつ沈みつ惑ふ捨雛　　水童

ナオ観念し目もうつろなる羊刈る　　浜本青海

春雷聞こゆ続く沈黙　　田中安芸

弓引けば同心円を宇宙とし　　小野酔陶

尺八の音堂に満ちたり　　大久保風子

ホームレス跨いでブーツとほり過ぎ　　地引聡亭

胸の埋火もてあましつつ　　土肥暢子

図書館でいつもの席の君を待つ　　横田思案人

メタセコイアの年輪を読む　　大城里水

焼けてこそ生まれる命の不思議なる　　中澤念魚

夢かもしれぬ現人の華　　横田童子

月を抜け消えてゆくよな雁の群れ　　山内螺々子

畦で色づく赤唐辛子　　品田公子

ナウ尾根めざし草踏みてゆく霧の海　　中村麗

ヘルマン・ヘッセの詩集片手に　　杉崎迪子

早熟の友若き日に薨りて　　高根沢洋子

帆船に乗り星へ旅する　　山内螺々子

花の香に大深呼吸庭に立つ　　品田公子

苗代ゆすり渡りゆく風　　中村麗

平成十二年一月　二十日首
平成十二年七月二十三日尾　（文音）

歌仙『あの岬』

衆議判

あの岬能登とや春灯またたけり　山本秀夫
　芽ばり柳の色を増す頃　吉藤一郎
鶯のかなでる歌を競わせて　大島朋子
　洗いざらしの似合うジーパン　宇野恭子
足長の影連れ立ちて月円か　杉本聰
　香り流れる落ち鮎の店　いぬじま正一
ウ秋収め旅行のパンフあれこれと　郎
　あの娘も僕もホモルーデンス　恭
砂風呂に並んで寝れば胸騒ぎ　正
　三途の川に嗤う奪衣婆　聰
※バルカロール民謡調のアレンジに　聰
　古き農具を飾るマスター　沖田泰子
くらべ馬いよいよ明日に月高し　恭
　汗にじむ手を浸す御手洗　秀
問いかけるキャパの写真の死のかたち　郎
　地雷廃止を批准せぬ国　恭
寄り寄りて雨の水輪に花筏　正
　一合枡で蜆売らるる　泰
ナオ山笑う窓辺にぼつんギプスの子　朋
　宇宙遊泳生涯の夢　恭
上下のわからぬほどに酔い潰れ　郎
　爪を研いでる怖いかみさん　秀
冬蜂の厨に羽根をふるわせて　恭
　火廼要慎と金釘の文字　竹部慧美子
せっかくの恋文ちょっと読みづらく　正
　大観覧車もう一度乗る　聰
昼見れば夜に見たのと違う顔　朋
　首相の人気髪も話題に　二村文人
月煌と森羅万象照らすらん　三谷貴志夫
　土にどさりと座る種茄子　雄上絹子
ナウ秋深くもろみに聴かすモーツァルト　恭
　老後に学ぶ源氏講釈　正
動かずに指図ばかりの牢名主　貴
　鬼のコーチは情にもろくて　文
城跡の写生の画布に花吹雪　絹
　青き踏む声さらにおおらか　朝倉一緒
　　長谷豊子

平成十三年三月　三十日首
平成十三年四月二十七日尾

（於・黒髪庵）

※ベニスのゴンドラに乗ってうたう舟唄

茨『首尾一巻』

近松寿子捌

首尾一巻茨で年も暮れにけり　内山尚美
煤払い終え待つ新世紀　富澤弘
猫たちも合唱の声張り上げて　妙島秋男
ゆらりゆらりと御隠居の膝　上田真而子
桶狭間刀の錆を照らす月　小池正博
龍田の姫はうっとりとする　久保田夜虹
前の世の縁めでたきめぐり逢い　奥村富久女
嫁入り先は鬼の棲む島　松尾博雄
〝太陽〟と名乗る跣の童駆け　圏理恵
こら待て待てと流しそうめん　弘
大統領選挙惑わす疑問票　秋男
社の杜に百千鳥鳴く　真而子
花は先ず京の八坂の夜桜へ　富久女
白酒売りはあちらこちらに　正博

平成十二年十二月十七日首尾
（於・茨木市市民会館）

・形式「茨」について
『表合十句』（発句・脇・第三は歌仙等に準じ、十句の中に四季を詠み込み、月・花・名所・神祇・釈教・恋等をあしらう。月・花の定座はないが素秋は忌むので秋月となる）は短時間で連句を楽しめますが、本来は格調ある形式なので憚って「表合十句的連句」と称して「茨の会」で愛用、それを発展させて句数は時間により八句になっても十二句・十四句になっても、としより八句になっても十二句・十四句になっても、として『茨』と称しております。
（本来は〝首尾一貫〟とすべき語ですが、巻き上げる嬉しさに〝首尾一巻〟といたしました）

歌仙『風交や』

風交やおとこおみなもさわやかに　奥村富久女捌
　頷き合えり黄菊白菊　奥村富久女
月に弾く琵琶の調べも更け行きて　内山尚美
　山荘に座し煎茶一服　妙島秋男
何処までも続く鉄路と転轍機　富澤弘
　ヘルメットより汗したたらせ　菌理恵
高層（ッ）のビルに映りし雲の峰　尚美
　想出はるか海の合宿　秋男
好き好きと囁く貝の耳飾　品部一朝
　わたしの恋は大器晩成　尚美
裏町に狐狸庵という蕎麦屋あり　富久女
　自慢の徳利信楽の産　福島桂子
弟の悴む手引き鎌月夜　弘
　枯れすすきにも怖じけづきます　理恵
はたはたと安倍清明神を呼び　尚美
　幡ひるがえり村は豊漁　秋男
灰撒けば見渡す限り花盛り　一朝
　舞いつめぐりつ蝶の長旅　桂子
奥村富久女の笠の懸る軒　富久女
　医師の駕籠の雨に打たれて　一朝
忍び泣く女心を歌に乗せ　尚美
　あなた好みのカツ丼の味　秋男
基督がいいかそれとも法然か　一朝
　中東和平今正念場　弘
アンタレス諸人の目をあつめたり　理恵
　簞笥にゴン虫さされムヒ　一朝
伝説の里の鬼塚薇の中　秋男
　龍之介逝き七十余年　富久女
文学賞受けて煌々望の月　弘
　秋刀魚ほうばるテレビの前で　理恵
茸（ナウ）狩り菌女の酒は笑い酒　富久女
　続々門に福来るらし　尚美
耳透ける黒猫屹度ふり返る　理恵
　都踊りの囃子流れて　弘
はらはらと花散り初むる桂坂　一朝
　土いつくしむ春霖の森　理恵

布草鞋（ナオ）へんろの笠の懸る軒

平成十二年八月十九日首
平成十二年八月二十日尾
（於・洛西・ふれあい会館）

尻取歌仙　『最終講義』

最終の講義や熱し二月尽　博
人智育てし快心の春　弘
ルーキーの踏む青芝の照り映えて　博
低空飛行撒く紙吹雪　弘
消えさうな玉兎はらはら雲の影　博
滅反の田の案山子とりこみ　弘
群れ遊ぶ稲に雀の無邪気なる　博
流転の我にとどく縁談　弘
壇尻を曳く勇ましき彼に惚れ　博
歴戦のあと濃き向かう傷　弘
瑞相の観音様に跪き　博
窮鳥抱く慈悲のお姿　弘
滝殿に旧友集ふ月の夜　博
留守の家族は冷し索麺　弘
免職に足の重たき帰り道　博
千々に乱るるこころもんもん　弘
門燈の光に浮ぶ花万朶　博
題詠三句「凧」の兼題　弘

松尾博雄
富澤弘

両吟

一管（ナオ）の笛に胡蝶と戯れて　弘
提携なつて晴れの会見　博
剣ヶ峰金融再建待つたなし　弘
潮の満つるは引潮の後　博
直送の河豚は生簀でぴちぴちと　弘
年の暮だとはずむ大枚　博
威張る奴ふふんと鼻であしらつて　弘
敵意交錯離婚調停　博
亭主面少し遠慮もよき夫婦　弘
不治の病につのる苛立ち　博
竹林を照らす満月煌々と　弘
とぼとぼ旅す瞽女が背に露　博
湯（ナウ）の宿に松茸飯の嬉しさよ　弘
佳き造作の数寄屋別棟　博
粘り腰王将めぐる読みくらべ　弘
勉強ですと客に根負け　博
絢爛の舞台を飾る花の枝　弘
だんだん蝌蚪のかはる此の頃　博

平成十二年二月十四日首
平成十二年八月十四日尾（文音）

歌仙『蟬時雨』

街路樹の影も動かず蟬時雨　　品部
　至福の午睡手枕のまま　　一朝
ゆらりゆら友は釣り糸垂れていて　　野路なをき
　夕べ立ち寄るあきんどの背戸　　一朝なをき
伝来の壺を飾りて月の宴　　一朝なをき
　見渡すかぎりコスモスの原　　一朝なをき
蛇穴(ウ)に入りて平和な小世界　　一朝なをき
　都に流行る歌謡ひとふし　　一朝なをき
夫はいま名古屋あたりかひとり酒　　一朝なをき
　拗ねてみる癖ほろ酔いのとき　　一朝なをき
今日も又テレビ見ながら悪たれて　　一朝なをき
　由緒正しき秘蔵の逸品　　一朝なをき
積む雪の土塀に揺れる縄梯子　　一朝なをき
　本所松阪月さえざえと　　一朝なをき
佳句を得て句筵一瞬どよめきぬ　　一朝なをき
　水泡に帰す国盗りの計　　一朝なをき
流れては又流れ来る花筏　　一朝なをき
外人墓地に涅槃西風吹く　　両吟
目借時英吉利(ナオ)いろは声遠し　　一朝なをき
　ＩＬＯＶＥ－ＹＯＵも乱れ文字なる　　一朝なをき
綻びを繕い続けプラチナ婚　　一朝なをき
　時は来れり寝たきり病　　一朝なをき
辞儀かわし坂を行き合う行者笠　　一朝なをき
　雹ぱらぱらと道に転がる　　一朝なをき
往時をば語る女将と夕端居　　一朝なをき
　鉱山の飯場に活気みなぎり　　一朝なをき
いつしかにたよりおこたるふるさとへ　　一朝なをき
　お詫びの気持新二千円　　一朝なをき
借財もどこ吹く風と居待月　　一朝なをき
　鳥居赤々稲妻に映ゆ　　一朝なをき
銀扇(ナウ)わすれて客のあたふたと　　一朝なをき
　寝ていた犬が急に吠えだす　　一朝なをき
四海波静かとはちといえぬ地球　　一朝なをき
　ぬくさに溶ける極地の氷河　　一朝なをき
花便り言葉遊びもちりばめて　　一朝なをき
　酔眼朦朧春日者遅々　　一朝なをき

平成十二年七月吉日首
平成十二年九月十一日尾

（ぼすと連句両家は至近距離にあるため直接郵便受に投句）

半歌仙　『琥珀』

菌　理恵捌

深秋のグラスワインのいろ琥珀　　菌　理恵
客を誘う月の縁先　　福島　桂子
藤の実の揺るるほどなる風ありて　　奥村　富久女
わが家自慢の木に登る鶏　　中島　ふゆみ
国境を越えし友なりEメール　　出来千　恵
梅雨にふくれし大川の水　　富久女
夏果てぬ六十路過ぎては刻辷る　　桂子
胡弓哀婉美人凄艶　　千恵
関節のすべてがゆるむその言葉　　富久女
捨てるカミサン拾いしオカミ　　ふゆみ
旅先の情に惚れて永住す　　千恵
束ねる干し菜匂いほのかに　　ふゆみ
御祭「翁」舞う人月明り　　千恵
電車乗りつぎ石の亀見に　　桂子
アトピーに効く漢方も呪いも　　桂子
瀬をすれすれに渡る初蝶　　富久女
靴の紐結びなおさん花の下　　ふゆみ
東風にさそわれ集う友垣　　理恵

平成十二年十月十五日首尾

（於・茨木市市民会館）

連句KUSARI

平成十一年三月に、インターネットBBSで発生した長い長い鎖連句の一部分をご紹介します。十三年五月現在、一万番を突破して増殖中。

7222 呼べばなつかしばあさまの顔　麦
7223 一世紀あっという間の夢のあと　タマ助
7224 メイドロボット家事をする日に　未悠
7225 水玉のエプロン姿よく似合い　あづさ
7226 ホストクラブの夜は更けゆく　雨乞い小町
7227 キムタクやトヨエツ・慎吾・仮面とり　拙閑
7228 バットで殺せ正論の徒を　Katchi
7229 捕まった小鬼が喚く壜の中　蕗
7230 青空目指しそれ浮いてこい　キリマンジャロ
7231 お日様とラジオ体操通う朝　んにゃ
7232 目刺しを炙る欠けた七輪　ミャーママ
7233 賄いの娘のだあれも知らぬ歳　睡々
7234 棚にせがれの写真あるだけ　たつみ
7235 アメリカで一旗あげたそうです　しゅん
7236 コーラ会社が五輪煽って　んにゃ
7237 アマチュアを貫きとおすメダリスト　わび太
7238 銀杏黄葉が散り敷いた道　藍
7239 霧時雨盆莫蓙渡世三度笠　たつみ
7240 とても強いと評判のヤツ　拙閑
7241 ナイロンの糸で作った命綱　麦
7242 生きて帰るも死ぬも地獄と　ニャン
7243 スポーツは楽しむものと割り切って　タマ助
7244 東京ドームドンと買い取る　ええ一
7245 新しき世紀を祝う大花火　蕗
7246 連句KUSARIの夢に乾杯　雨乞い小町
7247 いつ来ても必ず誰かに会える店　あづさ
7248 お袋の味今は昔に　拙閑
7249 葬花にも序列のありぬ寒の通夜　ミャーママ
7250 部屋にひっそり百合が一輪　風
7251 ピアノ弾くあふれる思い胸に秘め　ラプソディー
7252 言葉にすれば嫌いよ　んにゃ
7253 勘違いセクハラ上司のアプローチ　杏
7254 木枯しに舞う売り出しのビラ　蕗
7255 リタイアはするともない十二月　たつみ
7256 ラーメン屋台とピザの宅配　カンちゃん
7257 ふたりならどこにも居たって愛の園　キリマンジャロ

平成十二年十一月十七日より
平成十二年十一月十九日まで

歌仙『冬萌の巻』

吉江康子捌

冬萌や日毎訪ひ来る番鳥　吉江康子
　着ぶくれし児の投げるパン屑　片山春陽
竿売りの声どこよりか響ききて　佐々木リサ
　スポーツ雑誌ゆつくりと読む　菅谷ねこ
ブロンズのおとめ膝抱く月明り　河田水尾
　水澄みわたる山の湖　リサ
手折りきし秋草壺に溢れさせ　春
　女髪すく一つ家の中　ねこ
雨戸より洩れし灯もすでに消え　水
　遠吠えの犬次次に啼く　リサ
政変の大見出しには驚かず　康
　良妻賢母末は大臣　春
難民のキャンプの彼方夏の月　ねこ
　青田広がる故郷のこと　水
コーヒーを入れ直し居る作家業　リサ
　新米記者の胸の高鳴り　康
深吉野の花に連なるバスの列　春
春駒蕩と過ぐる船絵馬　ねこ
子持鯊釣る釣人の動かずて　水
　捲土重来重き荷を負ふ　春
信長の野望遺えし天主閣　リサ
　鑑定士等が探すお宝　リ
年かさねきて埋み火のごとき恋　水
　久しき文に心乱れて　ね
鎌倉に駈込み寺といふがあり　こ
　初鯛がとぎれとぎれに　リサ
宿題を溜めて外出禁止令　康
　地雷の国に渡る医師団　上田渓水
静かなる海はいづこぞ今日の月　春
　詩集はらりとめくる秋風　ね
色紅き菊人形にかしづかれ　こ
　股立取りて構えたる槍　水
ほろ酔ふて一さし舞へる老課長　春
　白き小鳩がポケットから出る　水
記念樹の花は朝日をしたたらせ　リサ
　教育プラン立てて麗らか　原田安恵

平成十三年二月十九日首
平成十三年三月十九日尾
（於・NHK文化センター青山）

歌仙『初旅』

宮脇美智子捌

初旅の眩しきまでの野川かな　宮脇美智子
　昔ながらの春駒の舞　臼杵游児
師を囲む四方山話しきりもなし　佐崎静緒子
　ぼろぼろにせる辞典そのまま　多平三代子
南窓に影くっきりと月の柚　藤井佐和子
　弓引きしぼる鹿驚倒れて　八島美枝子
神官(ウ)も氏子も酔へる秋祭　游
　縁談もって兄が故郷より　美
乗り廻すオープンカーは朱の色に　静
　右も左も茶髪顔黒　智
流暢な英語で届く忘れ物　佐
　梅雨満月を浴びし露座仏　佐
枝折戸に蟬の脱け殻すがりいる　游
　細く流れる笛の音は誰　三
鞍馬より牛若丸の稚児姿　三
　父親多き授業参観　静
ひとひらの花の行方を指さして　智
　かぎろひ止まぬ縄文の土器　美
山里の蚕飼いの灯遠近に　游
　瞳の青き次郎兵衛が嫁　三
手作りのパンまっくろに焦がしたり　静
　好きよ好きよと籠のインコが　佐
床の間に座敷童がにっこりと　智
　人がくるらし落葉かさこそ　美
落武者の身を置きかねし洞の奥　美
　富山の薬母の代から　游
貼りまぜの色紙に太き達磨の絵　佐
　授けし叙勲の功の数々　佐
月照らす一本道をどこまでも　三
　声さわやかに太郎冠者来る　三
黍(ナウ)餅をお裾分けよとくばられて　静
　じっと動かぬ水槽の鯉　静
ゆっくりと地球温暖すすみたり　智
　ゲートボール集ひ賑やか　智
寄り添ひし姉妹美し花衣　佐
　未来の都市が見ゆる蜃楼　佐

平成十三年一月十五日首
平成十三年四月二日尾
（於・NHK文化センター青山）

《豊田・桜花学園大学連句研究会》

しりとり半歌仙　『이르보ㄴ（イルボン）（日本）』

朴　權惠捌

伊吹山はるかに白い雪の　万年美香
さしこむ光匂う寒朝　聖きよみ
異国より兄貴の便りひきだしに　半田墨子
ニックネームの数が十七　加藤利恵
中休み달（タウル）（月）の姿はまぶしいね　朴權惠
稲の波間を鳥が横切る　鎌田英里
留守番のさみしい思い栗の味　美香
じらしまどわし恋のかけひき　きよみ
傷つけて傷つけられて成長し　利恵
七宝焼の窯の高き　きよみ
つなげよう最先端のEメール　美香
ルームメイトと楽しめた日々　權惠
비빔밥（ビビンバ）でビール片手に月の宴　英里
縁側で見るナイター中継　英里
いつからかストレス性の胃潰瘍　墨子
うるうるしてるゼミの先生　利恵
일본（日本）の思い出は降る花のいろ　英里
路面電車に暮れかぬる都市　權惠
　　墨子

平成十三年二月六日首尾
（於・桜花学園大学214研究室）

世紀継承百韻　『戦（いくさ）無（な）き』

戦無き世紀祈りつ餅を搗く　中尾青宵
若き等と焚く年の篝火　大城里水
丘の上寒九の空は晴れぬけて　和田忠勝
粛粛と筆嚠喨と吟（ウ）誓く　大駒誠一
重ねたる稽古もいよよ初舞台　大久保風子
龍門の風頬に優しき　塙於玉
図書館を巡れる月の青白く　今村苗
銀杏の実のそこ〳〵に落つ　中村麗
慣れぬ口には苦き蓼の芽　佐藤良彌
花冷えの堂に上りて座禅組む　風
剝いた色紙を見れば忍の字　一
你好（ニィハオ）の後お喋りと歌と酒　勝
夏の利尻はワンゲルの列　水
滴りを玉に月光フル生産　玉
もがりの宮のほの白き闇　麗
石榴の重たき蓋の沈黙に　苗
iモードでは想ひ中々　玉
恋やつれ人には告げてみたいこと　風
実に居て虚を為すはご法度　一
論文の時代考証手分けする　勝
不破の関越えわらふ遮那王　水
暫（ウ）くは放生池に紅葉鮒　宵

二ォ黄沙積む自動ピアノはアダージオ　彌

姑が来て桟をじろじろ　水

観光船マリー・クレール投げ捨てる　麗

駅前は恰好のフリーマーケット　苗

荻織る笠をみんな買ひ行き　風

ジャングルの地雷掘りてや月仰ぐ　苗

国境の峰小鳥往来　水

指一本ヒッチハイクも愉しかり　一

割れた時計は彼の人のもの　玉

やさしさがもてる男の基本とて　水

また直前で逃げた気の弱　樹

オードブル盛られしままに涸らびたる　勝

モリナガさんのビーチ夕凪　苗

陽炎の門床屋なくなり　宵

二ゥ椰子の実を落とす子が見る大帆船　青木秀樹

保美の隠者へ手紙届けん　岡山朱藍

世にふるはなんとむつかし日照雨　苗

捨てて拾って産着とりかへ　麗

辻占のいつのまにやら大蚜　玉

橋脇の寺額が盗まれ　宵

マキャベリの日夜通ひし石畳　水

コメント下さいマイク突きつけ　玉

ノーサイド中天の月寒々と　一

痛み分けした腰に柚子風呂　風

肉饅を頬ばるちょっと目立った娘　坂田武彦

エステティシャンの不可思議な技　勝

学問のすすめは措いて花の宴　苗

三ォ春火鉢次の一手のじれった　風

倫理委からのやっとＯ・Ｋ　勝

仏前と霊前袋買ひ置き　風

美人にゃたくさん持たす舟賃　藍

暗闇に地球の緑なつかしく　水

けふはあいつらゴルフコンペ　彦

一瞬の間が特許局時　水

宿に着くなり激し白雨　勝

山中でなんの肴もござらんが　宵

天井の染み数へ転う　彦

ぬっと出て黙って消えしのっぺらぼ　玉

落ちゐし睫毛コスモスの蘂べ　弥

月映す亀形石の溜まり水　鈴木慎二

おんぶばったの勢ひもなく　風

三ゥくずし字にルーペを当てて見る古地図　東浦佳子

路地の居酒屋江戸のＣＧ　二

新線の一番乗りに徹夜して　一

発作起すな蚤の心臓　佳

転げ落つシジフォスの石角とれて　弥

逃げ水は夢駱駝隊商　樹

秤り棒金と胡椒を揺らすうち　藍

鈎に変はれる風の雁がね　勝

大社千木の上なる月丸く　樹

隠せぬ恋は草虱着け　佳

悪びれもせず「できちゃった、お母さん」　一

ヘッドフォーンを洩れるサウンド　苗

花蓆学生さんら呼び止めて　彦

一句付けませ春の折端　宵

右腕（ナオ）に種痘の痕の懐かしき　藍樹

大政小政もお茶の烟に　一

銭湯の素人名人フアン有り　彌

アンニョンハセヨ十時過ぎたわり　佳

止まり木の内と外との御算段　宵

異なる夢に乳房がんばる　彦

すべすべとした肌触り豚の仔　苗

晴耕つん読余生豊かなる　彦

雪の夜は囲炉裏に昔話し　佳

冬至南瓜の味の甘辛　藍

金継ぎの失敗作は仕舞ひ込み　彦

比叡の峰を荒法師馳せ　樹

雑念を捨てれば背（ナ）の月かろみ　彦

朝毎に観る菊の白露く　佳

にらめっこ負けましたよと蛇穴に（ナウ）　藍

ちょっと太めがルノアール好き　一

オペラ座のプリマは今宵女神なる　彌

マーブルの床磨く孤児　藍

こころに灯あらば盲蝶いつか飛ぶ　宵

魚氷にのぼるきざし山峡　樹

何処へか失せるし花も戻り来て　宵

瓦礫除かむこぼせ良き種　勝

平成十二年（西暦二〇〇〇年）十二月三十一日首尾
（於・三田山上・山下）

歌仙『芭蕉一叢』

福田太ろを捌

北限の芭蕉一叢玉解けり　福田太ろを
〈起〉オ
夏風にのるつばくろの声　沢井三柳
ターミナル駅の改札混み合いて　小林茂之
土産を買って帰りゆくなり　佐々木文子
空しろく抱えきれざる月出でし　伊東康之
ちちろの中にすすむ長編　澤田佳久
〈承〉ウ
車座で地酒もてなす里祭　藤津和子
はっと息のむ見おぼえの影　三佳
麻酔よりアルトのこえに醒まされて　佳康
優しき仕草さらにやさしく　康三
爪ほどの若狭の浜の小さき貝　三和
遠く聞こゆるD51の音　和茂
先客は寒月なりし露天風呂　茂佳
同窓会の果てし冬の夜　佳文
口癖は社長になるよだったけど　文康
どうにもならぬ弁当の采　康太
背ナの子が振りて喜ぶ花の枝　坂本礼子
まとめてはがす春のひめくり　上月叩子
〈転〉ナオ
逃水の現れて明るき町となる　茂
青空の濃き岳の入口　三
手力男投げたる巌居すわって　佳
竜と化けたる人の執念　文
マニキュアもペディキュアも朱バナナ剝く　三
旗を打ちふり夢のシドニー　康
馴初めは共に眺めし十字星　佳
夜目にも白き君がうなじよ　康
けだるさの身はふわふわとふわふわと　三
波に消えたる恋の砂文字　康
月照らす補陀落駆ける修行僧　和
紅葉かつ散る錆びた鎖場　礼
〈結〉ナオ
おちこちに雄鹿の声の聞こえ来て　佳
メジャーへ挑む選手ぞくぞく　茂
出港のマストでおくる鷗鳥　三
留守を預かる路地のうららか　茂
漠山は花あるときは花に酔い　太
新世紀へと舞える双蝶　康

平成十二年四月二十三日首
平成十二年七月二十六日尾

（於・桶川公民館）

半歌仙　『鍬の柄に』

渡部伸居捌

鍬の柄に縋り雲雀を仰ぎけり　渡部伸　居
きのふもけふも霞む遠嶺　長井實　平
樹々の下ひとりしづかの咲き初めて　大野順子　平
悪童に蹤く幼な弟妹　村上宕王子　居
書に倦みて窓辺に寄れば月まどか　宇都宮柏葉　葉
風木犀の香を運びくる　居
仁ッ王様上機嫌なる秋日和　平
祝ぐご懐妊雅子妃殿下　順
若かりし父母の結婚写真帳　順
島の学校をしまれて去る　王
ぽつぺんが唇ナに戻せる己が息　葉
竹馬の友と交はす盃　居
夏の月塀掻きあがる猫を呼び　平
腕白坊主暑気当りして　平
松山の銘菓土産に姉が来る　順
はかなく覚めし古里の夢　平
一ト村を包むが如き花嵐　居
揺るるリフトは囀の中　順

平成十三年四月十六日首尾
（於・松山市小野公民館）

歌仙『旱り梅雨』

晴れ印いつまで続く旱り梅雨　　鈴木春山洞
　遠慮勝ちなる門（かど）の打ち水　　純
聞こえ来る謡の主は誰やらん　　楽
　夜も更け行く山里の道　　芝
出迎への訛り懐かし月の宿　　夢
　残暑の窓辺史書を繙く　　亭
ウ鉦叩き何故か今年はせわしない　　耕
　パソコン使ひメールやりとり　　水
かりそめのペンフレンドと思ひしに　　純
　会つた途端にひしと抱き合ひ　　洞
茶碗酒ぐつと飲み干しさようなら　　芝
　地震（なゐ）小止みなく伊豆の島々　　楽
海沿ひの苫屋を照らす冬の月　　亭
　湯冷めせぬようすぐ床に入る　　夢
休日は家族揃つてバーベキュー　　耕
　記者喜ばす首相失言　　水
大和路の寺それぞれに花の雲　　純
新入社員紺の背広で　　洞
ナオ楓咲きプロペラと舞ひ潦（にはたずみ）　　純
　カーナビ頼り気ままドライブ　　楽
どうなるか世の行く末が案じられ　　芝
　大自然てふ地球の自転　　夢
蛍飛ぶ子供喜びここかしこ　　亭
　湯葉と鱧（はも）とで京の味はい　　耕
過ぎし日の思ひ出話尽きもせず　　水
　闇に消えたる二人なりけり　　純
頬寄せし気配匂ひにひたりたる　　洞
　買春の罪森氏あばかれ　　芝
仲秋の名月妻と拝みけり　　楽
　皿一杯に猪肉を盛る　　亭
ナウ秋の射場矢走る音のいさぎよく　　夢
　若き血たぎるシドニー五輪　　水
ワープロを叩く指にも力籠め　　耕
　我が生涯を書くが生き甲斐　　洞
花白し灯影に流れ散りもゆき　　純
　歌声はづむ草萌ゆる原　　楽

平成十二年七月二十七日首
平成十二年九月二十九日尾
（於・松山市若草町松山市生涯福祉センター）

歌仙『颱風の眼』

平成十二年九月二十八日首
平成十二年十月二十六日尾
（於・松山市若草町 松山市総合福祉センター）

颱風の眼に入る島の静かさよ　鈴木春山洞捌
　船帰りくる満月の波止　鈴木春山洞
松茸の今年の出来はいかならん　浅木一耕
　過疎となりたる山間（やまあい）の村　長井南茶亭
こども等は草笛吹いて土手走る　藤本純一
　心浮き浮き街の賑はい　今井比呂夢
ゥ今日もまたオリンピックにテレビ漬け　高橋蘭水
　乗せられている口車なり　梶野浩楽
嫋やけき若き女将に惹れたり　鈴木春山洞
　憶えているは指だけじゃない　浅木一耕
立ち往生新幹線の数珠繋ぎ　長井南茶亭
　ファンは望むO・N対決　藤本純一
鐘の鳴るニコライ堂の冬の月　今井比呂夢
　暖簾くぐりて呷る熱燗　高橋蘭水
とりなしに受けに廻はりしとつとつと　梶野浩楽
　坂を下れば門跡の寺　鈴木春山洞
花疲れ帯も衣も輪に脱ぎて　浅木一耕
　早瀬に見とる鮎の子の群　長井南茶亭
ナオ川端の荻の二葉の閃きに　藤本純一
　世相・イベント「世紀末」付き　今井比呂夢
宣伝につられパソコン買う羽目に　高橋蘭水
　退職をして趣味に明け暮れ　梶野浩楽
娘らのお喋り蜜豆食べながら　鈴木春山洞
　髪切り虫の歯軋りの跡　浅木一耕
登頂に思はず友と抱き会ひ　長井南茶亭
　豊かな胸に弾む我が胸　藤本純一
くるほしきあの夜を肌は忘れ得ず　今井比呂夢
　唇つけて飲む弘法の水　高橋蘭水
四五人で先づは一献月見酒　梶野浩楽
　地蔵ほほ笑む秋の里道　鈴木春山洞
ナウ紅の厚ものの菊こぼれ初め　浅木一耕
　この頃しきり雛に凝る　長井南茶亭
どらえもん・だつこちやんもとドール蒐集　藤本純一
　挟み将棋は孫を相手に　今井比呂夢
杣びとの弁当開く花のもと　高橋蘭水
　河原に遊ぶ凧揚げの児等　梶野浩楽

《神戸・海市の会》

歌仙『神戸ルミナリエ』

鈴木　漠捌

神光あれと言たまひければ光ありき―創世記　鈴木　漠

天に星地に光あれルミナリエ　聖歌明るむこがらしの街　永田圭介

疾駆して世紀を越ゆる華やぎに　港巡りで過去へ時間旅行に　三木英治

寄る波に月の顔さへ皺みたり　くるみ割りとて形さまざまウ　梅村光明

澄む空は幼心を抱擁し　流し目こそは恋の捕物　圭介

法律に貞操義務といふ用語　とかく隣の芝は麗し　漠

蹌踉と男滝女滝に月は照り　小蟹の群れも右へ左へ　光明

諸々の生活危さ覚ゆるを　脚本も無く劇の幕開き　英治

前衛の前衛たりし宿命に　鐘霞む日にぬるき酒酌む　漠

遠山をひと刷毛染めて花の雲　葺替途絶え傾く藁屋根　圭介

安穏の蜥蜴も出でよ楽の音に　茶碗叩けど調子外れる　光明

人柄の良さが取柄と褒められて　縁は異なものの既に銀婚　圭介

携へて共に渉れる思ひ川　マロニエ咲くを君と仰ぎし　漠

茜さすワインゼリーの夕映に　享年伸びてほぼ八十路なる　英治

知と情と矛盾知らずの翁の言　月に由来の昔話を　圭介

能面の微笑の翳りすさまじき　友待つ虫も何かはかなく　漠

かの朝の記憶新たに震災忌　摩耶颪きて戦後しのばる　光明

若きらが登檣礼の解纜に　指南の極みなべて宜候　漠

降りしきる花のほろびに詩句を添へ　不死鳥舞へる春の夜の夢　英治

平成十二年十二月十六日首
平成十二年十二月三十一日尾

（文音・ファクシミリ）

歌仙『美は乱調に』

掌に朱鷺生るる日や青嵐　　玲
　夏暁にひびく草笛　　遊耳
可知不可知確率論をあてはめて　　遊馬
　またも乱るる衛星通信　　京
望の月帰国の列の影法師　　志乃
　萩の上葉に露の白珠　　純
冷(ヴ)まじの歯にしみ徹る密造酒　　真紀
　癲癇のまま渉る海峡　　洋一
サンタマリア鱶の餌となる君なれば　　玲
　バンドネオンの凍る「ジェラシー」　　馬
種子ひとつ行方不明となりしまま　　耳
　前世のわたし木だったかもね　　乃
石の家にバウムクーヘン焼く匂ひ　　一
　ゾーリンゲンの剃刀の鋭(と)き　　子
紙とんぼ飛ばせて建国記念とか　　馬
　水漬く英霊朧月の底　　純
Duet(二重奏)がDuel(決闘)となって花の散る　　一
　聖金曜にひとり旅立つ　　京

別所真紀捌

地質学教授の七ツ道具など(ナオ)　　紀
　胎教に良き竹を割る音　　玲
折り皺の婚姻届走り梅雨　　一
　保険外交休む片蔭　　玲
世を斜に渡るピタゴラスの裔にして　　乃
　一反木綿なびく新涼　　玲
文化遺産炎上繊き月かかり　　京
　石榴が裂けて闇が震へる　　馬
鬼や棲む鶯宿峠国境(くにざかひ)　　乃
　砦を棄てる俺は雑兵　　一
せめてもの晩節潔ぎよくあらむ　　紀
　劇の半ばに緞帳の落つ　　耳
成仏(ナウ)といふバス停に雪しまく　　馬
　ただ真直に行くほかはなし　　耳
言扁をたぐり寄せてる己(おのれ)吾(われ)　　馬
　炉の名残りにと燃やす文殻　　玲
初花のその色としもをとめごは　　純
　大杉栄「美は乱調に」　　一

平成十二年五月二十四日首尾

（於・松聲閣）

半歌仙　『胡砂昏く』

渡邉陽行捌

胡砂昏く黄泉の国から黒揚羽　　渡邉陽　行
　目路いっぱいに菜の花の畑　　古川千代亀
ガス燈もゆきかふ人もおぼろにて　　髙森秋　義
　自由闊達生まれ大正　　砂井斗志男
月光の曲聴いてゐる月あかり　　植松晴　子
　秋の七草風にそよぎぬ　　吹田健　児
手ッ入れよき銃たづさへて初猟に　　亀
　射止めてみたいエリートの彼　　行
あっけなく別れの朝が訪れて　　義
　酒を買ひ足し疲労回復　　男
摩耶山のロープウェイも再開し　　児
　不況の辛さしばし忘れる　　亀
ねず番の十二神将涼し月　　晴
　蛍火流れ心洗はる　　行
I・Tに情熱燃やす森首相　　義
　あっけらかんと外遊の途に　　男
花冷えの峠を下る花見バス　　児
　展望きかない春霞の中　　晴

平成十一年十一月六日首
平成十三年十一月十五日尾

（文音）

半歌仙　『綿津見の』

渡邉陽行捌

綿津見の沖よりあけて歳立ちぬ　渡邉陽　行
　初日さし込む部屋のガラス戸　高森秋　義
梅園へ友を誘ひて吟行に　古川千代亀
　麦踏むそばを駆ける童ら　行
うるむがに山へのぼりし朧月　義
　混成合唱（コーラス）風が運こびぬ　亀
少年は大志を抱き上京す　行
　君の蹴出しが眼に焼きついて　義
キャリアより女ですもの妻の座を　亀
　ペットの犬猫涼を求めり　行
参院選天下分け目の夏の陣　義
　恐怖ニアミス神よ仏よ　亀
むら雲を月押しあけて踊り出る　行
　今年酒酌み友と語らふ　義
孔明の五丈原に秋深むらん　亀
　ウーマンパワー続くマラソン　行
世界中ネットで結ぶ花便り　義
　氷河のとける音を聞く夢　亀

平成十二年十二月二十日首
平成十三年一月二十日尾
（於・四電お客センター）

ぶるぶる歌仙　『小雨坊』

あぢさゐや峠をはしる小雨坊　矢崎硯水捌
　はんざきの背にすくと赤舌　硯水
隠れ家の不気味な音にをののきて　矢崎硯水
　飾り鎧のわれさきに逃げ　沖津秀美
次第高名月にまで届くらん　本屋良子
　案山子へのへのもへじぴくぴく　山本秀夫
ウジキル顔して売りさばく天狗茸　東浦佳子
　パックに貰ふ媚薬一片　矢崎妙子
あらたかよ狐嫁入り列つづき　硯水
　泊りし宿の鬼女になぶられ　沖津秀美
立ちのぼる反魂香に現るる死者　本屋良子
　山海経を誦してもむ数珠　山本秀夫
食取りに憑かれ河豚ちり食ひたきが　東浦佳子
　月をボールに夜叉のサッカー　矢崎妙子
人玉か長き尾を曳く西の空　本屋良子
　水子・嬰児手をつなぐとき　山本秀夫
歌ひ出すロボット犬に花万朶　東浦佳子
　喜見城より覗くシバテン　矢崎妙子
尺骨に綿飴巻いて春祭　硯水
　千里鏡あり飛び道具あり　沖津秀美
研修をかさねていよよ背後霊　本屋良子
　新ハッカーは天邪鬼とふ　山本秀夫
ヒトゲノム盗んで牢にぶちこまれ　東浦佳子
　夜鷹の顔を隠すたふさぎ　矢崎妙子
蛍狩累がからみ「恨むぞえ」　硯水
　鎌八幡の鋭鎌・錆鎌　沖津秀美
名にし負ふ幽霊屋敷取り壊し　本屋良子
　水琴窟の音も頓狂　山本秀夫
月虹に妖怪どもは群れ遊び　東浦佳子
　ひやひやとして忍び現れ　矢崎妙子
ナウピシュピシュと風切つてとぶ木の実独楽　硯水
　念力こめる核の開発　沖津秀美
わたつみは海を穢され嘆くらん　本屋良子
　更けゆく春に龍はのたうち　山本秀夫
仙人が花に飲み干す越の酒　東浦佳子
　虎朝寝してあさきゆめみし　矢崎妙子

平成十二年五月　十七日首
平成十二年八月二十八日尾
（於・fax&e・メール・河童寓）

半歌仙　『焚　火　守』

渡部伸居捌

渡部伸　居
荻山玲幸　玲
井手光子　光
田中春紅　春

先生と呼ばれ夫子(ふうし)や焚火守　玲
　ころあひを見て掘りし焼芋　居
登校の児の挨拶を受けもして　光
　配達員の嫌ふ吠え犬　春
月映る川の浅瀬の波立てる　居
　急に吹きくる秋のビル風　玲
韓国(ウ)へ松茸贈る北の友　光
　想ひ切々長き電話で　春
妊りのこと告げもせず無理を押し　玲
　下戸の哀れは一盞に酔ふ　居
大宮へ奉納したる干支の絵馬　光
　実用近き介護ロボット　春
鈴蘭をいだける人を照らす月　玲
　宿の浴衣に駒下駄を穿く　居
東京でこけら落しの歌劇団　光
　燈明あがる御仏の前　春
儚さの花の一句を短冊に　玲
　箒かけたる炉塞ぎの部屋　居

平成十三年一月十二日首尾

(於・春紅邸)

『春風や』

酒恋半歌仙

若松藍香捌

春風ややわやわとして胸に入る　若松藍香
蒸蛤で交す盃　臼杵游児
朝寝する三度も恋の夢を見て　松永倭子
トランポリンで落す贅肉　伊藤薮彦
月今宵兄と弟を契る酒　福永千晴
晩稲実って嫁に請はれる　鈴木豊次
法ウ被着ていなせな棟梁秋祭　荻谷悦子
そりぁと青きあの人に添ふ　藍
天鈿女てふ酪酒の燗を熱ふして　游
何につけても脱ぎたがる癖　倭
ひたひたと砂文字を消す波頭　彦
天妃の閨は地震に埋もれ　千
パックツアービールの泡もうたかたの　豊
忍び逢ひたる涼み狂言　悦
京なまりはんなり耳をくすぐって　蘭
比丘尼が仰ぐ朧夜の月　游
ひとひらにはじまる花の円舞曲　倭
お玉杓子は四分音符かも　彦

平成十三年一月首尾
（於・藤ヶ丘地区センター）

歌仙『遠山』

遠山は眠りに入りぬ旅恋し　　桂
　冬の日差しのぬくき文机　　葉
ミレニアム夢を抱きて歩むらん　　節
　沖行く船が波の間に間に　　桂
鄙の家に円かな月の昇りきて　　葉
　耳を澄ませば鈴虫の鳴く　　節
ウ黄落の旧街道に団子買ひ　　桂
　小芥子に似たるおぼこ娘よ　　節
結ひたての髪のくづれを気づかひつ　　葉
　藤村詩集いつも鞄に　　葉
北へ行く電車の客のまばらなり　　桂
　単身赴任十年となる　　桂
月涼し鳴き寄る猫を拾ひ来て　　葉
　好きなものだけ食べる夏痩　　節
何事か真昼(つんざ)劈く救急車　　桂
　介護保険の説明書読む　　桂
支柱添へ万朶の花の淡墨に　　葉
叙勲の知らせ受けるうららかさ　　葉
ナオ肩に来てふはりと止まる石鹸玉　　桂
　パントマイムに人だかりする　　葉
大化けのハイテク株に息をのみ　　節
　洞穴に棲む狐とび出す　　桂
木枯に赤い蹴出しの湯女のうた　　葉
　愛の告白迫られている　　節
鉄鍋に釣りの成果の鯉こくを　　桂
　習ひ覚えの縄を綯ふなり　　葉
脱サラの田舎暮しにあこがれて　　節
　素焼の壺の乾く工房　　桂
月よさに連句巻かんと寄合へば　　葉
　禁酒禁煙続かざる秋　　節
ナウ所在なく軒の瓢箪ぶらぶらと　　桂
　話題にならぬ二千円札　　葉
サミットの主役集へる基地の街　　節
　繰り時計龍が舞ひ出す　　桂
記念樹の花咲きそめしでたさよ　　葉
　嬰の歩みに陽炎のたつ　　節

平成十二年八月十日首尾（文音）

歌仙『山繭』

山繭の淡き緑の春浅し　西　幾多捌
　田を打つ爺にひびく雪代　小松崎爽青
古雛のゆかしき面輪飾るらん　西　幾多
　北前船の跡を辿りて　片野弥恵
月あがり影長くひく破れ堂　後藤算子
　露置く草に足の縺るる　長澤矢麻女
秋袷(ッ)エスカレーター踏み惑ひ　小岩菖蒲
　心ならずもデート重ねし　弥
いつしかに女房気取りいそいそと　矢
　賞め上手にて彼はいい人　〃
弁当にそぼろでハート型描き　弥
　鴉五・六羽ビルに遊べる　菖
寒晴の空にぽっかり昼の月　算
　蒲団を干して部屋に積上ぐ　算
夜通しで話すことある嬉しさに　弥
　光源氏もCDに載り　弥
風に揺る万朶の花の紅枝垂　幾
　遍路の笠の見隠つつ　幾
陽炎(ナオ)に養蜂箱を並べ替へ　菖
　ホットケーキでお茶をいただき　菖
それとなく親遠ざけてゐるらしく　弥
　夏痩せしは恋の窶れか　算
連出して鬼灯市に行くといふ　矢
　苦き珈琲思ひ出となる　弥
小波のたちて消えたる逆さ富士　幾
　フルマラソンへ挑む調整　弥
いくらかはGNPも上向くに　〃
　海外旅行穴場狙ひて　矢
月光の差込むガラス欠けてをり　算
　風呂場の外で馬追が鳴く　矢
休日(ナウ)は一家総出の稲刈りを　〃
　大賑はひのコンビニの店　算
振込みの金額多いメール代　菖
　暇さへあれば指の運動　〃
老いぬれど花衣とてお揃ひに　幾
　夢現つつなる朝の囀　矢

平成十二年八月二十八日首尾

（於・算子居）

歌仙『老の口笛』

五月闇老の口笛音をなさず　西　幾多捌
　青田の風に走りだす犬　小松崎爽青
碑の万葉仮名が読めなくて　早田維紀子
　携帯電話持って散歩に　伊藤延子
十六夜の港にマスト影重ね　唯野嘉代子
　秋の七草ラウンジに活け　伊藤柳香
ウ残暑なほ理科標本の萎れそめ　西幾多
　窓にちらりと美しき横顔　維
直接は言へぬ想ひを句に托し　延
　意外に利きし恋の呪い　嘉
念力は伊賀の忍者の裔なれば　柳
　マジックショーに拍手喝采　幾
凍月を見上げる猫の妖しさよ　維
　机がはりに炬燵持出し　延
震災の復興ひびく槌の音　嘉
　パソコン習ふ爺の明け暮れ　柳
花の山呼びとめられて盃を受け　幾
　舞ひつつのぼる双つ蝶々　嘉
いつせいに発つ鳩のうらら(ナオ)かコーラスは復活祭の子等ならん　柳
　眩しきほどに白いブラウス　幾
逢ひにゆく爪の手入れも車内にて　嘉
　恋に狂ふは母ゆづりかも　延
キス長きふたりを隠す草いきれ　維
　コーラ呷つて深く息はく　幾
舫船ぎしりぎしりと昼下り　柳
　注目の中降りる五輪旗　嘉
手巾を土産にどさと買込んで　延
　砂漠の町のバザールに酔ふ　維
月のぼり胡弓切なく聞えくる　嘉
　落鮎掬ふ簗も崩れて　幾
ウ爽やかにディサービスの始ると　柳
　靴磨きあげ書道展観に　幾
震災の復興ひびく槌の音　嘉
　パソコン習ふ爺の明け暮れ　維
花の山呼びとめられて盃を受け　延
　舞ひつつのぼる双つ蝶々　柳

平成十二年十二月一日首尾（文音）

歌仙『植田』

膝送り

植田はやそよぎそめたる千町歩　小松崎爽青
女先生紅いパラソル　大竹多可志
山羊の群鈴を鳴らしてもどるらん　石田栄子
匂ひほのかに焼きあがる麺麭　福田安子
満月にショーウィンドウの埴輪笑む　多
そぞろ寒しと戻る小走り　栄
到(ウ)来の酒温めて人を待つ　安
電話鳴り出すポケットの中　多
筋書が狂ふデートにあわてゐて　栄
浴衣の帯も結べないとふ　安
香水のあまく淨らな髪に触れ　多
二人で行こうスイス・イタリヤ　栄
雪しづるヒュッテに仰ぐ月恍と　安
焚火の煙湖にながれる　多
恐竜の化石掘り出す土の凍て　栄
救ひの神も時に気紛れ　安
母の手をとりて万朶の花仰ぎ　栄
子雀の声軒に賑やか　多

草(ナオ)野球のんびり打てばホームラン　安
定年離婚はやるこの頃　栄
世の中の変る速さに追ひつけず　多
趣味を生かして詩吟教室　安
川開き見にゆく肩をそつと抱き　栄
白きヨットに恋のドラマが　多
セレナーデ夢見心地に聞きをりて　安
エルミタージュにピョートルの馬車　栄
陶器市掘り出しものがあるといふ　多
忘れた頃に地震ぐらりと　安
猫抱いて今のぼる月しみじみと　栄
銀杏拾ふ学舎の庭　多
文(ナウ)化祭難解の書に人だかり　安
机たたいて笑ふほがらか　栄
潮汁鯛の目玉を嚙みあてて　多
健診結果老化すすむと　栄
薄墨の花借景に舞扇　安
古里の山うららかにこそ　多

平成十二年十二月十日首尾（文音）

歌仙『蜘蛛の糸』

蜘蛛の糸意外に靭し秋の風　西　幾多捌

月見る老いのとがりたる肩　小松崎爽青

爽やかにファックスで来る付句にて　守田　碧

切株の椅子ベランダに据え　西　幾多

茶を入れて山の話のまたはずむ　根本美茄子

マットの上に犬が寝そべる　碧

ッあれこれとカルチャーセンター申込み　幾

止まりし時計差すは午後四時　美

すねてゐる顔の色白可愛いくて　碧

だあれと言うて後より抱く　幾

生意気は大人になったつもりなり　美

うぶ毛の抜けし鶯が羽搏き　碧

月あげて国禁の書を読む暑さ　美

紺の浴衣に寝押しきかせて　幾

野を拓き自給自足の五十年　碧

叙勲祝ひに孫の演奏　美

仰ぎ見る万朶の花の陽に光り　幾

ひとり住ひに届く草餅（ナオ）　美

挨拶を燕に送り出勤す　碧

ひよいと被りてベレー素敵に　幾

彼が行くスポーツジムを探し当て　碧

ビール飲み干し愛の告白　美

携える手鍋がはりの化粧箱　幾

車があれは事は捗る　碧

年用意出稼の金当にせん　美

田作のみの祝膳なり　幾

八っあんは親の代から店子にて　碧

駅前通りさびれ見えそむ　美

㊎の文字を浮べて月笑ふ　幾

おくんち支度昔ながらに　碧

村芝居はねて帰りのうそ寒き（ナウ）　美

意地を隠して女生き抜く　幾

松影を映す入江に澪の波　碧

ごきげんようとなごり惜しみて　美

花片が帽子の鍔に乗つてをり　幾

茶を摘む唄が谷越えてゆく　美

平成十二年十二月十二日首尾（文音）

歌仙『おぼろ夜』

おぼろ夜の鏡に沈む己が顔　小松崎爽青捌
　蛙せつせつ鳴ける田舎家　小出民子
気がかりの蒟蒻を植え終るらん　石田栄子
　紙飛行機がふはと舞ひ来る　新井佳津子
月よさに池めぐる影濃く曳いて　羽場桂子
　砂の箒目いとも爽やか　飯泉葉子
ッつるもどき無造作に活け蕎麦処　中村奈美子
　思ひもかけぬ人と逢うたる　佳
ただならぬ気配に猫が耳を立て　栄
　ふつと消されし部屋のともしび　佳
読みかねてゐる古文書の崩し文字　爽
　朴葉味噌焼く焜炉土産に　民
路地うらに煤けた月が懸りゐて　民
　草に鳴き澄む閻魔蟋蟀　爽
妻留守の温め酒にすこし酔ひ　栄
　セールスマンは口達者なる　柳
散り急ぐ花をうらみの手庇に　香
　吉野けぶらす春雨の音　佳
ナオ出来されし焼草餅の懐しく　民
　童謡唄ふ髭の校長　福田安子
ゆくりなくお氷川さまに絵馬掛けて　佳
　白き衿あし透きとほるかも　田川節代
かなしさは声かけながら言ひそびれ　柳
　寄り添つてゆく若からぬ影　爽
後朝の木戸開くさへけだるしと　栄
　不協和音が街に溢れる　佳
ロケットの打上げまたも失敗し　栄
　北方領土垺明かぬなり　爽
有明の潮うねり来る舟溜　奈
　こゑを零して渡るかりがね　葉
ナウ図らずも栗強飯を馳走され　高島三津子
　刻ゆつたりと過ぎる湯治場　民
夫と観し子供歌舞伎が目に立ちて　松岡綾子
　鶯笛が暁々と鳴る　伊藤延子
千年を咲き継ぐ花のくれなゐに　佳
　霞の奥に笑ふ神々　小松崎竹魚

平成十三年一月二十五日首尾（文音）

歌仙『兎小屋』

根津芙紗捌

紅梅に日がさし来たり兎小屋　根津芙紗
　遊び疲れて座るブランコ　小沢比呂志
忘れ霜窯の温度を確かめて　軍司路子
　次のだんどりあれもこれもと　山口良子
隣家には客がいるらし居待月　平島嘉子
　高嶺ルビーと蕎麦に名がつき　笠松道代
ウ鵙日和すゞめの声を鵙がまね　倉沢友子
　口説き上手の押しの一手に　竹内順子
眉を剃り化粧水つけ男です　嘉
　邪魔にされたるタイ国の象　近藤山澗子
喝采のカーテンコール繰り返し　篠田洋子
　第九に挑戦障害を越へ　順
月涼し照らす飛鳥の亀の石　道
　水路づたいに蛍追いかけ　嘉
縫い直し編み返しては母のよう　良
　学級崩壊果つるめどなき　比
鐘の鳴る思い出の丘花吹雪　比
くっきり浮ぶ爺の種まき　芙

ナオその先の先が知りたし柏餅　比
　定刻につく街の外灯　嘉
新しき図書館募るボランテア　路
　介護保険のわかりずらさよ　友
雪だるま目鼻が溶けてのっぺらぼう　山
　炬燵も時にまこいじめに　順
横綱の突如引退臨時ニュース　洋
　事故の後処理いつもうやむや　良
愛人と妻の間を揺れ動き　路
　不意に鳴りだすタイマーの音　山
家中に呼びかけている望の月　比
　茸談義に新酒加わり　良
ナウ蠟燭の闇がもてたる秋の詩　芙
　言葉少なき僧の説教　友
宿題の耳なし芳一暗記する　洋
　乗り捨ててある赤い自転車　嘉
雨少し大地を染める花の屑　路
　浅蜊の息に浜の口開け　順

平成十二年三月十七日満尾
（於・伊那市立図書館）

歌仙『傘がない』

秋の雨落命の蟬浄めおり　　啓
　月の桂にふっと放念　　実
雑沓にべったら市の匂いして　　瑞
　右脳左脳にＩＴ革命　　節
壇上に宰相ありて土用凪　　子
　虹のかけらと峠下りくる　　さ
ッあくびして鳩と目が合うガラス越し　　明
　恋の予感にフルーツパイ焼く　　靖
人形のサロメは妖し糸遣い　　瑞
　また逢う日までふり返りつつ　　節
千載の波打ち寄せる地震の島　　絹
　千六本の腕を褒められ　　啓
さし交わす枝の細きに冬の月　　宏
　枯野を渡るもののふの笛　　実
ざら紙のカフカ山積みプラハ駅　　実
　解説つきの史記を読み込む　　瑞
風一陣大泣き羅漢花のうず　　手
　湯気に包まれ茶つくりの里　　啓

坂手手留捌

坂手手　留
宮脇瑞　草
矢部節　子
坂上さくら
坂入啓　子
渡辺実　枝
斎藤靖　子
　　節
川岸絢　子
平田宏　子
八木山　羊
藤村明　子
　　啓
　　宏
　　絢
　　さ
　　手

ナオ掘り出され潮吹貝の不満げに　　啓
　学歴高き死刑囚たち　　実
もの思いイエ呆けました傘がない　　瑞
　捨てる捨てないと捨てられますか　　節
田植して緑広がるカタルシス　　瑞
　先見えるまでフリーターで　　靖
この道はローマに続くか霜の朝　　明
　酒と女は二ゴウどまりに　　さ
泣いてみし縋りてもみし北の宿　　啓
　区民農園立札乱立　　節
月高く青煙這える沼の森　　絢
　瑠璃糸蜻蛉つんつんつんと　　実
ナウ墨書きの図書カード繰る去来の忌　　宏
　パソコン講座またも外れる　　実
神経のきしむ音する名演奏　　手
　聖母子像の着衣ゆるやか　　瑞
島原の花の岬に灯の点る　　実
　殿様蛙庭石の上　　啓

平成十二年九月五日首尾

（於・東京多摩花林舎）

歌仙『百年の計』

池川蜩谷捌

枝打つて百年の計始むかな　池川蜩谷
　耳を澄ませば聴こゆ笹鳴き　小倉静波
客室の壁紙の色明るくて　戒能多喜
　ドライフラワー飾るテーブル　高瀬照幸
叢雲を脱ぎし玉兎のいと丸く　波
　早生蜜柑とて味は抜群　幸
潮(ッ)先ののぼりの鯊を船で追ひ　多
　ストーカーなどほんに嫌(ゃ)な奴　幸
捨てて来た筈の男が忘られず　波
　口約束を今も信じて　波
国あげて引揚げ待たる「えひめ丸」　多
　天神祭近づきし頃　幸
量かけてぼんやり照らす夏の月　多
　結城紬を孫に仕立てる　波
ふる里の従兄はとこはみな老ひて　波
　無礼講にて宴は酣　幸
ほのぼのと雲かと紛ふ嶺の花　多
　われも旅人春を惜まむ　波

入園児母とスキップして帰る　樋口史子
　師の句碑建ちて宮居きらめく　楠治子
湧き水の尽きる事なき流れにて　池川水穂
　無事に還れよ河野兵市　谷
虎落笛なれば吠え立つ小屋の犬　幸
　ふつふつ煮えて匂ふ牡蠣飯　波
背(ナ)の子をあやしつ今日も夫を待ち　多
　不倫のひとは痩せ細りたり　史
恋文の連綿美しき筆使ひ　水
　※コロ毒呑ませ保険金詐欺　水
前庭を月皎々と渡るらむ　史
　障子貼り替へすするお煎茶　治
砥(ノウ)部焼の壺に野菊の良く似合ひ　多
　買物兼ねて誘ふドライブ　波
入り鐘の響ける里は穏やかに　幸
　田の裏溝に蝌蚪の群れ棲む　谷
満天の星を宿せる花の精　水
　素描きの帯ににじむ春愁　多

平成十三年三月二十日首尾
（於・川内町中央公民館）

※（コロ毒…すぐにころりと効く毒）

《東京・神田川連句会》

歌仙『初山河』

衆判

雲を呑む雲悠然と初山河　松井青堂
　みどり映れる若水を汲む　小河信國
重三（ちやうみつ）を迎ふ雛の間華やぎて　堂
　簞笥長持菱餅霰　國
いつしかに仲春の月かかるらん　堂
　下戸も上戸も集ふ横丁　國
さりげ（ッ）なくメモを渡して澄まし顔　堂
　言はず語らず以心伝心　國
婚儀弥撒終へて陽光燦々と　堂
　ベニスの舟唄耳に涼しき　國
カンカン帽似合ふ縞シャツ矍鑠（かくしやく）と　堂
　わが愛犬も年をとりたる　國
屋根に猫シャル・ウィ・ダンス夜々の月　堂
　口内炎とや秋風の吹く　國
さはやかに禁食てふ札下がりをり　堂
　うす紙を剝ぐやうなゆくすゑ　國
花霞明日を信じて学徒らは　堂
　ぺんぺん草の空を銀翼　國
利久忌（ナオ）の井戸の底より声のして　國
　濃茶お点前息をもらさじ　堂
黄八丈格子の柄の端正に　國
　裾をはしょってすたこらさっさ　堂
浮寝鳥この世のことは知らぬげに　國
　赤く雪染む本所吉良邸　堂
裏道を小走りにゆく女傘　國
　手鍋さげての心意気よし　堂
新郎のパソコン狂ひつゆ知らず　國
　インターネットの果てもなき闇　堂
月まどかちんちろ邯鄲鉦叩　國
　今年の酒に足を取られて　堂
木守（ナウ）柿庭師一服うまさうに　國
　いまに見ておれ選挙があるぞ　堂
吹き荒れて神も仏もかくれんぼ　國
　外れ馬券に未練たらたら　堂
人は武士花はさくらと諭しける　國
　盛衰の夢浮かぶ蜃楼　執筆

平成十三年一月首
平成十三年二月尾（文音）

《東京・神田義仲寺連句会》

歌仙『秋の蟬』

老人がたやすくつまむ秋の蟬　　田辺　昇捌
　明月かかる宵闇の松　　斉藤石叟
秋の風峠に立てば雲掃きて　　山本芳岳
　世紀末きて地震が多発　　佐藤宗文
青楓梢の先を赤く染め　　田辺　昇
　豆腐とドジョウ夏負け対策　　平本宗嘉
テープ（ッテープ）切る尚子余裕の金メダル　　文岳
　九段の坂に亡き夫（ツマ）しのぶ　　昇文
過ぎし日の想い出たどり独り旅　　岳昇
　千鳥格子の流行戻る　　岳嘉
丸顔にネクタイ似合う舞の海　　嘉岳
　みんな上手に一輪車の子　　岳伊藤秀峰
氷柱ごし月煌々と山の家　　伊藤秀峰昇
　甘酒くんでかまくら遊び　　昇岳
カラフルにボディ広告バス稼ぐ（コメ）　　岳峰
　拉致はどうなる北鮮へ米　　峰岳
新緑に木の間に花の珍らしき　　岳石垣咲子
　陽炎もえて田の道を行く　　子文
お水取りあけて取出す鞣鞄帽（ナオ）　　文峰
　学校ゆとりで子は塾通い　　峰岳
国会は少年の令（トシ）引きさげる　　岳嘉
　野良猫避妊露地の愛護派　　嘉石垣咲子
炭焼のトウキビ美味し信州路　　子文
　ド派手浴衣に素足厚底　　文峰
メジャーでも振り子打法が期待され　　峰文
　クリちゃん引退ヒラリー上院　　文昇
初雛（ハツヒイナ）その黒髪を子にほしき　　昇咲
　子犬ロボットハイテク技術　　咲岳
夜もふけて虫の音高く望の月　　岳嘉
　枝つき柿に故郷の味　　嘉咲
雲（ナウ）去って団地の広場芋煮会　　咲文
　ソムリエ目指しワイン栓抜く　　文嘉
素人の自慢作品写真展　　嘉昇
　能管一声真の序の舞　　昇村仲良子
篝火の炎に映えて花明し　　村仲良子岳
　柳絮とびかいゆれる川端　　岳峰

平成十二年十月六日首
平成十二年十一月十日尾
（於・神田・伊藤秀峰宅）

歌仙『草萌』

草萌へ足届きけり三輪車　小池正博捌
蕨餅売る声の遙けさ　内山尚美
つばくらめ去年の廂探すらむ　久次米真理子
読みかけた本閉じて出かける　松永直子
月明にラップを踏めば踊る影　山田美智子
マリオネットの蜥蜴馬追　直
太閤忌生まれ変わりと主張する　尚
風に吹かれてモンゴルの旅　真
買いたてのカメラで撮ると駄々をこね　服部登詩子
あと一枚が脱げぬ純情　酒井保典
口づけを朝のドラマがやっとさせ　尚
虫歯の痛む新緑の中　孟
母ちゃんもこの月見てる簾越し　美
故郷の土匂う小包　保
ゆっくりと飲むはずなのがアレグロで　保
あっという間に当確が出る　登
笹舟を追い越してゆく花筏　孟
他所より高いうちの雛壇　美
プランドのシール剝がさぬ春日傘　孟
燃え上ったら鎮火不可能　保
法善寺ふたりの願は何だろう　尚
スポーツ記者になった無頼派　正
いつのまに地元出身いなくなり　保
テント暮らしに寒さひとしお　孟
年ごとに彩り添えて年賀状　孟
七草粥に前衛の味　尚
のしのしと町中歩く痩せた象　直
どこへ行こうかサイコロを振る　美
祖国売る女スパイを照らす月　真
菊人形はいつも英雄　孟
上段に刀かまえて秋の果　美
天守の猫に梯子たてかけ　尚
まだ生きてよろしいですか総理殿　孟
雁風呂焚いて海鳴りを聴く　登
花の雨いくつ数えた銀屏風　正
大縄跳の続く春宵　直

平成十二年二月十九日首尾

（於・たかつガーデン）

《逗子・木の会》

歌仙『病懶に』

草間時彦捌

オ病懶に秋風の濃きひと日かな　草間時彦
裏の山より鳴く法師蟬　藤井弘美
足元に鯊の遊べる潮寄せて　本井鱏
少年の背に光る釣竿　復本鬼ヶ城
人気なき都大路や月涼し　大島等閑
己れの影を追うて歩める　小野寺健
ウ堅琴の弦を激しくかきならし　堀口みゆき
不定愁訴の鎮まるを待つ　城
健康な伸びをしている娘たち　健
下手な鉄砲も数でこなして　城
命中をしたと言われてうろたへし　鱏
産婦人科の友が頼りか　城
満月にぶつかりそうな樹のありて　き
踊太鼓の遠く幽かに　閑
みちのくの果てまで続く雁渡し　き
ドライブインで釜飯を食ふ　閑
のぼさんを花見に誘ふ虚子がゐて　城
傘をかすめて燕飛び行く　美

ナオ爺ひとり水口祭してをりぬ　鱏
じんじんばしよりの婆も加わる　城
手土産は小布施の名菓七小町　閑
そこのそこらの草の深々　鱏
筒井筒井筒に掛けし君が髪　閑
男一人に女三人　閑
子福者の臨終囲む枕辺に　城
背戸の小藪に凩の音　健
顔見世の帰りはいつも鯡そば　閑
神のおつげを聞かされてをり　き
大好きな「受胎告知」はグレコの絵　閑
ワイングラスに水中花入れ　き
ナウ寅サンの啖呵もなくて夏祭り　閑
地震に揺れる日本列島　健
西表山猫誰も見たことない　鱏
夕べ明るく春時雨きて　美
七部集いつも小脇に花月夜　彦
蛤蒸して祝酒など　美

平成十二年八月二十四日首尾

（於・秋谷藤井宅）

短歌行　『草餅』

小瀬千恵子捌

草餅に熟き番茶をいただきぬ　小瀬千恵子
　子猫が遊ぶ客の座布団　鬼崎さやか
曲水の仕度万端とととのひて　大野鵠士
　和装にまじる金髪の人　高木美紀
ウ月仰ぐ宇宙飛行の予定者と　松尾一
　野菊活けたる馬頭観音　紀
その先に出口も見えぬ芒原　片田智子
　携帯電話ひびきつづける　紀
木曜は疲れすぎてる帰り道　小瀬渺美
　秘密のメモは黒と赤色　美
災害が来るかもしれぬ忘れ花　さ
　大根漬は家伝通りに　智
ナオ少しだけすっぱい気がする何故かしら　紀
　胎動といふ母のよろこび　士
入籍のことなどおくびにも出さず　士
　寄せては返す波の静かに　恵
雲間より一刻ほどのけふの月　一
　浮世をよそに猿と猿酒　士
村はみな平家の裔の鬼貫忌　美
　課長リストラ違ひなれとも　さ
ナウ贈られしゴルフクラブに銚び少し　一
　叙勲の噂ちらほらと聞く　美
ほほ笑んで空いつぱいの花の下　智
　母屋の軒を巣立ちゆく鳥　紀

平成十三年二月二十七日尾
平成十三年二月二十日首
（於・小瀬渺美宅）

《岐阜・岐阜県連句協会―源氏連句会》

短歌行　『支考忌』

端元涼子捌

支考忌へ急ぐ北野の土筆径　　涼子
　庵を廻りし鶯の声　　良子
春の色ショール衣桁に掛けられて　　草良
　転居通知に添へし案内図　　千草
望の月砂丘の影のくきやかに　　江
　秋桜ゆれし淡き想ひ出　　五百子
地歌舞伎の台詞に託す恋心　　志づ
　エコーに映る愛の結晶　　芳子
ふっくらと餡パン焼けし昼下り　　初江
　大欠伸する縁先の猫　　弥生
万華鏡あかず眺むる花の彩　　文子
ケーブルカーに乗りてうららか　　満智子

ナオ
野遊びに電子辞書入れ頭陀袋　　満
　変装好きの漢孤独で　　涼
手に負えぬ官僚あまた伏魔殿　　五百子
　冬籠りする北欧の街　　文子
外套に包(くる)まれふたり縺れ合ふ　　江
　垣根を越えし人妻の道　　芳子
新内の調べ流れて夏の月　　生
　全盲なれど耳で色分け　　弥生
ナウ
教会に神の血給ふ赤ワイン　　五百子
　ＮＧＯに行くと言ふ父　　満智子
花吹雪散らして走る草競馬　　良子
　海の彼方の喜見城まつ　　文子

平成十三年五月十五日首尾

（於・岐阜市鋳物会館）

《岐阜・岐阜県連句協会―朱の会》

短歌行　『助命壇』

今津哲朗捌

郭公や浅間の裾を乳搬車　　朗
　風やはらかく泉湧く牧　　乃
パソコンの警告音にとまどひて　　生
　人形泣かす操りの糸　　朗
丹精のうしほ汁出す月宴　　乃
　菩提樹の実に尼のかがめり　　生
水郷の秋のあはれは助命壇　　乃
　ガンクロの目を避ける教室　　生
面白くない奴だけど優しいの　　朗
　結婚披露うどんやでする　　生
船形の埴輪へ続く花の道　　乃
　噴火に濁る春潮の渦　　朗
メーデーに消防ホース干してをり　　乃
　クロアチアよりテニスコーチに　　朗
試験紙に秘密の恋をあばかれて　　乃
　てれにてれてる老の新妻　　生
おいらにも酒を廻せと蔵わらし　　朗
　けふの寄り合ひ熊打ちのこと　　乃
月冴ゆとさいはひ籠を門に結ひ　　生
　関節炎のそれも顎骨　　生
サムソンは終の力で国救ふ　　乃
　携帯電話砂漠でも鳴る　　朗
花の雨世界遺産の屋根ぬらす　　生
　女王蜂をあほぐうす翅　　乃

柴田由乃
今津哲朗
たかはし水生

平成十二年六月二十八日首尾
（於・岐阜市中央青少年会館）

短歌行　『陣屋の松』

可知貴子捌

秋蟬や陣屋の松の影濃ゆき　　可知貴子
　早稲の香りを運びくる風　　森川淳子
後の月お薄一服いただひて　　安藤和江
　作務着のひとの削る黒文字　　田口美智子
ウサングラス飛び立つ首相専用機　　貴子
　国連ビルの暑き地球儀　　淳子
合鍵のひとつならずや鉢合せ　　美智子
　記者会見は指輪外して　　和江
県営の小紅の渡し大師堂　　淳子
　履物の店いつも繁盛　　美智子
塗櫃に炊き込み御飯花筵　　永屋美代子
　大道芸に拍手のどろか　　和江
ナオ能面に魅せられて座す春の宵　　和江
　室町の世を今に伝へて　　淳子
色分けの点字のラベル服に付き　　和江
　寄り添ふほどに静かなる刻　　美代子
狂ほしく乳房ゆさぶる逆縁に　　淳子
　いつのまにやら雪兎消ゆ　　美代子
防人の歌碑照らすなり冬の月　　和江
　留学生に兵役の義務　　美代子
ナウ負けまいぞ経済不況のりこえて　　貴子
　電子メールに連句連衆　　淳子
花の雨硯水庵の軒を借る　　美代子
　竹筒の酒これぞ春興　　和江

平成十二年九月六日首尾

（於・市民いこいの家）

歌仙『朴香り立つ』

渡辺多美子捌

雨止んで咲きそめし朴香り立つ　渡辺多美子
　振り返る人片陰の中　飯沼麻奈美
熱気球願い叶えて大空に　小池五十鈴
　久々に出る場外ホーマー　天野収一
天心の月にとどけよ下駄の音　古田雅通
　むいて山盛り宅配の梨　斉藤音美
我娘(ウ)アリゾナの秋たのしめり　収
　ハートのダーツみごと命中　五
下校時間百円ショップで待ち合せ　水野光哉
　軽い財布に夢をつめこみ　麻
うっかりともらした台詞神の国　収
　天守閣には主は在らずや　多
天鵞絨をまとう木立ちに寒の月　五
　日足伸ぶ縁老母(はは)の微睡み　雅
棹売りが声ひいてゆく漁師町　通
　ヘミングウェイかって住みおり　音
花の幹約束の名を刻み征く　光
背筋まっすぐ新任教師　平
ブラウス(ナオ)の蒲公英模様陽に映えて　音
　撮影現場走る緊張　雅
隈どりの幼なき子ども見栄を切り　雅
　異郷の文化我も加わる　収
冷素麺ようやく慣れし箸づかい　五
　空蟬のこし羽定まりぬ　雅
車から誘う男の眉細し　光
　一線越えりゃあばたもえくぼ　五
南北や38度熱さまし　雅
　べっ甲かんざし黒髪にゆれ　麻
月のぼり野分たちまち吹きおさむ　喜
　小鬼隠れるコスモスの下　光
読了(ナウ)の顔あげしとき百舌鳥の声　雅
　出久根達郎今日も店先　収
カラフルなルアー並べて釣談議　音
　握りめしには塩シャケ入れて　喜
遠来の客を迎えん花あかり　多
　急に静まる初蛙かな　音

平成十二年五月十六日首
平成十二年六月　八日尾
（於・郡上八幡文化センター）

歌仙『うつせ貝』

春浅き波が残せしうつせ貝　　渡部伸居捌
　あと一段で終る麦踏　　伸　居
思ひきりボールかげらふ野へ蹴りて　　曽我部登志子
　若者達のギター連れ弾き　　藤田節子　居
厨まで月の光の皓々と　　志
　畳に跳ねるいとど素速く　　節
ッ日誌書くナース詰所のそぞろ寒　　菊野晄子
　齢を偽りいまもメル友　　志
長生きの秘訣は恋を忘れずに　　居
　通ぶつてする酒の講釈　　晄
炭足して昔の歌を想ひ出し　　節
　続報悲しえひめ丸事故　　晄子
汀線の白くさやかに夏の月　　志
　母に教はるうまき葛餅　　栗
抜け駆けに有名人の疎画を買ひ　　節
　友の機嫌を少し損ふ　　晄
寺修理完成を祝ぐ花の宴　　栗
行儀正しく葱坊主立つ　　晄

ナオ着飾りて都踊に親子づれ　　志
　デパート袋両腕に提げ　　節
折り悪しく風にまじりて降れる雨　　居
　いのちの管を止めし停電　　栗
絨緞を替へさっぱりと住みごこち　　小池芳恵
　岬に寄する冬涛に佇つ　　晄
手作りの笛はふしぎな音にひびき　　節
　反対にあふ義父の再婚　　志
二号とも秘書とも見えて曖昧に　　栗
　磯馴れの松の自然随順　　居
待宵の電話ボックス人気なく　　晄
　多彩イヴェント伊予の糸瓜忌　　芳
ナウ拵ぎたての熟柿をそつと籠の中　　志
　愛犬名づけ四苦八苦して　　節
途すがら口ずさみゆく口説き唄　　居
　イチロー野茂等瞠る活躍　　芳
花便り添へて兄より着く荷物　　晄
　共に蕨を採りし追憶　　芳

平成十三年二月二十日首
平成十三年四月十七日尾
（於・松山市久米公民館）

歌仙『冬鷗』

大凪の水脈愉しけれ冬鷗　磯　直道捌

自転車を漕ぐ赤い手袋　田村昌江

玻璃戸越し静かな部屋で外を見て　磯　直道

犬の片耳ピンとそばたち　荒川ゆうし

今日の月琴の音色に昇るらん　佐度谷ふみ子

剪り束ねたる菊の香に噎せ　小谷伸子

ゥご住職秋の彼岸の法話説き　ふ

芥浮かべる庭の池尻　伸

モノレール頭上はるかに過ぎてゆき　ゆ

千里も一里惚れて通えば　ゆ

どこがいいまだら化粧の元芸者　日笠靖子

歪みてかかる蒸し暑き月　廣田節子

蜘蛛の囲にからまりもがく黄金虫　靖

ホームページにはまる老楽　小川廣男

体調を整えながら飲む薬　ふ

明日を恃まん帰り行く鳥　石橋未どり

城跡に栄華を偲ぶ花の雲　高原牧子

おぼろおぼろとものの音もせず　永雄瑞子

ナオ評判の寂聴源氏草を引き　未

昔も今も恋はいろいろ　渡辺ハツヱ

あこがれし人と見分かず通夜の客　牧

窓打つ氷雨いよいよ激しく　未

新巻の朝に夕にと削がれたる　伸

お酒のあとはさらりお茶漬　節

久々の旅はやっぱり故里へ　靖

猿の餌付けが仇になる村　瑞

テレビでは陳謝ばかりが続きいて　節

すってんころり負ける横綱　柳田康弘

そぞろ寒皆既月蝕楽しまん　瑞

とぎれとぎれの鈴虫の声　未

ナウ草の実のほろとこぼるる庭稲荷　節

若者なべて東京へ出て　ハ

農業を継ぐ人はなく田は荒れて　ハ

風暖かな昼のひととき　ふ

花の下盃交わし右左　ゆ

春の行方を託す海光　未

平成十二年一月十七日首
平成十二年七月十八日尾
（於・下北沢タウンホール）

歌仙『鴛鴦』

磯　直道捌

鴛鴦の水脈一つとならむ刻ありぬ　磯　直道
　日を傾けて冬ぬくき土手　河合澄江
喨々とサックス吹きし人見えて　吉田悦子
　母の傘寿の祝い間近に　青山瑛子
月影の明るく照らす奥座敷　仁杉とよ
　藤袴あり貴船菊あり　西尾みゑ
身ニしみて書を奉る師の墓前　東浦佳子
　しなやかな髪肩にかかれる　森田英子
ピカピカの外車の並ぶ展示場　佳
　やや持ち直す景気情報　と
旦那衆芸妓はべらせ床涼み　渡辺梅子
　細き襟元白き夏月　長濱喜代子
真作と鑑定されし夢二の絵　悦
　蔵を利用の洒落たケーキ屋　悦
結局は病気の話クラス会　喜
　他人事ならぬ首相退陣　喜
思わざる風に吹かれて散りし花　永見徳代
　春雷ころところがってくる　佳

ナオ蕗味噌で友と地酒を酌み交わし　英
　インターネット訳がわからず　徳
得意気に教えてくれる馬鹿息子　永雄もりえ
　結婚詐欺にあいしいきさつ　佳
寒紅はひからびしまま片隅に　佳
　木枯しひたと戸口たたきて　佳
年金の暮しにもなれボランティア　佳
　郷土自慢の名所案内　と
奥宮の軒に匠の技残り　悦
　秋の袷の少し重たく　澄
還らざる日の懐かしき夕月夜　美
　銀杏黄葉のキャンパスの道　佳
ナウ震度三電光ニュース報じつつ　澄
　旅の予定はとりやめときめ　瑛
ぽつぽつと落ちる雨音ききながら　美
　暖かければ伸びをする猫　と
霞みたる遠山を背に花万朶　佳
　渡しの舟で通う入学　悦

平成十二年一月十七日首
平成十二年七月十八日尾
（於・下北沢タウンホール）

歌仙『カーネーション』

磯　直道捌

母在すカーネーションを大壺に　磯　直道
　かすかにゆれるレースカーテン　駒村多賀子
郊外の団地の昼は静もりて　小野良子
　とぎれとぎれに赤児泣く声　桑原百合子
まんまるな月に兎の見えかくれ　清水福子
　夜長楽しく民話研究　多
北上（ウ）の流れはゆるく秋めける　山澤カツ子
　肩を抱き合い歩くアベック　多
知らぬ間に同姓となり妻となり　倉澤以世子
　旅の手荷物「ういろう」を持ち　中山英子
城跡の天守に松の風の音　良
　利鎌の如き寒の三カ月　多
堀炬燵晶子詩集を前にして　良
　柱時計が刻を告げたる　以
中継の総裁候補神妙に　以
　余震の続く日本列島　カ
幻の武者走りゆく花の馬場　多
夢かうつつか春の曙　多

山寺は雪解雫の絶え間なく　福
　未来の見えぬ禁断の恋　柏村誠子
嫁舅いつまでつづく赤い糸　悦
　心と体健康チェック　渋谷シゲ子
土いじり家庭菜園のめりこみ　百
　振り返りつつ飛べる斑猫　福
風死してひっそり済んだお葬式　福
　知る人も無きふる里の駅　カ
茅葺の旧家は町の資料館　百
　榊供えし古き神棚　カ
月の出をひたすら待てる病みあがり　誠
　やや寒の衿かき合わせつつ　多
吊（ナウ）し柿はめば遠き日還りきて　英
　子供自転車置きざりしまま　英
ビル街は昼をともしてけぶる雨　カ
　ついとよぎりし燕の影　福
花盛り酒は爛漫酌まんかな　子
　客をもてなす木の芽田楽　多

平成十二年五月十日首
平成十二年八月十日尾
（於・芝浦港南区民センター）

脇起歌仙　『春帽』衆判

磯直道

停(オ)年の春帽振れり亦振れり
　キャンパス通り帰りゆく鳥
絵歩道にリラの香りの流れきて
　二十歳ちがいのブロンドの妻
夕刊配る少年の影
　虎の子の貯金みるみる減りゆきて
父の背のぬくみ懐かし望の月
　セーターの袖綻びしまま
ふっと途切れる秋の風鈴
　冬すみれ海より青き夢を持ち
語(ッ)り部の歳々老いし原爆忌
　港に着きし豪華客船
厚底靴も神妙になり
　ていねいに磨きおさめし銀食器
骨折が恋をとりもつラブコール
　腰をかがめて潜むこそ泥
女たらしと陰の噂に
　月光(ゲ)に稲荷の狐こんと啼き
ぽい捨ての空缶山と積まれいて
　盆狂言の近きポスター
千秋楽も済みし夏場所
　国宝(ナウ)の公開されし美術展
漆黒の川にうつれる月涼し
　しばし寛ぐお薄一服
トランペットの音の嗄々
　音もなく庭石濡らす通り雨
おどけつつピエロの顔の泣き笑い
　蜀山人の寂びし碑
旅から旅へ過す人生
　散る花に名酒の盃を酌みかわし
見晴るかす花咲きのぼる吉野山
　憩う蝶あり舞う蝶のあり
風を蒐めし風車売り

平成十二年四月五日首
平成十二年六月五日尾　（文音）
（連衆、古田悦子・稲垣治子・加藤武子）

脇起歌仙　『寒　明　け』

渡辺梅子捌

乾坤の張り崩るるや寒の明け　磯　直道
　ほころび初めし庭の紅梅　渡辺　梅子
合格の報に受験子眉あげて　青山　瑛子
　夕餉は厚いビーフステーキ　舟木　美代子
まんまるい月がぽっかりビルの肩　森田　英子
　かそけき音はあずきあらいか　梅
ッ退院の身辺整理爽かに　瑛
　友が見付けた琥珀ブローチ　美
あこがれの人の訃を聞くクラス会　英
　思い出だけを残す初恋　瑛
飛機の窓華やげる灯は巴里ならん　梅
　澄みて涼しき中天の月　梅
理由つけ昼夜もなくビール飲み　瑛
　客がさつぱり来ないコンビニ　英
とおろりと眼細めて猫欠伸　美
　回り続ける水の惑星　瑛
花万朶生きる幸せ溢れくる　梅
　うららに光る塔のパラボラ　梅
お土産は心づくしの木の芽漬け　瑛
　曽孫を膝に卒寿矍鑠　瑛
震災と戦禍の惨を語り継ぎ　美
　有珠山噴火他人ごとでなし　英
積もらざる雪に果敢なき雪女郎　梅
　冬野に細き恋の通い路　瑛
いつの日か妻となる日を夢に見て　美
　慎ましく住む小さきマンション　英
丈高き神父優しき笑み堪え　梅
　合唱団の指揮棒を振り　美
ゆったりと月の海往く豪華船　瑛
　V字になりて渡るかりがね　英
ッ身に入みる不況にスポーツだけ壮ん　梅
　坂本竜馬欲しい政局　瑛
風強く声聴きとれぬ街宣車　美
　和気謁々の句坐に身を置き　英
花の寺古りし板戸の絵も桜　梅
　おぼろおぼろに暮れなずむ空　瑛

平成十二年三月十五日首
平成十二年五月十五日尾　（文音）

歌仙『滝涸れて』

滝涸れて山籟どどと昂ぶりぬ　渡辺ハツヱ捌
木の葉散り敷く走り根の径　渡辺梅子
仕事がらシステム手帳ショルダーに　児玉俊子
電車到着待ちてそわそわ　ハ
雲払い今宵の月の昇るらん　梅
祖父の笑顔のいとも爽やか　俊
本堂の落慶祝う菊日和　ハ
キックボードが人を縫いゆき　梅
いまも尚あのときのこと忘れない　俊
忍び耐えたる背信の恋　ハ
一筋に情つらぬきて悔はなく　梅
旅果ての地は遠き知床　梅
夏寒く凜と懸かりし銀の月　俊
祭浴衣の下にTシャツ　俊
吟醸酒盃に溢れてなみなみと　ハ
いささか揉めた遺産相続　梅
邑(むら)よりは遅い峠の花盛り　梅
風に吹かれつ蝶の舞いゆき　ハ
ピカピカの新入生のランドセル(ナオ)　俊
フェリーボートが島を離れて　梅
懐胎を伝える天使ついに来た　俊
まだあどけなき娘十六　ハ
駅伝の襷渡して息白く　梅
穢を呑み込みし街のスモッグ　俊
官界はいつも身内のかばいあい　ハ
イワンの馬鹿になれぬ俗人　梅
ふる里の湖心に湧ける水ありて　俊
手作りだんご売っている店　梅
月照らす中仙道の関の松　俊
聴導犬の引綱の冷え　ハ
デフォルメとフォルメ並びし美術展(ナウ)　俊
伽羅の香ほのとアロマテラピー　梅
長椅子に掛けて思わずうとうとと　ハ
異国のひとの髭の暖か　俊
花吹雪くなかに古城の揺るがざり　梅
次世紀を待ち尽きぬ春愁　ハ

平成十二年八月十八日首
平成十二年十月二十日尾　（文音）

歌仙『絵日記』

駒村多賀子捌

駒村多賀子　絵日記の海の青さよ夏休
渡辺梅　子　蟬鳴く声に開け放つ窓
倉澤以世子　遊歩道ジョギングの人行き交ひて
山澤カツ子　乱れしままにこぼれつぐ萩
渋谷シゲ子　山籟は月影千々に砕くらん
小野良　子　鯊の天麩羅盛られたる皿
中山英　子　忌(ウ)を修す墓前の読経長々と
多　眼を光らせてうづくまる猫
梅　彼を待つ宵のお化粧念入りに
以　キャリアを棄てて愛情に生き
カ　変節をなじる議員に野次とんで
シ　数がもの云う寒い世の中
良　凩に打ちふるへたる細き月
英　ナースコールのひびく病棟
多　はるかなる北アルプスに雲ひかり
梅　広い牧場を駈ける若駒
以　爛漫の花を賞でつつ酌み合ひて
カ　父が好みし木の芽田楽
シ　戦中の思い出たどる旅のひと
良　タイムカプセル埋めし密林
英　突然に強く抱きしめ熱きキス
多　急に素直になりし猛妻
梅　幽霊が出たの噂の梅雨の家
以　応挙のお軸実は贋物
カ　美容師は資格持たずに大儲け
シ　取材攻勢かけるマスコミ
良　まんまるな月がかかれるテレビ塔
英　稲の穂豊(ゆた)に稔るふるさと
多　はらからのこと偲ばるる地蔵盆
梅　寂びたる苑に残る碑(いしぶみ)
以　古時計夢もいっしょに捨てられし(ナウ)
カ　ペットボトルが浮かぶ堀割
シ　並び建つビルを迂回のモノレール
良　翁媼の笑顔うらうらか
英　磴高き式内の宮花吹雪
多　幸をうべなう沖の蜃楼

平成十二年七月二十日首
平成十二年十月五日尾（文音）

執筆　シ　良　英　多　梅　以　カ

歌仙『秩父連山』

水野治夫捌

見はるかす秩父連山粧ひ初む　水野治夫
天高きより美(は)しき歌声　石橋未どり
久々に集うはらから月の宴　小川理太郎
木の香ただよう新造の船　妹尾延
下町の粋な橋の名たずねつつ　高原牧子
白玉(しらたま)盛りしギヤマンの綺羅　小川悠子
蠅(ウ)追うてしばしの愁い旅の宿　妹尾昭
保険取る人又掛ける人　悠子
愛妻は先にいっては困ります　牧子
懲りることなく陰で援交　未どり
教壇とストーブが消え通る風　理太郎
方程式が解けぬ凍て月　治夫
不祥事が新内閣につぎつぎと　昭
ジクソーパズルひとつ足りない　理太郎
大寺の屋根稜々と滑る鳩　牧子
芭蕉の句碑を傘さして読み　未どり
海光となりて昇天吹雪く花　理太郎
春のほこりを立てて去るバス　昭
上気せし新入生はおろおろと　延(ナオ)
フィルム切れたるカメラぶら下げ　治夫
ラブホテル受付嬢に言い訳し　悠子
責任取るよ僕は絶対　昭
雨霽れて濠の松柏清やかに　理太郎
「この芝入るべからず」の夏　未どり
焼酎を呷っていぶす初鰹　牧子
あした吹く風きのう吹く風　治夫
円高も株高もなくこぼれ落ち　延
稲荷神社は昔ながらで　悠子
バット振る姿照らさる月の下　柳田康弘
目の隅よぎる雁の影追い　未どり
お茶(ナウ)の間のテレビに映る赤い羽根　悠子
しようしようと思う宿題　牧子
飼猫の牙にも毒の二つ三つ　理太郎
胡蝶狂女となりて夢の世　昭
篝火に映えて妖しき花の舞　治夫
はるかにひびく温かき水　延

平成十二年四月十日首
平成十二年七月十日尾

（於・経堂・牧野邸）

歌仙『新涼や』

新涼や洗い茗荷のほの匂う　木部八千代捌
　とぎれとぎれに鈴虫の声　佐藤ゑつ子
秋簾巻けば名月昇るらん　木部八千代
　むずかりし児をあやす母親　白石喜代子
公園のベンチ賑わう昼下がり　田尻禮子
　汗をふきふき励む草刈　ゑ
ウひょうひょうと風に乗りくる祭笛　喜
「のぼせもん」とて落着かぬ夫　八
老舗守る女房にしかと舵とられ　禮
　携帯電話いつも離さず　八
父危篤知らせに急ぐ飛行場　喜
寒三日月の影は鋭き　ゑ
立枯れの芒は叛旗ひるがへし　禮
　拉致問題でもめる国会　八
北海を行き交う船に荒ぶ波　喜
　山並はるか雁帰りゆく　禮
咲き満ちて天守押し上ぐ花の雲　ゑ
さざえ壺焼酌めば暖か　喜
ナオ放映のテレビドラマは「智恵子抄」　八
　青く澄みたる故郷の空　禮
茶髪の娘赤いベンツを乗り回し　喜
　日毎にかわる助手席の彼　八
安売りのちらしポストに投げ込まれ　ゑ
　午睡の足にじゃれる三毛猫　禮
梅雨明の川滔々と流れゆき　八
　黒きリボンの遺影置かれて　ゑ
セピア色昏るる異国の裏通り　禮
　失意を抱いて一人来し旅　八
同窓の友と眺めし去年の月　喜
　松茸飯を盛りし重箱　禮
ナウ地芝居の興行告げるふれ太鼓　喜
　脱サラをしてやけに張りきる　八
念願の自分史作り思いたち　ゑ
　噂り四方に産土神の森　禮
ＩＴの電波飛び交う花便り　ゑ
世紀二千の春は酣　喜

平成十二年九月二十八日首
平成十二年十一月三十日尾
（於・北九州市立白銀公民館）

歌仙『大残暑』

吾が影の地に貼りつきぬ大残暑　山口安子捌
つくつくぼうし命しぼりて　松田千佐代
故郷の山に夕月ほの匂い　山口安子
お伽噺に集う幼ら　浜崎琴代
ＳＬは煙を吐いて橋の上　三喜玲子
海へ海へと中洲ひろがり　梁井和子
茄子（ヲ）南瓜自給自足のミニ農家　千
汗をふきふきビール一気に　安
サッカーをテレビ観戦する彼氏　琴
食事一の次娘寄り添い　千
飼い猫は窓にカリカリ爪をたて　和
風ひゅうひゅうと寒の三日月　琴
シベリヤの凍土に偲ぶ父の墓　安
眼鏡のくもりやたら拭える　玲
サラ金の返済まずは目途がつき　千
ようよう春の陽差しさしこみ　和
ちらほらと花の蕾のほぐれそめ　琴
宅配便で届く干鱈　千
ご法事のすみたる後の無礼講　和
隣近所へお裾分けする　千
口軽の姑じっと横睨み　玲
気弱の嫁を庇う鞆殿　琴
産土は神の留守にて人まばら　千
時雨ては晴れ時雨ては晴れ　和
日銀とそごう閉店歎く街　安
見果てぬ夢に紅蜀葵散る　琴
予後の身をなだめすかして夏深み　千
夜毎夜毎に旅衣縫う　琴
天窓にぼっかり浮かぶ望の月　安
豊作祝いすする新蕎麦　玲
何処（ナヲ）からかパラパラ踊る曲きこえ　和
飛び出して見る城址公園　和
木洩れ日に諭吉の像は凛として　千
雲をよぎりて帰りゆく雁　玲
花万朶風狂の詩を胸底に　和
卒業のなきロマンへの道　安

平成十二年九月二十八日首
平成十二年十一月三十日尾
（於・北九州市立白銀公民館）

歌仙『石礫』

大江加代子捌

新涼や池の面きる石礫　大江　加代子
蓮の実熟れて淡き夕月　渡辺　常子
お土産の虫籠（むしこ）に子らのかけ寄りて　福泉　淑子
ジャンケンポンでいつもぐう出し　池田　昭子
公園の掃除はかどるボランティア　淑子
焼芋一つ懐に入れ　常子
浅草（ヲ）の灯のさんざめく酉の市　昭子
腕を組み合う茶髪ガングロ　加代子
その年で親になるかと嘆く母　常子
あっけらかんと烏カアカア　昭子
山近き庵に月光滴らせ　淑子
苧殻焚く煙遠く漂い　淑子
明けくれを看取りて腰が痛くなり　加代子
出湯の旅のちらし気になる　昭子
倒産に公的資金まだ続き　常子
春は寒しと木偶を哭かせて　常子
西行の歌碑爛漫の花の下　淑子
峠の茶屋で憩う草餅（ナオ）　昭子
宙返り何度も出来る宇宙服　常子
笑顔の妻が大地ふみしめ　加代子
豊漁の夫帰りくる鰹船　昭子
袋に溜まるビール空缶　昭子
震災に逝きしはらから忌を修し　淑子
家のきしみが一寸気がかり　常子
忽ちに野をはすかいに初時雨　加代子
赤いマフラー首にふわふわ　昭子
国会の権力競う茶番劇　常子
くの字に潰す皿の吸がら　淑子
何も彼もご存知なのよ今日の月　常子
静寂破りて鼬鼠（ナウ）のとび　昭子
二科展に夢を抱きて描きつづけ　加代子
まだまだ若い七掛けの年　淑子
フラメンコ鏡にポーズ決めてみて　淑子
まなこ閉じれば亀の鳴くなり　常子
産土の千木のかたそぎ花吹雪　加代子
次世紀恃む万の風船　昭子

執筆

平成十二年九月二十八日首
平成十二年十一月三十日尾
（於・北九州市立白銀公民館）

歌仙『愛宕石仏』

春雨や愛宕石仏二千態　岡本　眸捌
　小径にはらと散りし山吹　岡本　眸
名物の鶯餅を求めきて　佐伯のぶこ
　子等も写れるテレビ中継　永井政子
夢のせて夕月淡く昇るらむ　川嶋七重
　初猟なれば心浮き立つ　長戸弥香
ヴどびろくも鞄に入れて旅支度　七の
　マドモアゼルにかけるボンジュール　政の
やうやくに想ひ届きてデートの夜　政の
　成るか成らぬか政治改革　香の
研究はヒトゲノムにて呆け防止　七の
　喜怒哀楽は人の世の常　政の
望月に吟ずる漢詩涼しげに　政の
　甚平を召し卒寿矍鑠（かくしゃく）　香の
借り上げの家庭農園生き甲斐と　香
　ルルル・ルン・ルン小川流れる　七
楼閣は見えかくれして花吹雪　七
　都おどりに母を誘ふ　政
ナオ会席の鯛の浜焼はなやかに　紀伊郁子
「日々好日」の著るき水茎　森　教子
人災が天災しのぐ怖ましさ　福井泰子
　廻す地球儀まわる目ン玉　眸
寝たきりで仕切つてゐてもなほ不満　潤
　軒の氷柱はいたずらに伸び　郁
裏山の狸親子に餌付けをし　教
　エステに賭ける老ひの執念　泰
ひたすらの追つかけ恋に疲れ果て　眸
　つまるところはやはり宿六　潤
何時しかに鎮守の森にかかる月　郁
　塒に帰り眠る椋鳥　教
ナウ待ちかねし運動会の支度終へ　泰
　ショパンの曲をかけるステレオ　眸
ゴージャスな卓のフルーツコンポート　潤
　壁に飾りし古き油絵　郁
記念樹の花ほんのりと匂ふかに　教
　亀鳴く池に立てるさざ波　泰

平成十三年五月二日首尾
平成十三年五月十日尾

（於・松山市岡本邸）

《豊田・ころも連句会―その一》

半歌仙　『永き日を』

由川慶子捌

永き日を囀りたらぬひばり哉　翁
うまいと聞きし草餅の店　聖きよみ
新入生ノートの蔭で欠伸して　々
携帯電話消える伝言　加藤利恵
暮れなずむ山は墨絵に月いまだ　稲田千寿
潰けしばかりの壜の金柑　黒木美代子
ゃや寒の膝を丸めて猫を抱く　寿
ふと懐かしき彼のぬくもり　み
愛を知るために恋する十七歳　恵
アイラブユーとメールウイルス　寿
珈琲はブラック氷がりと噛む　代
王手飛車取り勝ちはいただき　寿
月冴えて入母屋造りの寺の屋根　々
モンゴル秘伝薬膳料理　梅
チェリストのボルボを駆って颯爽と　芳
ここは私有地風の終点　寿
儚きは人の常にて花の咲く　恵
孫の手をひくのどやかな午後　み
平成十二年五月十六日首尾　子

（於・桜花学園大学）　慶

半歌仙　『返り梅雨』

稲垣渥子捌

返り梅雨篠突く昼を集ひけり　八木聖子
　ゼリー大皿連句三卓　稲垣渥子
ここからはスイッチバックの列車にて　山口元子
　脇に抱へた推理小説　黒木美代子
月の下砂山を掘る黒い影　佐久間和宏
　錆びたナイフにすだく蟋蟀　美
ゥ獨り酒忘れ去りたいことばかり　聖
　ジェット機の窓頬を押しあて　々
じりじりと内壁焦がす嫉妬の火　聖
　ただひたすらに抱きあふ闇　元
サミットの各国首脳の忍者ぶり　宏
　朱塗りの箱に京のお干菓子　元
五重塔仰ぐ捨て犬寒の月　渥
　マフラー首に若さ気取って　美
あらあなたいつ帰ったの異界から　聖
　黄沙に曇る丸善の前　渥
車椅子しばし留めたる花の枝　美
子ども等の夢託す風船　渥

平成十二年七月二十五日首尾
（於・スペースKei）

歌仙『曲家』

曲家へ曲家よりの寒の水　　谷本守枝捌
　ほのかに匂う早咲の梅　　月山　壹
久闊の友を門まで送り出て　　繁原敏女
　抱かれし猫の何を見ている　　曲川慶子
サーカスの跡地を照す月の光　　長坂節子
　口笛軽ろし夜学子の行く　　女
あるがまま気の向くままに胡桃割る　　女
　ひとの恋人奪うのが趣味　　慶
夢さめてのっぺらぼうの腕の中　　慶
　パイプの煙地下の止り木　　節
遠景にオアシスの町点々と　　節
　平和を願い巡礼となり　　女
月暑しひたすら昇るエレベーター　　女
　ライブに集うアロハ短パン　　節
銭湯のゆの字の揺れる神田川　　節
　天皇杯へシュート一発　　節
酒肴だんだん弾む花の宴　　節
　宅配便で母へ岩のり　　女
揚（ナオ）げひばり御空の青に加わりぬ　　壹
　歩け歩けのジョギングの会　　節
知命過ぎ定年退職たのしみに　　慶
　なんでやねんと爪を噛む癖　　節
男来て炭焼小屋の戸を開ける　　節
　黙の吐息の荒くゆき交う　　女
雨しとど後は至福の膝まくら　　女
　遠州作の古き庭園　　節
残照を鴉騒げり大屋根に　　女
　西に東にカルト教団　　加藤治子
海底に似たる良夜の中にいる　　節
　妻子ある幸新走り汲む　　福井直子
善（ナウ）人の少しく吃るからす瓜　　慶
　丘のチャペルに響くオカリナ　　女
無位無官掌になじみたる筒茶碗　　節
　旅好きの兄雲丹を土産に　　節
咲き誇る花の濃淡風の道　　女
　蝶の憩えるふらここの綱　　谷本守枝
　　女

平成十二年一月十八日首
平成十二年二月二十九日尾

（於・桜花学園大学）

歌仙『冬日』

生き方をいまさら変えず冬日かな　　み
　霜に色づく山のほそみち　　良重
アドバルーン新興都市のビル上に　　渥子
　社員一同ラジオ体操　　藍
隣でもあくびしているおぼろ月　　み
　頬にやわらか春のスカーフ　　重
もやい船たまる入江の水ぬるみ　　渥
　最終便で新任の地へ　　藍
恋天使弓矢こっそりスタンバイ　　重
　ふいに香った君のフェロモン　　宏
拒食症ですねと医師は向き直る　　み
　一人前になるのたいへん　　重
原人の斧はまぼろし月更けて　　渥
　雲居の雁の落ちてゆく闇　　藍
チャットしてますますさびし冬隣　　渥
　ひねもす茶番続く国会　　藍
花よ咲け酒よ酒酒座のまどか　　執
　蝶舞い狂う昼のアンニュイ　　筆
受難節（ナオ）何も言わないキリスト像　　み
　新入生は起立している　　良重
父さんの書き込みのある英語辞書　　渥子
　玉音放送知っているかい　　藍
雲の峰越えて遠くへ行けたなら　　み
　ドレッドヘアー頼るカーナビ　　重
色ふかき眼女豹と申すべく　　藍
　小さな嘘がまた嘘を呼ぶ　　渥
ピンセットガーゼをネジを置き忘れ　　重
　夕月かかるふるさとの夢　　藍
柿干して祖母の年忌の近づきぬ　　渥
　おぼこが鰡に出世するころ　　宏
神戸発世界周遊豪華船　　み
　ふうふう吹いてキムチチゲ鍋　　渥
長電話なかなか切れぬ子供部屋　　藍
　運動欄の今日は吉なり　　渥
てのひらをこぼれる時と花びらと　　藍
　バロック流るかげろうの中　　執筆

平成十二年十一月二十一日首
平成十二年十二月　十九日尾
（於・桜花学園大学）

半歌仙　『桜　し　べ』

小野シズ捌

丹下博之
小野シズ
児玉俊子
柴田寿賀

老犬の背に二三片桜しべ　寿賀
　とぎれ〳〵に遠足の列　俊之
栄螺焼く海の向ふに海見えて　ズ
　液晶テレビ流すCM　賀
マンションの窓額縁に今日の月　之
　町おこしには新酒飲む会　俊
明暗の溶け合ふあたり末枯るゝ　賀
　ものゝけ姫のやうなコギャルが　賀
保険金殺人事件恋がらみ　之
　噴火鳴動吠える有珠山　俊
介護士のあみだにかぶる冬帽子　之
　観音像は穏やかに笑む　賀
ナイターのひと振り月へホームラン　ズ
　ソフトクリームわさび風味で　賀
漸くに名称決まるさいたま市　之
　駅前広場母を待ちつゝ　俊
花筏お堀の水は青く澄み　賀
宙さゞめかす高き囀り　俊

平成十二年四月十八日首尾
（於・TEPCOプラザ浦和）

半歌仙　『おこり炭』

年の瀬や俳茶会継ぐおこり炭　　松本杏花
　千両の実に映ゆる蒼天　　佛渕健悟
ちゃ〳〵と雀土鳩と遊びゐて　　小林しげと
　リボンをかけたケースいたずく　　浅賀淑代
蹲にたゞよふ望の月掬ふ　　田中安芸
　冬の仕度もおよそ整へ　　桜井つばな
ウ爽やかに象の背に乗る宣教師　　悟
　仮名字おしへる絵入り伊曽保　　と
化粧間は西日射し込む刻となり　　代
　恋愛サイトＩモード開け　　芸
酔ふほどにネイルアートの指からめ　　つ
　何もかも知る盧舎那仏座す　　杏
泣きながらつるりと啜る寒卵　　悟
　片割月のくさめするよな　　代
焼物に俤のあり伊賀の窯　　芸
　シルバーモデル休む暇なし　　つ
見得切つてさすがは花の立役者　　と
のどかに昏るゝ河岸のそよ風　　杏

平成十二年十二月二十六日首尾

（於・浦和残心亭）

歳暮俳茶事　控

師走の喧噪を避けて一日俳茶会を催す。亭主の発句を乱れ箱に入れ、寄り付きに置く。客は、その場で表六句まで進め席入り。床の軸は、一行物「常行一直心」。炭手前に香を薫きしめ懐石・酒・菓子をいただき中立ち。再び寄り付きで裏の三句を詠み、後座。席入りして茶花を賞で、そのまま座で半歌仙を首尾、化粧作り、退席。一会、凡そ四時間。（杏）

歌仙『十薬の花』

平成十二年六月二十七日首
平成十二年七月二十五日尾（出勝）
（於・愛媛県立生活文化センター）

十薬の花の眞白き残りけり　鈴木春山洞捌
　崖の尾すつとかくす蛇（クチナワ）　井門可奈女
外出の妻の残せし香水に　鈴木春山洞
　どこえ行きしか夕仕度して　大本まこと
天窓に月の光（ゲ）さす刻移り　林半星
　芒・刈萱角（スミ）棚かかり　洞奈
山の寺荒れたる庭と秋の水　星ま
　恋の歌にてカラオケデュエット　洞奈
美男美女集ふ広間に彩の酒　星ま
　噴火寸前艦艇出そろい　洞奈
反抗期寝ろといはれて立てにねる　ま星
　株主総会無事に終了　弓崎雅美
銀世界静寂すべるスキー月　洞
　ポケットにあるホットドリンク　星
雑踏の眞ン中に居てただ独り　ま
　おされおされて職安通ひ　星
花の中駈け抜けてゆく騎馬もあり　洞
御縁日なる朧の月夜　星

帆（ナオ）を捲いて来し船暖かに　洞
　サミット無事に終りひと息　ま
ゼット機の訓練再開沖縄県　雅
　古墳の中に馬鈴発堀　星
むし暑く眠られぬ夜はマンガ読み　ま
　瞳（マミ）澄みわたるエロのコミック　洞
南無大師同行二人杖をつき　星
　会話のはずみ車窓忘るる　奈
口ぬぐひ夫（ツマ）により水戸泉なり　洞
　手玉に取られし月見宴の月の出ぬ前に出来上り　ま
父母恋しと鳴ける山鳥　星
　蓮（ナウ）の実の飛ぶ池に来て一人佇つ　奈
モネに魅せられ旅はフランス　千
　男性の数へつてゆく老人会　ま
温泉にゆったりとひたり極楽　星
　花弁受けて山路を遠く一廻り　千
寂蓮法話集ふ春庵　洞

歌仙『蜩』

鈴木春山洞捌

鯛や丹原高校歌二度聞かす　　鈴木春山洞
　涙と汗のさわやかな顔　　林　半　星
大いなる月のさし込む鉄下傘にて　　大本まこと
　旅の仲間の談笑交はし　　井門可奈女
小包は孫の写真とさくらんぼ　　星
　沖の小舟の朶む三角帆　　洞
遊園地回天木馬のゆらゆらと　　奈
　腹をかかえて傍で見る嫁　　ま
駅前の群衆無視し目にキッス　　山野千艸
　ルックス低き茶店落ち合ひ　　洞
恋ゆらむすばれぬまま消えてゆき　　星
　海難事故のロシア原船　　ま
月光ゲの琴柱灯籠雪かぶる　　奈
　しばれる夜は読書三昧　　艸
文起し筆を噛み噛み室生犀生　　星
　百万石の城下町佳き　　洞
花蕊の甃馬車通りぬけ　　美
　壺焼暖簾連れいる軒　　星
こ（ナオ）の島の名物安き桜漬　　洞
　ロープウェイの空中散歩　　星
台湾へ出稼ぎ孫のアルバイト　　ま
　柔（ヤワラ）ちゃんかな金ンの微笑（ミ）　　奈
言（ゲ）ンや佳し「夜は一人で泣きました」　　千
　夏の渚をふたりで歩く　　洞
君ふめば玉と鳴る砂従ひて　　星
　みな脱ぎすつる大人の遊び　　ま
詩の世界宮沢賢二銀河鉄道　　奈
　地べたにすわる愛のはたてよ　　千
横抱きに小女をかかへ草の月　　洞
　家内安全秋祭なり　　星
紐（ナウ）とけば虱（シラミ）をつけて帰る犬　　ま
　犯罪多き十七才児　　奈
四次元の思ひに遊ぶ夢酔めて　　千
　枕抱きよせ二度ひを寝る　　ま
花筏つらなりてゐる渕蒼き　　洞
　鮒の巣離れ投げし赤浮子（ウキ）　　星

平成十二年八月二十二日首
平成十二年九月十九日尾（出勝）
（於・愛媛県立生活文化センター）

《さいたま・三尺童―その一》

歌仙『旅の糸』

上簇やわが身をつつむ旅の糸　原　伸一捌
庭よぎりゆく麦の秋風　丹下博之
ヴィオロンのA線の音の軽やかに　中嶋桂竹
団欒のあと雨の静まる　華尤子
書見の目上げれば月は耿々と　原伸一
コスモスまとう有刺鉄線　松下英雄
海鵜(うみばい)打ちに興ぜし子らはいまいずこ　小池信子
幼なじみにメール送ろか　田中雅子
人気無きホームに影の長くのび　中野恵永
蜜月の日々かけ抜けてゆく　関口せう子
傷ついて傷つけられて十七歳　せ
心の襞のその奥の奥　尤
有明に凍てて階段軋むなり　雅
オーバーの肩いからせてゆく　雄
執達吏段ボール箱用意して　小宮幸子
恨めしき目が車見送る　一
難攻の鎌倉山は花の中　萩谷準一
千軍万馬春塵の舞い　之
空吹(うそぶ)きの面をかざせば蠅生まる　尤
女子高校生笑いころげて　せ
学園祭教師の真似が大当たり　永
〝俺は死にたい恋に死にたい〟　幸
故郷は入道雲と自転車と　準
蛇ひんやりと休む草むら　信
組み紐に妖しい色の混じりいて　準
クレオパトラの凱旋の輿　信
灯を入れよ最後は見てのお楽しみ　雄
満々月にジェゴグ藤く　尤
駐在員サンマの秋をなつかしむ　永
帰燕の数の増えるこの頃　準
突(ナッ)一本馬庭念流三十年　竹
うだつあがらぬ次男坊なり　雅
カイラスへ五体投地の行(ぎょう)　雄
旗も小石もひゅうひゅうの風　之
老妻と名残の花を惜しみつつ　一
裾を気にする春泥の径　せ

平成十二年五月三十日首尾

（於・案愚庵）

短歌行　『匂い幽かに』

華　尤子捌

白蓮の匂い幽かに闇深し　　華　尤子
春三番が通り過ぎた日　　小宮幸子
駒鳥笛を玩具の箱より取りだして　　丹下博之
半ズボン穿く町の悪童　　松下英雄
並木道横一列に月明り　　田中雅子
地蔵の前にゆれるコスモス　　原　伸一
鳥渡る地平にレンズ振りながら　　関口せう子
揃いのベレーとてもお似合い　　小池信子
躓いて思わずすがる胸厚く　　せ
亀がひょこりと首を出してる　　信
破れ築地恥じらいがちの花三分　　幸
涅槃会ばかり尋ぬ版画家　　雅

噴煙（ナオ）を遠く眺めて春暮れて　　之
アラビア文字のあふるバザール　　尤
砂嵐砂丘に伏せる兵士たち　　雄
別れた女の名前呟く　　之
月上がり炉辺話は更けるまで　　せ
自己破産者の指先の冷え　　一
折れ線のグラフジグザグする世界　　雄
盆地の雷に山は聾く　　一
サニーサイドを二つ焼いてよ　　幸
花の雨流れる曲はドビッシー　　之
お玉杓子も尾びれ振り振り　　信

平成十三年三月二十八日首尾

（於・案愚庵）

半歌仙　『三ガ日』

赤松よう子捌

香合の龍の絵柄や三ガ日　赤松よう子
　俎始待てる訪客　藤井　治
塀越しに伯父のだみ声聞こえ来て　佐久間淑子
　春の霙のたたく庭石　西山真樹
月のぼり雛の白き顔照らす　猪平十糸子
　蓬団子を大皿に盛り　川口摩知子
ッ雪駄の音やたらいなせに鳶の者　淑
　振り袖娘イタメシが好き　淑
念願の亭主関白当て外れ　摩
　ママはお出掛け私子育て　よ
多摩団地万緑の中住民会　治
　名前を変えるカルト宗教　治
十六夜の一層丸し波の果　摩
　新走り酌む船頭の髭　十
邯鄲を小籠に飼いて独り住み　十
　介護保険は高くつきそう　真
花冷えの平安神宮ひとめぐり　真
池の畔に蝌蚪を眺める　淑

平成十二年一月二十五日首尾

（於・俳句文学館）

半歌仙　『秋深む』

衆判　加藤望子　赤松よう子　藤井治　中西昭子　徳住羚

門川の緋鯉真鯉や秋深む　羚
籠につやつや盛れる秋茄子　昭
十三夜雲ひとつなき空にして　子
コーヒー香るカフエに憩える　よ
裸木の街足早に靴の音　望
遠く連なる雪の山々　よ
北欧のパックツアーに申し込み　治
座間違えし事が始まり　羚
いきなりの熱き接吻乱れ髪　昭
思い出手帳しまうポケット　子
国二つ神の聖地を戦場に　よ
慣れっこになり総理失言　治
納涼のお化け屋敷の紙の月　望
祭囃子の笛の賑やか　羚
新聞に今日もまた載る医療ミス　昭
路地に集える猫の一族　子
八重の花しだるる下に盃交わす　よ
蒸し鰈置く信楽の皿　羚

平成十二年十月二十四日首尾

（於・俳句文学館）

半歌仙　『夏　燕』

伊藤稜志捌

百人町に残りし米屋夏燕　稜志
　信号を待つ白きパラソル　遊
筆太く篆字を紙に走らせて　遊
　歴史を変える柱列の跡　稜
月光の下に奏でる古石琴　稜
　水蜜桃の匂い甘やか　よ
鉈彫りの如来に山の紅葉濃し　よ
　貸りたる軒で恋の思案を　真
顔かくし灯を消してよと初の夜　真
　女性上位を思い知らされ　よ
ヒトゲノム解析なにか恐ろしく　稜
　右往左往とそぞろ足元　羚
さもあらばあれ西行に冬の月　羚
　単身赴任燗熱くして　房
自公保をやっとつなげる総選挙　房
　時は過客で人はたちまち　子
散る花の大海原に辿り着き　子
　乗込み鯛の鱗輝く　博

平成十二年六月二十七日首尾

（於・俳句文学館）

歌仙『桜紅葉』

桜紅葉踏みつつ帰る家路かな　太郎
　星二つ三つ光る夕月　宮下太
ハローインキャンデイ吾子の両腕に　禅巌　矢野禅
　薄目をあけて猫の香箱　梁　小林梁
お隣りの庭より百合の香る風　太
　店は息子にまかす隠居所　禅
選挙戦戦い済んで日が暮れて　梁
　眠れぬままに面影を追う　梁
夢二描く潤む瞳の君なりき　梁
　伊香保のお湯に新婚の旅　太
玄関の額に総理の太き文字　太
　公務とやらで今日も昼酒　禅
原人の遺跡照らせる冬の月　禅
　寒鷹の声闇を劈く　梁
怨敵はいずこに潜む吉良屋敷　梁
　春の初めに切腹の殿　梁
散る花を名残に旅の宿を発つ　太
　水の淀みに蝌蚪生れるらし　禅
野遊びは一族郎党引き連れて　ナオ　梁
　娘笑わす弟子の軽口　梁
絵手紙の美人画あまり上手くなし　禅
　半裸の手酌やや色っぽく　太
刺青の紅あざやかに青嵐　梁
　田舎芝居の舞台幕引く　禅
大統領選挙よく決着し　太
　軋みて廻る修羅の世界史　梁
車事故道路は油だらけなり　禅
　どこかで鐘の響く夕暮　太
聖地行く羊の群れに月昇り　梁
　ほーうほーうと托鉢の秋　禅
鬼子母神石榴がはぜてまっ赤っか　ナツ　太
　終りに近き朱印帳捺す　梁
いつも来る草書の手紙読み難し　梁
　東の風が吹いてくる頃　禅
同級のみな白髪に花蕾む　禅
　草餅を茶に集う故郷　梁

平成十二年十月
平成十三年一月吉日尾首（文音）

脇起歌仙　『涼風や』

赤田玖實子捌

涼風やほの三日月の羽黒山　翁
　佛法僧が響く杉の秀　赤田玖實子
軒簾奥より人の声洩れて　加藤マサ子
　連載ものの週間漫画　松本杏花
銘柄にこだわっており雛の酒　蛭海停雲子
　春のスカーフラメがきらつく　マ
その中に夢を封じたシャボン玉　杏
　受胎告知に乙子羞らう　マ
弁護士になりたる後に再会す　マ
　〝もってのほか〟の菊をサラダに　杏
彼岸寺閻魔の庁の地獄変　雲
　月の黄河へ傾（ナダ）れ長城　マ
初猟へ供する犬は逸りたち　杏
　行列したが何の行列　マ
内閣の支持率下がるまた下がる　鴨志田智恵子
　ねんねこ姿近頃は見ぬ　杏
餅花が映えてはんなり蕎麦処　〃
　柴胡は枯れて原は眇茫　〃
採算も福祉ビジネスでは合わず（ナオ）　杏
　医療現場で續発のミス　マ
浦安の舞の鈴音軽やかな　〃
　鼻は太くてくっきりの眉　大谷繁子
ひたすらに『命』と腕え文身を　マ
　とかし屋という車商賣　〃
星今宵盥え浮かす針の影　玖
　夜明の月に作るおむすび　智
萩叢は大うねりして露こぼし　繁
　視廻る祖父は稲の香にむせ　マ
ほども良く呑めば功徳よ百薬の　〃
　話す呼吸もさすが演説　雲
古（ナウ）書市の埃にやつれ稀覯本　智
　巨船従えラフランチ堂堂　雲
淡雪は喜びながら降るとかや　智
　青き竹林北窓を開け　繁
乾坤を満たして花の盛りなり　玖
　どんたく終りもどる静謐　〃

平成十二年七月十一日首尾

（於・相模原　桃夭樹）

歌仙『寒さかな』

鶯の肝つぶしたる寒さかな　　支考
　自在の鉤に春の釜鳴り　　國島十雨
持ち寄りし菜飯弁当分けあひて　　梅村五月
　嬰児（やや）の頬の赤くふくらみ　　梅村卓矢
月の城金の甍の輝ける　　本屋良子
　戸板に並べ尾花撫子（なでしこ）　　小川守
世阿弥忌にやをら繙く謡本　　川島四郎
　旅の一夜の枕崩るゝ　　園部志げ
主を追ふ女の想ひ盥舟　　春日井朱雀
　鬼太鼓（おんでこだい）撲を振り上げ　　成瀬貞子
呷り飲むかっぽかっぽとコップ酒　　高木和子
　体に毒よ母のささやき　　山下陸雄
蜘蛛の囲にかゝりて揺れる月の光（ゲ）　　唐渡北勢子
　団扇であふぎ軒にたたずむ　　田辺桂月
熊さんと八っつあんが指すヘボ将棋　　伊藤白雲
　待った待ったと車渋滞　　山村忠男
花篝川に映して奥山へ　　中尾青宵
　門前町で買ひし草餅（ナオ）　　武藤みう
納税期不況幾年重ね来て　　武仲登志春
　携帯電話ぴーぴーと鳴り　　田中湖城
甲板で立寄る先は晴と聞く　　井口ひろ
　厚底靴が宙返りする　　北勢子
憧れの君をさらひし恋敵　　恩田静村
　身を切る様な冬の風泣く　　清水みよ子
雪をんな一本足が戸を叩く　　河合勝子
　いつの間にやら美濃弁となる　　田中加代子
神の庭木立ちの道はうねうねと　　高松正水
　切り立つ崖を走り去る栗鼠　　青宵守
見返れば峠の月の大きくて　　和子
　リックサックに飾るコスモス　　桂月
連（ナウ）れだちてセザンヌ展へ秋惜しむ　　ひろ
　言ひ訳けばかり論議脱線　　貞子
甘い菓子腹いっぱいに頬張りぬ　　白雲
　獺の祭のむかしなつかし　　十雨
と見かう見花咲き初めし三輪の里　　執筆
　蝌蚪の遊べる池のさざ波

平成十二年三月二十六日首尾

（於・獅子庵）

《岐阜・獅子門―その二》

歌仙『啼く千鳥』

星崎の闇を見よとや啼く千鳥　　白雲
　たどり着きたる木枯の宿　　北勢子
古文書の変体仮名に読み淀み　　朱雀（春日井）
　しのび寄り来る抜足の猫　　桂月
有明の大河流るゝ滔々と　　文子
　青き蜜柑に雫宿れる　　守
繰り返すリズム不可思議法師蟬　　良子（後藤嶺子）
　空の一句に頭悩ます　　正水（高松）
神話てふ天の岩戸を覗き見る　　良子
　ヌードダンサー腰をくねらせ　　貞子（井口ひろ）
嫋やかに島原太夫舞ひ納め　　和子
　庭を映して廊下つやつや（ナオ）　　洋子
風涼し蛇の目の傘を置き忘れ　　十雨
　のんどひこひこ蟇は動かず　　執筆
郷分ける大綱引きの賑はひて　　白雲
　織部の皿にカレーライスを　　北勢子
城の窓四方に開けられ花吹雪　　朱雀（春日井）
防人のごとつくし林立（ナウ）　　桂月

國島十雨捌

松尾芭蕉　國島十雨　唐渡北勢子　伊藤白雲　梅村五月　高木和子　瀬尾千草　石田富恵　田辺桂月　小川守　成瀬貞子　宇野久恵　本屋良子　堀内洋子　船渡文子　北勢子　中尾青宵　和子

平成十二年十二月二日首尾
（於・岐阜公園　華松軒）

歌仙『埋火や』

伊藤白雲捌

埋火や壁には客のかげぼうし　松尾芭蕉
煮凝鮒と地酒徳利　伊藤白雲
句碑新た四方の借景整ひて　田辺桂月
横一列で写眞とらるる　堀内洋子
引き絞るゆんでの先へ望の月　本屋良子
木犀の香を風が乗せゆく　松岡裕子
由緒あるひなびし村の秋祭　久世竹水
皿鉢料理でクラス会する　福永常子
暗号は輪ゴム小指に巻いておき　清水青瓢
焼けぼっくひが燃え出して候　唐渡北勢子
後朝の珈琲少し濃きがよし　伊藤錦石
いつも逢ふひと子連れ犬連れ　田中湖城
上り月軒端にゆるゝ釣忍　浅野繁子
浴衣の袖をまくる碁仇　竹水
息つぎて温泉旅行の話決め　高田久枝
ガイドの配る名産のお茶　広瀬雅女
十字架のトンガリ屋根へ花吹雪　船渡文子
平和公園水の麗らか　桂月
真つ青な空へふらここ押してやり　洋子
携帯電話首にぶら下げ　良子
お土産を両手にお婆孫を見に　裕子
煎じ薬が効いて来る頃　錦石
独り居の眠れぬ窓に雪をんな　白雲
炬燵の中で抱いて溶かさん　北勢子
からからと粉挽き水車廻りづめ　常子
菓子作るときホイップ角出す　高木君栄
家計簿は引算ばかり重なりて　小林美苑
蹲に啼く名も知らぬ鳥　文子
月の量合掌造りの幾何模様　桂月
蝗出し汁ひし香し　裕子
将軍の威厳を保つ菊着せる　竹水
表彰台に金メタル映え　大橋正子
ハイテクの機器で伝へる気象報　堤民女
霞たなびき跳ねる橋桁　洋子
咲き咲きし花の大樹へ手をかざす　北勢子
新世紀祝ぐ春の歌声　執筆

平成十二年十一月十九日首尾

（於・大垣「円通寺」）

半歌仙　『世界遺産』

膝送り

伊藤白雪
尾関芳子
宇野久恵
武藤みう
後藤キヌエ
井口ひろ
竹内昭子
端元涼子
河合初江
船渡文子
瀬尾千草
伊藤弥生
成瀬貞子
本屋良子
田辺桂月
堀内洋子
八木紫暁
小川守

文化の日世界遺産の町にかな
　ちちろ虫鳴く折鶴の像
ラ・フランス豊かな香り月影に
　愛犬を呼ぶ声のやさしく
公園の遊動円木揺らし合ふ
　道標かくす夏の草丈
ウ滝しぶき浴びて若者天幕張る
　陰陽の神おはす洞門
授かりし玉のやうなる赤ん坊
　新人王は祝杯に酔ひ
竹林に何か蠢くもののあり
　菩薩に知恵を借りて合格
無位無冠それもまたよし蜜柑むく
　海豚の海に月の小波
パソコンで自在に描く未来都市
　遠隔操作介護ロボット
花大樹駅に仕立てて縄電車
　みすずの詩に島の麗らか

平成十二年十一月五日首尾

（国民文化祭ひろしま2000・連句大会参加の途次、車中にて）

『冬桜』

半歌仙
賦物・岐阜

成瀬貞子捌

南無薬師瑠璃光如来冬桜　成瀬貞子
木乃伊の堂にすがる凍蝶　後藤嶺子
黙もくと轆轤を廻す父のゐて　尾関芳子
通販で買ふ紙の靴下　河合初江
エッキョウと仁輪加の落ちに月笑ふ　瀬尾千草
籤に当たりし干柿の連（れん）　後藤キヌエ
ゥどぶろくの朱盃を受くる長寿眉　宇野久恵
トンネル続く高速道路　松尾博雄
寛斎のファッションショーが縁となり　貞子
蛇の目の傘に隠すふくらみ　雄子
どこ行きやるお婆々大きな荷をさげて　草恵
小紅の渡し細波のたつ　雄子
銘刀の鞘抜き仰ぐ月涼し　貞子
祭提灯点す氏子ら　雄子
家苞に持たす佃煮いかだばえ　草恵
千畳敷に栗鼠がちょろりと　エ草
国盗りの城へゴンドラ花吹雪　江江
やっとかめやなもうららかな午後　芳芳

平成十二年十二月十五日首尾　嶺嶺

（於・ドリームシアター岐阜）

『美濃言葉』

半歌仙
賦物・岐阜

本屋良子捌

なつかしき美濃の言葉や冬桜　本屋良子
一家揃ひて寒の餅搗く　岡本満智子
さまざまな和紙の製品並べられ　船渡文子
さるぼぼ負ひし背ナの童　竹内昭子
こっとんと鳴りて月下の芋車　堀内洋子
蜂の仔取りに労ひの酒　武藤みう
ファッションの発信基地よ爽やかに　小坂五百子
高橋尚子・白川英樹　井口ひろ
柳ケ瀬に祝勝幕の垂れ下がり　小川守
ブルース歌ふ夜の女王　良
川舟に睦言交はす夏の月　文
鮎釣る糸のからみ合ひつつ　五
つややかに郡上紬の織り上がり　う
どんな鳥なの古今三鳥　ろ
マンションに武者の亡霊でる噂　洋
呆け封じにと御首神社へ　満
特急の徐行に臥竜の花盛り　守
母がりに喰ぶ田螺田楽　昭

平成十二年十二月十五日首尾
（於・ドリームシアター岐阜）

歌仙『三年目』

伊藤薮彦捌

三年目四つ目通りの冬温し　伊藤薮彦
　ビルに響かう焼芋の声　高橋賢
独演会森の広場に連れ立ちて　小野誠一郎
　ボジョレヌーボー入手たしかめ　伊藤哲子
新築の庭の木の間に月のぼり　黒川洋
　雲を斜めに飛ぶ渡り鳥　泉浩一
卓飾る松茸づくし鄙び宿　賢
　予約に迷う携帯の弁　誠
左見右見とびこむように彼の背に　哲
　ペット気遣いドアに鍵する　和
町ぐるみ島を避難の地震つづき　子
　ボランティアに年を重ねて　洋
水中花月影共に揺らぎいし　和
　土用灸するがんこ職人　哲
織部焼母の形見のさしみ皿　賢
　簞笥の奥の通帳みつかり　賢
宝前に集う一族花寂か　浩
妓王の像に春意もよおす　和
銀（ナオ）の彼方の雲よ鶴帰る　哲
　フランス料理ランチタイムに　和
地図片手訪ね尋ねし観光地　誠
　珍なる猫の水を掬いて　哲
積もるよな積もらぬような小米雪　哲
　眼鏡くもらせすする燗酒　賢
今日だけは早仕舞する若大将　史（並木隆）
　シルクのドレスするり脱がされ　賢
哲学も趣味も好みも合わぬまま　和
　リストラ社員職を求めて　哲
月に吠え世間に吠える十七歳　隆
　りんご腐りて北の風吹く　隆
院（ナウ）展に運ぶ百号重いこと　哲
　一獲千金幻のまま　賢
おだやかに時が流れて浄閑寺　和
　都電ゆうゆう右に左に　誠
花浴びて子の掌の温し飛鳥山　彦
　瀬音聞きつつ陽炎える背ナ　隆

（於・四つ目通り　そばの里　みつまさ）
平成十二年十二月十五日首
平成十三年一月十日尾

歌仙『斑鯉』

伊藤薮彦捌

清澄や林泉わがものと斑鯉を　伊藤哲子
　昼寝男の見ゆる軒先　高橋賢
お宝を鑑定せんと額よせて　黒川洋
　まず一服と啜るコーヒー　伊藤薮彦
下駄の音遠ざかりゆき月仰ぐ　泉浩一
　色鉛筆で帰る燕を　小野誠一
鮮(ウ)やかな唐辛子吊る道の駅　賢
　秘密の記号伝言板に　哲
身をかわす人を尻目に追いかける　洋
　ポールとポーラ今は爺婆　哲
遺産分けテレビドラマの真似をして　賢
　独り芝居に拍手止まらず　賢
月冴ゆる荒神山の別れ酒　哲
　何を祈るか納め庚申　哲
地震つづく七つの島に友がおり　洋
　赤い帽子を波に放ちて　誠
特選の涙に負えず花満開　哲
　万葉がなで夏近き詩(ナオ)　浩
浜防風コンビナートは白煙を　哲
　湾岸道路トンネルを抜け　浩
旧型のパソコンを守る四帖半　彦
　時代の壺に長い羽根ペン　哲
湧き上る曲想若き浴衣がけ　浩
　姉妹うち連れ花火大会　賢
仕掛けだと知りつゝもまた口説かれる　洋
　見られたらしい足を速める　誠
あきまへんぼちぼちでんな今景気　哲
　何を隠すかコインロッカー　賢
人の世は一切無常月皓々　哲
　蟷螂遊ぶ主なき庵　賢
栗(ナウ)拾う谷に響かう児等の声　浩
　喘息に効く薬草を摘み　賢
疾く起きてラジオ体操楽しみに　哲
　蹤いてくる気の猫がまごまご　洋
ひるがえり襟元に舞う桜花　史(並木隆)
　軍書に哀しかぎろいの山　彦

平成十二年七月十二日首
平成十二年八月一日尾
（於・四つ目通り　そばの里　みつまさ）

歌仙　『雲湧いて』

澁谷　道捌

雲湧いて雲に加わる栗の花　茨木和生
駈けきし馬の塩となる汗　澁谷道
しなやかに反る折紙の指にして　西野文代
ハミングをもて児に聴かせつつ　岩城久治
満月の海を離れて大いなる　加田由美
螺旋階段すこし冷ややか　道
穂芒のネオンの色に染まるとき　代
ひとの気配にいくたびも立つ　美
躾ぬく贈りものなる縞間道　道
よみ路の旅にふわときせかけ　代
山影が伸び来る子捕ろ遊びにも　生
炉話つづく漁夫の寄合い　美
柚子風呂の戸を蒼白く月照らし　道
こだまばかりを乗りついで来る　代
人の世の知らず知らずのすれ違い　二上貴夫
ひよりつづきに雪囲い解く　生
ときおりに燠をちらして花篝　美
朧の敷居ふみはずしたる　道
手（オ）が三本目玉がふたつビカソの絵　代
女ばかりを糶（せ）り落としたり　夫
あなたなら鍋釜提げて追いゆくと　生
浜ひろびろと蠍座の天　美
朝顔の苗の双葉の色濃くて　道
祇園囃子が町々を縫う　代
ソムリエは客に呑まさぬ美酒（うまざけ）を　夫
ひっさげという魚ぶらさげ　生
包丁を研ぎ旧交をあたためむ　美
飼主に似た犬が車に　道
おはじきをはじきかえして後の月　代
勝鬨橋に秋風がふく　夫
水（ナウ）澄めり槍投げの新記録出て　生
ハッカーとなる暗き快感　美
弗・法・円の換算苦手なり　道
ワシントンへと転勤辞令　生
ゆめのあと億光年の花匂い　夫
蛙の目など借りっぱなしに

平成十二年十一月二十五日首尾（於・大阪・住吉）

歌仙『斑雪』

故郷の恋し斑雪の山と畑　日下悟乃捌
　腰を伸ばして啜る五加茶　井上鶴鳴
蕭々とメーデーの列過ぐるらん　中村磁鏡
　ステンドグラス工房のビラ　橋本古代
灯を消して机に残る月明かり　井上蘭石
　どっさり茹でる露地の枝豆　小林蜆汁
ウ色白も糸瓜の水も母譲り　中村磁鏡
　二人の為に風のそよ吹く　渡辺玄鴻
へんなとこ触ってみたりつついたり　渡辺極光
　遺伝子操作は神の領分　柳川霊鷲
デジカメとエディタで綴る旅日記　代
　漬ける蝮の鎌首に月　鏡
魘されて昼寝の夢に泣くこども　代
　人ごみの中ぽつり佇む　鏡
韋駄天が鳴らし過ぎ行く空バケツ　鷲
　蕎麦屋のカレーこれがまたよし　乃
郵便夫庭先の花見上げつつ　代
　運河の街の青き踏むなり　鏡
ナオドットコムドットコムとて暮れかぬる　代
　大三元をつもる強運　鏡
腕ひしぎ逆十字きめ新王者　鷲
　地方銀座に安売りの声　代
蒟蒻掘る蒟蒻玉の面構へ　仝
　森の樹氷の明けにかがやく　鷲
思ひ出はころぼっくるの置土産　鳴
　セクサロイドを撫でる令息　仝
金髪の女房が駅で投げキッス　鷲
　感染源はきっとあの店　仝
背広から月のかけらをふりおとし　鏡
　もって帰れと籠の鈴虫　代
ナウ裏木戸をなにか抜けゆく秋の暮　仝
　一枚残るS席の券　鳴
ITで人は機械に使はれて　仝
　紬に深き時の光沢　鷲
玉砂利の合間の花か桜蘂　乃
　銭湯いでて春風の中　代

平成十二年三月三日首
平成十二年六月六日尾　（電脳文音）
（於・NIFTY―Serve　現代詩フォーラム・紫明庵）

半歌仙　『運　河』

橋本古代捌

弓なりの運河一本涼しかり　橋本古代
初ほうたるの低く飛ぶ岸　井上鶴鳴
脳髄にラテンのリズム刻みゐて　日下悟乃
常には見せぬ熱き血脈　中村磁鏡
望の月盆地は光り洩らさずに　乃
茴香の実の甘く香れる　鳴
ッハロウィンの魔女のスープをお裾分け　鏡
下水に巣くふ鰐の目ン玉　乃
燃えてゐる手紙の束の若き文字　鳴
産婦人科を選ぶ憂鬱　乃
業腹なカンパとやらで二千円　鏡
NOと言へれば生も変はりて　柳川霊鷲
日蓮を偲ぶ身延に月冴えて　仝
鮟鱇の肝舌に溶けゆく　乃
レア・カード求む子供で溢れたり　鳴
人知れずある特攻隊の碑　鷲
潮鳴りの聞こゆここより花の道　代
窓を開ければ茶山あをあを　鳴

平成十二年五月十五日首
平成十二年七月二十五日尾
（電脳文音）
（於・NIFTY―Serve
現代詩フォーラム・紫明庵）

歌仙『牛の艶』

新涼や牧に百余の牛の艶　井上鶴鳴捌
　道標のもと揺るゝ露草　橋本古代
月光に古代の文字を解き終へて　柳川霊鷲
　煎茶を注ぐ手捻りの碗　中村磁鏡
ヒーローはサイドカー駆りやってくる　日下悟乃
　飛入りしたる野外演奏　井上鶴鳴代
ッ秒針のゆっくり進む原爆忌　代
　繰り返し梳く髪の重たき　鏡
身の上は嘘で固めた左褄　鷲
　ハギア・ソフィアと称す教会　乃
絵葉書の中の長椅子銀放つ　代
　なぜあんな夢を見たんだろう　鳴
軍勢は木馬の腹にひそみをり　代
　繊月嶺に運ぶ凩　乃
冬安居問答の声凛として　鷲
　ロードワークの粋なボクサー　鏡
鮮やかに花舞ひ初めし華盛頓　代
　春闘打開策の浮かばず　鳴
ナオ田螺和へ竹串細く研ぎにける　乃
　釜の大きさ米の美味しさ　鳴
ONの夢の対決始まりぬ　代
　舞台の裏で弾く算盤　鷲
コロラチュラソプラノ毒の接吻を　鏡
　雷照らす松葉くずしを　鳴
でむしの雌雄はひとつ殻の内　乃
　整理券出し空母公開　代
医務室の悪魔払ひもけふ済んで　鷲
　落とし便所の底は茫洋　鏡
山小屋へあとひと息よ降り月　代
　雁陣はるか先鋭に見ゆ　鳴
ッ温め酒土産話を聞きながら　乃
　電子レンジがチンと鳴りをり　鷲
義歯義眼人工心臓すこやかに　鏡
　川瀬づたひに通ふ銭湯　代
花よ花よやがて現る蓬萊洞　鳴
　現世の夢を眠る猫の仔　乃

平成十二年八月八日首
平成十二年十二月十二日尾（電脳文音）
（於・NIFTY―Serve 現代詩フォーラム・紫明庵）

『郭公や』

郭公や煙り噴く山目のあたり　妙
畑いちめんにほこる向日葵　正
空港の迎えの父に駆け出して　修
日本語知らぬ孫娘抱く　妙
バラードの小節素敵な月今宵　修
松茸飯に卓は賑やか　正
飛ヴび込みし飛蝗いたぶる猫のさま　妙
日頃工夫のひと手ご覧じ　修
紅一点今売り出しの人気棋士　正
詰めろ違えて善悪を越え　妙
敷居など跨ぐものかと捨てぜりふ　修
大江戸線は地下のまた地下　正
雑踏のクリスマスイヴ月淋し　妙
賀詞は遠慮と喪の人の文　修
洋服のMはいつしか2Lに　正
おいこらこらと籠の鸚鵡が　妙
花繚乱日本丸の総帆展　修
プラスバンドの響きうらうらに　正
春祭稚児の行列しずしずと　妙
攘夷浪士のうずくまる辻　正
首相だけ替えて済むまじ新世紀　修
バンジージャンプやってみようよ　妙
義経の馬は野鹿に導かれ　正
著莪咲く道に傾ぐ石仏　修
蚊を払う女二人の立ち話　妙
また一人来て八つ裂きの恋　正
不倫とて泣きの涙のコップ酒　修
憑き物落ちて絵は賞を取り　正
ふるさとに錦を飾る昼の月　妙
河童ケ渕に揺れる竜胆　修
深ツ山田の案山子風情が太刀かざし　正
股旅物が好きな跡継ぎ　妙
双子です聞いて咄嗟の宙返り　修
レフト、ライトへノック百本　正
陣取りの大の字に寝る花の朝　妙
紋白蝶の羽化のひととき　正

（是行修吉　いぬじま正一　久我妙子）

平成十二年九月　十五日首
平成十三年五月二十七日尾　（文音）

百韻『遠富士に』

土屋実郎捌

遠富士に雪耀けり初懐紙　土屋実郎

龍の土鈴に淑気みなぎる　小林静司

祖母よりの一つ紋にて炉塞ぎに　菅谷有里

包みほどけば匂う草餅　小野シズ

緑食む斑の仔牛あたたかく　和田洋子

風に揺れいる白いブランコ　和久井八重

能楽堂帰路は月影踏みながら　原崎弥生

遅れし雁に送る声援　今村苗

祝(ウ)いとて新酒吟醸贈らるる　蛭海停雲子

ほんのり甘き後味のよさ　若尾よしえ

深情いつしか恋に変わりゆき　村上敦子

どう告げようか妊りしこと　茂田キヨコ

慎重にしんにゅうかけて宮内庁　成田玲子

反り美しき濠の石垣　高島幸子

ゆったりと緋鯉真鯉の描く水輪(みなわ)　秋山よう子

トロンボーンを伸ばす汗の手　洋

月暑し抗生物質三日分　雲

ボイジャー二号海王星へ　生

古稀にして野球人生涙あり　苗

エンドレスなり母のおこごと　洋

根尾谷にミレニアム生き花万朶　え

法灯守り霞む名刹　里

オ麓から運び込まれし大わらじ　ズ

厚底ブーツ今や公害　郎

幸せはひょんなところにころがって　里

雄鶏すくととさか振りたて　敦

我が好み胸毛と髭の濃い男　苗

鎖の切れたレディーチャタレイ　え

寒林をするどく抜ける音は何　苗

あわてふためき隠くる縞リス　生

浅井園丁

国境の町へと橇を急がせて　丁

大きな鞄たずさえし医者　生

名物の土産山ほど持ち帰り　苗

ドーナツ版のレコードを聴く　重

鬼気迫る狂女の舞に月白し　里

身をくねらせて穴に入る蛇　え

アルハンブラの丘の連翹　郎

オ穂芒のゆれる鉄路のほとりにて　ズ

秋の祭の鎮守開熱　雲

焼き上げてアップルパイの香りよき　藤沼和ヱ

防災訓練早々と終え　玲

猫よけのペットボトルが並ぶ塀　よ

暇と金とは反比例なり　洋

運ためす競馬新聞赤をつけ　苗

口開けて差す目薬が外れ　里

政権は数と力で月凍つる　敦

慇懃無礼炬燵席とり　雲

逆読みもトマトキツツキパパとママ　洋

いいかげんほどむずかしきもの　コ

花舞台プリマドンナに選ばれて　生

アルハンブラの丘の連翹　洋

三オ　僧院の春眠さそうポリフォニー　よ

ちぎり絵遊びきりもなき子等　幸

三猿をきめて余生のコップ酒　里

宇宙食糧みなチューブ入り　ヱ

不況下も選手契約億単位　ズ

ホームレスにも五分の魂　里

目覚めては涼風に聞くほととぎす　苗

あの鈴蘭に毒あるを知り　雲

腕時計外しペイネの時間とす　ヱ

帰さないよと甘く耳打ち　ズ

拒みつつじらす手法（てくだ）が身についた　す

しけの恐れも浜の盆荒れ　り

KOBANに指名手配書月明り　雲

郡上踊りは夜を徹して　て

爪とぐ機械売り出されたる　ズ

三ウ　病棟の窓に銀杏拾いたる　洋

生き方変えて写経一念　丁

消防車うろうろしてる繁華街　生

行列長し当る観相　苗

割り切れぬ数を素数と言うらしき　郎

皇寿の祝い昆孫も来る　雲

御先祖のルーツさぐれば只の人　ヱ

突然引退告げるエリツィン　ズ

炎熱のサファリ静まり月赤し　よ

もがきつ沈む蟻地獄なり　司

尼寺の尼の数だけ物語　苗

ほめ合う丈で心ほのぼの　敦

花嫁がくるてふ噂過疎の村　里

爪とぐ機械売り出されたる　雲

世（オ）も末か人もペットも美を求め　え

綱吉ならば何と言うらむ　司

雨ぞ降る大井の渡し川止めか　苗

賽子振って棒に振る職　ヱ

こんど来たピザの配達好男子　幸

神の留守じゃと不倫三昧　雲

いざと言うとき老いらくの大くしゃみ　里

介護保険に望み託して　玲

タンバリン力一杯叩かせる　苗

お辞儀上手にサーカスの象　洋

駅前の英語留学決めかねて　ズ

情報網で先手必勝　ヱ

秋刀魚囓る符丁飛び交う暁の月　コ

菊師の父が晴れの叙勲に　司

騎馬（ナウ）の武者時代祭りのアルバイト　生

こわれているかヘルスメーター　雲

核の傘ため平和な世紀来よ　里

地球は一つかけ替えはなし　司

キリストと釈迦とアラーと手をつなげ　え

人美しく水清き里　洋

讃えつつ今日まほろばの花に酔い　郎

囀り四囲にキャンパスの杜　里

平成十二年一月五日首尾

（於・七里ケ浜　玉寿司）

世吉　『鶴岡八幡宮奉納俳諧之連歌』

大銀杏爽気纏いて神さぶる　　土屋実郎

浜風抜くる鴨の舞殿　　宮司

会議終え飛び立つＶＩＰ月浴びて　　和田忠勝

漢籍ひろげ祖父の端座す　　村上敦子

凝りすぎた暗証番号ど忘れし　　和久井八重

根雪とならん今日の冷えこみ　　小林静司

まるまって猫の親子が寝る炬燵　　原崎弥生

パチンコ店へ足の向くまま　　白井暎子

星占でつきがつき呼び丸儲け　　高島幸子

幸せなのは夢見てるうち　　林恵津

妻色に染まるかホワイトタキシード　　菅井てい

土俵の鬼にエプロンをさせ　　松本朝子

夏祭り御輿かついでリフレッシュ　　新家敦子

ビールと言わずホップドリンク　　和田洋子

有明の月に一声ほととぎす　　菅谷有里

椎の古木の武士に似る　　山本孔子

剪定の音がパチンとパズル解け　　内田光子

「たけやかおだけ」孫の質問　　吉田多喜

空襲の焼け跡おぼろ半世紀　　田中真喜

米ロのトップ並ぶあたたか　　寺田悦子

語らいつつ眺めつ花の段葛　　大林杣平

新入生をカメラ追いかけ　　杉浦ちゑ

ナオ寅さんを撮りし館の跡もなく　伊藤薮彦

うつらうつらと土堤で寝そべる　司

投手から打者に転向ホームラン　城　依子

洋酒ずらりとカウンターバー似合うカメラマン

ホステスは上海生まれ鍼灸医　坂田武彦

息弾ませて胸にとびこむ　里

不死鳥と云われて落ちるコンコルド　え

五輪へ向けて大派遣団　宗匠

有難き妙法華経の護符を身に　執筆

マフラー拾い枝にかけおく　水

威勢よく爆ぜる焚火に声あげて　星

豊漁祝う島の若い衆　丹羽友子

千年紀果つる真如の月の光　秋山よう子

見渡すかぎり虫の合奏　蛭海停雲子

ナウ到来のおはぎに入れ歯立たぬ秋　柴田寿賀

ユーゴースラビア民の旗波　藤沼和ヱ

すりきれたGパン似合うカメラマン　今村苗

離さずに持つ愛のロケット　岩永極鳥

子は鎖平和の夜は川の字に　戸沢鞠

アンパンマンがバックボーンに　小林しげと

まほろしの花に逢い得て花狂い　小張昭一

草芳しく水の惑星　高津明生子

執筆　宗匠　土屋実郎　座配　秋山よう子

脇宗匠　小林静司　花司　菅谷有里

知司　和田忠勝　配硯　村上敦子

執筆　今村苗　〃　高島幸子

平成十二年十月八日

（於・鎌倉鶴岡八幡宮直会殿興行）

半歌仙　『澄む水を』

伊藤稜志捌

澄む水を硯にそそぎ正座する　南博子
　月の影さす壁の古軸　田島文子
こほしつつ尚咲き続く白萩に　成田圭子
　オリンピックにトランポリンも　中野芳子
デパートで甲虫買い宝物　相沢富子
　団扇の形丸と四角と　伊藤稜志
学童の吹奏楽の音合わせ　芳子
　鏡の前で顔洗う猫　富子
知らんぷりしていてそっとウインクを　稜子
　砂に寝そべり熱き抱擁　博子
名刹の精進料理局の名　文子
　目の手術して埃よく見え　圭子
雪原に吹き飛びそうな鎌の月　芳子
　囲炉裏に並ぶ地酒徳利　稜子
原潜の事故にプーチンさん不評　博子
　凍解道に足をさらわれ　文子
宮島の花ぼんぼりに届く浪　圭子
しゃぼん玉舞い爆ぜる虹色　芳子

平成十二年九月五日首尾

（於・前橋文学館）

歌仙『一筆箋』

大西貞子捌

走り茶に添へたる友の一筆箋　　大西貞子
庭から庭へ牡丹あかしろ　　村田治男
鮎釣りの瀬音たかまる真昼にて　　中野たつ子
黒子の似合ふ顔形よし　　村田静子
山幾重秘境の月をうち仰ぐ　　尾崎重子
持ちし新酒をぐっと呑みほす　　前田てい
詩（ッ）と童話宮沢賢治の忌日なり　　治
女の頼み膝をくづして　　重
テレパシー時に誤作動恋逸し　　たつ
船形ロマン埴輪出土す　　てい
外貨立て貯金の奥様コンニチワ　　貞
水のいらない犬のお手入れ　　静
月光の冴え冴えとあり御神前　　貞
角巻の女津軽三味線　　静
方言のやさしさにふれ旅つづく　　重
お土産はみなありきたりなり　　たつ
勝峯山金剛證寺花の雲　　治
庫裡の隅にて蠅生まるとは　　静
鮒（ナオ）なます食べた事をば姉妹して　　静
世紀末なる皆既月食　　てい
石英に圧力加へ発光す　　〻
健康法は先づは笑顔で　　重
登山口草にうもれし道しるべ　　たつ
秋の近きを風の知らせる　　貞
デート場所間違へてをりあわてをり　　治
それでも挙式明日迎へる　　重
天才の腹話術師のいっこく堂　　てい
慰問袋に入れしお守　　たつ
源氏より平家大好き月机辺　　治
燕帰るを見送りて立つ　　貞
爽（ッウ）やかにトランペットを吹く少年　　静
スポーツウーマンテニス大賞　　貞
宅配車「バックします」の声せわし　　重
入学の日の声のはずめり　　静
城址を瞬時にさらふ花吹雪　　たつ
宿借りのむれ生国は何処　　治

平成十二年四月十九日首
平成十二年七月十九日尾
（於・猿田彦神社休憩所）

歌仙『汐入川』

田中一火女捌

潮張りし汐入川や行々子　田中一火女
池畔めぐれば蘆の群生　松木達雄
宅配便疎遠の友ゆ送り来て　森川年
老ひし愛犬尻尾ふるなり　森川寿
月中天玻璃戸は澄みて影もなく　武田健
爽やかな朝弾む挨拶　年
旅宿に灯火親しむ新刊書　寿
行方も知れず思慕つのる人　健
死ぬ事も辞さぬ想に燃へし恋　年
深夜に流るディスクジョッキ　寿
総選挙与野党争点合はぬまま　健
就職願ひ神頼みする　年
うらぶれし駅舎を照らす冬の月　寿
熱燗交し叙する久闊　健
SLに遠き夢追ひ津和野行き　年
車椅子にて機能訓練　寿
陵の花は咲くまま散るままに　火
遙かなる野路舞へる蝶々　健
遍(ナオ)路ゆくふる里訛なめらかに　年
テレビゲームに時を忘れて　寿
誘はれて会員となりウォーキング　年
朝餉抜くてふ出勤の友　健
蒼天にしぶく噴水七彩に　年
瀬音に急かれ河鹿昂る　寿
三世代旧(ふ)る家に住み睦まじく　健
押しの一手で遂に得し女(ひと)　年
ベンチには美女と野獣が並び居て　雄
言葉にならぬ悦楽の刻　火
空港に早夕月を仰ぎつつ　年
すだき初めたる虫の楽章(がくしょう)　寿
日(ナウ)展へ力作の書の運ばれて　健
三三五五と会話はづめる　健
子等よりも親が気にする参観日　寿
仕立て下しの服をまとへり　年
記念樹は八年(セ)を経たり花吹雪　寿
野辺広々と燃ゆる陽炎　健

平成十二年七月十二日首尾

（於・楠河公民館）

《名古屋・尋牛会》

『地名バーチャル紀行』
安芸・備後

半歌仙

上島登志彦捌

蕗のとう摘みゆく安芸の遠会釈（内海町）　稲葉敦子
船便ごとに凍て返る風　（備後）　立石洋一
つつがなくドームの燕白止めて（筒賀村）　伊藤実和
親しき顔の未知の顔知る　（尾道市）　久田結花
作業服山にもたれて月高く　（福山市）　伊藤益臣
スカーフの中なんと松虫　（布野村）　西脇智子
ウ早稲酒を飲み屋自慢の樽で出し（宮島町）　上島登志彦
黙って待てぬ幕までの通　（沼隈郡）　高橋厚生
身の丈は楽に一尋島みかん（竹原市・広島市）　上島智子
猛攻奪取　牡蠣打ちの恋　（甲田町）　上島一生
ゴールイン熨斗までつけた戌の帯（因島市）　上島一生
少子高齢ケセラセラだわ　（世羅郡）　岩崎美和
月細り温度差激し原爆忌　（音戸町）　岩崎帆敦
蚊いぶしの火が偲ばれる里（東野町）　岩崎敦花
楽しもか曲り屋で聴く百噺（下蒲刈町）　岩崎花生
ルパン登場謎は氷解　（東城町）　岩崎生和
逆上がりワイド画面に花躍り　（坂町）　岩崎和帆
五輪を賭けて春のマラソン（加計町）　岩崎帆臣

平成十二年二月五日首尾
（於・愛知芸術文化センター）

歌仙『市芸術祭参加正式俳諧』

霊峰を結んで高し鰯雲　　内田素舟
里は豊かな秋の七草　　青柳翠
恩師より月見の宴に誘われて　　八戸一橋
俄か役者に続く喝采　　富沢比佐女
冴え渡るバスを待つ間のひと思案　　荒木宝章
白雪冠る名所の松　　斎藤一葉
情熱のタンゴの曲に燃え上がり　　小野梅久
柔に実るシドニーの恋　　荒木遊仙
隠し得ぬ腹に岩田の帯を締め　　阿部一笠
数で押し切る臨時国会　　斎藤一竿
物売りの電話に老いは恍けいる　　高山桃里
客足途絶え欠伸する巫子　　市川澄水
幽玄な箏の流れに月涼し　　小川庭水
シャワーを浴びて囲む絵筵　　山崎茶香
横綱の意地を見せたる武蔵丸　　伊藤香月
峠の駅で力餅買う　　三上渓人
後手で仰ぐ城址は花万朶　　荒木吉峰
画架立ててみる麗かな庭　　庄司籟山
入学は双子兄弟それぞれに（ナオ）　　笠
小さな旅は鈍行でゆく　　斎藤孤柳
抱きしめて好きと言ふのも今朝の夢　　比
誠の証し筆に託して　　山
三宅島噴煙恨む避難民　　門脇桃園
賀状に浮かぶ友の面影　　岸庸女
菩提寺の晋山式は厳そかに　　峰
肩の荷おりて刺身味わう　　葉
飽食の世は野良猫を太らせて　　井上玲虹
そっぽむかれし二千円札　　仙
白き歯の零るる笑みに今日の月　　虹
風を誘いて揺れるコスモス　　伊藤緑雨
豊作（ナウ）に宅配便は忙しく　　坂本露香
でんと構えて磨く骨董　　村松杏風
時鳥鳴くも懐かし父母の里　　浅沼葛子
瀬戸の島々結ぶ吊橋　　里
花守も句帳を開く昼下がり　　舟
苫屋漂う鮠の田楽　　熊谷喜楽

平成十二年十月八日首尾

（於・新庄市民プラザ）

歌仙『社創立記念正式俳諧』

伝承の行事頼母し雪の里　内田素舟
愛想よろしきかまくらの娘等　荒木吉峰
新聞の折込チラシ山ときて　熊谷喜楽
目の色替えて探すバーゲン　高山桃里
路地裏の隅まで届く月清く　荒木遊仙
笹の葉末に宿す朝露　富沢比佐女
柄も良く妻も若やぐ秋袷　斎藤一葉
メールで送る憧れの人　荒木宝章
またも来る異国の嫁は媚を売り　阿部一笠
塵介処理の場所は決らず　八戸一橋
原潜は練習船を真二つ　小野梅久
気の合う友は裸付き合い　三上渓人
神橋を団扇背にして月涼し　庄司籟山
風もゆるりと庭の踏み石　青柳翠柳
老夫婦ロボット犬に癒されて　伊藤緑雨
鼓弾みし高砂の舞　岸庸女
酔うほどに十八番でてくる花の宴　市川澄水
婦長と歩む麗らかな空　斎藤一竿
桜鯛浜大漁に湧き上がり　伊藤香月
息もつかずに耀の掛け声　村松杏風
無駄遣いオンブズマンに叩かれる　小川庭水
威厳を誇るご隠居の髭　井上玲虹
積年の恋開かる、玉子酒　翠
不倫話も合い間合い間に　高橋雄悦
危機管理ゴルフボールに飛ばされて　渡辺竹園
跡継ぎもなく無住寺となる　楽
朴葉飯頬張る峰を時鳥　章
バスで旅するおくの細道　笠
おけさの輪月天心に燃ゆる島　山崎茶香
蝗追いつつ、刈り進む稲　雨
たらちねの枝豆の味噛みしめて　久
ポケット探り小銭数える　橋
パソコンでよくも飽きないヘボ将棋　峰
緑茶差出す糟糠の妻　舟
新世紀海の彼方も花万朶　浅沼葛子
日永いっぱい遊ぶ公望　葉

平成十三年二月二十四日首尾
（於・新庄市勤労者福祉センター）

歌仙『無人是貴人』

名和未知捌

床の間に無人是貴人夜半の春　佐伯俊之
　飾る日近き孫の初雛　名和未知
卒業の生徒と写真撮り合ひて　田邊才蔵
　散策向きの古い町並　中島子路
月明りいづこを見ても山ばかり　知之
　龍胆求め連れとはぐれき　路
ウやうやくに鳥の渡りの頃となる　蔵
　お手々つないでゲームセンター　之
何思ふ茶髪のふたり高笑ひ　知
　新婚旅行やめて貯金に　路
巴里祭の広場に立てば月涼し　蔵
　トマト山盛りどれも百円　之
水彩で物売るひとの気色など　路
　病み上がりらし伸びたあごひげ　知
をちこちにお返しすべき義理抱へ　蔵
　さしつされつ過す祝盃　之
花の寺恩師の墓は苔むして　路
　角の小川に蝌蚪は生れし　知
ナオ磯栄螺みやげに提げて帰京せる　蔵
　不出来もたのし吟行の旅　路
庭砂の箒目は古り乱れゐて　知
　株にうつつを抜かす神主　之
本年も憂きことばかり日記買ふ　路
　我関せずと穴に入る熊　蔵
寝るなんてひどいじゃないのひとでなし　之
　お前ばかりが女ではなく　知
町内の顔役が出てまたも揉め　蔵
　船を浮かべて宍道湖の月　路
次世紀をすこしは見たしとろろ汁　知
　紫式部実りたわわに　之
ナウ大臣は口八丁の経企庁　路
　出世払ひのつけが溜りて　蔵
外からは訳の分からぬ訴訟沙汰　之
　やっと決まりし村の境界　知
珍しき蝶の舞ひゐる花の昼　蔵
　濃茶を点てる清明の朝　路

平成十二年三月　十日首
平成十二年七月三十日尾　（文音）

歌仙『キムチ屋』

名和未知捌

キムチ屋の三軒並ぶ残暑かな　名和未知
　蒲の穂絮のとほる街角　中島子路
澄みきった真ん丸月に魅せられて　小林公直
　力いっぱい和太鼓を打つ　川崎陶子
飽きもせで調子外れの隠し芸　路
　水暮れてゆく寒釣の岸　知
息白く挨拶かはす沈下橋　子
　約束をした女を探して　直
イスラムの掟はきびし恋の日々　知
　居眠りしつつ窓際に座す　路
竿さして大波小波どんぶらこ　路
　佐渡にて世阿弥能を広むる　子
荒海のヨットより月見えかくれ　直
　鯖鮨つくり今宵喰らはん　知
じんま疹急に出て来て大騒ぎ　路
　水掛論で徹底論議に　子
人の世の田舎芝居に花の雨　直
　声を合せて小綬鶏の鳴く　知
憲兵に呼ばれて覚める春の夢（ナオ）　路
　早く返さうマルクスの本　子
売出しの値段毎朝書き替へる　路
　とんとん拍子作家稼業に　知
下積みを支へしはずが蟻地獄　子
　揃ひの浴衣着るは何時の日　直
沓掛にあぶらやありき恋ありき　知
　幼馴染みに貰ひたる文　路
来ぬ鬼を夜まで待ちしかくれんぼ　直
　卒園劇は桃太郎なり　子
望の月凱旋門の雲はらひ　路
　新酒の盃を高くかかげる　知
名水の里にうっすら秋の霜（ナツ）　子
　ニュービジネスの空気缶詰　直
韮食つて入るをためらふ禅の寺　知
　甘茶いたゞきお守りを買ふ　路
ひたすらに期待違へず花の咲き　直
　揚羽蝶舞ふ朝の十字路　子

平成十二年八月二十九日首
平成十二年十二月三十日尾（文音）

歌仙

『節分けて』

中尾青宵捌

節分けて探る俳諧新古かな　中尾青宵
鋤鍬入れよ丘は浅春　淀川しゞみ
田鼠の鶉にゲノムが問題で　加藤亀女
運ぶ患者は爪にＩＣ　宵
遍照の月長廊を路地奥を　み
九里より美味しい十三里です　亀

ウ落人の胤でありしが宰相に　宵
産湯の井戸に伸びる松が枝　み
谷戸歩き口実にして手を握る　亀
鮎は塩焼き鯉は洗ひで　宵
ちょいの間の泣かせ処も夏芝居　み
知ったる筋に玉箸胸迄　亀
気がつけば溜まるポイント嬉しけれ　宵
お使ひ済ませ鶏に餌やる　み
モバイルで奥山行きを決意の報　亀
野火の煙の霽れて三日月　宵
花若木開かむとして匂ひなき　み
おかっぱ揺らし細螺シャラシャラ　亀

ナオ時に六はた七文字八文字　宵
バンジョー鳴らし婿はご機嫌　亀
新藁を貰って新床つくりましょ　み
黍を醸せる酒も呑みごろ　宵
けふは結菜種蒔く山月のぼり　亀
堂に預ける嬰児蟲追ふ　み
注文の時装箱に届けられ　宵
鏡の奥に妖かしの微笑　亀
水晶に封じ込めたる黒魔術　み
真説く人石でぶたれる　宵
柏槇の梢を風の鳴らし行く　亀
あしたは晴れるピレネーの雪　み

ナウ地図にないそんな村々谿合に　宵
昔噺のうまい長老　亀
膏薬と煙草を仕舞ふ小袖出し　み
土産呉れるは熱々の乳　宵
玉キャベツ膨らむ湖畔花の騒　亀
新空港を帰雁占領　執筆

平成十三年二月　三日首
平成十三年五月十六日尾　（文音）

獅子の子　『バーミアン』

バーミアンに砲声一過花冷ゆる　中尾青宵捌

春耕もなく岩にやせ牛　淀川しゞみ
いつか草生える流れの澱みゐて　小林節子
雨珍しと眼みどり児　松本杏花
月からもメールを受ける新時代　藤沼和ヱ
出来秋なれば下がる相場値　城倉吉野
酒すこし隠し味して零余子炊く　鈴木圭子
昆布談義に郷の方言　加藤亀女
太原の金盥足浴佳き侍女に　寺田喜八郎
白檀香る胸の小扇子　中尾青宵
鳴き比べして老鶯や藪の蔭　渡辺祐子
帰り四時半文化センター　亀
モノレール枯れ野枯れ山右ひだり　吉
中止のダム湖わたる凩　節
引導の火の粉を浴びるお焚きあげ　和
目薬さしてイチロー応援　祐
海渡り蒲公英の絮ひとり旅　み
雲の端より立てる初虹　杏
宵

平成十三年四月首尾　（於・柴庵）

（註）獅子の子形式は（4＋x）の半定型。月花自由。時に名残4句追加することあり。

半歌仙兄　『南　天　に』

南天に午后の日静に回りけり　中尾青宵
　切干笊にやがて夕月　藤沼和ヱ
琴糸のゆるみをためす指先に　淀川しゞみ
　生絹の袖が恋をすべらせ　小林節子
トラックに幟掲げる旅役者　加藤亀女
　アヤメ葺く屋根子供石投ぐ　渡辺祐子

ごろごろと薬研重たき家伝薬　福島朱鷺
　インターネットのページ押し開く　城倉吉野
知らぬとて運賃表は欲張りで　水野道子
　引き下がらざるゴアの陣営　中尾青宵
ノモンハン戦記にありし叔父のこと　藤沼和ヱ
　好きな零余子の飯を供へる　淀川しゞみ
鵲はあの世この世の魂はこび　小林節子
　秋の蛍が菊の枕に　加藤亀女
なよたけや葉擦れさらさら月の光げ　渡辺祐子
　お百度石に忘れ煙草が　福島朱鷺
屋根伝ひ歩かう会の赤帽子　城倉吉野
　貴船鞍馬を電車ゆっくり　水野道子
当番じゃ花マルたんと付けとくれ　中尾青宵
　蝌蚪の池よりバケツ汲みくる　藤沼和ヱ

中尾青宵捌

平成十二年十二月九日首尾

（柴庵十二月例会作品）

（註）「半歌仙兄」は半歌仙の欠陥を補う意味で、裏の句数を何句でも伸長したもの（通常二～四句）。二十句、二十二句位が適当。半定型。

歌仙『法師蟬』

石丸静月捌

十　法師蟬余命の声をしぼるなり　石丸静月
多　ペダル踏みつつ仰ぐ夕月　石丸信子
月　どの家も茸飯炊く匂ひして　藤原十重
信　十四、五人で句会始まる　戒能多喜
信　庭の牡丹に弾む絵心　信月
吊るされて江戸風鈴は風を呼び　多月
チーズケーキに銀の匙添へ　十信
野放図なギャルママ増える昨日今日　信月
あっと言ふ間に離婚再婚　月多
有る筈の電話もなくてかくれ宿　多十
狸の罠にかかる猟犬　十信
月冴えて染物晒す水清く　信多
母逝きてより父は病みがち　多信
建築の現場主任はおどけ者　信十
枕抱へて地震に怯へる　十月
遮断機が上がれば花の舞ふ駅舎　月多
渡り初めたる橋も麗ら　多信
この時とばかりに唄う新社員　信十
謎を秘めたるモナリザの笑み　十多
回収のミール落下も杞憂となり　多月
豪華な箱の洋酒頂く　月信
軽舟の子は親の後からよちよちと　信多
水琴窟の音色涼しき　多十
舶来のスポーツカーを乗り廻し　十信
遊び呆ける医者の長男　信月
乾盃の音頭を取ればひやかされ　月十
一世紀経し庭の傘松　十信
拍手を打てば月光いよよ澄む　信多
夜学教師となりしはらから　多月
老うほどに母に似てきし秋袷　十十
ふる里遠く偲ぶこの頃　多多
河野さん六年間の旅に発ち　信信
さえずる中に喇りの句碑　月月
花電車花の濠端ひと巡り　十十
かすみ棚引く四国連峰　多多

平成十二年十二月　二十日首
平成十三年　三月二十八日尾

（於・千舟町石丸邸）

歌仙『秋立ちぬ』

神の国火山の国に秋立ちぬ　谷敷　寛捌
　小鳥寄りくる木の香水の香　菊地一寛
独居の書斎に月の射込みて　町野紫乃
　原稿取りの車三台　谷敷　寛
カーラジオ野球聞く人賭しきり　中野睦治
　捲土重来冬場鍛錬（ッ）　式田和子
襷かけ新樽に大根漬ける朝　薄井康夫
　想焦れて物も言はれず　檜森五十子
埃乃へいっそ一緒に飛びましょう　儀我壮一郎
　ヴィーナス像にあげる賽銭　田中正能
交差点魔法がとけて歩きだし　一
　腕組交はしジョッキ干す群　紫
夏至近し六甲山に上る月　寛
　絵手紙の筆洗ひそびれる　睦
我も又何時とも知らず目はかすみ　和
　スキップする子てんでばらばら　五
花筏流れ流れて何処へやら　康
　春川光る午後の極まり　正

鷹（ナオ）の巣に待ったかかりしダム工事　一
　枝きはやかに風の集る　紫
茶の間ではメダルの数に指を折り　寛
　原始女は赤き太陽　睦
冬籠り雀卓囲みゐ姦しく　壮
　夜着を羽織りて語り明かさん　康
気の置けぬ二人の間（あひ）に猫が居て　五
　思のたけを込めし眼差　一
きぬぎぬの涙を写す三面鏡　紫
　白髪の翁杖曳いて行く　寛
お土産の月見饅頭手に提げて　睦
　兼六園の秋の彩　壮
池（ナウ）の端紅葉の錦鯉跳ねる　康
　はかなき望み宝籤買ふ　五
四谷なるお岩稲荷に願かけて　一
　ふらここ漕いで空へ飛立つ　紫
大川の堤に沿ふて花の道　康
　たんぽぽ摘みし遠き思出　壮

平成十二年九月一日首
平成十二年十月十三日尾

（於・学士会館）

半歌仙『面白屋』

この秋に開店しました「面白屋」
一人一人に月見酒注ぐ　伊藤　鈍
渋柿も毒きのこだって歳時記に　宮腰　滝
四股ふみこける若田山関　佐藤　無風
愛犬は新型ロボット初夏の径　高橋　径
外ればかりの夕立予報　滝
おそうじ番閉めてきたべが部屋(へや)の窓　中島　房子
ていねいに拭く彼のロッカー　径
三叉路に恋の予感がちりぢりと　伊藤　南三
針音高き「影を慕いて」　無
所在なくボードレールを読んでいる　房
どなたかお茶をいれてちょうだい！　房
衿巻に首をすくめて月の道　径
「瞼の母」はあかぎれ痛い　滝
筆不精格の上ったE-メール　鈍
白み始めた東の空　南
春眠し顎深く埋め花蒲団　径
春はあけぼの満員御礼　若生　芥子
壱岐　初　径

（平成十二年十月二十三日首
平成十二年十二月　十一日尾
於・エルパーク仙台・セミナー室）

『型か形か』

伊賀焼の荒膚古茶の匂ひけり　村田治男捌

上布の背筋のびやかなる師　村田治　男

ハープの音湖こえてゆくならむ　大西貞　子

現れ出でよ古きものたち　喜多さかえ

望の月柔らかくなる嬰の嵩　治男

くるりくるりと芋など洗ひ　貞子

ゥねんごろに涎祀れり牛祭　さかえ

夢見小路を探すミニ地図　治男

青春は仮面とっかへひっかへて　貞子

思ひ遣るのは七分目ほど　治男

巨頭らは基地の島また置き去りに　さかえ

婆の財布に合ふか新札　治男

寒月を支ふるはるかなる大地　貞子

冬の鴬ひくく鳴き交ふ　さかえ

狭き門出でてゆきたりチェスの僧　治男

追伸いつも糊で貼りつけ　さかえ

咲き初めて乙女となりし花さくら　貞子

寿ぎのごと清浄明潔　さかえ

ナオ遠蛙イーハートーブな夜の更け　治男

「あなろなびくなび」眠い邑です　さかえ

包丁の在り処と瓦斯栓気にかかり　貞子

弱きを守るはずの公約　治男

赤富士は四囲の峰々したがへぬ　治男

墳井のほとりいざやますらを　貞子

ももとせの松の契りのけざやかに　さかえ

愛撫に点もらぬわたし電球　さかえ

橋いくつ潜りくぐりてカンツォーネ　貞子

洗濯ものも両手ぴらぴら　治男

月光と木賊まっすぐ束ねたる　さかえ

きのふのやうに地虫鳴き出し　治男

ナウ八時間耐久レース死のカーブ　貞子

もっともっと水が欲しいと　さかえ

しんじつは型か形かコップ酒　治男

彼は誰どきの頭の冴え返り　さかえ

花吹雪どこまでが過去　遊歩道　貞子

東風の縁ばかりなぞりて　さかえ

平成十二年六月七日首尾

（於・猿田彦神社）

《東京・草門会》

歌仙『時に娼婦』

川野蓼艸捌

しぶきつつ加賀友禅の雪解川　川野蓼艸
　雲なき空を帰れ白鳥　坂本孝子
春月におぼろの星座侍らせて　高岡粗濫
　ソナチネを弾くさらさらと弾く　山地春眠子
土曜には麩入り麺麭焼く慣ひ　神山みち
　塗の扇を帯に差し込み　村田実早
見るかぎり青葉の山は父の領　穴沢とこ
　純潔たりし兄の墓標よ　粗濫
レーダーに女の顔の浮き出づる　実早
　ひとつ枕に雨脚を見て　みち
厩舎朽ち廃馬は深き眼もつ　粗濫
　隧道近き機関士の指呼　孝子
望月に「瓦斯の火消して来たかしら」　とこ
　ぬかご引くほど淋しきはなし　春眠子
その中にクローンの子供ハローウィン　粗濫
　銃砲店も今日は閉ざせる　孝子
チョークもてメニュー書かれし花の宵　粗濫
　楽屋暖簾を分ける荷風忌　孝子
田螺鳴かせついでに蜷も鳴かせたる　とこ
　小溝渡ればボスニアといふ　実早
凩にトラックばかり橋を行く　粗濫
　坐ってできるテレヴィ体操　とこ
欄外を朱筆で埋めし文来たる　孝子
　逢ひたしの何もなけれど　春眠子
シガリロの間諜時に娼婦なり　孝子
　パレードは今始まったとこ　粗濫
にと笑ひ兒は夢見るか垂乳根を　孝子
　次弟神主末弟は僧　春眠子
月の豆腐介護ロボット食べさせる　みち
　崖に白々浜菊の群　実早
列島の背骨てふ山粧へり　みち
　バーを揺らして越えるスパイク　春眠子
人ならば飯を三度と誰が決めし　とこ
　御慶言上斗酒も辞せざる　孝子
飛花乱舞朱雀門さへ見えぬほど　蓼艸
　没骨描法墨絵若鮎　実早

平成十二年三月十八日
（於・目黒区鷹番住区センター）

註・没骨描法、線を書かず直接対象を描く方法。片仮名打越許容。

歌仙『春の空』

クレーンの長く伸びたる春の空　　眞下草笠捌

　転りこぼす裏の屋敷木　　町田節子

入学の児のランドセル光らせて　　柏原知子

　流れる水の行方定めず　　眞下草笠

仕舞う茶に影濃く月の渡りゆく　　杉野弁一郎

　塩瀬の帯に秋の七草　　柏原和宏

白壁の蔵に背を寄せ杜氏憩う　　市川美代子

　誰が唄うか佐渡の浜唄　　石川光男

すれちがう幼馴染みの名を忘れ　　知和

　迷い込んだる恋のぬかるみ　　美知

魅せられし不倫の筋に夜が更けて　　美美

　途切れ〳〵に残る蟋蟀　　光光

狛犬の阿の牙研いで寒の月　　笠笠

　建て付け悪き裏のくぐり戸　　弁弁

熟年の夫婦が傷を舐め合って　　笠笠

　白雲悠々碧層々　　和和

寂聴の法話諾べなう花の下　　美美

親の教える草笛のこつ　　光光

かげろうに校舎の旗の定まらず　　笠笠

　ゴルフクラブの素振り百回　　弁弁

この国の選挙やってもやらずとも　　笠笠

　時計の後れ電池交換　　和和

緑陰にカンバス立てて居る仲間　　弁弁

　脳天砕く炮烙の炎　　光光

こわごわと渡りし祖谷の葛橋　　知知

　千里の道を一里ともして　　笠笠

宿帳に始めて妻と記したる　　知知

　信楽焼の狸とぼけて　　光光

望の夜の尻取り遊び限りもなや　　美美

　光の束の小芒の波　　和和

大漁の秋刀魚に港賑わえる　　弁弁

　節くれし指赤銅の顔　　光光

ビーグルはピアノに合わせ声を出す　　美美

　明治大正おぼろおぼろに　　光光

花吹雪どっとこの世に未練など　　笠笠

　陽のあるなしに揺るる麦の穂　　弁弁

平成十二年四月二十九日首
平成十二年六月二十五日尾

（於・無腸庵）

歌仙『老夫婦』

子に遠く朝顔と住む老夫婦　石川光男捌
　木戸の軋みに洩るる月影　石沢無腸
峡の稲田ごと田ごとに刈り次ぎて　森三郎
　土ぼこり立て地鶏はばたく　町田節子
自家製のハーブのお茶を振舞われ　柏原和宏
　夏の木立に古き縁台　柏原知子
囮鮎きらりきらりと光りもし　眞下草笠
　平山城で折れる荒川　石川光男節
国宝という人間の髯っ面　石沢無腸
　閉じ蓋にして子供八人　森三郎
あの頃の鄙に生まれた若い恋　町田節子
　毛皮帽子の深き挨拶　柏原和宏
寒月え高層階のつき差さる　柏原知子
　カレーライスの味は激辛　眞下草笠
そつの無きケアー施設の発起人　石川光男節
　電子の辞書で叩き出す愛　石沢無腸
花御堂如意観音の笑み給う　森三郎
　バス停遙か陽炎の中　町田節子
猫(ナオ)の子を十三萬で買うという　石沢無腸
　ゴブラン織りの古き長椅子　森三郎
テキパキとホームヘルパー拭き掃除　町田節子
　浜の生まれが山に嫁いで　柏原和宏
射るような強き眼差し背に受けて　柏原知子
　秩父音頭の元は戯(ざ)れ唄　眞下草笠
撃剣の道場かこむ草いきれ　石川光男節
　埴輪の太くたくましき腕　石沢無腸
権利書の一枚に在る泣き笑い　森三郎
　細き虫の音廃校の跡　町田節子
そぞろ寒アルツハイマーなどのこと　柏原和宏
　月下の塩湖鬼哭啾啾　柏原知子
遣唐(ナウ)使遂に戻らず雁の列　眞下草笠
　到来物の箱入りの菓子　石川光男節
旅疲れ辛き地酒の酔心地　石沢無腸
　町興してう流行(は)りことばが　森三郎
花吹雪浮かれ歩きのチンドン屋　町田節子
　春の霞に鐘は溶けゆく　柏原和宏

平成十二年七月　三十日首
平成十二年八月二十七日尾

（於・無腸庵）

歌仙『秋灯』

新札の源氏絵巻や秋灯し　石川光男捌

軒の雫に宿る月影　眞下草笠

到来の茸の魔味を汁として　柏原知子

ずしりと重き蔵の錠前　森三郎

小間物を売って小江戸の裏通り　石川光男

単衣の棋聖待ったくと　市川美代子

言い過ぎてあとは風鈴聞くばかり　杉野弁一郎

結納金の額に魅かれて　柏原和宏

年上の妻に見果てぬ夢託す　知郎

蚤の夫婦もそれなりの味　笠

潮騒に佐渡は四十九里波の上　和宏

偽物なりし良寛の軸　弁

山河に山川の音棲み慣れて　美美

野鳥の声のこうるさき朝　笠知

独居して介護保険を受ける身と　弁

頭のぞかせ土筆あちこち　和

巻紙に末筆ながら花便り　郎

春のショールに心浮き立つ　美

浜焼(ナオ)の鯛捌く子のしなやかに　郎

提げて来たりし酒の辛口　笠

新知事の名刺へし折る無礼さに　和

女三人話華(か)やぐ　美

猫でない証拠の竹を描いておき　弁

炬燵の中の足のもぞもぞ　笠

月寒く木戸をくぐりし人は誰　知

遅々と進まぬ離婚調停　郎

ＳＬの谺を返す峡深く　美

松逞しく岩をかかえる　町田節子

月皓々いくさの傷の癒えぬ島　知

鬼哭啾々穂芒の揺れ　笠

秋(ナウ)しぐれ芸の行く末師の墓前　弁

筆をかついで食えず彷徨(さすら)う　和

盆点をゆたかに喫し籠り居る　節

雪解の水の音を立て初む　笠

花うらら紙飛行機を飛ばす児等　知

ポストの上に蝶の憩える　和

平成十二年九月三十日首
平成十二年十一月二十六日尾

（於・無腸庵）

歌仙『踏青』

岡本耕史捌

哲学者めく後ろ手や青き踏む　田島もり
　蝶の生まるる枝の静寂　木村文子
伝来の雛飾らんと蔵あけて　田島竹四
　忙しい忙しいと母のくり言　吉藤一郎
珍しき顔もまじりて月の客　岡本耕史
　萩のトンネル出れば湖　もり
朝(ウ)寒し広き境内掃き清め　文子
　薫の君にあくがるる姫　竹四
厚底の靴でしゃなりと歩きだし　一郎
　ビルの谷間を抜ける凩　耕史
電柱の金具取り替ふ命綱　もり
　小銭はたいてコップ酒飲む　文子
月遅し二ヶ声ほどの時鳥　竹四
　日曜画家の描く睡蓮　一郎
カフェテラス芸術論をたたかはせ　耕史
　暴走車向け鳴らす警笛　もり
咲き誇る花の鎮めし荒御魂　文子
　麗峰富士に春の雲湧く　竹四
しゃぼん玉掴まんとして身をそらし(ナオ)　一郎
　トラック勝負となりしマラソン　耕史
妻つくる薬膳料理効き目あり　もり
　主治医にっこりおめでたを告ぐ　文子
出張の宿の目覚めに晴るる雪　竹四
　化けぬ狸がねだる食べ物　一郎
咄家の人情噺にのせられて　耕史
　紋付羽織粋に着こなし　もり
究極のシャッターチャンス追ひ求め　文子
　闇魔の庁でライフワークを　竹四
月に夢今も語ると老ひし友　一郎
　雁来紅の燃ゆる庭先　耕史
ダンプカー地響きたてて柿落とす(ナウ)　もり
　安全旗持ち下校児を待つ　文子
人さらひやってくるような夕まぐれ　竹四
　若布干場に風騒ぎをり　一郎
花見んと集ふグラウンド踊りの輪　耕史
　虚子も仰ぎし伊勢の初虹　もり

平成十二年一月九日首
平成十二年三月二十一日尾　（文音）

歌仙『初詣』

浅野黍穂捌

初詣お化け灯籠まで百歩　浅野黍穂
下りられぬまま新年の鳩　笠間文子
戸開ければ今日も雨なり松明けて　浅井園丁
頭の中の囲碁の白黒　星野惠則
きら〳〵と月光ゲ散らし湧く泉　高畑自遊
学園前でタコヤキを売る　中島まさし
車ウ座に冷や酒まはし糶りの衆　沢木智恵子
手じめの呼吸心得たもの　小谷參木
義理チョコをさっとさし出す可愛い子　佐野千恵子
うらら娘の高ヒールこけ　田口猛康
花のもと「青い山脈」大合唱　高島橅山
黄金週間孫の生誕　穂
「死※して成れ」永遠のおもかげゲーテ云ふ　木
鋏を入れるメビウスの輪よ　千
中教審国大協と大げんか　山
髭の意休をあしらひし意気　智
谷川の月を捕らんと枝の猿　文
花鶏集る霧晴れの宵　康
素ナオ十忌の終るキャンパス肌寒く　文
背なを丸めて自転車のひと　遊
大江戸線開通記念と売り出して　遊
新作戯曲作者買占め　し
刺青がどっぷりつかる檜風呂　山
辰巳芸者は素足のままよ　斎藤信子
張込みの相手はなんとニューハーフ　し
この世の賽の河原氷雨に　文
「間質性肺炎」進むCTに　山
ゴールドベルク第九変奏　穂
月の下競ふコンペに集ひ来て　康
扉の前にきりぎりす居り　文
脛ナウ高き案山子ふん張る痩せ田畑　康
穴八幡にお百度参り　し
フラマン語喋りながらのレース編み　信
誰が作なのと孫の育ちに　遊
あめつちにこの花びらといふ重さ　文
森のめぐみの有難き春　信

平成十二年一月九日首
平成十二年十二月十日尾
（於・東京女子医大精神科会議室）

※ゲーテ西東詩集

忘機宗匠一周忌

半歌仙　『風炎ゆる』

第六天と源氏講座の行き帰り、路地を飄機先生のお姿があった。

風炎ゆる路地ゆく後ろ姿かな　沢木智恵子捌
簀の子を赤く乾く梅干　笠間文子
南海の地震（なゐ）いつ果つ疎開して　高畑自遊
フラフープなど興味津々と歩く忘　中島まさし
屋上に地酒を提げて月見客　文遊
築の鰻の昔話も　智恵子
ッオリーブの実のゆらゆらと墓地の坂　笠間文子
手桶の水が縁のはじまり　高畑自遊
黄八丈匂ふ衿足朝夕に　中島まさし
「口喧嘩では一枚上よ」　文遊
サミットの腹は複雑腹話術　智恵子
蛇皮線の音は波が運ぶか　笠間文子
凍て月に猫の目光る時折に　高畑自遊
霜の窓辺を続く点滴　中島まさし
雨垂れのぽつりぽつりと陽の高く　文遊
バイク途中の携帯電話　し
ゆくりなく古書と逢ひたる花の下　則
孫の手ひいて見る雛店　遊

平成十二年七月九日首尾
（於・東京女子医大精神科会議室）

世吉桐　『平和の碑』

サンシャインシティ

平和の碑傾けてなほ秋の雨　浅野黍穂捌
　帰燕截りゆく大ガラス窓　星野恵則
うすら寒消しゴムの白転がして　佐野千恵子
　まちがひ電話相手する月　中島まさし
カリオンの音に木の葉の舞ひあそぶ　斉藤信子
　着ぶくれつづく駅の抜け道　沢木智恵子
なかほどは豆腐ステーキ吟醸酒　高島楙山
　こゝで止めるが年の功なり　小谷参木
ケーララにアーユルヴェーダ医術あり　穂
　ニルヴァーナとは無為のねむりよ　千
罪深く十四歳の人殺し　し
　口ぽっかりとあどけなき顔　信
アイドルの広末涼子夢の中　智
　連れて逃げてと迫る看護婦
くされ縁即かず離れずくさらせず
　フェルメール展小さき行列
噴水の力学通り月をどる

自販機拒む五百円玉　穂
どこででも体育座りの高校生　千
　美濃の俄かに紙の国とは　し
ゆり椅子に身をゆだねたる花の昼　信
　爪とぎ飽いて仔猫じゃれくる　智

平成十二年九月十日首
平成十二年十月二十七日尾　（ウ十より文音）
（於・東京女子医大精神科会議室）

歌仙『楢の実』

第六天連句会発祥の地を再訪して

小谷参木捌

楢の実のひしと額打つ古社　小谷参木
　天の高さに背伸びする梢　穴澤篤子
月やさし変体仮名の律動に　星野恵則
　ふと思ひやる名園の道　高畑自遊
こだはりの銘柄麦酒適中し　田口猛康
　甲羅干しの背日焼けを比べ　高島楓山
ウヘラクレスさながら巨大兜虫　浅野黍穂
　ジョリンピックと苦笑ひする　沢木智恵子
上院は空椅子女王様のもの　笠間文子
　恋の相手は記者に限る　則文
そのうちに蛇にもならうぞ日高川　中島まさし
　厚塗りの絵のタッチ激しく　康子
遠吠ゆる白い狼月の崖　斉藤信
　動物作家病篤しと　山木

この国の宰相ＩＴイットとは　穂
　築かんとして焦り先立ち　文
一二片花びら受けぬ盃の底　文
　鐘の音霞む棚田段々　智
かの淵に雪代山女潜むらん　穂
　「釣れますかな」とや拾得の釣　穂
手拭を頭に露天湯星天井　信
　ピリカメノコも男まさりの　康
新婚のスープが煮える飯が噴く　智
　はからず触れし夜叉になるツボ　木
破れ寺に肉付の面なほ残り　木
　卒塔婆の「忘」のわれ忘るなと　し
小短冊結城紬の背を曲げて　山
　電磁波防ぐ麻のカーテン　智
月代に火見櫓の浮き出せり　穂
　池のほとりに虫を売る店　康
ナウ秋興の水滴どれも穴二つ　文
　神の留守中出雲地震ふる　智
いざ立たん青少年よヴォランティア　穂
　爺の自慢の一幅の書画　康
この刹那止れと花の雲愛づる　木
　子らの去りても揺るゝふらこゝ　信

（於・首・下総若宮第六天社
尾・東京女子医大精神科会議室）
平成十二年九月二十三日
平成十二年十月八日

半歌仙　『風光る』

渡邊陽行捌

おろがめば石も仏や風光る　小国豊治郎
　草笛吹く子かすめつばくら　渡邊陽行
メーデーを横目にジンタ囃すらん　植松晴子
　つい口づさむサーカスの唄　古川千代亀
月上げていつしか増へる踊り子連　高森秋義
　旅の土産に落ち鮎を買ふ　堀金清子
古酒新酒宴盛りあがる同窓会　福島敏子
　甘いくどきにうまくほだされ　小国豊治郎
思い出はたたんで胸のポケットに　渡邊陽行
　ポストを餌にまたも転勤　植松晴子
森首相きびしくブッシュにあしらはれ　古川千代亀
　不況で財布ヒモ固く締め　高森秋義
奥祖谷の落人部落月涼し　堀金清子
　江戸風鈴を軒に吊して　福島敏子
田舎でもI・Tブームにとりつかれ　小国豊治郎
　携帯腰に野良仕事にも　渡邊陽行
雪洞のともり華やぐ花の色　植松晴子
　金比羅宮に春の虹立つ　古川千代亀

平成十二年十月三日首
平成十三年二月二十日尾

（文音）

半歌仙　『冴え返る』

友帰る周防は遠し冴え返る　山口みずえ
縁のめぐり蛍烏賊鍋　安江真砂女
朝ぼらけ樺も咲きたる牧場にて　田中乃扶子
辞典の校正五十年なり　村川雅子
裸山の月虎が煙草吸ふた頃　岩田玲子
スケッチ終へし髭のやや寒　宮下太郎
ッ運動会明日の子供の大はしゃぎ　真砂女
父兄達にも以心伝心　真
赤坂の穴場に総理出入りして　乃
安居と云ひつ薬喰ひする　真
白壁の一丁続く雪の村　玲
木立にホーと梟が鳴く　雅
願い事毎日はこぶ朝詣り　み
貴方のために入れる珈琲　み
新聞は求人欄より読む習ひ　雅
部長止まりで可も不可もなく　乃
何とまあ今年の花の早いこと　太
分別酒瓶春雨の降る　み
執筆

平成十三年二月六日首尾

（於・宇田川）

『初秋』

秋めくや庭木の影の濃く淡く　小林しげと捌
　ねぐらへいそぐ鳥に夕月　小林しげと
子を連れてべったら市の雑踏に　沢田洋々
　ねだられるまま綿菓子を買う　城依子
爆音も機体も冴えるヘリコプター　原崎弥生
　眠気を誘うダルマストーブ　洋々
王手飛車待った待ったを繰り返し　依子と
　素知らぬ顔でデート重ねる　弥生
ネグリジェに透ける胸乳の悩ましく　弥生
　火傷のあとを癒す聞法　洋々
さざ波の志賀の湖水に浮かぶ舟　依子
　環境保全叫ぶ住民　依子
草いきれ月と詩歌を語らわん　藤沼和ヱ
　夢のかけらに縋るうつ蟬　弥生
列島の地殻は地震（ない）にただならず　洋々
　錆のかちたる汲み井戸の水　洋々
ひとひらの花ふりかかる江戸小紋　依子
　ビルの合間に飛ばす風船　ヱ
不良債権かさむ業界　杏花
丑寅の崖をこつこつ掘り返す　杏
　骨董趣味が病膏肓　洋々
茶断ちして娘の良縁の願を掛け　武彦
　護符を授ける禰宜は二枚目　藍香
縄のれん人恋しげにゆらゆらと　香と
　雲がはしるか月が走るか　〃
乾山の皿の秋寂ぶ彩紅葉　彦
　本家分家で祝う豊作　賢
バイクさえあれば気軽にどこまでも　杏
　鮫鰊下げて磨く包丁　彦
一年の喜怒哀楽を古暦　洋
　宇宙は広しダンボ羽ばたけ　賢
ジャグラーが見事南京玉すだれ　香
　思わず笑みをこぼすのどかさ　寿
花明り竹馬の友と地酒酌む　賢
　飛天舞いいる風光る中　杏

平成十二年八月　十七日首
平成十二年九月二十六日尾
（於・中央区立産業会館）

短歌行　『渡し舟』

伊藤薮彦捌

盆僧の緋衣をひらりと渡し舟　　伊藤薮彦
眉目爽やか声も爽やか　　川名将義
タイフーン逸れて満月皓々と　　藤沼和ェ
指すふるさとの道はひと筋　　須田左千子
マラソンの勇者ゴールに倒れ込み　　義
電子メールに風邪の言い訳　　和
毛皮着る噂の主と逢い続け　　左
火宅のひとに贈るカミソリ　　義
髭を撫で過去は過去よと酒呷る　　義
塚に筆・鳥・櫛の名を揚げ　　和
黄泉にまで乗って行きたき花筏　　左
制服揃え孫の入園　　和
低金利解除か機嫌よき蛙（ナオ）　　左
シャネルのバッグそっとおねだり　　義
カーフェリー待合室の硝子の玻璃に文字　　和
暑き雑音遺産分割　　左
蚊遣香老いるというも難かしく　　義
超速誇るコンコルド熄む　　和
登りくる月の嶺峰遙かにも　　左
卵落として啜る新蕎麦　　義
山車（ナウ）を牽く佐原囃子のもの悲し　　義
伊能忠敬歩みつづけて　　和
花の塵地図に鎖もる四海波　　左
起こしてくれるまでの朝寝を　　彦
平成十二年八月十七日首　　義
平成十二年十月　十日尾　（一部文音）

（於・中央区立産業会館）

〈東京・中央連句会―その三〉

半歌仙『大花火』

土屋実郎捌

屋形船屋根ぞ上席大花火　土屋実郎
ほどよき風の運びくる涼　伊藤薮彦
留学生自慢の声を張り上げて　臼杵游児
ＴＰＯで変る人情　郎
練習を終えしトラック月出づる　児
軒場逆さに巨き蟷螂　彦
見(ウ)栄切って地歌舞伎役者眼玉むく　郎
一合の酒添える弁当　児
駄々こねる連れ子を膝へ抱え上げ　彦
コンパクト出しメイク若やぐ　黒川洋
守礼門晴れの図柄の二千円　児
黒帯プーチン株が急騰　洋
月仰ぐ冬薔薇凛と庭園に　柴田寿賀
狸と狐違う化け方　郎
お住持の法話いささか長過ぎる　彦
病養う雪解けの村　児
辛夷咲き再会約すクラス会　寿
鯛網干せる浜の陽炎　洋

平成十二年七月二十四日首尾
（於・中央区立産業会館）

歌仙『雀来て』

白井風人捌

雀来て拾ふ麺麭屑今朝の秋　白井風人
　あずまや高く上弦の月　遠藤嘉章
ビルあひの釣瓶落しをそれと見て　鵜澤治久
　郵便夫ゆくゆるき坂道　白井風人
竹林の奥より絶えず風のくる　遠藤嘉章
　虹の尾残る里山の端　鵜澤治久
サングラスして二人連れ町へ行く　白井風人
　就職先の決まりし男女　遠藤嘉章
これからは仕事大事と恋を捨て　鵜澤治久
　パソコンを見に電機屋に寄る　白井風人
ようやくに星占いの案内書　遠藤嘉章
　すってんてんの裏町ぐらし　鵜澤治久
冬の月雨戸の隙間より覗く　白井風人
　餌をきょろきょろ親子の狸　遠藤嘉章
生きるとはさて死ぬまでのかたちとぞ　鵜澤治久
　座禅を組みてひとり瞑想　白井風人
一休の一喝に散る花の数　遠藤嘉章
　都忘れが蟄居の庭に　鵜澤治久
騙(ナオ)されてだまして笑ふ四月馬鹿　白井風人
　いやはや人の世は住みにくい　遠藤嘉章
先見えぬ不況の果は南無阿弥陀　鵜澤治久
　煙吐く山今日も休まず　白井風人
鰻食い吉田松蔭大語吐く　遠藤嘉章
　雷雨のあとの涼しさを賞で　鵜澤治久
差してゐし相合傘は彼の手に　白井風人
　重なる旅も夫婦のしるし　遠藤嘉章
普陀落の海の底まで陽が沈む　鵜澤治久
　出で湯の宿の広き縁側　白井風人
月に濡れ天狗の面の恐ろしき　遠藤嘉章
　蓑虫鳴くを聴きし幻聴　鵜澤治久
日曜(ナウ)の一家揃ひて柿吊るす　白井風人
　餌つつき合ふ鶏の声　遠藤嘉章
黙礼は訝しみをるしばしの間　鵜澤治久
　腕拱ねきて昨日をたどる　白井風人
陽を奪ふ吉野の空の花吹雪　遠藤嘉章
　庵の庭の暮れかぬる蔭　鵜澤治久

平成十二年八月十八日首
平成十二年十二月三十日尾（文音）

歌仙『黒潮の沖』

引地冬樹捌

黒潮のとよもす沖や初明り　引地冬　樹
舳を結ぶ小さき輪飾　上野弘　子
梅が香に琴の爪引き聞こゆらむ　南條巷　子
母が作りし木の芽田楽　坂根慶　子
ハイヒールふわりとはきて春月に　岸田和　子
家鴨率き連れ巡る湖　猪口義　雄
ドラゴンに乗りたる騎士の剣さばき　樹
携帯電話突如鳴り出す　弘
「あなた好き」言ってみたけど笑いこけ　義
デート費用はすべてワリカン　義
テポドンがドポンと落ちた太平洋　慶
アリランの唄声も哀しく　慶
月影が纏わりくぐる縄のれん　巷
毒茸煮る女将じろりと　弘
仰むけに菊人形を着せ替えて　樹
脱ぎ捨てられた厚底の靴　巷
乱舞する茶髪の群れへ花吹雪　義
蜂の貌して新世紀来る　義
かげろうをデジタル時計訝しみ　樹
わからぬことはきけばいいのさ　巷
尼様のもったいぶったお説教　弘
豊かな胸にもらす溜息　義
紅つけた雪のだるまのおしゃま振り　樹
昨日のカレが今日は「もとカレ」　慶
自分史に書くことと何もありません　巷
チンジャラジャラとパチンコ暮し　和
痩せ馬のドンキホーテは見得を切り　和
フラメンコの娘やがて哀しき　義
ジョギングにまた追い越さる月の下　弘
ぶらりぶらりと軒の瓢箪　樹
いまここがおらが浄土と案山子殿　和
施設の芝居パントマイムで　慶
たっぷりと時間をかけておしゃれをし　樹
珈琲をくむきさらぎの窓　和
筑波嶺のむらさきほのと花の雲　弘
髪なびかせて海の朝東風　巷

平成十一年十二月十四日首
平成十二年七月十一日尾
（於・稜光倶楽部・六本木）

歌仙『白銀の富士』

白銀の富士に尾の触れ鯉のぼり　引地冬樹捌

衣を更える里の乙女ら　引地冬　樹
手習いの墨をたっぷり含ませて　南條巷　子
師匠も読めぬ床の間の軸　岸田和　子
月今宵人の往き交う橋の見え　上野弘　子
大鍋で炊く芋煮会なり　堀越ふみ子
傾(ウ)きし地蔵のほとりつづれさせ　樹
一針ごとにしのぶ面影　巷
さんざめくパリから君のEメール　和
酒の匂いもキスの匂いも　ふ
頬寄せてワルツを躍る夢ごこち　樹
しまい忘れた宿の庭下駄　弘
縄のれん出て寒月を仰ぎ見る　巷
狐誘ってながすハラジュク　慶
ニーハオとツァイツェンだけの留学生　子
関帝廟にあげる線香　巷
啖呵切る花の小紋の袖みだれ　弘
紙入れ落すかげろうの中　樹
燕来る(ナオ)メガロポリスにフーガ聞き　ふ
裏町ぐらしきざむ惣菜　和
西行が武士をも棄てし女院あり　巷
待っていますわロイヤルスイート　慶
旅立てばあとは野となれ山となれ　弘
昼寝のあくびうつるいっとき　巷
「銃後」とか総理失言また出て　樹
この世の始末いま急がねば　ふ
うれしさは女子マラソンの金メダル　和
コアラが跳ねるユーカリの枝　猪口義雄
月を航くデッキにワイン酌み交わし　弘
若い牧師のカラーさわやか　巷
肌寒(ナウ)にほのぼのと聴くジョン・レノン　慶
喝采のなかおりる緞帳　ふ
仮面脱ぎ泣き黒子ある顔さらし　和
世紀の岐路をまたぐ佐保姫　弘
宇宙から見れば列島花あかり　樹
ゆらりゆらりと赤い風船　雄

平成十二年　五月一日首（文音）＋
平成十二年十一月十四日尾（於・稜光倶楽部・六本木）

歌仙『草萌ゆる』

文音付廻し

引地冬樹
二羽智子
木上紫雲
吉本芳香
田川利公
樹樹
子子
雲雲
香香
公公
樹樹
子子

四高寮歌高吟の像草萌ゆる　香
　飛び翔つ鳩がこぼす春光　公
木の芽吹く庁舎の屋根の新たにて　子
　名札を胸に俳諧の席　雲
酌む酒にいつしか月の傾ける　雲
　雨戸を繰れば猛る朝鵙　香
秋蚕(ヲ)で不況の生活支えつつ　公
　紺の作務衣はペアールックよ　公
黒髪の乱れを直す細き指　雲
　奥の座敷に社長待ちおり　子
にっこりと笑ってブスリ刺されんか　子
　十七歳にご用心あれ　香
集会をするりと抜けて夏の月　香
　漂うてくる青葉潮の香　雲
金貯める知恵もなかりし足の跡　公
　稲荷狐がそっぽ向きおり　公
ままごとの馳走に盛らる花の屑　香
　笊の田螺が角を伸ばせる　子
永日(ナオ)の縁に富山の薬売り　香
　見てきたような話弾みし　公
海底の神秘をのぞく箱眼鏡　子
　積立ファンド知らす親展　雲
空港へミンクの毛皮軽やかに　香
　雪降る中を外車横づけ　公
納税の長者にいよよ仲間入り　雲
　玉の輿をと狙うながし目　子
逢引は齢より若く粧いて　公
　こころ尽しの月明の膳　香
揺れ交しつつほろほろと萩こぼれ　雲
　原っぱ占めるとんぼうの群　子
蒼天(ナウ)に声響かせてボール追う　公
　お地蔵さまへ一礼をして　香
ふところに買いしばかりの豆の餅　雲
　孫を迎えに急ぐ保育所　公
記念樹の花馥郁と咲き満ちて　香
　煙るがごとく蜃気楼たつ　子

平成十二年四月　十四日首
平成十二年五月二十三日尾　（文音）

歌仙『銀座極月』

引地冬樹捌

極月や銀座に赤きもの溢れ　引地　冬樹
　ショール小粋に早き夕暮　永井京子
句座の友大吟醸を中にして　南条巷子
　いで湯の宿の夜を楽しむ　間瀬石雲
満月に陶の狸のおどけ顔　巷京
　銀杏を炒る古きほうろく　石雲
虫(ッ)しぐれ思いでの品棄て難く　雲京
　借りたノートの淡き移り香　南条昌二
ライバルが隣に坐るクラス会　巷京
　マリオネットのブラブラ踊り　京昌
正論を吐けど聴衆秘書ひとり　昌京
　部屋に鍵かけ糠みそに蓋　京巷
涼しげに月光の曲弾くは誰れ　樹昌
　夏帽白き教会のみち　巷雲
川舟につきくる鳥の名は知らず　雲巷
　涙ぬぐいて覗く手鏡　昌京
花の雲遥かに浮かぶ姫路城　京樹
　生まれし蝿の翅の虹いろ　樹昌
キャンバスを立てる水面に風光る(ナオ)　昌京
　パントマイムの古きジーパン　京樹
〝デジタル〟を教える手話の難しく　樹巷
　肥り過ぎなどと気にせず　巷雲
外人も鍋をかこんで日本食　雲昌
　弥陀三尊のごとき氷壁　昌樹
セクハラもされずオールドミスとなり　樹京
　手に残りしは愛のCD　京昌
風吹けばまたカルメンの眉を引き　昌樹
　アンダルシヤの石の町並　樹京
酒くんで月の出を待つ丘の上　京雲
　霧笛消えゆく遠き波間に　雲巷
梨(ナウ)棚をでて少年のしのび泣き　巷京
　パソコンたたく夜は吾がもの　京昌
野暮用は昼間のうちに片づけて　昌雲
　好きで又ゆく開店セール　雲巷
花篝消されて宴終る朝　巷京
　緑の羽根で国土豊かに　京昌

平成十二年十二月二十一日首
平成十三年　四月二十六日尾
（於・大手町・日本ビル）

半歌仙　『浅　間』

引地冬樹捌

秋あかね浅間の空の深さかな　引地冬樹
野を吹く風の果てに三日月　岸田和子
啄木鳥(けら)聞きつボジョレ・ヌーボー酌み合って　猪口義雄
趣味のマッチを棚に並べる　本田八重子
白地着て湖畔並木をひとまわり　上野弘子
仔犬かけ込む夏草の中　南条巷子
教会の鐘高らかに響く丘　樹
スカーフの肩軽く抱かれ　和子
いつまでも「君(くん)」とか「ちゃん」と呼ぶ仲で　和子
不倫も知らず古稀を迎える　巷子
クローンの人間ばかり群がりて　巷子
鯨見にゆく南極の海　八重子
月寒く映画ポスター貼り直し　弘子
引きとめられし辻の支那そば　雄
駐在所誰もいなくて電話鳴る　樹
民話の村に残る石(いし)碑(ぶみ)　弘
少年の読書の窓へ花万朶　雄
前山仰ぐ清明の朝　弘

平成十一年九月五日首尾
（於・北佐久・あかね山荘）

歌仙『縄電車』

平成十三年四月五日首尾（文音）

春光や超特急の縄電車　吉本芳香捌
百葉箱にとまる蝶々　藤江紫虹
北窓を開く在郷に赴任して　石本よし子
老いた庭師は話上手で　加藤定雄
まんまるな月を肴に地酒酌み　永多澄枝
篭にあふれる木の実いろいろ　西佐代子
爽（ッ）やかにシルクロードを巡る旅　小山西置
ベールで隠すくちづけの跡　小薗洋子
二十年たてど直らぬ浮気ぐせ　高山真由美
恋の病に妙薬は無し　芳香
それぞれの個性が滲む水墨展　虹よ
選挙公約どれも怪し気　定雄
携帯の電波とびかう夏の月　澄枝
孫と揃いの甚平を着て　佐代子
ほのあつき手焼煎餅香ばしく　西置
万歩計つけ犬と散歩に　洋子
落慶の稚児行列に花吹雪　真由美
囀り背中に仰ぐ山脈（ナオ）　リストラに縁なき暮らし　目借時
ひと坪ほどの家庭菜園　真
通販の品物届く頃なのに　洋
遅参をわびて連句会席　佐
赤銹の右脳訓練冬ぬくし　西
竹馬の子等賑やかに過ぎ　洋
久方に時を惜しみて語り合い　真
抱かれしあとの髪を梳き上げ　虹
できちゃた婚とてハッピイハッピイね　芳
夢にまでみたマイホーム買い　佐
穏やかに響く梵鐘月今宵　よ
骨董市の萩の掛軸　洋
古池（ナウ）のほとりにちちろ虫鳴きて　真
簞笥にねむる従軍の章　虹
南方の島国の旅思いたち　芳
民族衣装色も鮮やか　定
花の中竣工なりし麦櫓　澄
願いをこめて飛ばす風船　佐

歌仙『佛の日』

平成十三年四月一日首
平成十三年五月十八日尾（文音）

地震去って北窓開く佛の日　中田風来捌

畑打つ人にかすむ山脈　中田風来

ラジカセのロックに混り転りて　舟橋玉枝

鉄道も消え遠くなる町　多田史代

月の酒話上手に聞き上手　藤田小夜子

忘れ扇の詩もゆかしき　山本比佐子

遺跡堀る背なに群れとぶ赤とんぼ　前山優美子

タオルを渡す恋の始まり　細山吉女

火遊びのつもりがついに深い仲　夷藤ゆう子

真紀子と組んで総理手中に　水野道代

大空に百万石の櫓建つ　来

ライトアップに映える庭園　玉

鯔はねる涼しき月の湖を漕ぐ　史

メロンをさげて母を見舞えり　代

有明けの雨もあがりて靖の碑　忍

砂丘の塔に移る雲影　者

悲しみは置いてゆこおよ花の旅　の

袂につつむ春の汐風　屋

日の永し僧も眠むそうに　敷

ビーグル吠えてつげる来客　守

メルヘンのおとぎの国の扉をひらく　り

夜の港にひびくドラの音　継

夢よ実れ歳末ジャンボ宝くじ　ぐ

モデルのように似合う冬帽　径

事故一瞬王妃を偲ぶ民の声　を

スキャンダラスな生き方もすき　飄

愛あれば六十路の年も気にならず　々

海に行こうか山へ行こうか　と

月今宵江差追分のびのびと　花

おかめ南瓜の座る土間隅　簀

紅白の玉秋天に入りみだれ　起

こんこんと沸く神の銘水　伏

生糸から染めて紬を織りつづけ　の

代々忍者の屋敷守り継ぐ　長

花簀起伏の径を飄々と　閑

心安まる郷の長閑さ　さ

歌仙『銭五の碑』

木上紫雲捌

花大根瀉見遙かす銭五の碑　木上紫雲
燕飛び交う干拓の渕　酒井愛子
入学の背にランドセル弾ませて　多田芦畔
隣り近所に配る赤飯　加納俊子
茅葺の合掌屋根にかかる月　赤坂久子
柿も色づく谷あいの邑　藤田暁夫
秋ッ時雨やおら荷を解く薬売り　出見世裕子
嫁のうわさに声をひそめる　村上町子
綾取りのからめる糸に焦がす胸　芝田祥子
総裁選は混沌として　宮嶋茂
二上の鐘いんいんと鳴り渡り　紫
帰えろかえろと児等が駆け出す　愛
縄文の夢掘り返す月涼し　芦
汗拭きながらビールぐいぐい　俊
携帯の着信メロデードラエモン　裕
ひたすら辿る渓流の道　暁
千年の淡墨観音桜散る　久
陽炎逃げてままごとの茣蓙　町
パソコンは新採社員に任せきり　祥
宇宙旅行に億の積み立て　茂
バビロンの宝を狙うトリックも　紫
五右衛門風呂に茹でであがる僧　愛
駅伝の応援旗ふる蜻蛉の野　芦
掌にのせてみる柚子味噌の味　俊
無作法でボケのど忘れ照れ笑い　久
年甲斐もなく恋のシグナル　暁
透きとおる頬に激しく口づけて　裕
金の成る木が窓を占領　町
雲脱ぎて畷の月のあからさま　祥
こおろぎすだく薬塚のかげ　茂
ナウ富士の初雪つかれ果てたるかがし抜き　紫
いびつ嬉しき窯出しの壷　愛
片言の英語混じりでご挨拶　芦
鑿の先より生るる佛像　俊
鳥葬のごと莚敷き花疲れ　久
囀りやみてくぐる城内　暁

（平成十三年四月　十日首
平成十三年五月十六日尾）（文音）

歌仙　『寒九の水』

二羽智子捌

四百四病なだめ寒九の水旨し　二羽智子
　よく生き延びてさぐる早梅　谷本綾子
借景の遠き山脈模糊として　田川利公
　鴉がとまる磯の流木　小蕎照子
絵付筆やすめ今宵の月を待つ　紙谷湖秋
　軒端に吊るす朱いなんばん　細山芳絵
獅子舞は最高潮よ秋祭　尾山村雀
　思いもかけぬ君と邂逅　中村瓔子
秘め通すつもりの恋に胸焦がし　小川ひろ子
　打ち損なったワープロの文字　智
正確に史実伝える難しさ　綾
　総裁めざし派閥混沌　利
両国の川開きてふ月まどか　照
　蛍呼ぶ声あちらこちらに　湖
積み立てる旅のプランに夢ふくれ　芳
　白の碁石で先手攻め込み　村
花の香に酔うて繰りだすかくし芸　瓔
　書院の窓へ透る囀り　ひ

ナオ
ありがたや一期一会の御身拭い　利
　健康維持はウオーキングで　照
忘れたる頃にぐらりと揺り返し　智
　波紋ありそなビザの発給　綾
お杓もじを譲り気楽な炬燵番　村
　なりふり捨てし父の着膨れ　瓔
海外でいよよ名を挙げホームラン　湖
　沸騰点へハート滾らせ　芳
年甲斐もなく永久の若さ欲し　智
　インターネットで多きメル友　ひ
平安の月の宴も斯くばかり　綾
　菊人形の衣裳雅に　村
ナウ
十代のキレタ犯罪冷まじく　照
　すんなりゆかぬ禁酒禁煙　湖
真紀子節勝利街道押しすすめ　瓔
　いざ出航へはらむ順風　ひ
愛犬も莫蓙を守りて花万朶　利
　うつら居眠る縁の長閑し　芳

平成十三年四月五日首
平成十三年五月四日尾　（文音）

半歌仙　『ほととぎす』

榊原由美捌

京にても京なつかしやほととぎす　松尾芭蕉
　連子格子の窓の風鈴　高山孝子
笑顔よし酒を楽しむ友にして　中北ひろみ
　訛り直さぬ人は剛直　榊原由美
三更の月のあはれさ見付けたり　岡田美代子
　窯場の煙立ちてやゝ寒　山岸れい子
ツポケットの木の実は孫の宝物　西村みゑ子
　赤い靴好きブーツ大好き　河村こう
流るゝは古きシャンソンティールム　孝
　より添へばふと匂ふシトラス　み
禁断の果実の味はいくつでも　美
　曲がる小路は行き止まりなる　い
月光に裾野もしるき雪の富士　み
　写経の膝にうづくまる猫　う
生きてゐる心臓だけが運ばれて　孝
　母はいのちを育める海　み
大夕日花爛慢の中に落つ　美
趨やはらかき蝶の舞ふ丘　い

平成十二年一月七日首
平成十二年二月二十日尾

（於・大豊和紙）

半歌仙　『明易し』

根本　芳子捌

巨き寺対岸に置き明易し　芳
水面まぶしう渡る子燕　伊藤薮彦
煎り立ての珈琲の香が流れきて　上田渓水
テレビゲームの孫につき合ふ　勝田みつ子
開きたる窓に月光降る如く　根本芳子
鹿火屋の隅に傾けし杯　水
ひょんの笛吹いてクラスの人気者　彦
「ぶっちゃん」と言ふ猫が貌出し　芳
不愛想ながらに何故か口説調　つ
別れ間際にくれしロケット　彦
宇宙より青い地球へ投げキッス　水
領袖ひとり惜しまれて逝く　水
眠りたる山ふところに道祖神　芳
乱れし髪を濡らす寒月　つ
橋がかりより杖曳ける墨田川　彦
椹の桶に鰆一匹　水
花篝古稀の宴の酣に　彦
そよろと頬に触るる春風　つ

平成十二年六月首尾

（於・市川・教育会館）

胡蝶『馬賊芸者』

工藤　繭捌

くまあぶらみんみんはてて法師蟬　　諏訪欣二
　爽節といふともずな解いて　　工藤繭
四海波朗々月に届くらん　　河野玄麿
　静けさ戻る部屋で弾きそむ　　福田一也
隣家では袱紗捌きの見事さに　　八木紫暁
　借家の先の雄大な景　　田原玉蓮
ミニ浴衣素足冷たい芝の上　　志村実生
　私ライオンあなたニワトリ　　繭暁
しなやかな鞭で首相を飼いならし　　二
　絵師の苦心の地中のミイラ　　蓮
小晦日貯金通帳記載して　　繭
　山越へ道路凍結となり　　麿
故里の博多蔵出し宅急便　　蓮
　馬賊芸者はいにしえのこと　　蓮
貫祿は十分背にする床柱　　生
　前脳が嗅ぐ命の匂ひ　　生
バズーカの標的とせん望の月　　也
　原野にすだく虫ほしいまま　　暁
ナウ障子貼るインターネットスイッチオフ　　暁
　この週末は格安セール　　生
塀越しに源氏の君が訪れて　　麿
　うららの淵に貘が喰ふ夢　　暁
要介護ベッド動かし花の席　　生
　スカイダイブで降りる弥生へ　　繭

平成十二年八月二十七日首尾
（於・福岡行動医学研究所）

歌仙『踏みなさい』

川野蓼艸捌

「踏みなさい」イエス宣まふ絵踏かな　川野　蓼艸
　白梅ゆたかに匂ふ袖垣　内田麻子
早春に銀器を磨きかざすらむ　岡山朱藍
　隣の家の連弾の音　浜本青海
満月をぱりんと割って杯に入れ　村田実早
　眉しかめたる自画像の秋　神山みち
虫姫は涙ぐむなり虫鳴かず　青海
　阿修羅のやうなバネのしなやか　みち
ルーキーの十九歳の球を受く　麻子
　集ひ来て緑陰のみな無表情　蓼艸
際限もなく冬濤の寄す　青海
　風来坊の刺青に汗　実早
北狐月を慕ひて母と仔と　藍
　本棚に谷崎源氏の色褪せて　麻子
原野に坐してナナハンの快　青海
　莫座に坐れよ双子兄弟　蓼艸
衛兵に立ちたる事をしみじみと　麻子
　ＣＯ²地球は冷やせ月昇る　みち
入れ子人形頬の赤かり　青海
　スペイン土産摘んでサフラン　麻子
スタートの号砲一発フライング　実早
　衣被（ナヲ）ぷすと刺したる箸の先　みち
心に灯火ともる淡雪　藍
　借金ばかり増える行く末　麻子
ジョニ黒も安値なりけりいざ飲まむ　麻子
　世を断ちし隠居の部屋の麗らかに　青海
花吹雪天の橋立渡りゆく　蓼艸
　昔の先生漢字忘れる　麻子
ピロシキも焼けモスクワも焼け　みち
　濁流を枕に一睡したりける　藍
苗代の水分け入る山里　藍
　折鶴折りて誰に飛ばさむ　みち
長屋王哭く古墳の閤に花吹雪　実早
　シラノには鼻の重たき悩みあり　実早
せせらぎの音囀りの声　朱藍
　蠟燭消して異界への恋　みち

平成十二年二月五日首尾
（於・鷹番住区センター）

歌仙『立秋の翅』

川野蓼艸捌

立秋の翅の透くなりそこここに　川野蓼艸
萩を揺らして渡りゆく風　内田麻子
濁酒月下の宴に廻りゐて　石村静子
サッカー場に挙がる歓声　石飛千可良
Eメールパン焼く香りも送ります　村田実早
風鈴の舌鳴らむともせず　若松藍香
端居して新聞囲碁を並べをり　浜本青海
女難の相と言はれ久しき　神山みち
恋せじと用心しすぎまだひとり　岡山朱藍
湖北の里におはす観音　麻子
夜もすがらキリ・ハタリ・チャウ機織りし　みち
落款を捺す深き朱を捺す　静子
銀箔の三日月沈む襖絵に　麻子
休耕田のフィギアスケート　千可良
マチュピチュの丘の上にてケナー吹く　藍香
遙かなりけりイエス磔刑　藍香
「地雷より花を下さい」文届く　静子
桜貝ひとつ母の形見は　朱藍
小海線右も左もかぎろひて　青海
カフェテリアにて暮六つを聞く　実早
屋上にクレーン動かす男あり　千可良
吟遊詩人に心摑まれ　静子
盗品のネックレス付け逢ひに行く　みち
百万本の薔薇の花束　朱藍
少子化時代五人目産んで褒められる　麻子
スープは音を立てないで飲め　麻子
昭和史を見続けてきた古箪笥　藍香
車イスにて刑務所に入る　千可良
珈琲のカップに月を遊ばせて　藍香
ポケットの中鈴虫を飼ふ　蓼艸
弁慶（ナウ）のお手玉石に紅葉映ゆ　実早
気づいて見れば騙絵のうち　藍香
沈みたる艦の砲塔潜り抜け　みち
介護ロボット寝せつせつせと　みち
灯のともる病理教室花吹雪　蓼艸
雑居家族のうららかに棲む　青海

平成十二年九月三日首尾
（於・調布市民会館　たづくり）

歌仙『冬ぬくし』

松永静雨捌

旅装とけば湯煙諸所に冬ぬくし　松永　静雨
　座敷あかるく揺れる繭玉　井上　和久
お稽古に行くも帰るも藪抜けて　山田　昭子
霧深く月光模糊と黄に深み　宮島　正
　小豆洗と言える虫かも　中村　通仙
産土の参道広く露しげく　伊藤　幸子
　メール着信心踊るよ　静
ときめきの伝わる程に抱きしめて　通
　切れる事なき与党三党　正
えひめ丸沈没したるハワイ沖　和
　貴船の川床に集う同胞　幸
満月に山椒魚も這うて出て　昭
　アルバム開き想うあの頃　通
カルストの牛の瞳も逞しき　静
　石の彫刻造る槌音　幸
雨後の花どっとばかりに咲き盛り　正
　抹茶呷れば雲に入る鳥　昭
すっぽり(ナオ)と黄砂の中の城下町　渡部　晃子
　口笛吹きつつペダル踏み込む　川嶋　七重
前世より定めの恋と思いつつ　正
　雪も解けるか熱きくちづけ　昭
白鳥の翔つ湖青く拡がりて　晃
　あすの出社に髪をばっさり　通
宇宙船ミール落下はどこの国　昭
　浅き夢みしえひもせすとよ　静
蛍舞う真っ暗闇の光の輪　七
　ほどよく匂う綿抜の紺　晃
下駄の音やや遠ざかり月淡く　正
　秋刀魚さんまと高き売り声　和
子規(ナウ)居士の百年祭を修し了え　通
　ミネラル入りの水に癒され　正
若手等がオープン戦で競い合い　通
　記者会見に慣れぬ応答　七
料亭の花ほつほつと散り初めて　昭
　今も昔も粋な春雨　和

平成十三年三月三日首尾
（於・松山市道後、プチ・マドンナ）

漢和行歌仙『下萠』○標は庚の韻

赤田玖實子捌

下萠ノ苑ニ怡ヨロコビワ溢レ
臘梅ワ清芬ニ盈ミチル○

紅白のワインも飾る雛段に
父と間違う声の長兄○

風ワ雲ニ嘯ウソブキテ円シレ月ワ
燕帰りし後の山城

赤田玖實子
蛭海停雲子
雲
雲
玖
雲

ウ
神祇ヲ敬ウニ秋袷ワ一
佛法ワ伝ニ東ニ征ユキテ一○
街頭のセールスマンに気を惹かれ
家人の留守に交わす柔情○
それぞれに標を付けた鍵ばかり
穴子に蝦蛄のにぎり大盛○

若葉ノ花ニ染リレ堤ワ
五輪勝ツニ投槍デ一
介推ワ節ヲ不レ屈ズ
晏嬰ワ正義ニ栄サカエル○
上弦の月の育ちに炭を足す
買初の本立てる本棚○

雲
玖
雲
玖
雲
玖

オ

古布ノ褪(セ二)藍色(ワ一)　玖

政治動かす資金従横○　雲

貧乏を愧じるな潔く胸を張れ　玖

夏汐荒く船は傾(ク)○　雲

香水(ト)濃粧(ニ)悩(ミ)　雲

内外(ニ)流(ス二)浮名(ヲ一)○　雲

日(ワ)昇(リ)時鐘(ワ)響(キ)　玖

月ノ運(ビニ)樓鼓(ヲ)鳴(ス)○　玖

慰霊碑へ想い託せし菊献じ　雲

猿酒と聞き感嘆の觥○　玖

籠居(シテ)食(ス二)焼米(ヲ一)　雲

使い捨てでも写る驚(キ)○　雲

河原石硯(ナウ)と成して賜りぬ　玖

夫婦和(ミ二)泰平(ニ一)○　玖

大雪(ニ)漬(レル二)霸図(ワ一)　雲

春泥(ニ)塗(マミレテ)徐(ニ)行(ク)○　雲

花衣襷掛けして踊らんか　玖

ゆらりさらりと垂柳の纓○　玖

平成十三年二月二十七日首
平成十三年四月二十四日尾
（於・相模原市・桃夭樹）

世吉『時雨』

音もせで老葉(わくらば)濡るる時雨かな　鈴木　漠捌

枯野の夢を刻む碑(いしぶみ)　高田保二

工房のあした炭火を熾(おこ)しゐて　梅村光明

小さき幸(さち)はたぶん出窓に　斎藤梅子

留処なく同じ詠唱(アリア)を口遊み　鈴木　漠

心ふはふは木の実恵まる　光明

公園の奥まで月の波寄せて　保二

混みあふ書肆に入る夜学生　紀野　恵

耳鳴りと思へば蚯蚓(みみず)鳴く気配　梅子

巫(ふ)山のこともすずろなるまま　漠

余りにも情濃(こま)やかと友が言ひ　保二

別れ来(き)たるをつい振り返り　光明

行水の裸身仄かに月欠けて　梅子

蛍ありたけ庭に放てば　保二

下町に素人劇団なほ健在　恵

いつになっても愚兄賢弟　梅子

ステッキを珈琲店に置き忘れ　漠

介護保険は未だ縁無く　光明

天国へもつとも近き屋根裏で　恵

落ツル涙ハ怪盗紳士　漠

幼少に仰ぎし花と背比べ　保二

雛(ひひな)のあそびも親しき　光明

逝く春の惜しむ哀れをポイと捨て　保二
長く煙草を持たぬ指およびよ　恵
能楽の発声まねてみるもよし　梅子
滝のしぶきに打たす刺青いれずみ　漠
諍ひの最中に金魚売り通る　恵
襲ふ既視感はところ鎌輪ヴュ　光明
騙し絵かはた幻灯か月懸る　漠
あなめあなめと戦ぐ穂芒　保二
絶世の美女に似合はぬ秋渇き　光明
都への船に酔ったか筆乱れ　保二
妹が置きしか土佐の旨酒　梅子
海の底からピアノ聞こゆる　恵
まなざしはときをり過去へ毛糸編む　梅子
並ぶ樹氷は何の墓標ぞ　漠

光吸ひ河豚透きとほる皿の上　恵
往きつ戻りつさかづきの紅　恵
あまつさへ契りしことを憾みつつ　光明
肘を枕に逢瀬数へる　保二
獺の祭見ばやと艙を漕いで　保二
メタモルフォズは揚羽などよき　漠
領巾振らなずずいと花の雲　梅子
日光に映ゆる森羅万象　光明

平成十三年二月満尾　（文音）

歌仙『公達』

鈴木　漠捌

三輪　和
鈴木　漠
梅村光明
西條裕子
東條士郎
竹内菊世

公達も辿りし道やこぼれ萩
　歴史はなべて青き月の出
瀬踏みする野心も消えね爽籟に
　潮騒微か耳朶に届くも
シーソーの上がりて広く園枯るる
　初雪ありて透きとほる空
ヴ硝子戸に人は生活の影写し
　姉妹の小さき諍ひ
紅を濃く点し背伸びの片思ひ
　愛の言葉はビートルズから
熱狂の余韻楽しむ夏の月
　性蝕ける朝凪なれど
近ごろは嫌はれつつの紫煙にて
　天使必須の羽根と光輪
少年の悪戯論す女神居り
　砂に埋もるる古代文明
花朧魑魅魍魎の息づかひ
　入れ墨の腕春陽に晒す
ノオ蝶飛んで庭の役者の勢揃ひ
　たつたひとこと沙汰の嬉しさ
選集に加へし句々を自賛して
　合はせ鏡の襟足を見る
お転婆もしとやかなりし七五三祝
　鯨現る浜に立つ市
豊漁の旗のデザイン賑はしく
　ボトルの曲線なぞる指先
月清か幼き乳房恥ぢらひて
　色なき風に恋つのりつつ
猪食す習慣は血筋やも知れず
　葷酒はつとに拒む山門
ナウ滴れる石にゆかしく残す字義
　日傘を閉ぢてじつと佇む
これがまあ今浦島といふことか
　新世紀とて亀は鳴くまじ
八極の花晴々と咲き誇り
　耕す土に我も解さる

平成十二年十二月満尾（ファクス文音）

歌仙『初波』

小林静司捌

弐千年事なく越えて御慶かな　静司
　シンフォニックに寄せる初波　洋子
冬帽子際立つ白さ目印に　和田洋子
　小犬一緒に駆けて来る駅　寿賀
本州の東端に見る月丸し　柴田寿賀
　鰯づくしで振舞いし膳　敦子
水やりも手間と言いつつ菊の鉢　村上敦子
　タイの嫁にも口を出されて　明生
何してもすぐセクハラと思われる　高津明生子
　挫いたあとも懲りぬ厚底　停雲子
違反車の移動撤去の運不運　蛭海停雲子
　オンザロックでまほろしの酒　洋司
次の付け少し待ってよ月涼し　洋司
　脱サラをして習う幇間　雲〃
鉢巻は豆しぼりなる手拭で　洋〃
　創部百年飾る優勝　生洋
若木よく育ちて花は爛漫と　賀生
競漕果てし選手打ち伏す　敦賀
品書きのあいなめ煮付け筆頭に　雲敦
　包装紙には魚偏の文字　洋雲
だしぬけにかかる電話は首相から　生洋
　門冠り松くぐる押売り　賀生
天井を打つて株価は暴落し　司賀
　九官鳥に下手と上手と　賀司
甘たるくダーリンとのみ繰り返す　生賀
　黒のネットの脚をからませ　賀生
パリに死すデートリッヒの反戦歌　生賀
　プチケーキにはミルクティー添え　洋生
独り往く旅にも慣れて後の月　雲洋
　いとも露けし十二神将　賀雲
八重葎虫すだきいる古館　敦賀
　地球にやさしコンポスト置き　洋敦
途上国人口増が悩みにて　生洋
　キリマンジャロの雪解の水　賀生
見渡せば花の雲とも霞とも　司賀
　仰げば龍の天に昇れる　雲司

平成十二年一月十六日首尾

（於・横浜　抱虚庵）

《東京・都心連句会―その二》

歌仙『青時雨忌追善俳諧連歌』

仲見世の百軒のぞき薫風裡　土屋実郎
　真青の空にまわる矢車　坂田武彦
亀の子のびっしり甲羅干すならむ　小林しげと
　気儘に流す川舟の棹　今村苗
月出でて酔は三分の酒の中　高津明生子
　通草松茸籠に山盛　蛭海停雲子
秋祭神楽の役は猿田彦　杉浦ちゑ
　旅行案内パソコンに入れ　柴田寿賀
ウエディングドレスキャンセル逃避行　藤沼和ヱ
　私二度目の更年期なの　和田忠勝
とろとろと漢方薬を煎じいて　原崎弥生
　電撃ニュース首相交代　和久井八重
有珠マグマ我慢に我慢噴火せる　池田紅魚
　子連れ狐の背ナに半月　岩永極鳥
故郷の山河優しく美しく　菅谷有里
　今にあたたか管鮑の交　秋山よう子
花の雲ハイテク工場うち囲み　小林静司
　強きもの勝つ鳥の巣の中　村上敦子
腕（ナオ）白よ目高になるな個性持て　小張昭一
　よろしく頼む祖国日本　和田洋子
水平線染めて太陽昇り来る　山口良子
　ふたりの足を洗うさざなみ　白井映子
さよならを言えずに送り送られて　西牧常世
　譲られません正妻の座は　清水敬信
捨てるとこなしと寒鰤捌きたる　藤江瑞
　雪振りしきる湖東三山　宇咲冬男
回峰行無事に修して大阿闍梨　赤田玖實子
　金と閑とは何故かよそ事　引地冬樹
李白の詩月光浴びて高吟す　上田渓水
　瓢こぼるる飛車角の駒　川野蓼艸
柿（ナウ）提げて友の放浪いずくぞや　川名将義
　床屋を探すセビリアの街　信
身も寒しビザの期限におちつかず　伊藤哲子
　踊るキティにねむるハービィ　宗匠
駅を出て御陵へつづく花見客　執筆
　種撒き終えて語り合う夢

平成十二年五月三日　（於・浅草伝法院興行）

宗匠　土屋実郎　花司　原崎弥生
脇宗匠　坂田武彦　香元　和田洋子
知司　小林しげと　配硯　村上敦子
執筆　和田忠勝　〃　高島幸子
座配　小張昭一

歌仙　『大山阿夫利神社奉納』

俳諧之連歌

土屋実郎　プレートのせめぎしところ時鳥
目黒雨峰　葉桜のもと酒の評定
蛭海停雲子　読みさしの詩集ぽとりと籐椅子に
藤沼和ヱ　紅茶茶碗の金の縁取り
高津明生子　月横に銀河鉄道まっしぐら
柴田寿賀　蜻蛉群れいる山の頂
今村苗　蓮(ウ)の実を掌にもてあそび笑み仏
岩永極鳥　夫婦揃ってカラオケが好き
和田洋子　年齢差越えて絡みし綾の糸
和田忠勝　重ねて四つに斬られてもいい
近藤蕉肝　大江戸が突如出現映画村
大津博山　刻を違える雄鶏の声
菅谷有里　薬採り戻りの道の月寒く
前田明水　コート手袋兄のおさがり
和久井八重　幸は金で買えぬと諭されて
浅井園丁　招き猫置く結界の中
小林静司　ぽんぽりが灯り妖艶花の苑
秋山よう子　都踊りの稽古夜すがら
村上敦子　葱(ナオ)坊主辛子味噌和え乙なもの
高島幸子　火伏の護符の煤けたるまま
原崎弥生　何とまあ厚底靴に顔黒く
杉浦ちゑ　シングルマザー大手振り振り
白井暎子　養育費なしで済むとはラッキーな
小張昭一　スタンド沸かすハットトリック
西部周子　夕立が流す涙と汗のシャツ
内山良子　冷し西瓜の種も丸呑み
杉内徒司　口きゅっと結んで登る男坂
若尾よしえ　名物団子三つ三色
上田渓水　関石に影あをと月射して
丁　秋さばおろす母の背を見る
成田玲子　ワープロ(ナウ)を慣れぬ手つきで身にしみて
町田順風　跡を継ぎたる地盤看板
茂田キヨ子　合唱のボーイソプラノ声はずむ
楠正三　勢多迦童子滝に打たるる
宗匠　俳縁を懐しみつつ花の下
執筆　ふわりふんわりたんぽぽのわた

平成十二年五月二十八日
（於・大山阿夫利神社下社興行）

宗匠　土屋実郎　座配　前田明水
脇宗匠　近藤蕉肝　花司　原崎弥生
知司　大津博山　配硯　内山良子
執筆　和田忠勝　〃　西部周子

半歌仙　『山あげ祭り』

桜井吹女捌

木と紙の故郷山あげ祭り来る　石沢みつ
サルビア咲いて染まる道すじ　桜井吹女
図書館に無料映画の開かれて　田中加翠
友の約束うかと忘れる　中山いみつ
月の出て灯台の影浮かびそめ　吹女
バケツのさんま鮮度抜群　加翠
ッぽーず撮る菊人形にはさまれて　いみつ
単身赴任の胸の昂る　吹女
週末に逢ふときめたるレストラン　加翠
燦と輝く高橋尚子　いみつ
あやかりし乾杯の酒利きすぎて　吹女
本家争いつゞく八木節　加翠
頬被りする野佛に月冴ゆる　いみつ
蜜柑をむいて静かなる旅　吹女
心臓の薬ぽとりと取り落し　加翠
ノーベル賞を受けし化学者　いみつ
咲くもよし蕾もよしと花めぐり　吹女
蛙の声に点る家々　加翠

平成十二年十月十七日首尾

（於・田中加翠宅）

歌仙『ターバンの少女』

二村文人捌

ターバンの少女の瞳梅雨に入る　二村文人
茶房の壁を覆う青蔦　瀧澤尚子
風紋のまだ踏まれざる浜に来て　平訳敏子
三脚長く伸ばす写真家　江沼半夏
外つ国の朝の電話に月円か　犬ぬじま正一
秋の蝶飛ぶ休日の街　袋谷小菊
ウ歳時記を机上に開く糸瓜の忌　藤縄慶昭
眉がほっそり描けて変身　宮村千鶴子
南北に別れ南北慕いあう　大畑蛍魚
火ほ中なかに入りて皇子捧げし　山中狐太
ガーデニング名前を知らぬ洋花も　松永幸子
最終校のせまる締切　中川信子
凍の月海鳴りとどく無人駅　野島一子
落葉の風呂で客をもてなす　蛍魚
放蕩の果ての仏心説法会　小菊
薬の効き目強いる押売り　正一
花の下井戸端会議きりもなし　南悦子
庭騒がしく仔猫生まれる　千鶴子
ナオ春炬燵仕舞う潮時計りかね　信子
卒寿の母の昼もうとうと　半夏
爆弾を抱え息子は年頃に　尚子
手デドアヲアケ降リテクダサイ　一子
麻問屋今にたしかに田舎町　半夏
飲み水までが売れる哀しさ　正一
欧米を巡り祖国の良さを知る　慶昭
鉄幹晶子大阪の恋　同
道行も相対死も死語となり　正一
干せばまた注ぐ一瓢の酒　蛍魚
往年のラガー仲間よ今日の月　慶昭
松茸飯をナウ芋洗う樽のしぶきを丼に盛る　半夏
笊の行商婆のへそくり顔に受け　狐太
FMの古典名曲減らされて　敏子
ゴッホの黄色パレットに溶く　幸子
志士の夢偲ぶ石垣花曇　小菊
雉鳴き交わす神明の杜　文人

北野眞知子

平成十二年六月十一日首尾

（於・富山県知事公館）

半歌仙　『螢狩』

砂井斗志男捌

螢狩煙のやうな長い髪　砂井斗志男　行男
　木下闇ゆくせせらぎの音　渡邊陽　行子
ころころと小石の多き坂道に　植松晴子　行行
　すべってころび尻を濡らして　吹田健児　行男
民謡を歌ひつ月に老の影　砂井斗志男　行児
　木犀の香を池畔は呑む　渡邊陽　行子
ッ街騒のふと途切れたるそぞろ寒　植松晴子　行行
　エスカレーター降りる恋人　吹田健児　行男
通じない電話のベルの音むなし　砂井斗志男　行児
　独り寝の床酒の空瓶　渡邊陽　行子
禅寺の幼き僧は骨の壺　植松晴子　行行
　ギヤ切り換えて自転車をこぐ　吹田健児　行男
寒月の松にかかりてゆるがざり　砂井斗志男　行児
　凍る沙漠を急ぐ隊商　渡邊陽　行子
ピラミッド崩れぬやうに祈りつつ　植松晴子　行行
　巡拝のみち世界遺産に　吹田健児　行男
花筵妊婦加はは地も窪む　砂井斗志男　行児
鶯の啼くけはいおこりぬ　渡邊陽　行子

平成十二年十月十九日首尾（文音）

歌仙『寒玉子』

寒玉子胃の腑へぽとり落ちにけり　西岡恭平　捌
　ふくら雀の耐ゆる軒先　大鹿節子
ひさびさに古窯の址を訪ひて　三橋早苗
　拾ふ欠片にのこる彩色　佐々木栄一
山の端の松のあはひを月渡り　田岡弘
　誰(た)がタクト振る虫のコーラス　平
間(ウ)引菜の青き香りをかろく茹で　節
　筋骨隆々見せる二の腕　早
バーグマン張りの教師についホの字　一
　出会サイトは甘き誘惑　弘
ささやかな預金も哀れ零(ゼロ)金利　平
　百均の店けふも賑ふ　平
亀の子の甲羅に月は微笑みて　弘
　社宅に届く薩摩焼酎　一
永田村いざ合戦の陣太鼓　早
　新米記者は夜討ち朝駆け　節
ひこばえの枝にも花は咲き初むる　節
　羊毛を刈る牧は陽気に　早
チロリアンハットが吹ける角笛は(ナオ)　一
　谿から谿へ谺寄せ来る　弘
紺碧の空を截ちきる飛行機雲　平
　アルバムに添へ旅の一句も　節
言ひ訳も愚痴もぐつぐつおでん鍋　早
　耐へて忍びてひらく冬薔薇　一
惜しみなく奪ふ明治の愛なるか　弘
　肌の血汐と晶子鉄幹　平
敲(たた)き土には紅き鼻緒の乱れ下駄　節
　袱紗捌きの手並鮮やか　早
月の光(ゲ)浴びるこけしは書架に立ち　一
　露に草鞋を濡らすみちのく　弘
大(ナウ)振りの自然薯里の家苞(いへづと)に　平
　骨董好きが住まふ仕舞屋(しもたや)　節
念仏の声が過ぎ行く昼下り　節
　ゼブラゾーンを介助する犬　早
貴賤なく老も若きも花に和し　平
　水面を染めて生ふる萍(うきくさ)　弘

平成十三年二月九日首
平成十三年五月二十日尾
（於・桜ん慕工房&文音）

半歌仙　『初　花』

初花を琴に摘みて連句集　　鴇田秋甫
　風暖かくゆるるカーテン　　藤代羽都江
角の店手搗き草餅よく売れて　　塚越朝子
　二十五階の賃借りぐらし　　高橋渓声
世のけがれ忘れて酌める月今宵　　大野利丘
　灯下親しみ学殖深め　　四十九院科峰
栗の実を大きく描き絵手紙に　　鴇田秋甫
　隠れ逢ふひと長き黒髪　　藤代羽都江
人妻に惚れて深みに一歩二歩　　塚越朝子
　フーテンの寅己よく知る　　高橋渓声
叩き売りしたき政治屋多過ぎて　　大野利丘
　脱線記事の続く日々なる　　四十九院科峰
橋幾つくぐる櫓音に冬の月　　鴇田秋甫
　夜寒むをつきて救急車とぶ　　藤代羽都江
塞翁が馬の譬へも馬耳東風　　塚越朝子
　バリアフリーの老人ホーム　　高橋渓声
対局を終えて故郷の花自慢　　大野利丘
　佐保姫のせて人力車行く　　四十九院科峰

平成十二年五月六日首尾　（文音）

歌仙『寒梅に』

寒梅に声の明るく響きけり　木村文子捌
　新表札にかかる風花　山本実穂
オリジナルケーキのレシピ思案して　田島竹四
　ふと気がつけば膝にのる猫　田島もり
技工士の作業場照らす月明り　木村文子
　コップの水の冷ややかな色　実穂
地震跡の空に群れたる赤とんぼ　もり
　満員バスがふたり近づけ　西岡美代女
彼好みミニスカートに長い髪　実穂
　身重なことも隠す体型　文子
「平成の怪物」遂に優勝し　もり
　下戸の悲哀を晴らすサイダー　美代女
月涼し漁火ふえもへりもせず　廣波青
　小渕首相の飄々とゆく　文子
初伊勢に奉納雅楽拝観し　竹四
　いまごろ届く年賀状とは　実穂
ふるさとの花に集はん同窓会　もり
　名代草餅手みやげにせむ　美代女
春の夢パステル調で見てをりぬ　実穂
　逝きしきんさん撫でるぎんさん　もり
住み古りて土地の訛も心地よく　波青
　鬼へわらじを流すしきたり　竹四
石塁に紋付鳥のいつも来る　竹四
　ついてこいとは言はぬ結婚　美代女
うかうかと仲人口に乗せられて　波青
　ゼロいくつある慰謝料の額　波青
もうこれでストップ地球温暖化　もり
　一切衆生悉有仏性　木村緑茶
裏山のどんぐり集め独楽づくり　実穂
　職員会議月の出るまで　文子
ナウ温め酒おはこといへる唄もなし　実穂
　低い物にもけつまづく齢　波青
朝市に並ぶ野菜の活き活きと　美代女
　亜細亜の果ての鉄路霾る　緑茶
ハッカーがホームページに花便り　竹四
　目高殖やさう朱鷺を殖やさう　もり

平成十二年一月二十六日首尾

（於・阿児南草庵）

歌仙『風成樹形』

明け暮れの地震ふる島の鉦叩　石崎　葵捌
　全き月を願う人声　杉田　茅
秋芝居リニューアルの振袖で　坂手　手留
　ぬれおかき噛み苦吟ひたすらく　香林　香
夾竹桃ハイウェイの疾風にすくと立ち　柳沢　その
　避暑地自慢のはがき大判　鈴木六美
塗下駄とアンクレットの老婦人　岡本夕子
　約束したのでもね来ないの　六
溶接の火花の蒼く恋生まる　香
　白鳳仏の深き眼差し　葵
波の音風成樹形越え伸びる　茅
　プラネタリウム廃業します　夕
冴え冴えとペスト記念碑月の辻　葵
　毛糸編む母クイズ大好き　宏
よどみたる流れの底にすずの影　手
　マスコットにはカモノハシなど　手
長崎を埋め尽して花千本　香
　空酒樽抱えぶらんこに乗る　夕
身の芯に微熱の残るよなぐもり　葵
　どこまで下がる内閣支持率　夕
いつのまにかフリーサイズな人になり　六
　ジュゴンの浜でゴーヤチャンプル　茅
うす明き夜に蟬の声渦巻いて　六
　眼鏡涼しく解く星間物質　宏
押しかけてお金貸いですがりつく　香
　抱擁の時シャネル19　茅
“Me too”で夫二人のヒラリーさん　その
　ふっくら甘い白い焼菓子　葵
月皓々約束の地は遠くして　宏
　サイダーハウスの林檎搾り機　その
滅亡の不安に脅ゆ火鉢欲し　手
　少年の日の川を見に行く　茅
文豪の意外に多き誤字宛字　手
　途中下車して友禅の町　香
はらはらと新古をつなぐ花吹雪　手
　春の城址に雨降り止まず　夕

平成十二年八月八日首尾

（於・調布市　たづくり）

歌仙『厩静けく』

曲屋の厩静けく鳥帰る　窪田阿空捌

昔を今に咲ける紅梅　村井とき女

振りあぐる鍬先に風光りいて　と

兄が走れば妹も駈け　空

夕月の横丁はみな小家がち　と

人にも呉れて甕の鈴虫　空

やや寒のきょうも地蔵の水を替う　と

サラリーマンの急く明け方　空

こ綺麗にコーヒー付のパン卵　と

キャビンの窓にしぶき折おり　空

ちょっかいを出して喰った平手打　と

ちんまり坐る神経科の椅子　空

冬月の影を落とせる廊長く　と

誰ぞ綱振る鰐口の音　空

初孫を身篭ってからいたわられ　と

門の構えの由緒正しさ　空

古酒一壺花一枝を添えし膳　と

見渡す先に弥生遠富士　空

行く春に残生という旅があり　と

宿のお内儀がそっと茶を入れ　空

張込の辛棒つづく不精髭　と

雲の湧き立つ空の眩しさ　空

銃剣は錆てケルンに刺されいし　と

ゲバラへ捧ぐボリビアの酒　空

ヴェールの女の指の美しく　と

つい取り落す駅の釣銭　空

リストラに私物を包むさりながら　と

使い古した一本のペン　空

板張りの診療室に月さして　と

島の漁師の唄を秋風　空

観光の網引く浜に雁渡る　と

力士笑えば細目かわゆき　空

従兄からめでたさ祝うEメール　と

仔猫も生れて一戸建なる　空

スーパーの帰り遠廻り花堤　と

江戸へ十里の道標に蝶　空

執筆

平成十三年三月十日首尾

（於・北野壺中庵）

R

『夢を紡げば』

岡本星女捌

夢を紡げばどんな織物　岡本星女
引出しの奥で小鬼の笑うらし　若林りえこ
蜘蛛の糸にて天に昇らん　林道子
華清池に玉の肌（はだえ）を恥じらいて　星女
カウントテナーの声に惚れ惚れ　田伏博子
金の矢に射られしハート疼きつつ　道子
夜な夜な庫裡に寝にくる狸　道子
烏賊大根焚けば焚くほど柔かく　博子
渦巻模様のビードロの盃　星女
どらえもん霞をこえて空の旅　えり
菜の花化して蝶となる時　道子
ハッカーをやめハッカーの摘発を　博子
円朝おはこの牡丹灯籠　星女
月夜茸・一本しめじ・笑い茸　えり

平成十二年二月首尾（出勝）
（於・岡本星女居）

賦物一夜官女

十二調　『いとけなき』

いとけなき一夜官女の薄化粧　鈴木長　駆
泣き村なりし里の春寒　岡本星　女
沖つ浪高し櫂（かしわ）の済（わたり）とて　葦生はてお
デジタルカメラ場面々々を　星野　焱
いけにえに花の盛りの十六歳　星　駆
涙しぐれと送る唐櫃　焱　お
酔えばまた恋の思出さまざまに　お　星
なまずのひげにかかりたる月　星　駆
袴に氏子総代身をかため　駆　お
白羽の矢とぶ行方知らずも　お　焱
かっとむく狒々の眼に稲光り　焱
昔ばなしに更くる秋の夜　お
リフレイン
八十嶋のわけても阿迦留姫なる島　駆
笙いずこより風のまにまに　お

平成十二年二月二十日首尾（滕送）
（於・岡本星女居）

○大阪府指定文化財の神事。

出花『春は憂し』

岡本星女捌

春は憂しとの濁りして長良川　岡本星女
ふくらみそめし桜の花芽　川北幸枝
口うつし巣立雀が餌もらう　斎藤麻子
茶髪ながらもカウンセラーとは　葦生はてお
月ついてきて自転車の涼しさよ　麻
拗ねているような水茄子の形(なり)　永井一子
きぬぎぬや鼻紅々と垂れし姫　星
愛子と名付けしその想いをば　吉井愛子
天井桟敷ガラス細工の恋模様　福井翠
狩したくなる猫の本能　星
油売り一文銭の穴通す　お
写経万巻張り子の大仏　枝
冥きより生れて雪の降りしらむ　枝
エッグノッグで深き眠りを　愛
フィッシュテールとも呼ばれいてマチヤブチュレ　翠
願いの糸の人知れずこそ　星
花火の夜更けていよいよ波の音　お
蒲の穂絮のちぎれ飛ぶなり　一
翠

平成十二年四月首尾（出勝）
（於・岐阜観光ホテル十八楼）

《大阪・俳諧接心―その四》

十二調　『下　町　の』

岡本星女捌

下町の雀よ蛤になるな　岡本星女
二夜の月にいとど名残りを　伊藤哲子
舞台顔花柳章太郎の孫という　黒田洋
じだらくに着て赤の千筋　星女
人の目を盗み芥子の実運ぶ恋　哲子
裏山わたる風さやさやさや　星女
石地蔵と見しその背なに羽根のあり　同
年を送るに生姜酒とは　星女
ドーム式住宅オペラめく会話　洋子
逃げ水追うて旅から旅へ　哲子
パンジーの日時計燦といま正午　洋子
何といっても煙草は刻み　星女

平成十二年十月八日首尾（出勝）
（於・国士館大学教室）

《松山・白水台連句会》

歌仙『初音』

向井由利子捌

整はぬ初音なれども頼もしき　寺岡情　雨
　土やはらかく耕せる畝　向井由利子
遠足の子等のひとむれ過ぎ行きて　名本敦子
　腕に縒りかけ煮込む佃煮　岡本伊勢子
盃に映る満月呑みほせば　大西素之
　桟敷にそよと吹きし秋風　山口博三
兄弟（ヲ）のどんぐり拾ふ留守の宮　杉山豚坊
　出征の日の思ひ出を追ふ　博
謎めける一行の詩（うた）手渡され　情
　サナトリウムの恋の立て引き　情
職安に青白き顔ひしめきて　豚
　冬田に続く冬田果てなく　豚
乾坤を鎮めて月の冴えまさり　情
　つるべ軋ませ汲み上げる水　情
よひどれの亭主の戻る裏長屋　伊
　ワイドテレビがでんと居座る　素
下北の海辺に沿ひて花の旅　伊
縄文遺跡掘ればあたたかし　七
　遅々と進まぬ行革の道　七
不景気に宇宙体験金次第　豚
　ヒット記録を伸ばすイチロー　博
涼しげに内助の功を強調し　敦
　声の洩れ来る青蚊帳の中　博
携帯の呼び出しサインぴかぴかと　伊
　水は低きに流れゆくのみ　伊
み仏のかすかに笑みし御尊顔　素
　公認なりし電気自動車　敦
月を背に龍馬の佇てる桂浜　敦
　翅すり合はせすだく鈴虫　博
秋刀魚（ナヲ）焼く匂ひに路地を急ぎ足　素
　桧の風呂に浸る幸せ　敦
高層のビルに住まひて二十年　由
　郵便受けに届く絵手紙　七
花まさに春燭爛漫と咲き盛り　情
　都をどりの舞台華やか　由

平成十三年三月一日首
平成十三年五月十日尾

（於・道後白水亭）

『初　鴉』

松澤晴美捌

〈起〉オ 初鴉夜明けの闇を翔けゆきぬ　松澤晴美
飛石に敷く福藁の霜　三枝霧子
太筆の墨たっぷりと滲みいて　渡辺ゆり子
ロビー個展に若ものの群　沼尻香寿子
連らなりて動く歩道に月皎々　晴
秋の気配をまとうロボット　霧
〈水〉ウ 蟬丸の逆髪祭むくつけき　平北はじむ
にがみばしった民俗学者　ゆ
論文を見てほしいとは思慕なりし　宇咲冬男
シングルママとなりて悔なく　晴
健気なる朝のドラマの主人公　香
古里しのぶCDの曲　霧
野の川の自由に流れ夏の月　は
冷そうめんの喉ごしの良さ　ゆ
旅土産座敷いっぱいひろげられ　ゆ
眠ったふりでチラチラと猫　淑
留守番の膝暖かき花の昼　美
新入生のただいまの声　香
〈転〉ナオ 一陣の風に黄砂の舞い上る　霧
回転木馬こわれたるまま　は
メル友の本性見たりスト―カー　晴
お地蔵さまは泰然自若　ゆ
しんしんと津軽に熱き雪の降り　冬
まろびては起き盲目の恋　淑
谷崎の佐助のよにはなれません　霧
千客万来商売繁盛　淑
出されたる薄茶ほどよく泡立ちて　晴
バイクの音の遠ざかる路地　は
月光を浴びて城趾に自刃の碑　香
そぞろ寒さに疼く古傷　ゆ
〈結〉ナウ 新酒盛りアユタヤユンタ踊り出す　香
海の幸受け長寿天国　は
床の間に和顔愛語の軸かかり　晴
パイプの煙輪になって浮く　香
八重の花房にふくみしよべの雨　霧
右も左も耕しの人　冬

平成十二年一月十五日首
平成十二年三月二十二日尾

（於・芭蕉記念館）

『秋寺の』

中野稔子捌

〈起〉オ
秋寺の篝に梶の紋所　中野稔子
後の今宵に高む琴の音　後藤典雄
新絹の紅彩やかに染め上げて　谷田男児
源遠くダムの無き河　松谷雅子
〈承〉ウ
狩人の小屋に残れる灰の跡　男
しわすの街に配る郵便　稔
金門橋くぐる外国船あまた　典
自在に舞える鳥のひと群　雅
突然の辞令本社へ戻るよう　男
部長の椅子に恋敵いる　典
レポーターすました顔で床じょうず　宇咲冬男
居ずまい正し聖書ひもどく　稔
そよ風と共に入れたる夏の月　男
山の庵にほととぎす待つ　稔
丈草もときおり医者をたずねしと　雅
何でも言える師弟よろしき　稔
花のもと酒と田楽しつらえて　冬
東踊りにしばし駘蕩　男

〈転〉ナオ
大干潟あれて潮の引くばかり　典
一手で決まる烏鷺のたたかい　男
思わざるところにひょんなおとし穴　典
いと簡単に堀り返す道　雅
ぼろ市にひとのむれいるひとしきり　典
予報はずれて雪の降り来る　冬
次々に相乗りタクシー走りだし　稔
べに引きなおすラウンジの隅　雅
無情とも別れの曲の流れいて　稔
よろずの神の在す出雲路　男
きりきりと弓張月の弦の張り　冬
紅葉かつ散る谷のはざまに　豊
〈結〉ナウ
小牡鹿の人を慕いて現るる里　男
埋蔵金はでるかでないか　冬
イベントのタイムカプセル開くをまつ　雅
今日のある身のまこと不思議と　典
天地の恵みに満てる花燦々　稔
富士をはるかに春の曙　執筆

平成十二年十月二十五日首
平成十二年十二月二十日尾
（於・芭蕉記念館）

歌仙『桜吹雪』

三枝霧子捌

〈起〉オ 杉山の一樹の桜吹雪かな　三枝霧子
　間近に聞こゆ鶯の声　飯田春紅
　春の炉に昔々の話して　川上綾子
　ひいふうみいよいつむなや　谷田男児
月昇る刻一刻の影を変え　渡辺ゆり子
〈承〉ウ 小舟こぎゆく爽涼の湖　男
　信夫父子眠る芒野風淡く　霧
　パイプオルガン響く身ほとり　春
訛ある牧師に心うばわれて　綾
　ライスシャワーの雨のごとくに　男
反応の早き対策地震の国　男
　でんと構えし大佛様よ　ゆ
耐えきれぬ暑さに昇る赤い月　ゆ
　浅草に出て泥鰌鍋食う　霧
さすらいのこころに路地を幾曲り　春
　終着駅は涛高き海　霧
花万朶病棟の窓いちめんに　ゆ
　苺かわゆき絵手紙もらう　ゆ
〈転〉オ 蛤の舌出している真昼どき　男
　饅頭怖いと前座の男　綾
政界の裏に財界闇のなか　男
　雅号みやびに俳諧の席　ゆ
木枯の一番明日は冷え込まむ　春
　炬燵の中に触れる足先　綾
地酒酌み私のすべて盗まれる　春
　スパイ映画の大き看板　霧
人間の進歩はあまり見当らず　男
　ときどきひとり笑いなどする　春
松の月忍者を隠す石燈篭　ゆ
　残る渡しのそぞろ寒しや　春
〈結〉ウ 田の神を送りて村の秋収め　男
　朝雲わけてJALの飛びゆき　ゆ
遠来の客よりもらう白珊瑚　綾
　大洋はるか流れ来し民　霧
いにしえの大和詞に花の散る　綾
　ぽくりゆるりと太天道中　筆

執筆　三枝霧子

平成十二年四月二十六日首
平成十二年七月二十六日尾

（於・芭蕉記念館）

『佗助や』

阿部朝子捌

〈起〉オ 佗助や過ぎ越し中に光るもの　阿部朝子
　蹲の辺に寒禽の声　新井世紫
遠島に英語の教師赴任して　川上綾子
　道のつながる段々畑　大野優
真夜の空独り占めせし望の月　飯田春紅
　奥の座敷に後の雛あり　綾
〈承〉ウ 女ばかり狭く坐れる紅葉忌　〃
　おみくじ引けば吉ばかりなり　世
出合たる送り狼良き男　優
　双子の衣類かわく物干　綾
パリ郊外色とりどりの家ならび　春
　貧乏画家が描く似顔絵　綾
夏の月赤く大きくどんよりと　朝
　ホットコーヒー冷房の中　世
飽きられしテレビゲームが部屋の隅　優
　こけら落しの切符手に入る　綾
幔幕を張りめぐらして花の宴　朝
　ちゅんちゅんちゅんと遊ぶ子雀　世
〈転〉ナオ 発掘の古墳に湧きし春の野辺　綾
　サイクリングの列の連なる　朝
どこからか喜多郎の曲流れきて　春
　ひらすら寫す般若心経　優
かじかみて雪積む音を聞きながら　朝
　思いもかけず届く寒薔薇　綾
三人の漢はみんなお金持ち　優
　燃えた相手は凛としていて　世
菜園の成育も良く味も良き　春
　一合で足る越の寒梅　冬
後の月良寛像を照し出す　優
　刈田のまっすぐに延ぶ　朝
〈結〉ナウ あちこちに気配感じる冬仕度　春
　雑誌の見出し数歩先行く　綾
よく似合う青いリボンのヒマラヤン　世
　百才の師に会いにゆく会　優
花吹雪いく度訪ぬ北の丸　朝
　ゆっくり廻る風車のどけし　執筆

平成十二年一月十五日首
平成十二年三月　三日尾

（於・芭蕉記念館）

《岐阜・巴世里連句会―その一》

短歌行　『立待の月』

各務恵子捌

立待の月出るまでや二三言　　大野鵠士
　早稲の穂ゆらす風のゆるやか　　沼波かおり
錆鮎のまことめでたき錆様に　　安藤美保
　地酒とりどり香さまざま　　松尾一
ウラちもなき愚痴の相手はかじけ猫　　士
　投げし小石に続く水の輪　　保
信じると言ひきれぬ夜のわだかまり　　士
　見合ひ写真もなぜかのっぺり　　り
磨かれしロビーの床に塵もなく　　久代宮子
　オリンピックへ予選始まる　　士
ふるさとは今千年の花盛り　　保
　いまだなほらぬ春眠の癖　　一
ニオベランダの洗濯物につちぐもり　　清水貴久彦
　特養ホームのチラシ配られ　　大坪洋子
描きたる女は妻に似ても似ず　　士
　笑窪一つが変へる運命　　藤塚晶子
壁裏の隠し金庫に五億円　　彦
　不良債権処理のいつまで　　洋
夏の月雲の晴るるを待つ港　　大竹恵子
　声高らかに帰れソレント　　各務恵子
ニウアブサンに溺れ溺るる地下酒場　　士
　往生遂げる悪人のゆゑ　　恵子
来し方の闇行く先の花明り　　士
　ぐっと広げし岐阜蝶の翅　　一

平成十二年九月十四日首
平成十三年五月十二日尾
（於・岐阜西柳ケ瀬羽酒）

短歌行　『黄水仙』

松尾　一捌

黄水仙スケッチブックに詩一行　　清水貴久彦
黒揚羽舞ふ深き蒼空　　各　恵
のどかなる博物館に人もなし　　各　恵
ピアノの蓋の開けられしまま　　彦
船長の主催パーティー月今宵　　大竹恵子
映画女優の笑顔冷まじ　　洋
鬼榛むと言はるる山へ紅葉狩　　藤塚晶子
蛞蝓殺す塩のささらさら　　彦
宅配のピザSサイズLサイズ　　洋
解剖学書どんと積まれて　　士
花の冷えやつと取れたる博士号　　松尾　一
祝ひの酒にかかる初虹（ニヲ）　　大　恵
春祭商店街にチンドン屋　　清水貴久彦
迷子をあやす若き警官　　各　恵
制服の袖の釦がちぎれさう　　各　恵
寄り添ふ時はいつも左に　　彦
良き妻を演じきれずに癖がつい　　大竹恵子
だみ声通る女大臣　　洋
蛸壺の蛸が覗ける昼の月　　藤塚晶子
龍宮城も更衣とか　　彦
白髪（ニウ）の老爺に習ふボクシング　　洋
故郷に錦飾る夢見る　　士
盃を脇に寄せたる花筵　　松尾　一
犬もよろこぶ風光る土手　　大　恵

平成十三年三月十七日首
平成十三年四月二十七日尾
（於・岐阜西柳ケ瀬羽酒）

《岐阜・巴世里連句会―その三》

歌仙　首尾　『梅雨深む』

大野鵠士捌

一億のうちのひとりや梅雨深む　安藤美保
　選挙ポスターあぢさゐの脇　大野鵠士
門に居る犬が愛嬌ふりまいて　各務恵子
　原稿用紙吹ける金風　松尾一
資客の挨拶長き月の宴　大坪洋子
　秋場所初日イヤホンで聴く　久代宮子
添寝する肌温かくよく眠り　中瀬和子
　眉の太さはやはりあの人　大竹恵子
思ひ出となれば優しい過去の傷　各
　流るる雲の形とどめず　恵保
峰の花門前町に吉野葛　保一
古道辿れば春蟬の声　一

平成十二年六月二十四日首
平成十二年七月十九日尾
（於・岐阜西柳ケ瀬羽酒）

半歌仙　『花百句（花づくし）』

山口和義捌

こころざす花の百句の第一句　　山口和義
　菫色濃く生うる礎　　岩波浩吉郎
菜畑にかくれん坊は孫ならん　　今村苗
　古流家元継ぎて三年　　山口和義
名月に菊戴は夢を見る　　和義
　狗尾草をつけて白犬　　苗
ウ風の行く道をたどれば萩の寺　　苗
　焦がれし人は何故か花嫁　　藤松正子
早咲きも遅咲きもあり一もんめ　　苗
　運転席にドライフラワー　　和義
部屋中にラベンダーの香漂ひて　　栗原暁子
　看護疲れに薔薇のやさしく　　和義
露草に月の草鞋をしめ直し　　苗
　幼き日々を唄ふ押花　　浩吉郎
赤短に青短揃ひ大騒ぎ　　苗
　黒の柄樽に猫柳ゆれ　　和義
角館枝垂桜の家を守り　　浩吉郎
　椿餅食む老いの翼鑠　　栗原宗八

平成十三年三月二十七日首尾

半歌仙　『八つ手花』

鈴木アヤ捌

八つ手花かそけき羽音まとひけり　　鈴木アヤ
火桶小さく学問の家　　内田さち子
子福者の名も洛中に高くして　　ヤ
次世代突如売り買ひの才　　ヤ
名月に蛸唐草の口ざはり　　ヤ
婆にも秘密茸とる場所　　ち
山神もきこしめしたか薄紅葉　　小林美智枝
胸のふくらみ湯けむりのひま　　ヤ
三姉妹おなじ一人を恋ひわたり　　ち
流し目のあと知らんぷりきめ　　智
天才のチンパンジーをもてあまし　　ヤ
ブリキの玩具ゆるやかに止む　　ち
月仄か母に似てきし夕端居　　日高美灯子
ことことと炊く根菜が好き　　ち
門前の小流はやし水車　　ヤ
奈良町あたり滲む春灯　　灯
花の塚朱雀の舞にどよめきて　　ち
三千年の旅のかぎらふ　　ヤ

平成十二年十一月十日首
平成十三年三月一日尾

（文音）

歌仙『狸罠』

戒能多喜捌

人の知恵狸の知恵や狸罠　戒能　多喜
　地下足袋しかと霜柱踏む　高瀬照幸
開発の村道工事遅々として　曽我部登志子
　大気汚さぬ電気自動車　渡部就子
四阿に席を移して月の宴　幸
　かすかに聞こゆ藤の実の風　多
秋遍路奥津の湯にも杖休め　就
　振り向き様にコンタクト失せ　志
愛しくて離したくないおぼこ妻　多
　君の動悸を唇で聴く　幸
禁煙を会社ぐるみで推し進め　就
　月蒼白く照らす雪渓　志
旅に見る薩摩の国の蜘蛛合はせ　多
　伝統芸を学ぶ島の子　幸
何となく制度化されるボランティア　志
　喉をうるほし香るコーヒー　就
爛漫の花の枝に吊る小短冊　多
新入社員電話こはがり　幸
ナオつぎつぎと馬の仔生るる厩舎棟　志
　健脳食の薬草を摘む　就
モナリザの微笑の謎に論分かれ　幸
　底値底値と下がる株安　多
ぎっしりと境内埋めし初詣　就
　敵も味方も泥のラグビー　志
日本語の乱れの元はマスメディア　多
　介護保険に馴れて一年　幸
援交の噂次第に治まりて　志
　何が悪いの本物の恋　就
水の面に隈なき月の澄み勝り　多
　栗を食みては憶良偲ばる　幸
ナウ秋深く爺のたしなむ手風琴　就
　鍋も急須もみんな百円　志
日曜は我楽多市をぶらつきて　多
　鵙飛び交ふ京の賀茂川　幸
来し方の夢も消えゆく花吹雪　志
　万愚節とて騙す愉しさ　就

平成十二年十二月十五日首
平成十三年三月十五日尾
（於・松山市小野公民館）

歌仙　『ゴールデンウィーク』

ゴールデンウィークけふも青い空　ロコ
　仔馬放てば丘のひろびろ　文
春の門出会ひがしらに友のゐて　梨乃
　サーカス触るる楽隊がくる　鳴
太りゆく月を乗っけてテント小屋　ど
　林檎のにほひ描く抽象　砂
ウ現国(*)と地理の間に夜食する　石
　思はれ面皰潰さずにおき　耶
あなたとはロープのような赤い糸　砂
　魔方陣書く杖に骸骨　ど
やみくもに一筋の道進むらん　砂
　親父が眠る団子屋の店　耶
寒月と欠け徳利が物語る　砂
　無用の用のあるとこそ知れ　鳴
イメージの浮かばぬ時は厠入り　石
　ワープロ打てば消ゆる筆胼胝(ふでだこ)　砂
花をみる友は数へで七十三　宗
朝寝の夢に王手飛車取り　海
ナオ早起きで一番乗りの潮干狩り　無
　八景島に揺るるゴンドラ　真
迷ひ子はため息ついて母探し　由
　海は歩いて渡れないんだ　野
蛇身とも知らず重ねる逢瀬なり　み
　のみどの奥に汝を捕ふる　海
兵役を終へて戻りし宿の月　砂
　カリカリ冷むるバイク漸寒　玄
トンネルに幽霊話秋の暮　鴻
　祝儀不祝儀おなじ顔ぶれ　蘭
やかましき伯父の髭にも白いもの　石
　紙漉く里に韓のひもろぎ　水
ナウスワンにも海を渡れぬ由のあり　海
　食パンの耳風に投げ上げ　砂
口嗽ぐ音窃して晴れ渡る　耶
　むさぼるやうに渋澤を読む　鳴
花舞ふや火刑法廷静もりぬ　石
　おぼろおぼろに尖塔の鐘　砂

平成十二年五月五日首
平成十二年五月二十八日尾　（電脳文音）
（於・BIGLOBE SIG電脳連句）

（*）現国：高校教科目「現代国語」の略語

歌仙『薔薇胸に』

薔薇胸にラクリモーサ(*)の和声かな　海
涼風の園満つる永遠　耶
一つがひ田鶴の餌を掘る小流れに　砂
鍬を洗うて帰る草の家　海
軒に干す地下足袋月を蹴上げたり　耶
文化の日まで衣装合せを　砂
好きな詩もトランクに詰め秋の旅　み
エアーポケット抜けて雲海　砂
五十年北と南が一堂に　宗
水饅頭にも好みそれぞれ　海
歌舞伎町あたりの夢は夜ひらく　耶
毛深ハーフが湯冷めする月　砂
名は無くも知恵はありますかじけ猫　砂
魚屋を呼ぶ尼寺の裏　耶
リストラの愚痴南無般若波羅密陀　海
押しつけられし会長の役　由
引連れていざお花見の杖と杖　真
風船ガムがパンと弾ける　海
衆議判住替(ナオ)へし寄居虫(やどかり)どこぞ所在無げ　耶
三代経つて瘠せる票田　砂
末つ子にあぐりと名づけ天あふぐ　砂
見れば見るほど律儀者なり　海
梅雨といふ字義の講義もめんめんと　耶
バッカス神と語る短夜　砂
指先にニコチンの色染み付きし　海
玉の井上りのおかみさんなる　耶
隠れ棲む裏屋に紅絹(もみ)の長襦袢　砂
女形役者の拗ねる有明　海
手触りも匂ひも味もちがふ梨　由
むし歯に沁みる雨冷えの風　耶
仲間(ナウ)の待つたは三度限りとし　砂
去年の旅の首尾を尋ねる　海
新築の祝ひと熊の剝製を　由
謎解きをする爺の得意げ　耶
灰撒けば万朶の花のまつ盛り　砂
お伽噺のさそふ春眠　由

（電脳文音）
平成十二年六月三十日首
平成十二年七月　七日尾
（於・BIGLOBE SIG電脳連句）

（*）ラクリモーサ…レクイエム

歌仙『淑気』

朝寝起き粥にも餅を放り込み　耶
　日本語講座人気上々　薊
少子化に移民解禁進むらん　坊
　引越し先は交番の傍　ど
駅前のポスターまたも盗まれて　コ
　ジャンバルジャンは髭を剃らない　ど
肩こりの元になつてる目の疲労　梨
　麦焼酎を炭酸割りで　乃
すてこはブランドものと大威張　耶
　全共闘が孫の守りする　砂
月の出の安田講堂はるかなる　耶
　今宵かぎりぞ雁が南へ　砂
露（ナウ）ばかり強い味方の干し大根　耶
　歓喜の歌の譜に仮名をふる　砂
ドイツからホームステイの旅の人　耶
　手摺れの壁のかけら取出す　砂
花の森ひとに知られず埋めるもの　猿
　年月過ぎて再会の春　コ

平成十三年一月一日首
平成十三年一月十四日尾　（電脳文音）

（於・BIGLOBE SIG電脳連句）

（＊）オルト…パソコン通信用語でOnline Talkの略称。

《二見・日の出連句会》

半歌仙　『野ざらしや』

連衆捌

四五丁の艪が野ざらしや秋夕焼　御辺卯徑
　句碑の背山に月傾きぬ　松井郁子
式部の実迷ひ猫にも餌をやりて　山根於京
　脱ぎ散らかして子供らの靴　徑
会釈してジョギングの道ゆずりたる　京
　新茶の香り産地直送　郁
蜑料理とて大盛りのてこねずし　徑
　真珠の家紋飾る床の間　京
今もなほ結納品に鶴と亀　郁
　*ヘジャブの女話すカタコト　徑
国境を越えてようやく幸（さち）つかむ　京
　健康注意禁酒禁煙　郁
月天心凍てまさり行く落人（おちど）村　中世古正郎
　怒（いか）る仁王に深きひび割れ　〃
ルイ・アーム・ストロング聴くレコード店　徑
　おたまじゃくしを水槽で飼ふ　郎
花の坂のんびりとゆく歩こう会　京
　火男のごと風車吹き　郁

平成十二年九月七日　首
平成十二年十月五日　尾

（於・御辺卯徑宅）

（*）ヘジャブ＝イラン女性のかぶり物

歌仙『秋蝶』

寺仙啓子

秋蝶の風向きに翅直しけり　喜
　月見団子はひとつ足らねど　倭
ポケットにどんぐりころころ遊ぶらん　三
　ゴルフのよしみ連衆となり　啓
そのまゝで箸置として落し文　喜
　唐子まつわる陶枕の夢　倭
思ひつめおぼこ娘の素振して（ウ）　美
　乗合いバスで恋句やりとり　喜
溜まったら出版しようヌード集　三
　くびれ腰まで黒髪の丈　啓
百年に一度の地震術もなし　倭
　陰陽師めく呪文となへて　喜
冬の月涙こらえて楽屋裏　三
　手袋脱かず叩くかしはで　美
只今と鸚鵡は我の声をまね　喜
　船の旅へと諸用かき分け　啓
花の蔭着物も帯も鈴の柄　倭
　病ひ抜けしていよゝ麗らか　三
姑に出づるきつかけ春炬燵（ナオ）　啓
　落書まがひピカソ見直す　喜
政治家の約束なべて疑はし　倭
　色即是空般若湯好き　三
筍を掘る力点と作用点　啓
　夕顔ほのと巻きし電柱　喜
ファゴットの低くて弥撒も厳かに　倭
　うぬぼれ鏡恋は盲目　啓
身をやつし光源氏にあやからむ　三
　次の世紀は土にこだはり　倭
萱ぶきの厚き廂に真夜の月　啓
　萩を乱してたはむれる犬　喜
足音に追ひつかれつゝ秋の山（ナウ）　三
　パラリンピックメダル續々　啓
カルメンの煙草工場を大学に　三
　認定証などただの紙きれ　喜
繙くは奥の細道残る花　倭
　霞をもれる鳶の遠笛　啓

品川鈴子捌

堀田美智子　美
森倭子　倭
高橋三千子　三
緒方喜代子　喜

平成十二年九月二十三日首
平成十二年十月十三日尾

（於・伊丹市柿衛文庫）

歌仙『初景色』

品川鈴子捌

一族が繰り込む島の初景色　恵
　宝船にも積める酒樽　曜
立札の幔幕東風に膨らみて　鮎
　亀も鳴くかと月の出を待ち　曜
生ゴミを肥やしにキャベツ玉を巻く　恵
　上着の衿を立てて小粋に　曜
柴又(ウ)を出でて漂ふ旅の空　鮎
　水茎をもて愛をしたため　鮎
燭火に透かせば見ゆる君の影　曜
　森の奥なる寺領涼しく　恵
減量のお腹に響く遠花火　鮎
　ここら辺りか鍼灸のツボ　鮎
月の出にユースホステルさんざめき　曜
　危機管理とて新米を貯め　恵
蟷螂は雄の鎌まで食ひ尽くし　鮎
　ゴルフ場より電話たびたび　鮎
花の上飛行機雲の伸びてゆき　曜
　谷間の出湯鐘も朧に　恵
精進(ナオ)を落として啜る蜆汁　恵
　しつこい烏追うて半日　曜
タリバンの仏像破壊収まらず　鮎
　引力増すか地下で実験　恵
玉あられ鴨越を逆落とし　曜
　障子の奥に琵琶を爪弾く　鮎
行先は当てずっぽうに田舎バス　曜
　部屋の合鍵上履きに入れ　恵
さっちゃんが僕を好きだと六つの児　鮎
　ジャングルジムのペンキ塗り立て　曜
校正も終えて家路の月が澄み　恵
　焼き栗の皮やたら散らかし　鮎
猪(ナウ)が泳いで逃げる五色沼　曜
　禁止されるとなほ聴きたくて　恵
深々と腰掛けて待つ占ひ師　鮎
　甘い指値にどっと寄り付き　鮎
花びらに岸も川面も埋められ　曜
　苗代端を急ぐ子供ら　恵

平成十二年一月十八日首
平成十二年四月十九日尾
（於・神戸新聞文化センター神戸ハーバーランド連句教室）

歌仙『沈丁花』

品川鈴子捌

裏通り馥郁はこれ沈丁花　小原みどり　貞
忙しそうに蜂の飛び交い　永原貞子　み
潮干狩ぬめる礁につまづきて　野口喜久子　喜
おすそ分けよと向う三軒　み　貞
さらさらと筆を走らす月の光（か）げ　貞　喜
小牡鹿のこゑ揺れる吊り橋　喜　み
千枚田あち見こち見の案山子どの　み　貞
何処で乾かそ恋の濡れ衣　貞　喜
円舞曲お手をどうぞと誘はれ　喜　み
砂漠の砂は今日も移ろふ　み　喜
アメリカは思いもかけぬ銃さわぎ　喜　貞
舟で通ふ子また一人減り　貞　み
月讃ふビールのジョッキ重たくて　み　喜
智恵子の切絵避暑の家苞　喜　み
白亳で見守っている世紀末　み　喜
地震つづきて鯰眠れぬ　喜　貞
南朝の花に囲まれ貴人点て　貞　み
尾にも足にも春泥の犬　み　貞
古草に埴輪そこここ滑走路（ナオ）　貞　み
近々と寄り写すポケモン　み　喜
清水の舞台に揃ふ狂言師　喜　貞
またも始める基礎英語より　貞　み
神留守にあいそふりまく道祖神　み　喜
ぐつぐつぐつと煮込むおでんを　喜　貞
病める身も冒険好む女棋士　貞　み
家柄違ひ心得て候　み　喜
一ッき十にひらめく仲なれど　喜　貞
オリンピックの金メダル欲し　貞　喜
月の量句座のもてなしはんなりと　喜　み
燕帰りて只の電線　み　貞
名妓（ナウ）とて褪せし稽古の秋扇　貞　喜
やうやく和解同胞の国　喜　み
コーラスへ杖ついて行く公民館　み　喜
パソコンを打つのみの朧夜　喜　貞
花ふぶき太極拳の技こなし　貞　み
江口の里は霞棚引く　み

平成十二年三月　二日首
平成十二年四月十一日尾

（於・阪急教室）

歌仙『比良ふところ』

平成十二年三月廿日首
平成十二年六月末日尾

残雪の比良ふところに春の闇　稔
　四徳を兼ねる老梅の白　樹
末黒野をトラックターに犬を連れ　稔
　大地の広さ豊かさを知る　樹
十六夜の月は躊躇(ためらい)がちに出で　稔
　紅葉ずる木々と渓沿いの径　夫
さらさらと葉ずれの音も肌寒く　樹
　文字に写せぬ文(ふみ)の書き出し　稔
たったいま逢うて戻りしばかりとは　稔
　主(ぬし)を待つ舟戯れる波　夫
碁仇を無言のままに送り来て　樹
　しばし遠見の鈴鹿山脈(やまなみ)　稔
負い籠に一歩一歩の道辿り　稔
　家近くなり晩鴬を聞く　夫
かって見し黄河ほとりの夏の月　樹
　目覚めて暫し止まぬ雨音　樹
佇めば眼下の花も散りはじめ　稔
　坂を下りゆく遠足の列　夫
村木佐紀夫捌

高尾　稔
村木佐紀夫
林　茂樹

（文音）

半歌仙　『初しぐれ』

小野シズ捌

初しぐれ古都に一夜の夢結ぶ　小野シズ
香りほのかに床の水仙　小林静司
群雀背戸の藪より飛び立ちて　町田順風
忘れぬうちに句想メモする　茂田キヨコ
昼月に釣糸垂らす防波堤　若尾よしえ
栗のおこわは竹皮の中　川澄みよ
ウアフリカヘボランティア隊露分けて　司
井戸を堀ったり土運んだり　えい
価値観が同じでいつか恋となり　風
ウブなところが私好きなの　ズ
かすかなる音に開きし月の蓮　コ
釈尊しのぶ蜘蛛の巣の糸　司
上げ足を取られて治国まゝならず　よ
校歌斉唱肩を組みつつ　風
安くても地酒に味の深きもの　コ
子猫よちよち姉妹とり合う　よ
屋根のみを残して宮の花盛　司
銀輪めぐる風光る道　筆

執筆　司

平成十二年十一月十九日
（於・世田谷　梅丘会館）

半歌仙　『野焼き』

成田玲子捌

野焼する煙をあとに句座の道　成田玲子
梅飾りして客を待つ駅　若尾よしえ
石彫の貂生き生きと春風に　町田順風
手作り和菓子形いろいろ　茂田キヨコ
月今宵波止場に舟をつなぎとめ　川澄みよ
大鰡の竿右し左し　キヨコ
ッ遊園地ホップステップ児等と行く　よし
今日がチャンスと化粧念入り　え
ハワイまで飛ぶ夏の夢ふくらませ　子
草の葉上にとまるとうすみ　子
サッカー場観るのも苦労サポーター　コ
聖地譲らぬ戦さ絶えざり　風
玲瓏と雪隠照らす寒の月　え
生姜湯わかし母にすすめる　よ
ケアセンター介護の練習余念なく　コ
裏山で鳴く小綬鶏の声　え
一本の花に延々長い列　風
赤い床几に甘茶いたゞく　よ

平成十二年三月十九日首尾
（於・世田谷　梅丘会館）

歌仙　『高橋路草先生追悼』笹子鳴く

歳月の過ぐるに速し笹子鳴く　中込省三捌
天空染めて寒夕焼果つ　高橋路草
そよ風に硯の墨を乾かして　土屋清市
うねうね流る屏風絵の川　中込省三
ふり返り見る山の端に望の月　高木トシ
木犀の香の縁に語らふ　高木千代子
福耳(ウ)をほめられている敬老日　清
逢引といふ昔なつかし　省
寄り添へる浪漫の里のレトロバス　ト
女出入りに名をぞ留める　千
高原に風切る乗馬拍車して　千
課外授業の自然観察　清
夏の月ビニール光る畝なりに　清
形見分けする虫食ひのセル　省
初産の孫に乾杯爺と父　ト
宇宙目指して冒険旅行　千
能演のかがり昂る花朧　千
油のごとく水温みだす　清
制服の身についてきし新社員(ナオ)　省
企業集める政党資金　ト
押売りを軽くかはして厨妻　千
奇術の種をマジシャン明かす　千
一ト言に悔いを残して隙間風　清
石狩鍋に民宿の夜　清
防波堤バイクの群の駆け抜けて　省
連れて逃げてとふいに抱きつく　ト
銀幕の美女と野獣の一刹那　千
パスポートには想ひ出の国　千
十六夜の屋台の酒に頬染めて　清
虫籠吊す村の駐在　省
紅葉狩城址に続く石畳(ナウ)　清
駅の自転車借りるハイカー　省
蔵王嶺に黒雲かかる夕まぐれ　ト
預りし児と遊ぶお手玉　千
平らかな潮起伏の花の径　清
雛のあられは夢の三色　鈴木芳子

平成十三年一月二十一日満尾
（裾野市立東西公民館）

歌仙　『高橋路草先生追悼』

寒昴

師はいよよ高みにありし寒昴　飯田輝子捌
　水仙清く活けし文机　飯田輝子
ボランティア大マジックを披露して　渡辺未依女
　仲間の笑顔伝はる波紋　後藤文代
いびつなる月見団子の供へあり　田口明子
　幾何学模様ゑがくさやけさ　未
廻廊をめぐりて遭へる薄紅葉　輝
　旅のかたみに買ひし半衿　文
富士山をバックに写真撮り合へる　明
　深き縁によりそひし肩　未
「そんな事言ったか？」酔の恐ろしき　文
　部屋の奥まで月影涼し　明
土用灸据ゑし痕あり湯治客　輝
　優勝ねらふゴルフ大会　未
思はざる新人現れて騒動に　文
　剝落仁王が踏む天邪鬼　明
御朱印の行列長き花の城　未
　蜃気楼たつ遙かなる沖　輝
春の風邪押して出掛ける美術展（ナオ）　文
　禍禍しける「橋立」の壺　明
戦略の秘術尽して功ならず　芙美子
　テレビゲームを孫に教はる　未
冬うらら猫が下界を睥睨す　輝
　守衛があくび嚙み殺し居る　文
追ひかけて大蛇と変はる日高川　芙
　乱る黒髪とくすべもなし　明
悟などひらく気もなく六道を　輝
　颯爽と行く乾きたる街　未
月の船宇宙をめぐる夢のせて　文
　心に荒れ永遠の白菊　明
啄木鳥（ナウ）の幹を叩ける音に覚め　芙
　山小屋の灯の淡き明け方　輝
一瀑を神とし祀る鄙の里　未
　銘酒処と名を轟かす　文
舟盛に尾をはねあげる花見鯛　鈴木芳子
　青きを踏めば励ましの声　芙

平成十三年一月二十一日満尾
（裾野市立東西公民館）

歌仙『牧の牛』

のこぎり草すずやか牧の牛座る　狩野康子捌

雪渓残し青む山々　狩野康子

夏の果市民オペラの盛るらん　谷田部弓子

バスと地下鉄乗り継いでゆく　垂石よう子

月の道しかと抱えるメロンパン　松ノ井洋子

いとど住みこむ風呂の片隅　秋田てる子

小柄(ッ)なる庭師不乱に菊を著せ　熊坂昌子

思わぬ馳走に迷い箸する　昌子

しっかりと内にあるもの見透かされ　洋子

今度の彼は放っておけない　てる子

オリンピック南北統一計る旗　よう子

駝鳥の卵でプレーンオムレツ　弓子

風紋を静止させたる寒の月　昌子

記憶の底にお神楽の鈴　てる子

調子者女系家族末子にて　よう子

ワインが届く姉妹都市から　弓子

花片々一軒宿の長廊下　洋子

小舟を揺する春の潮よ　昌子

初虹(ナオ)の涯を見つめる常長像　洋子

チャンスシュートをはずすPK　よう子

運命の天秤針は定まりぬ　弓子

饒舌すぎる気象予報士　てる子

鮮やかな日傘広げて足早に　昌子

香水が知る愛の数数　洋子

おかあさんこれが胎動なのかしら　弓子

三角定規ペアで一組み　弓子

龍うねるごと長城を造らせん　よう子

人身御供も聞いたかなかな　洋子

ほどけそな手編みの篭に月入れて　てる子

眼鏡離せぬ文化の日なり　昌子

絵付(ナウ)師は熟柿の朱を試作する　康子

国と国とを隔つ石橋　康子

バザールに民族ごとの顔があり　洋子

長老語る古き良き時代(とき)　てる子

花の雲紛れこんだる観覧車　よう子

たんぽぽの黄を点ず参道　昌子

平成十二年十月十九日首
平成十二年十一月十二日尾

（於・双葉西集会所）

歌仙『原爆忌』

狩野康子捌

眠り継ぐ腕のみどりご原爆忌　狩野康子
　学び舎の鐘渡る豆畑　山田史子
望の月小島離るる船ならん　佐藤千枝子
　はき慣れぬ靴かたわらに置き　佐々木嘉宇
窯守のつれづれ猫と戯れる　高橋玻斗子
　赤み増したり濡れ薮柑子　木田眞智子
ッ神の旅八方開けし史料館　史
　モンロードレス闇を誘惑　眞
枕辺に恋の温もり捜しつつ　玻
　いつも気になるあの人の運　玻
社長以下まずカフェオレから始まりぬ　枝
　極楽鳥が鼻煙壷に住む　眞
月涼しガーデニングをお墓にも　玻
　袋小路にはまる帰省子　枝
踏まれ上手難しいこと考えず　枝
　セピアにできる写真機を買う　宇
花盛る騎馬の政宗海を見て　宇
春塵を乗せ大観覧車　史
めざし焼き深層水の酒を酌む（ナオ）　宇
　柔道着まで青くなりたる　史
内弁慶薄き口ひげお手入れし　枝
　パソコン持ち込み検査入院　枝
冬の田を貫きバイパス開通す　宇
　長者が松は早や雪囲い　眞
香匂う大和座りの阿弥陀仏　枝
　ピアスを付けた男振り向く　宇
やすらぎは女上位の世に生きて　史
　あなたの亡骸（なきがら）抱きしめる夢　康
人肌で醸す納豆三日月　宇
　岩木山麓芒散りゆく　玻
すがれ（ナウ）虫かの教団の跡もなし　枝
　似顔絵描きの身の上を問う　枝
日本語に残しておきたい鼻濁音　眞
　西の空から晴れ間広がる　枝
花嫁の笑みはすみれのはなのよう　枝
　膳に整うはまぐりの椀　宇

平成十二年一月二十一日首
平成十二年二月十八日尾

（於・山田宅）

歌仙　『胎児まがたま』

喜多さかえ捌

鰤起こしとどろとどろと遠記憶　楚口恵美
水仙の崖汐かけのぼり　小西澄子
点字絵本ミリオンセラー果たすらむ　藤岡よし子
人名、書名、件名目録　西山和子
望月を掠めゆく雲ふたつみつ　西村幸子
短き旅信爽気とともに　杉本静子
松茸を異国の土といただきぬ　恵美
キムさんどうし抱き合ふ半島　喜多さかえ
別姓で週末婚です白い家　よし子
うすら眼の胎児まがたま　さかえ
更新のメールアドレス「八衢（やちまた）」と　和子
先触れの神しきりとまどひ　恵美
売れぬ土地ただのっぺりと月涼し　山口手巻
噴水の秀の崩る瞬間　幸子
歯切れよきご意見番の空手形　静子
覗けば昏む篠笛の穴　よし子
新世紀花の命のあらたなれ　〃
帰りゆく鶴残りゐる鴨　澄子

ナオ
ははそはの母と連れ立ち御身拭　幸子
仮名文字の歌飛火野に愛で　恵美
かっきりと敗北宣言　朴の下駄　手巻
砂のてのひら平らに漱ぐ　幸子
小流れの落葉筏は陽を集め　澄子
俄かしぐれか爵位捨てし身　よし子
香りたつエスプレッソに目覚めたる　手巻
心もろともキイを預けて　よし子
長煙管じゅげむじゅげむの名付親　静子
誰より大きこの蒙古斑　澄子
裸木のメタセコイヤに月の針　〃
博物館への坂はゆるやか　幸子
ナウ
どぶろくの銘鬼ころし車座に　恵美
船簞笥から銹釘の出づ　よし子
軒下に住みつく猫の過食気味　澄子
疎開の少年黙りこくって　よし子
許されよ花を疎める現そ身を　静子
白桃一顆おのづから光る　手巻

平成十二年十一月九日首
平成十二年十二月十四日尾

（於・いせトピア）

歌仙『陶芸展』

池川蜩谷捌

賑はへる陶芸展や梅香る　池川蜩谷
初音に心和むひと刻　戒能多喜
水温む池のほとりに佇みて　荻山玲幸
雲湧き上る遠き山脈　長井実平
寄り合ふて月見の仕度あれこれと　井手光子
稲田の径を小走りに行く　谷多
氏神の境内広き敬老日　多幸
素敵な人に好意よせられて　幸平
恋かしら寝ても覚めても彼のこと　平光
坊っちゃん列車よみがえるらし　光谷
からくりの時計見てより道後の湯　谷多
派手なアロハの旅の一団　多幸
煌々とビアガーデンを照らす月　幸平
森内閣へ批判厳しき　平光
気に入りの青磁の壺に罅が入り　光谷
籬の上に干せるスリッパ　谷多
平安の往時を偲ぶ御所の花　多幸
夜明け間近に春の咳き　幸平
年金で閑はりもなき納税期　平光
手作りパンの味は格別　光多
停電の暗き廊下をゆく盗人　谷幸
思いがけずも猫を踏みつけ　多平
雪だるま箒木の杖にバケツ帽　幸光
冬の銀河を縫へる飛機の灯　平谷
旅十日隣へ留守を頼みおき　光多
家も子も捨て駆け落ちをする　谷幸
結納の倍返しなど知りもせず　多平
大仏殿に読経三昧　幸光
月を背に袱紗捌きも鮮やかに　平谷
新酒成りしと吊れる杉玉　光多
松茸をよっこらしょと負ひ帰り　谷幸
輸入野菜の並ぶ店先　多平
厨房は夫が自慢の腕ふるい　幸光
ふる里の山想ふこの頃　平谷
車椅子押され巡れる花の苑　光多
舞も踊りもなべてのどけし　平幸

平成十三年二月二十五日首
平成十三年二月二十五日尾

（於・道後友輪社）

『七日粥』

賜りし長寿尊し七日粥　井上弥生捌
客待つ部屋に揺るる蘭玉　井上弥生
早梅の香りかそけく漂いて　戒能多喜
入学試験終えて寛ぐ　永井政子
おぼろなる月にギターをかき鳴らし　吉岡フサ
波の間に間に浮かぶ島影　河野夏彦
最低ッの総理支持率いかにせん　松永静雨
烏合の衆に頼るものなし　多
したたかに一気呑みする冷やし酒　静
サングラスかけくぐるモーテル　弥
職場では上司なれども今は別　夏
食思不振は癌の兆候　政
小望月神杉の秀にかかりいて　フ
窓辺に寄ればむささびの声　多
廃業の店うそ寒くたち並び　夏
三次元描く夢のパソコン　政
ふらここの軋みて花の咲き初めし　弥
故郷目指して雲に入る鳥　静
ひたすらに雛納めに勤しみて　弥
まともに書けぬ過去の自分誌　夏
ノーヒットノーラン成りし野茂投手　政
愛しき人は何時も遠くに　伊達由紀
初恋の思い出胸に旅つづけ　政
四囲みな枯るる尾瀬の木道　夏
セーターの肩に喰う込むリュックサック　夏
お地蔵様に抹茶煎餅　政
小流れの音さらさらと絶へ間なく　弥
ゆくりなく逢ふ幼な友達　夏
吾が影を踏みつつ戻る十三夜　政
秋の吟行楽しみにして　由
街角ナウで赤い羽根売る市長さん　弥
行き交うひとの足早に過ぎ　由
ふと耳にドボルザークの新世界　夏
自由自在にロボットの犬　政
花落ちて祖母にこやかに笑み浮かべ　由
蝶の舞うさえ芽出度かりける　夏

平成十三年三月三日首
平成十三年四月七日尾

（於・久仙亭）

歌仙『太平洋』

高月三世子捌

太平洋を押し上げ昇る初日かな　深井　玲
　淑気漲り踏む三番叟　内田さち子
種浸す農継ぐ吾を受入れて　玲
　民話の里は石のあたゝか　鈴木アヤ
みどり児のおとがひつんとおぼろ月　ち
　人差指で叩くソナチネ　杉浦喜久代
戦(ウ)ひの痕残りたる旧校舎　高月三世子
　いつもおどけてシャイナA君　野口敏子
悲しければ泣きにおいでと誘はれて　小林和恵
　猫が見ている汗の抱擁　代
繪ガラスの杯に涼しき酒八分　ち
　ユーカラ織りは北の手ざわり　世
それぞれにベランダへ出す月の椅子　菅野陽子
　いつか隣に移る虫の音　白濱節子
ひっそりと風の仕上ぐる簾柿　倉橋澄子
　旅の夢見つ病癒えしか　恵
淡きあり濃きあり花の丘に佇つ　敏
　プロペラ飛機の翼のどかに　小林純子
上(ナオ)り鮎息子は二十歳丈高し　玲
　リタイヤ近き昭和ヒトケタ　世
「おはやう」と仏飯鳩にふるまひて　玲
　太極拳の息をふかぶか　敏
虚子の句碑ここにもありて冬もみぢ　代
　巽にぬるゝ軒の大甕　陽
さかやきを伸ばして傘を張る身すぎ　代
　紅い襷の背(ナ)に恥ぢらひ　陽
人妻となりし噂も立ち消えに　ヤ
　高速バスが立てつゞけ過ぎ　代
峡の宿月を追ひつゝ更けゆけり　恵
　朱欒どたりと落つる庭先　ヤ
おく(ナウ)んちの撒き手拭が宙に舞ひ　澄
　エンデバー撮る地球環境　ヤ
軽やかに歴史の頁加へられ　恵
　玉子煎餅名は「匂ひ辰」　純
花こぼるコトリコットン水車　節
　新入生の呼びかはす声　世

平成十二年一月十五日首
平成十二年二月十九日尾
（於・東京女子大学同窓会館）

歌仙『薫風や』

佐野千遊捌

薫風や孔雀ゆるりと羽根まわす　佐野千遊
　高く上がりし噴水の影　岩井秀子
開発という名で島も荒れてきて　野崎昭子
　お国訛りでベンチにぎわう　岩井魚水
コンビニの弁当月が覗きこみ　藤原繁子
　相撲甚句の声のしみじみ　河原喜美子
尼寺の楓色づきはじめしと　繁
　御守犬に祈る安産　秀
マンションの螺旋階段すべりそう　昭
　忘れてきたるブランドの傘　秀
海青く白波寄せる日本海　魚
　紅茶はジャムのロシア風にて　喜
冬帽を真深く月の歩道橋　繁
　テールライトの遠ざかりゆく　昭
佇めばひたすら慕情つのりきて　魚
　色の褪せたる写真一葉　水
花散ってひそかに彫りし観世音　子
　城ある町の雁帰るらし　遊
うららかに缶けりの缶ころがって　繁
　Tシャツの絵はアイドルの顔　魚
亀石の遺跡をのぞく好奇心　昭
　拾ったばかりの恋はほかほか　繁
ひっそりと框に置かれ蛍籠　秀
　村の細道川明りして　魚
往診の赤いバイクに挨拶し　喜
　スパルタ式でピアノレッスン　繁
飛びたちし鳥の羽根のぬれいろに　秀
　うういの奥山月皓皓と　昭
杖をつき手をひかれたる秋深く　繁
　柚子の実たわわに陵の見ゆ　魚
琵琶抱いて公達落ちし一くだり　昭
　俄に鯉の跳ねる水音　秀
湯豆腐に顔の揃いて湯気の中　秀
　肝胆照らす宵のともしび　魚
高遠は万朶の花にうずもれて　繁
　こごめ零れて小雀の寄る　喜

平成十二年五月十一日首
平成十二年七月十三日尾
（於・神戸市男女共同参画センター）

《香川・丸亀連句会》

半歌仙『茄子漬』

片山多迦夫捌

茄子漬白磁の皿を染むるほど　広谷青石
　暑気払ふべし吟醸の瓶　今井水映
国宝の晝の天主に人もなし　松岡遼雲
　入場券に篆刻の印　篤沢翠
折からの月に朗々詩を吟じ　鎌田耕仁
　敬老の日の野点にぎやか　片山多迦夫
コスモスが見頃とテレビニュースにも　翠
「携帯」の娘の長いおしゃべり　遼
一滴の媚薬垂らせし悪い奴　迦
　シヤガールの繪の天使空飛ぶ　翠
コンコルド世紀の夢も破れたり　石
　わがふるさとの島が火を噴く　仁
坪庭の大根引くや父の忌に　仁
　木枯が研ぐ三日の月光　映
扁額に飄々の文字面白く　石
　友をもてなす独活と蕗味噌　迦
花の上迦陵頻伽の声かとも　耕
　遅日寸劇筋書はなし　耕

平成十二年八月二十七日首尾

（於・耕仁邸）

二十韻『夕端居』

斎王（ナオ）の御歌奏上凍ての苑　さかえ
　羽子板市をのぞく半月　壽子
天に口地に耳ありと言ふなかれ　治男
　菩薩の肌の柔らかなこと　明雅
鮮やかにあなた命と彫りの墨　壽子
　ぼんぼん時計捻子を巻きたり　さかえ
願（ナウ）る酔生夢死の八十年　明雅
　仔猫さかしく傾ける首　治男
ギネスにも載るコースター花の雲　さかえ
　ボートレースを応援の声　壽子

膝送り

組鐘（カリヨン）の淡き音色や夕端居　東　明雅
　掌染めし糠漬の茄子　村田治男
復刻の訳詩集など売り出して　喜多さかえ
　ＯＡ機器の説明を聞く　杉山壽子
望月を仰ぐ甲板印度洋　治男
　何処かめざして雁の一列　明雅
君につと引かれてみたき葡萄蔓　壽子
　去年はなかったこのほくろ・疣　さかえ
リストラの嵐収まる気配なり　明雅
　鍼力の玩具打てば響くよ　治男

平成十二年六月二十五日首
平成十二年八月二日尾（文音）

歌仙『面輪良き雛』

平成十三年三月　十日首
平成十三年三月三十日尾
（於・東海村舟石川コミュニティセンター）

あやかれと面輪良き雛孫に買ふ　堀江水城捌
春の灯に揃ふ三代菜買ふ道の駅　片野弥恵
丘の辺の欅大樹の芽吹くらむ　堀江水城
メールを送る指は軽やかに　長澤矢麻女
定住の異国の浜の月清か　小岩菖蒲
秋を惜しみてワイン傾く　大山とし子
ヴィル街の銀杏黄葉の夕映えに　弥恵
ギター片手に集ふ若者　水城
意地を張り口をきかずに今日も過ぎ　矢麻女
神殿巡る新婚旅行　菖蒲
明日の夢語る夜更けの膝枕　とし子
水琴窟のあるや何処に　弥恵
蓮舟に仰ぐ宵月塔離る　水城
かたはだ脱ぎて酌み交す酒　矢麻女
山間に発砲淋く昼下り　菖蒲
犬はくるりと小屋に駆け込む　水城
花楚々と古木のいのち甦る　弥恵
春塵の舞ふ落人の里　矢麻女
携帯（ナオ）の圏外霞む峠越え　菖蒲
朝採り野菜買ふ道の駅　と
姥車押して媼の長話　水城
離れをる島今朝もニュースに　弥恵
爽降る仮設住宅余震また　菖蒲
手編みのマフラー肌身離さず　矢麻女
ひとすぢに信じて待って赤猪子は　と
三輪の流れの淵瀬変りぬ　水城
どこへでも高速道路走りぬけ　弥恵
われも一票決まる総裁　菖蒲
夕月にヴェートーベンの笑ひ顔　矢麻女
歓喜を運ぶ穂波吹く風　と
柚子（ユウ）たわわ山ふところの一軒家　弥恵
岩戸の隙間洩れる光か　水城
ひょっとこのお面を被り負はるる子　と
御神火太鼓空にとよもす　矢麻女
屋形船ゆるりとくぐる花の下　菖蒲
入学式に家族打ち連れ　と

歌仙『初暦』

後藤算子捌

初暦めくれば富士の大いなる　黒沢かすみ
　お年玉待つ行儀良き子等　後藤算子
春霞銅鑼の響ける船出にて　山中杏里
　段々畑に紫雲英咲くなり　算
ぽっかりと湯殿に春の満月が　杏
　いつもの枝に鴉二三羽　算
念入りにハーレー磨く大男　杏
　宿の灯りのちらちらと見え　算
週刊誌恋に狂ふを書きたてる　杏
　舞台と共に終る道行　算
好物の夕張メロン届きをり　杏
　読経の声の聞こえ来る庭　杏
月光に濡れてひかれる鬼瓦　算
　壁の隙間に蟋蟀が鳴く　杏
紅葉山自家発電の村に住み　遥
　インターネットでショッピングする　子
初孫を抱きて花にVサイン　月
　園遊会はうららかに過ぎ　算
春疾風列車ダイヤも大乱れ　算（ナオ）
　集団登校手をつなぎあひ　か
定年となりて碁敵またも増え　遥
　背筋のばしてラヂオ体操　秋
冬日あびいつしか二人寄り添ふて　か
　思ひのたけを告げられてをり　遥
君がためレシピ片手にハンバーグ　秋
　机も椅子も渋好みなる　算
小鳥来る小さな森を残す街　か
　ショパンの曲を復習ふいちにち　秋
月流るインダス川の旅の宿　秋
　色葉の奥に美術館建つ　秋
はれやかな（ナウ）宴の席に今年酒　遥
　テレビジャックはいまやイチロー　遥
アナログが好きと拘り黒電話　秋
　シャネルのスーツ着こなせぬなり　遥
花咲きて昨日に変はる山の嵩　秋
　陽を遊ばせて芹田青々　か

平成十三年一月十三日首
平成十三年二月十日尾
（於・東海村舟石川コミュニティセンター）

歌仙『煉瓦蔵』

平成十三年三月一日首
平成十三年三月二十八日尾
（於・東海村・舟石川コミュニティセンター）

銀杏のあまた落ちたり煉瓦蔵　根本美茄子　捌
　月影ゆるる庭の引き水　安島茨穂
師の賜ふ励ましの文身にしみて　根本美茄子
　マドレーヌ焼く午後のひととき　舟生笙風
退屈な猫は炬燵で丸くなる　上条洲紅
　宿の本道抜ける除雪車　宮本茂登
Eメール昼夜を問はず世界馳せ　茨
　ベストセラーの本籍は何処に　茂
さりげなく交はす握手の指柔く　美
　実は君がと打ちあける彼　笙
天秤にかける妻の座恋心　洲
　農地整理を畦に見廻る　美
汗かいてダム計画を潰す知事　笙
　晩夏の風を楚歌と聞くなり　茂
大仏の御手に遊べる寺の鳩　美
　園児を乗せて縄電車発つ　笙
初花とふくらむ蕾いとあかく　茂
　裾よりのぼる山国の春　洲
雨戸繰り雀の巣薬見上げいる　茨
　同期の出世あれよあれよと　茂
いつの間に油揚さつとさらわれて　笙
　橋竜のあたり急に騒し　美
夕立に密談の声高くなり　笙
　青葦そよぐ小さき舟小屋　洲
道行きのもつれ舞台は暗転に　美
　襖のかげに鼠潜むか　洲
乳房の手そっと外して寝返りぬ　茨
　萩の一むら月に暈あり　洲
宅配で敬老の日を済ませをり　茂
　赤いリボンのワイン爽やか　笙
ご懐妊電光板の文字おどり　美
　蘭・蘭・蘭とスケートボード　茨
ショーウィンドウブランド並ぶ五番街　洲
　春雨の中傘をまわして　笙
天上の花に届けと肩車　茂
　青信号に燕スウィング　美

歌仙『人間に襞』

都市に壁人間に襞汗流す　狩野康子捌
　球音響く炎天の下　狩野康子
飴細工手元から鳥産まれ出て　浅野史郎
　古き簞笥に眠る千代紙　山田史子
欠け初むる赤銅色の月の光ヶ　浅野光子
　葡萄の種を飛ばしっこする　谷田部弓子
ウ海賊船吃水深く戻る秋　中村孝史
　タトゥシールを貼って意気がり　佐藤千賀子
妙齢の美女のくちびる誘うかに　弓
　子供のもので占める物干し　郎
陪審員あっけらかんと別室へ　郎
　慈悲の水瓶百済観音　孝
寒満月おどりだすよに尾根の樹々　康
　立ち小便で雪に字を書く　郎
列島のコンクリートの腐れだし　弓
　辺地医療に懸ける老医者　千
散る花を眼鏡で受けて佇ちつづけ　光
　私の庭に姫虻の来て　史
ナオ復活祭隣人また住み替る　千
　三角山にはぐれ雲浮き　光
斜めから見るゴッホの絵淋しかり　郎
　留学先を決めたひとり児　孝
オリンピック金銀分けるタッチの差　康
　濡れるにまかす夕立の中　郎
毒になり薬にもなる男いて　弓
　両性具有の遊ぶ迷宮　郎
オーボエのラ音で楽の始まりぬ　枝
　価格破壊に片手上げたり　枝
月清か直立不動の意志を持ち　裕
　風つつみこむひと叢の萩　康
脂のるもどり鰹の青き鰭　洋
　カクテル揺らし孤独飲みほす　郎
ロッキングチェアーに憩う母の在り　光
　蜑屓の宿に猫が待ってる　枝
尖塔を遥かに望む花の道　枝
　うららに渡る夢のかけ橋　洋
　　松ノ井洋子
　　田中裕子
　　佐藤千枝子
　　執筆千枝

平成十二年六月二十五日首
平成十二年九月十九日尾

（於・丸辰）

《東京・未来図連句会―その一》

歌仙　『切株に座す』

原田千町捌

切株に座すれば小鳥ふえて来る　原田千町
落穂の粒を乗せる掌に　野中広司
フラメンコ月の光の街角に　須賀一恵
靴の片っぽ階段の下　平野美子
脈々と大甕作る家系なり　延平いくと
湯豆腐吹けば名句生まれ　恵司
連れ立てるその足音はお十夜　恵美
日本シリーズ王と長島と　恵司
化粧する男と一緒アルタ前　美恵
焼けぼっ杭に火を付ける役　美恵
打ち水のあと縁先に土匂ふ　美恵
酒に茗荷の三杯酢よき　恵司
だんじりに月を浴びつつ蹤いてゆく　美恵
痛い痛いとぼやく足腰　恵司
筑波にもノーベル賞の栄誉あり　美恵
卵ケースでつくる王冠　恵司
鬼の出る昔咄を花の下　恵美
じいわじいわと春蟬の声　恵司
島と島つなぐ大橋陽炎へる　恵司
大統領選やっと決着　紅露ゆき子
ケイタイは家へ電話をかけるだけ　恵美
鍵の隠し処絨毯の下　美恵
調へる媚薬に阿片公を待つ　恵美
反魂丹に二世を契りてゆ　恵美
少子化の進む種なし枇杷食めば　恵美
杖を引きつつアッシジの道ゆ　恵美
シャガールの贋作描かす骨董屋　美恵
汽笛のようにぴようと鳴く鹿と　美恵
月今宵北の湖畔の宿にあり　恵美
村で試すは新の葡萄酒ゆ　恵美
乞食も神も仏も足袋履かずと　恵美
これ見よがしの英字新聞ゆ　美恵
ペルシャ猫グランドピアノを定位置に　美恵
宅急便で届く浜焼き　恵美
花ちらら黄泉平坂夢に越え　恵美
青きショールのふはと暖かゆ　恵美

平成十二年十月十二日首
平成十二年十一月十四日尾

（於・滝沢）

『町淑子さん追悼』

脇起り　銀砂灘

炎昼や陽の粒とばし銀砂灘　　原田千町捌
開く扇に香る白檀　　町　淑子
フラメンコ足踏み強く鳴らすらん　　須賀　一恵
小さき靴の干してある軒　　紅露ゆき子
月今宵詩は一行を持てたりる　　平野美　子
古酒汲みかはすてびねりの杯　　延平いくと
秋深し竈のけぶり吹きおちて　　幸喜みゑ子
またしゃらしゃらととめどなき嘘　　野中広　司
ぬきさしのならぬ現場を抑へられ　　原田千　町
クローン人間だとは知らざり　　一恵
猫舌のしばらく待って匙をとる　　ゆき子
うち広げたる羽織反物　　美子
くっきりと月中天に恵比須講　　広司
世界に馳せる野茂とイチロー　　みゑ子
縮尺の富士原宿の歩道橋　　一恵
ふはりと風に蝶の訪れ　　ゆき子
名を問へば花と答へて消え給ふ　　美子
いと面白の弥生狂言　　千町
みゑ子

平成十三年三月二十日満尾
平成十三年五月十七日尾（文音）

《松山・木曜会》

歌仙

『茣蓙敷けば』

青野竜斗捌

茣蓙敷けば一家の城よ花万朶　青野竜斗
しゃみや太鼓に浮かれ蝶々　荻山玲幸
縁側にまどろむ猫のうららかに　小池郁子
母愛用の絹のスカーフ　菅野茂美
澄みわたる望月賞づるめがね橋　玲
焼き松茸のほのと匂へる　竜
重陽の宴寿ぐ京の宿　茂
電子メールに溢る想ひを　郁
結婚を決めかね心只ならず　竜
総裁選の出馬ためらふ　玲
とつぜんの地震瀬戸内を総嘗めに　郁
期待に応へ打ちし新庄　茂
団扇手に散歩の姉妹月に映え　茂
祇園祭の街の賑はひ　竜
退院の見通しもなき生活にて　玲
極点めざし故郷発つ人　竜
またしても景気下向き桜散る　郁
小川の底に蜷の這ひ跡　玲
彼岸会の梵鐘を撞く昼下り　竜
土を袋に去りし球児ら　茂
大阪にUSジャパン開業す　郁
毛皮のコート投げ売りの店　竜
みちのくは雪囲ひもし冬仕度　玲
気のむくままに歩く畦径　郁
笑み交はすデイサービスの迎へバス　茂
共白髪まで添ひとげし妻　玲
墨染めの衣で過ごす寧き日々　茂
低き金利も諦めの域　竜
眉月の懸る天守の更けゆきて　竜
道標のそば赤カンナ燃ゆ　郁
酒林軒に吊り下げ古酒も売る　玲
募金めあての油絵を描く　郁
おどり子の夢をふりまくオペラ劇　茂
太公望は波止にひねもす　玲
駆けぬける愛犬の背に花ふぶき　茂
声ばかりなる薮の鶯　郁

平成十三年四月三日首尾

（於・松山市・白寿荘）

歌仙『詩嚢まで』

透かし見る卵のなかの冬はじめ　　喜多さかえ捌
　霜柱立つ畑中の径　　村田治男
長距離のアンカー拍手の渦にゐて　　青島ゆみを
　深海水をぐつと飲み干し　　藤岡よし子
屋上のペントハウスに月しづく　　小西澄子
　拡大鏡に閲す「邯鄲」　　小津睡心
さんたまり・りありありあと鐘冷ゆる　　杉山壽子
　ヘブライ系の血筋確かに　　喜多さかえ
誰よりも熟れたる君の唇盗らむ　　壽子
　初体験の襞を打つ雨　　治男
鈍行の旅アブサンと葉巻の香　　よし子
　彼奴の綽名天才バカボン　　睡心
大らかに母なる牛は眼閉づ　　澄子
　核ふところに玉蟾の汗　　ゆみを
粒々の苺ゼリーを六等分　　壽子
　バーゲンセールせめて生甲斐　　よし子
花吹雪すつからかんの詩嚢まで　　治男
東風軟らかに夢をなぞれる　　睡心
心して歩み出すなり大掃除　　壽子
　渡岸寺仏の爪先の反り　　ゆみを
もの言はぬ電話に黙つて応へをり　　さかえ
　けふのステージコクトオの役　　睡心
短日の裾より暮るる朝熊山　　よし子
　無罪判決ほたん鍋とは　　治男
千代紙を繋ぎつなぎて情の輪　　壽子
　そばかすメリーすぐ赤くなる　　さかえ
右の肘ばかり伸びちやふ絹パヂヤマ　　壽子
　そしてそれから看板となり　　治男
満月を置き去りにする曲り角　　壽子
　出会ひがしらに鵙の高鳴き　　よし子
がき大将見えなくなつた葛が原　　睡心
　ネガの裡には釦転がり　　ゆみを
あるときの予定は未定ブラジリア　　壽子
　あちらこちらに穴を出る蛇　　治男
杉山の明るむところ花万朶　　澄子
　宙うららかに飛翔してゆく　　よし子

平成十二年十一月二十五日首
平成十二年十二月十九日尾

（於・いせトピア）

《相模原・八千草連句会―その一》

歌仙『王様クレヨン』

山元志津香捌

ガーベラや王様クレヨン十二色　山元志津香
風船虫の遊ぶ川底　藤原りくを
通販の健康食品予約して　中村澄子
ばさりと開く世界地図なり　渡辺孝子
待宵の月へオカリナ吹く青年　志
芸術祭は準備ばんたん　澄
神留守の羅漠の酒盃欲しき午後　を
春日局化粧の間とや　平野きぬ子
忍び逢う痛みを知っている小指　志
鍵を渡せば今生の縁　を
ひたすらに轆轤静かに廻す人　澄
減反の田に夢干からびる　き
翌檜（あすなろ）の梢にやさし冬の月　澄
国会中継興味しんしん　を
ダーバンのあのネクタイを買いましょう　孝
好みのちがう兄と弟　澄
愛犬の綱ゆるめゆく花隧道　を
視界うららに扇面の海　志
卒業期（ナオ）みがき込まれし旧校舎　を
名前うかばず渾名ばっかり　澄
聴診器かけたる医師のでっぷりと　志
エンドレステープ・ラ・カンパネラ　孝
煤逃げの茶房の珈琲極甘に　き
誰と一緒に仰ぐ初富士　孝
女運悪し悪しとぼやき詰め　を
真白き肌を今も忘れず　孝
バカンスのラフルズホテル蘭々々　志
それは御法度ポケットのガム　澄
名月を右に左に環状線　を
縮緬波を立てて雁落つ　き
はく（ナウ）・すばしり・おぼこ・いな・ぼら・出世魚　き
マラソンランナーあっと過ぎゆく　を
窓越しのニコライ堂の鐘かすか　孝
パン焼く匂い部屋中に満ち　志
花大樹病知らずの夫は喜寿　孝
陽炎いしずか遠州の庭　き
平成十三年五月二十五日首尾　を
（於・相模原市大野南公民館）

歌仙『縞馬の』

かげろいて縞馬の縞ほどけおり　晴子
　せせらぎの音もゆるむ弥生野　厚子
藍皿に盛りし青ぬた酢が利きて　英子
　エアロビクスにはげむ母と娘　晴子
上り月薄雲脱いで匂やかに　厚子
　夕顔の実のぱちり爆うつ　晴子
濁り酒（ウ）にごれるを注ぐゴブレット　英子
　ウェディングドレス和紙仕立てなり　晴子
口髭の長身の夫頑固者　厚子
　擬装離婚と噂広がり　晴子
政局もおんな大臣（おとど）のかしましく　英子
　二十五億の宇宙への旅　晴子
あおあおと月の涼しき珊瑚礁　厚子
　蛇皮線熱くちゅらさんの唄　晴子
免許証書き替え急ぐ期限切れ　英子
　飛鳥の秘仏半眼の笑み　晴子
碑の除幕終えたる花の虹　厚子
　ベイブレードの春へ渦巻き　晴子
小綬鶏（ナオ）の雛ちょと来いと御披露目し　晴子
　お役大儀と古い写真機　厚子
なんとまあ調剤薬店筋向い　英子
　シックハウスで今日も欠席　森一枝
雪投げのあの子も瞳だけ光らせて　厚子
　若狭の蟹がとどく頃あい　厚子
折り畳み自転車軽し組み了わる　晴子
　十七歳の恋は助教授　枝子
知らぬ間に相合傘も破れきし　晴子
　ワープロ廃れ買うに買われず　厚子
唐辛子吊るす白壁夜々の月　枝子
　おかまこおろぎ世を覗き見る　晴子
自画像（ナウ）の岸田劉生肌寒し　香子
　クロワッサンで朝の食卓　厚子
胡同（フートン）を溜達（リューター）と人の列　厚子
　少女の髪を結ぶ汕頭（スワトウ）　枝子
花前線山河へひかり置いてゆく　枝子
　浅間祭に汲みし名水　香子
平成十三年四月十五日首　英子
平成十三年五月十四日尾

＊胡同（フートン）…北京の路地のこと
＊溜達（リューター）…散歩のこと

（於・相模原市大野南公民館）

半歌仙　『鳶の空』

水谷純一郎捌

耕してそれから先は鳶の空　　水谷純一郎
　雪解の水の洗う石床　　浅野黍穂
リビングの盆梅凛と咲き満ちて　　水谷純一郎
　一筆箋をすべるペン先　　浅野黍穂
雲の幕するする上がり小望月　　水谷純一郎
　運動会の帽の遊べる　　浅野黍穂
数珠玉のぽっけに弾む塾の道　　水谷純一郎
　しまなみはるか多々良大橋　　浅野黍穂
かいま見るオードリーなり匂い立つ　　水谷純一郎
　画家の卵の恋の日めくり　　浅野黍穂
ご破算に願いましてはピアニシモ　　水谷純一郎
　郵便貯金やめようと言う説　　浅野黍穂
寒月の湯の町に入る救急車　　水谷純一郎
　携帯電話落とす悴　　浅野黍穂
勤行を聞いているのか天使魚　　水谷純一郎
　ひらりと躱うつそみの夢　　浅野黍穂
葛城の廃バスに栖む花の季　　水谷純一郎
心祝いの春の角樽　　浅野黍穂

平成十三年四月満尾

《横浜・瑶沙連句会―その一》

半歌仙　『石地蔵』

土屋実郎捌

石地蔵一夜あくれば花衣　酒井久志
新入学児急ぐ畦道　小張昭一
軒先の雀の雛の気になりて　今村苗
携帯電話メロディーで呼ぶ（まろうど）賓の白髪光る月のかげ　戸谷是彦
早稲酒ひとり飲むべかりけり　坂田武彦
芒原見晴らす茶屋の床机台　土屋実郎
未だ来ぬ人の心疑がひ　公一
六条の御休息所物狂ひ　苗
狐火燃ゆる回廊の先　志
湯豆腐のもめんかきぬか迷ひおり　郎
選挙迫れど入れる党なし　一
南北の首脳会談ピョンヤンで　彦
夏負けに効く薬あれこれ　志
大家族茅の輪くぐりて仰ぐ月　郎
ワゴン車買えと勧むセールス　一
乗っ込みにリュッククーラー積み込んで　彦
黄水仙描く色の鍋島　苗

平成十二年四月十一日

（於・浦高同窓会事務所）

半歌仙　『梅　雨　寒』

戸谷是公捌

梅雨寒の都心に四たり連句の座　戸谷　是公
　遅参を詫びる汗の宗匠　坂田　武彦
駆けつけの冷やしビールを飲み干して　小張　昭一
　潮の匂の強き大川　今村　苗
月の出に大道芸の店仕舞　苗公
　ふかしたばかりの藷をふうふう　土屋　実
運動会組代表に選ばれて　実郎
　草の褥の誰をまつらん　郎
人思ひやせる胸にも錠を挿す　郎
　出すあてもない文を書きつぐ　苗
温室に和蘭洋蘭ひしめける　彦
　迷子の鯨月あびる浜　公
苛めっ児苛められっ児仲直り　郎
　半世紀ぶりピョンヤンの笑み　一
長病に神も佛もあるものか　郎
　雲に向かって投げる速球　苗
故郷の母より届く花便り　公
　日の暮るるまでひばりさえずる　彦

平成十二年六月十三日

（於・浦高同窓会事務所）

歌仙『藍文字の』

福島新吾捌

藍文字の酒徳利に梅一枝　　福島時子
うつらうつらと春宵の夢　　今井楊
龍天に昇る勢い望まれて　　臼井久子
パソコン修行孫が手ほどき　　内田たづ
いつの日か月にいこうと言われても　　楊
杜はすかいに飛べるむささび　　磯直道
巡回のサーカスじんた秋の里　　野坂民子
ジェルソミーナのぬれた涙目　　楊
あの時に恋の告白なぜしない　　直
あたら才女のながめせしまに　　久
川流る宇治十帖はお茶どころ　　時
木鐸打ちて人気なき寺　　矢口美穂子
凍ての月仲たがいせし兄想う　　高山佳子
雪見る旅の列車待ちつつ　　直
苦吟して句帳はついに白きまま　　明石潤子
御馳走たべて高脂血症　　楊
我が庭に古木の花が散り敷きて　　井口昌亮
あるともみえずゆれる糸遊　　福島新吾
街道に名代煎餅屋虻が飛び　　時
ふと耳にする訛りなつかし　　潤
朝ドラのシングルマザー元気よく　　楊
亭主別れてゴミ袋出す　　た
いつの間に親友となる大鴉　　直
雨しとど降る卯の花垣に　　美
夏潮を睨むシーサー口をあけ　　佳
紬の上下奮発せんと　　佳
眼鏡かけじっと数える○の数　　楊
生きてあることこそ煩悩のあり　　久
湯煙をかき分けのっと望の月　　美
風の盆とて胡弓朝まで　　た
新そばと柚味噌で猪口をかたむけつ　　潤
床にかかりし隷書のお軸　　た
置物のように古びて母在す　　楊
謡のテープくり返し聴き　　直
花あかり亀万年のめでたさに　　時
トリコロールの風船の束　　佳

平成十二年二月十日首
平成十二年六月八日尾
（於・世田谷区代田区民センター）

歌仙『新涼や』

新涼や白壁蒼き朝の海　福島新吾捌

浅黄の空に淡き残月　福島時子

籠背負い茸狩の人急ぎゆき　今井楊子

風にのりくる声の賑やか　楊

次々と並び立ちたる吟醸酒　矢口美穂子

湯気の向うに煮ゆる河豚鍋　高山佳子

老友と冬のシベリア語り合い　野坂民子

何時も終わりは年金の額　楊

低き雲ノーベル賞が吹き飛ばし　民

同じ肩書夫喜び　内田たづ

女房は昔かわらぬ粗忽もの　臼井久子

釣しのぶには洗濯のピン　楊

短夜の月影ゆるる舫い舟　時

犬のおかげの近所づきあい　時

腰痛にあのハリ利くとすすめられ　楊

仕出し弁当菜飯田楽　福島新吾

花の下リズム正しき鼓笛隊　時

殿様蛙ギョロリ見まわし　民

土(ナオ)ならし遺跡をつくる神の人　美

浅き夢みて酔うこともなく　佳

戀の字はいとしいとしと言う心　久

ハートのシール包紙にも　新

何でもがコレクションなる時ありて　子

焚火に投げる憂い三つ四つ　久

景気よくなったが嘘の年の暮　佳

戒名料はお志と　時

西方に瑞祥見えぬ雨もよう　美

ぶつかりあって糸瓜ぶらぶら　た

光淋の漆の文箱月と雁　時

文化の日には美術館にて　時

足(ナウ)のばし大江戸線で電気街　楊

ロボットもありデジカメもあり　佳

偶然に成功すると子はわめき　佳

斑雪のこりし薬ぶきの家　民

早咲きの花を求めて南(みんなみ)へ　潤

世紀を開く陽炎の道　た

平成十二年九月十四日首
平成十三年二月　八日尾
（於・世田谷区・代田区民センター）

歌仙『白牡丹』

白牡丹咲き極まりて雨兆す　磯　直道捌
　親を待ちたる軒の子燕　磯　直道
曾祖父の威厳ある笑み色褪せて　佐渡谷ふみ子
　幼き日々を思い出す時　柴田美代子
月光ゲに金波銀波を返す浜　笠原悦子
　鉦叩く虫舟底を打ちて　小川廣男
ウ鐙屋と本間の殿が古酒交わし　躰中　縫
　狂わねばこそ一期は夢よ　縫
人数も時刻も入る領収書　美
　留守番電話疑える妻　廣
うら若き後添え娶りうろたえる　縫
　ゴリラ獣舎はてんやわんやで　悦
枯蔓のからまる屋根にかかる月　誠
　卓球せんとセーターを脱ぎ　誠子
コーヒーのいずこともなく香りきて　柏村誠子
　見知らぬ町の旅の楽しみ　ふ
教会の鐘にこぼるる花の下　幸子
　鮎の放流待ちかねて居し　ふ
ナオ残雪の嶺々と真向う古里に　光子
　きのうに続く精進料理　美
ドルと円喧騒高き兜町　悦
　余録は袖に虫干しのあと　縫
げじげじを打てば歪みし部屋の隅　幸
　逢ってはならぬ人は年下　ふ
すさむ日々別れの予感よぎりくる　悦
　ベランダにいる猫は居眠り　悦
椋鳥が首を傾げて赤き実に　ふ
　「ちいさい秋」を歌う優しさ　廣
よもすがら分校照らす丸い月　美
　砂場の中に錆びた自転車　誠
ナウギプスとれ友と語らう試歩の道　誠
　おもたき琵琶の抱きごころとも　美
違い棚こけし大小並べられ　悦
　日はうらうらと舞いきたる蝶　ふ
初花を手折りて帽の華やぎし　光
　水の上くる淡き春愁　美

平成十二年四月三日首
平成十二年八月一日尾
（於・読売文化センター川口）

半歌仙　『春一番』

引地冬樹捌

春一番百千の絵馬吹き鳴らす　引地冬樹
大志を胸に祈る合格　緒口義雄
リラ咲けば紺のスーツを匂わせて　岸田和子
鷗と交す携帯電話　坂根慶子
月へ往くキャビンの鏡くぐり抜け　南条巷子
指輪に飾る露のひと粒　水谷常子
ウ長き夜の目つむり弾ける平家琵琶　上野弘子
波底に棲む人魚抱かむ　樹
帰さない帰りたくないふたりです　子
卵のなかは光るみどり児　和
芳崖の「悲母観音」を伏し拝み　和
火柱あげる蝦夷の火の山　子
宰相の病状篤き梅雨月夜　樹
魑魅魍魎が呷るアブサン　樹
玄関の自画像ぺろり舌を出し　常
さよならという卻ばかりが　常
松羽目の松青々と花簀　義
燕子再来朋故再会　樹
平成十二年三月十四日首　慶
平成十二年四月十一日尾　慶

（於・稜光倶楽部・六本木）

連句14　『七味や』

松井文子捌

七味やにしばらく時雨やりすごす　辻　斉
池埋めつくす落ち葉はらはら　田中イスズ
我を待つダーバンの街おだやかに　河合シズエ
鳩にパンやるデートスポット　矢崎　藍
誰彼に愛を告白躁のとき　由川慶子
ポニーテールのギター弾く人　斉
大物を狙い竿出す月の宵　松井信夫
佐渡をめぐりて新走り酌む　斉
御陵（みささぎ）の扉も古りし八百年　文
燃え立つようにサルビアの赤　藍
日本丸借金背負いどこへ行く　藍
ロボット犬が首をかしげて　シ
母となりとことん花見のお弁当　シ
子らに幸あれ野べの春風　藍

平成十二年十二月二十一日満尾
（於・竜神公民館）

半歌仙　『芽吹くもの』

長坂節子捌

芽吹くもの身内に秘めて雑木山　長坂節子
友と連れだつ囀りの中　由川慶子
春惜むカフェのひとときなごやかに　塚本益美
予防注射は犬もいやがる　宇井美和子
滅茶苦茶の語源きいたり使ったり　小泉和江
夏枯れの宿海照らす月　近藤とみ子
縋るものに汗の胸かすいい男　節和
髪をまさぐる白い指先　松井文子
留守電の亡き夫の声まだ消せず　益と
天まで届け聖樹キラキラ　高見智子
みないっしょお袋の味レンジでチン　和
秋の窓辺にほおづえをつく　智と
月細くなかぞらにあり風なぎて　細川美代子
陰陽師とてぬくめ酒酌む　文
世の中のローン地獄が口をあけ　江
共同購入消火器を買う
嫁さ来て花は万朶の過疎の村
南吉家訪う遠足の子等

平成十三年二月十五日満尾

（於・竜神公民館）

歌仙『無告の市民』

狩野康子捌

蜻蛉や息のかからぬ距離保つ　狩野康子
　暮れゆく沼に揺るる半月　中村孝史
秋闌くる筆持つ絵師は正座して　田中裕子
　広き額に赤きバンダナ　北寿雄
アーケード通り抜けてくギターの音　佐藤千賀子
　側溝の内木の葉しずまる　高橋良雄
着ぶくれて一言居士の鋏研ぐ　小岩秀子
　寺山修二の声の抽斗　堀越満里子
髪ひとすじ燃やして恋の息子待つ　満
　朝の別れを猫は見ていた　康
もぎたてのトマトの味は地中海　良
　神殿までは金雀枝の咲き　千
月涼し眼鏡のくもり拭きとれば　秀
　シニアパワーの世を覆いたる　寿
次世紀は無告の市民動き出し　裕
　山ふところに新しき村　史
花満ちてダムの歴史を遠くせり　史
　ふらここ高く帽子飛ばされ　秀
四月馬鹿奥歯に力入れしまま　千
　グリーンジャンボに夢を託して　寿
指ヶ谷町赤門も過ぎ模擬試験　良
　文学書からクレゾール臭　裕
西日さす奪衣婆の舟客もなし　千
　外人社長の辣腕に功　史
美しき児を産むことが条件で　史
　不定愁訴に不貞願望　康
政界のダストシュートは満杯に　寿
　四季折々の峰を借景　良
有明は蒼い時間を引き連れて　満
　地芝居のため作る小道具　秀
サムホールおさまりきれぬ石榴の実　裕
　オールドパーが饒舌にする　寿
見解の相違に候北枕　満
　遊印を押す空の片隅　康
散る花のふわりふうわり風まかせ　千
　土手の煩白光源となる　執筆

平成十二年九月二十八日首
平成十三年三月二十二日尾

（於・パル・長町）

歌仙『鬼やらい』

平成十三年三月二十三日首
平成十三年四月二十三日尾
（於・佐藤宅）

伐採の裏山低し鬼やらい　佐藤千賀子捌
　太き柱を照らす冬の燈　狩野康子
操縦桿握り祖国をあとにせん　足立かほる
　栞の隅に走り書きあり　佐藤千賀子
人影の絶えて良夜をほしいまま　康
　葡萄酒醸す匂い芬芬　か
ひよの声古地図の川は流れかえ　千
　すんなり伸びた脚がくせもの　千
抱かれて爪に髑髏のペンティング　か
　見知らぬ土地でクローン誕生　康
大店を閉じる噂でもちきりに　康
　寛永二年の創業という　か
船霊を持て余してる夏の月　千
　スパイ小説好きな秘書官　千
懐の銀時計の捻子転げ出て　か
　鳥獣戯画の如しこの世は　康
花の雨ひとっ跳びする水溜り　康
　入学式は傘の行列　か
春昼の砂丘に生きとし生けるもの（ナオ）　か
　嚙ってみれば未だ半なま　康
少数派多数派そして印象派　千
　色一刷毛の仮想現実　か
追悼の詞きいてる箱男　康
　帯状疱疹寒の最中に　千
寝返りの冷きベッドまさぐりて　か
　何やら色香増した異母妹　康
渡来人その是非めぐる論争は　千
　ランチタイムにちょっと立ち読み　か
白月は空を否みて傾きおり　千
　人形浄瑠璃囃す鈴虫　康
うかうかと庵を過ぎぬ去来の忌（ナウ）　千
　リースに限るベビーシートは　千
駄菓子職ひとすじにきて胡麻ねじり　か
　夢の景色に隕石が落ち　康
梅に桃地平に花をこきまぜて　康
　ぶらんこをこぐ髭の村長　か

二十韻　『秋ざくら』

小野寺妙子捌

犬猫の鎮魂塔や秋ざくら　小野寺信一郎
白露に裾を濡らす細道　鈴木文男
観覧車動かずやがて月載せて　小野寺妙子
母子並んで鯉に餌をやる　奈良榮夫
鶴ヅ嘴の跡をとどめて切通し　中村記康
地震強ければ彼へケイタイ　郎
不意の客寝乱れ姿気にしつつ　子
コルト向けられ愕然とする　男
キャンプする中州を襲う夏出水　夫
獲物銜えし裴翠の発つ　康
ナオマンションの最上階に住みなれて　郎
隣家近くて遠き仲の世　男
筒井筒幼馴染は外ツ国に　子
畑酒飲んで語る胸中　夫
露天風呂顎まで浸り寒の月　康
我が代までの鍬を洗えり　郎
飽ナウ食の心飢えたる民増えて　男
尊徳像に山焼きの畑　子
教室の子等はにぎやか花の雨　夫
海辺の窓に映るかぎろい　康

平成十二年九月六日首
平成十二年十二月二十日尾（文音）

歌仙『日本丸満帆』

和田忠勝捌

木谷英子
和田洋子
椴本良之助
和田忠勝
笠松以代子
佐々木けん
大駒泰子
大駒誠一
中井淑子
栃木やよひ
玉生うめ子
中井啓輔
辻松雄助
英ひめ洋

日本丸満帆にして夏祭り　洋
　風と遊んでアイスクリーム　ひ
探鳥会河鹿を鳥と言うがいて　英
　濡れたシューズを冠る竹垣　雄
月今宵明るく萩の道照らす　洋
　夜学の児らが二人三人　淑
すぐ(ッ)切れる十七歳は霧の中　泰
　あやうげに見るタレントの恋　英
湯上がりの細きなで肩引き寄せる　雄
　結末みずにわかる筋書　輔
衆院選入れたい人はいるかしら　英
　曰くつきにて買いを控える　代
木(ず)菟(く)の耳月に立てたり眠る森　一
　あれは確かに山姥の声　ひ
能舞台刻む一足何十里　洋
　百難隠す起居宜しき　め
別宅は溢れんばかり花しぐれ　ひ
　プリズムに見る春陽の虹　英
遅(ナオ)き子に幸多かれと雛選ぶ　淑
　タカラジェンヌにあこがれし夢　ひ
ニューハーフ女っぽいのが玉に瑕　英
　戒律破り果ては駆け落ち　雄
ウオッカの青き炎に捨てしこと　洋
　ザイルは謎に厳し雪山　洋
日脚伸ぶ結跏趺坐せし仏達　泰
　ヨガ極めんとインドツアーに　泰
口癖の死ぬ気でやるが入院を　淑
　介護のつもり鎮座する犬　助
偉大なる太陽を月蝕みて　助
　天の岩戸の虫の音をとめ　英
問(ナウ)いただす爽やかなりや神の国　雄
　昭和の御世も遥か遠くに　輔
縮緬も紬も知らぬ母が増え　英
　ファストフードにラージコーヒー　代
花の下タイガーウッズ仁王立ち　一
　フォローに乗りし蒲公英の絮　ひ

平成十二年六月四日首尾
（於・東小コミュニティハウス）

歌仙『もう師走』

和田洋子捌

世紀末あれよあれよともう師走　大駒誠一
　ツリー点灯困の街　栃木やよひ
寒鴉今朝も我より強く居て　辻賢次郎
　ものはためしと飲みし青汁　和田洋子
トンコリの流るる北の月淡く　玉生うめ子
　木の実の独楽のころぶ縁側　中井啓輔
紅葉忌日を数えつゝ病癒え　郎
　綺麗好きなり兄の嫁さん　ひ
粋筋の起居に鼻の下がのび　郎
　遺産目当てと噂口々　一
税法の改正なるを待ち兼ねる　一
　ロースクールを急ぎ新設　辻松雄
花火止みしばしの間合い月の土手　郎
　浴衣で走る子等の歓声　輔
豆みそを添えて夕餉の酒を酌む　め
　二人の出合い禅宗の門　郎
さわりなく挙式は丁度桃の宴　雄
　真珠育む海のあたたか　洋

ナオはなたれし仔馬のはねる草の原　雄
　モンゴル遥かとどく映像　郎
とりとめも無きを語りて温泉宿　め
　派閥の論理洋を問わずに　郎
京雀訳あり顔にうなづいて　輔
　メールの相手選び損ない　郎
ひょんな事獏の枕の縁となり　一
　高座の師匠切り絵鮮やか　雄
手拭に藍濃き紋の染め抜かれ　洋
　稲刈り終えて広き畦道　め
月の山ザイル束ねる無精ひげ　輔
　分け合って食む硬き干柿　郎
ナウ神の手で石器を探す町の秋　雄
　プレーキ効かぬ自転車を繰り　洋
見とれたるパントマイムの身の軽き　輔
　ボリューム低くひびくバラード　雄
思い出す人皆優し花古木　洋
　陽炎越えて老も若きも　雄

平成十二年十二月三日首尾
（於・東小コミュニティハウス）

※トンコリ…アイヌの楽器、琴の原型

歌仙『ものの芽に』

和田忠勝捌

ものの芽に雨のしずくの宿りけり　和田洋子
分譲団地鳥交る軒　桜本良之助
雛仕舞う皺の掌武骨にて　佐々木けん
我家自慢のだんご練り上げ　辻賢次郎
無重力宇宙船にも月の差し　木谷英子
少年の夢燃えるかまつか　和田忠勝
ヴァトリエに終日籠り秋惜しむ　中井淑子
フリータイムは成行のまゝ　中井啓輔
二人してオーロラ青き船の旅　栃木やよひ
夜明けに淹れる旨きコーヒー　玉生うめ子
石を置く指悩ましくダメを詰め　洋
老人集い禅の問答　淑
黙々とパットの素振り夏の月　助
ビール一杯喉ならし飲む　ん
心電図ついに宣告「やせなさい」　郎
赤字の苦労おしゃれ工房　淑
花ひらり追うようにしてまたひらり　ん
水明如来うららけし頬　洋
ナオ母と子の姉さんかぶりお茶を摘む　ひ
富士の裾野の心地よき風　め
舵を当て前帆もあげて波を切る　辻松雄
しお時なりとホテル直行　淑
新世紀生きる女性のパンと薔薇　郎
ためつすがめつ飽かず眺める　輔
中たり券持つ手ふるえる宝くじ　洋
節季の払い取らぬ釣り銭　英
かき餅に豆落ちし跡二つ三つ　郎
奥歯の揺るぎ舌で確しかめ　ん
盃の月乱さぬようにそっと飲み　雄
鹿増えすぎて論争の種　ひ
ナウボストンの周りの紅葉誰見るや　ん
着物の裏地濃淡に凝る　淑
教会のパイプオルガンおごそかに　英
心のくもり徐々に融けゆき　雄
花篝大観の筆火を弾く　郎
しゃぼん玉から世界飛び出す　ん

平成十三年三月四日首尾
（於・東小コミュニティハウス）

歌仙　『斎藤八千代雅姉追善』

雪女郎

恋捨てて雪にもどりし雪女郎　　八千代仏
　返す踵を追うて寒雷　　光樹
友よりの手書きの詩集かたわらに　　依子
　主自慢の珈琲を挽く　　ヱ
名月が川面漂う船溜り　　和ヱ
　楓紅葉のはらと一葉　　美翠
爽やかにマラソン選手テープ切る　　芙紗
　ウォークマンから好きな音楽　　良風
ミッキーのぬいぐるみ抱き帰郷して　　慧子
　はんなり沈む京の水茶屋　　珠枝
片頬で笑う男にほだされし　　悦子
　円周率は果てしなきもの　　ヱ
風鈴のひと休みする月の寺　　風
　青蛙追い走りゆく子等　　紗
ボランティアしつつ私も癒される　　枝
　いつか帰ろう島の畑に　　悦
花朧八千代の時を刻みいて　　慧
　組み合う肩にこぼる噂り　　翠

衆判

地下(ナオ)たびに法被で勇む凧合戦　　風
　大神宮に積まる酒樽　　枝
計るたび最高血圧不安定　　風
　党利党略席を取りっこ　　ヱ
山荘に松の盆栽「空」の軸　　紗
　琴弾くひとはどんな人やら　　依
狐火にそそのかされて通いつめ　　慧
　未来はいかにバーチャル夫婦　　悦
コンビニにずらりと並ぶお弁当　　枝
　何処へ消えたか二千円札　　翠
若者の集う広場に月上り　　ヱ
　アミ族踊る秋の台北　　紗
残菊(ナウ)の香りを詰めて宅配便　　風
　母の回忌のはやも幾年　　悦
新世紀国の宝は子だくさん　　悦
　波打際で拾う貝殻　　依
花ふぶき花の声とも涙とも　　子
　後姿は陽炎の中　　紗

平成十三年一月十六日首
平成十三年一月十七日尾

（於・中電熱海荘）　　彦坂範子

『良寛忌』

脇起り
文音百韻

衆判（順）

初オ 綾取りの梯子くづしぬ良寛忌　阿片瓢郎
　ゐろりとろとろ聞く童歌　加藤望子
湖の上一番星のまたたきて　倉垣和子
　都通ひの船発ちし後　小林梁
絵タイルの舗道に仔犬とび跳ねて　飯沼三千古
　親代々の珈琲の店　望
月見びとしづかに集ひ来たりけり　和
　紫苑いたはり開くる枝折戸　梁

初ウ そぞろ寒む琴の音はたと止みしまま　古
　栗鼠の黒眼の覗く裏窓　望
ちりちりと携帯電話彼よりか　和
　見出しに釣られ週刊誌買ふ　梁
公園のベンチに憩ふ老ひとり　古
　憶ひ出袋少しづつ解く　望
行幸路のみ熊野詣でひたすらに　和
　紅旗征戎誰が為にせる　梁
眉月を涼しく宿す心字池　古
　今時流行る浴衣ぽっくり　望
日曜の馬券売場の混合へる　和
　色と金とは西鶴の世も　梁
雪洞に文字浮き立てる花の宮　古
　「いろは匂へと」春の風吹く　望

二オ

隅田川浄しと来たりつばくらめ　古
新浄瑠璃をけふ習ひ初む　望
式台の磨きこまれしお玄関　梁
躾きびしき姑と十年　古
方角は巽が佳しと占はれ　和
辻行燈の闇にしばたく　梁
秋遍路人待顔に軒を借る　和
早出の朝を囃すかなかな　望
荷の中に丸き結飯（むすび）の零余子めし　古
嵯峨野吟行師の伴をして　梁
猪口ひとつ古きのれんの店に買ふ　和
やっと逃れし車渋滞　望
凩の夜すがら独身寮の月　古
頓服さめて見たる狐火　梁

二ウ

くり返し婆の称へるなむあみだ　古
スペースシップは便り術なく　望
髭剃りしあとの鏡の薄ぐもり　和
ゆらゆらと棚の上なる弥次郎兵衛　古
窓の向ふに軽き浮雲　梁
自転車の連中先に通しやり　和
袖に残りし冬薔薇のとげ　望
妖精の軽やかに舞ふ雪月夜　古
聖樹の下に眠る三毛猫　梁
噴いてきし煮物の鍋の蓋ずらし　和
魚も青菜も昂きこのごろ　望
故郷の花漸くに咲き初めて　古
くるりと回す春の絵日傘　梁

三オ

陽炎へる長き堤に並び立ち　梁
夢見る未来ひたに語れる　和
駆落ちの昔なつかし侘住居　望
売れ残る空地はビルの谷間ひ　古
ごみの仕分けも夫に甘えて　古
ふるまひ酒にすこし酔ひつ　梁
手囲ひに蛍のいのち明滅す　望
瓜番小屋に洩るるだみ声　古
午下よりの潮目変りし遠岬　和
退院近き杖の足取り　望
負けん気の姉さん女房介添に　梁
契約金は鰻昇りか　古
月の出にとらぬ狸の腹鼓　望

三ウ

本山は会式万燈の夜更けまで　梁
履きなじみたる片減りの靴　古
パン屑を鴎に投げる想橋　望
不倫不倫とあたりうるさし　和
銭湯に浮世の垢を流し合ふ　梁
夕餉支度に急ぐ裏町　望
内職に削り終へたる黄楊の櫛　梁
節穴多き塀が目のまへ　和
誘はるる月の明るさ団扇手に　望
川をへだてて樽神輿ゆく　古
若君に乳まゐらせる下屋敷　梁
匂ふ灯籠つくばゐの陰　望
つとまどろみのまぶた露け　和
身じろぎもせず角落ちし鹿　古

風光り大使双手を高く振り（ナオ）

沙翁喜劇の緞帳派手に

木の間越し西空の映えいろ深む

思ひはおのづ病床の友

三寒を凪ぎてきらめく伊豆の海

ふのりとろりと炊きし冬晴

ランドセルどさりと投げてもう消えて

おばあちゃんちのおやつ大好き

手作りの餡は秘伝の隠し味

渋茶汲み替へいつかしんみり

懐旧の紐ちぎれたる登山靴

渾名で呼びし仲間あれこれ

月今宵古都の学び舎偲びつつ

世界遺産のまこと爽やか

梁

和

望

古

梁

和

望

古

梁

和

穴まどひ石垣ぞひをするすると（ナウ）

シャッターチャンス逃す一瞬

審判をこづく代打のあられなき

ヘリコプターのめぐる上空

何とまァ海果つるまで真っ平ら

拾ひし貝のうすきむらさき

日帰りの疲れを畳む花衣

春の小川のごとき筆跡

古

望

梁

古

和

梁

古

平成十一年十一月十二日首
平成十三年二月五日尾

《東京・連句〝なな〟の会》

半歌仙　『銀座即事』

土屋実郎捌

ピッコロに俳諧興す戻り梅雨　　村井昭三
　遅参を詫びつつつまむ枝豆　　原田子楓
えごの花連合クラス会果てて　　萩本勝夫
　いづれも元気白髪禿頭　　佐々木英男
月旅行孫の醵金で申込み　　土屋実郎
　ハイブリッド*のメール秋寂び　　楠正三
本郷に下宿屋残りさんま焼く　　村井昭三
　ロケによろしき坂の古井戸　　原田子楓
手には手をとりし昔ぞ懐しき　　萩本勝夫
　嫁より若き後妻迎へて　　佐々木英男
次の世へ己が生きざま語り継ぎ　　土屋実郎
　一圓融合大徳の軸　　楠正三
得度式翌に控えて月冴ゆる　　村井昭三
　年越し蕎麦を親子共々　　原田子楓
ヒトゲノム解読近し四方の春　　萩本勝夫
　潜水泳法復活の兆し　　佐々木英男
若き日に短剣佩きし花の下　　土屋実郎
船の往来霞む江田内　　楠正三

平成十二年七月二十七日首尾
（於・銀座　ピッコロ）

*ハイブリッド…郵便の新しいサービス。

オン座六句　『大正の裸』

浅沼璞捌

一連　大正の裸見せけり桃の花　　高山れおな
　桜よりよく肥えてにこやか　　浅沼　璞
　ぽこぽこと産みし卵は朧にて　　櫂未知子
　崖をころげてゆける鶏小屋　　宿谷晃弘
　伯爵と人に呼ばせて月今宵　　れおな
　従三位ならで芒巻きたる　　未知子

二連　ざくろにも一本の傷与へては　　未知子
　君の言葉が色あせてゆく　　璞
　てのひらをひそかにあはす午さがり　　晃弘
　血圧計を壊してもみむ　　未知子
　とびのりし入道雲は雷帯び　　れおな
　夏鶯の都なるらむ　　晃弘

三連　十字路に置き忘れゐし観覧車　　晃弘
　竜頭なめらかブルドッグ・ソース　　未知子
　サンタナの納豆ギターひきたくて　　璞
　日数かぞふる夢に氷山　　れおな

四連　ローマより嘆きの壁へ舌出せり　　晃弘
　シールを貼って防弾ガラス　　璞
　ペルノーの匂ひをめくるだけのこと　　未知子
　蝶の話に夜もふけにけり　　れおな
　海市まで風に脂粉の混るてふ　　未知子
　母になりたるあの人が住む　　れおな

五連　笑ふときうつむく癖はそのまゝで　　璞
　お面抱へて買ひし綿飴　　晃弘
　初詣この八幡に恩ある身　　れおな
　体言止のやうに餅花　　未知子
　若水を金の柄杓でくみしより　　晃弘
　よぎれて煙をあげる新年　　執筆

平成十二年四月二日首尾
（於・ランドマークタワー　ロイヤルフードコート）

註・脇＝鬼貫『独ごと』、挙句＝眞鍋呉夫『雪女』より引用。

歌仙『枯菊』

芭蕉庵あとの枯菊踏むまじく　小林静司捌
今様に巻く白いマフラー　加藤望子
達磨舩水上バスが追い越して　小林静司
土産はいつも老舗佃煮　高畑自遊
団欒の窓に射し入る月の光　中村洋右
虫の音やがてセレナーデめき　伊藤緑雨
肌寒（ウ）の渡り廊下を湯壺まで　沢木知恵子
入れ黒子（ぼくろ）せる腕のたのもし　梁
いかめしき彼の心はまるでうぶ　望
盃重ねては杞憂を論じ　司
借りまくる国の財政如何せん　遊
定家葛のまつわりし墓　洋
魚跳ぬる瀬音しきりに夏の月　雨
淀みのあたり河童棲むとか　恵
添寝して吾児に聞かせる物語　梁
家系いずれも大器晩成　遊
三囲（みめぐり）の花見帰りにどじょう鍋　望
万太郎句碑あたたかに読む　司
春潮に微笑みいます羅漢岩（ナオ）　雨
かもめ群れ舞う光のどかに　恵
馬停めて城の跳ね橋開くを待つ　梁
王子おしのび帽子ま深に　望
ときめきし胸の高鳴り伝えねば　司
今度は何時（いつ）とすがるカチューシャ　遊
降る雪に野山は白の一色（ひといろ）に　右
湾をとよもす漁の船団　雨
指揮をとる大将は早や卆寿とか　恵
染めた小鬢に衰えぬ意気　梁
今日の月上りつめたり宙天に　望
牧の馬肥ゆ阿蘇のカルデラ　司
竹の春卓袱（しっぽく）たのむ旅の果て　遊
行き交う人の胸のロザリオ　右
モナリザがデフォルメされて店頭に　雨
良いことづくめ嗤う手相見　恵
花吹雪如意輪堂の秘史知るや　梁
稚児粧いて風光るなり　執筆

註1　三囲稲荷神社　墨田区桜橋東　境内に江戸座其角堂もあった
註2　斉藤別当実盛の面影　平成十二年十一月　六日首
註3　和風にアレンジされた中華料理、長崎から流行　平成十三年二月二十日尾　（文音）
註4　奈良県吉野町所在、南朝後醍醐帝勅願寺、楠正行が遺言の歌を遺す

両吟歌仙　『炎昼や』

宇咲冬男捌

炎昼やじっと動かぬやじろべえ　宇咲冬男
　蚊帳吊り草を割きし縁側　川田章夫
夏期講座志を高々とかかぐらむ　冬章
　浮き世さまざま人もさまざま
山の上に明鏡止水望の月　冬章
　遠鹿を聞く古都の路地裏
風炉（ッ）名残若き会主に華やげる　冬章
　忙中閑のＩＴ寵児
フォーカスをされてほんとの愛育つ　冬章
　映画ブームが鄙に静かに
産土の神は今でもうやまわれ　冬章
　柳田国男慕う学究
冬月へ年の用意も様がわり　冬章
　ペットホテルで初鶏が鳴く
関取の隅におけないかくし芸　冬章
　うわさ話を酒の肴に
一斉に花雪洞に灯の入りて　冬章
　疲れ眠れる遠足の子等
春汀異国の壜の流れ着き（ナオ）　冬章
　ノーベル賞に金大中さん
五十年五百羅漢に父探し　章
　トランプ占いスペードが出る
臓器待ち部屋に溢れている玩具　冬章
　静かな曲のながれ涼しき
ひとり身の気安さに来し避暑の宿　章
　趣味が同じで仲深くなり
再婚の自然農法子だくさん　冬章
　カリフォルニアの土地の広さよ
雨月なりベトナム戦士に言葉なく　章
　口閉じしまま熟れる郁子の実
卒寿（ナウ）とはまだ他人ごと秋うらら　冬章
　囲碁も将棋もプロの腕前
風鎮のかそけさ音に猫目覚め　章
　野焼きの煙ふと匂いくる
いきいきと走り出したる花前線　冬章
　田鼠の化してうずらとなれり
平成十二年七月三十日首
平成十三年二月　五日尾　（文音）

歌仙『鰯雲』

鰯雲分けて入りし露天風呂　小野寺妙子捌
　湯気の向うに白き残月　小野寺妙子
運動会年に一度の主役にて　笹川圭子
　小さき文字でポスターに名が　井上せつ子
文庫本読みつつ知らぬ間に寝ぬる　安斎厚子
　定時に止むはつけし冷房　今野福子
ッ退社後はビヤガーデンで大騒ぎ　伊藤航
　指輪と時計みんなはずして　伊藤キヨ子
忘られぬ人が昔の日記帳　坂本浩子
　読経の声にしずむ斎場　圭子
支那を越え印度に至る旅長し　航
　風のおこりて砂塵まき上ぐ　福子
三日月を背に受けながら雪下ろす　航
　囲炉裏の煙鍋の煮え立つ　浩子
手話交え正座して待つ金メダル　厚子
　今も副職感謝状書き　圭子
満員のトロッコ列車に花吹雪　航
　広瀬川辺につばめ群れ飛ぶ　厚子
ナオげんげ田で行きつ転ぎつ遥かなり　厚子
　独り芝居でふたりのわたし　キヨ子
開店をチンドンや告げ廻る街　航
　切れた蜥蜴の尻尾のこして　せつ子
夏季講習志望決めかね参加する　厚子
　歩きながらの携帯電話　浩子
大阪で女闘士は逮捕され　航
　几帳の陰に裳裾かくして　厚子
身に付いた爪を噛む癖いつからか　圭子
　診察券を栞がわりに　圭子
名月を父と見るのもあと幾度　航
　カフェテラスに薊香りたつ　浩子
ソウ秋時雨下校の列を通り過ぎ　圭子
　語り足りないプラットホーム　浩子
今日はまだ灯のつかぬ窓があり　圭子
　和室に集う連句会終え　キヨ子
百歳のいとめでたくて花明り　福子
　岩場に遊ぶ小さき寄居虫　せつ子

平成十二年九月六日首
平成十二年十二月六日尾
（於・若林中央市民センター）

《町田・和光大学》

歌仙『二〇〇〇年度和光連句』

山左右捌

若がえる校舎に春の歌満ちよ　山左右
　おたまじゃくしも踊りだす朝　庵直斎
スイスイと駅を泳げぬビギナーで　餅桜
　煙草の煙空に吹きかけ　虎牛
月のかさ月のうさぎの仕業だね　三菜
　手元の札はすすきの野原　若澤葵
秋風(ウ)に吹き寄せられて北の街　山左右
　彼のおもかげ幼子にみる　速瀬川
砂の城崩したわけは「好きだから。」　遙平
　次の言葉をさらう潮騒　若澤葵
梅雨のあけ縁側に出てかき氷　美奈
　あちらこちらに踊るサンダル　春恵
出目金と水の月とがすくわれて　こだま
　青びょうたんの生物学者　山左右
研究のあとにつつつくきのこ鍋　公雄
「早くおいで」と湯けむりが呼ぶ　江
遠山の花もちらちら見えかくれ　寝図美
遊び人よと肩で春風　夏尾
飛(ナオ)びまわる蝶がみつけた蜜の味　喜美
　にがみ一滴恋の始まり　修
寝言いうくせにもなれて腕枕　志津
　ラッコ子ラッコ波間に消える　庵直斎
聴こえるよ流氷たちのオペレッタ　六角
　満天の星夜空の音符　前発句
あしたにも来るかファースト・コンタクト　山左右
　スーパーマンも普段はめがね　庵直斎
日曜のパパのんびりと充電中　智庵
　メールがまねくやきいもパーティー　六角
金の舟木の葉まみれに空つたう　佐白
　女狐ひそむ銀杏の巣穴　こだま
コンコン(ナウ)と恋のウイルス感染し　快酔
　ついに発売！キューピッドの矢　カムロ
射止めたら二度と逃がすか幸せを　香魚
　いつもは着ないスーツを着だす　青春
スマイルが自分らしさに花添えて　松茶庵
　春の門出を猫も見送る　猫左右

平成十二年四月首
平成十三年一月尾

（於・和光大学共通教養講義）

連句協会支部

連句協会愛媛県支部
支部長　青野竜斗
事務局長　長井實平
〒791-0242 松山市北梅本町甲781-8
(089—976—6182)

連句協会関西支部
支部長　近松寿子
事務局　同
〒567　茨木市北春日丘2—13—7
(0726—23—8817)

連句協会石川県支部
支部長　中田風来
事務局　同
〒929-03 石川県河北郡津幡町字加賀爪ニ3　津幡町役場
(0762—88—2121)

連句協会三重県支部
支部長　村田治男
事務局　喜多さかえ
〒516-0008　伊勢市船江1—9—29
(0596—22—3317)

連句協会埼玉県支部
顧　問　金子兜太・宇咲冬男
支部長　森　三郎
副支部長　磯　直道・白根順子
事務局　福田太ろを
〒363-0025 桶川市下日出谷375—1
(048—787—4477)

岐阜県連句協会
会　長　国島十雨
事務局　伊藤白雲
〒503　大垣市室村町4—156
(0584—73—0774)

連句協会千葉県支部
顧　問　東明雅・今泉忘機
支部長　上田渓水
事務局
〒272-0021　市川市八幡2—8—20
伊藤薮彦方(047—334—5606)

連句協会岩手県支部
支部長　小原啄葉
副支部長　志和正巳　菅原多つを
事務局　沼宮内凌子
〒020-01　盛岡市西青山2—4—41
(0197—46—5164)

連句協会栃木県支部
支部長　中尾硫苫
副支部長　高井利夫・田中きみ
田浪富布
事務局長　富田昌宏
〒329-4406　栃木県下都賀郡大平町下皆川721
(0282—43—2664)

連句協会富山県支部
支部長　志田延義
事務局
〒930　富山市大手5—1
富山新聞社内
(0764—91—8111)

連句協会香川県支部
支部長　渡邉陽行
副支部長　植松晴子・鎌田孝義・廣谷青石
事務局　渡邉陽行
〒764-0033 香川県仲多度郡多度津町青木169
(0877—33—0549)

大分県連句の会
支部長　佐々木均太郎
〒874-0902　別府市青山町2-72
(0977—26—4476)

連句協会広島県支部
支部長　髙橋昭三
事務局　同　上
〒731-0223　広島県安佐北区可部南4—5—47
(082—815—1914)

宮城県連句協会
会　長　狩野康子
副会長　佐藤千賀子・北　寿雄
事務局　狩野康子
〒981-0924　仙台市青葉区双葉ケ丘2—5—12
(022—271—0005)

鳥取県連句協会
会　長　音田諚治
副会長　新田幸子・永江重昭
高野重子・山崎君子
事務局　田中史郎
〒682-0402　鳥取県東伯郡関金町大鳥居関金町教育委員会内
(0858-45-2111, FAX3961)

（理事会）
第20条　理事会は原則として年３回会長が招集する。理事会の議長は会長とする。理事会の運営については別に定めるところによる。
（常任理事会）
第21条　常任理事会は原則として隔月に会長が招集する。常任理事会の運営については別に定めるところによる。
（総会）
第22条　総会は毎年１回会長が招集する。また必要と認めたとき会長は臨時に総会を招集することができる。
（総会の議長）
第23条　総会の議長は会長がこれを務める。
（総会の議決事項）
第24条　総会は次の事項を議決する。
1．事業計画および収支予算についての事項
2．事業報告および収支決算についての事項
3．役員の選任
4．名誉会長の推戴
5．その他この会の業務に関する重要事項で理事会において必要と認めた事項
（総会の議決方法）
第25条　総会の議事は会員である出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第７章　会　　計

（会計の種類）
第26条　この会の会計は次のとおりとする。
1．経常会計
2．特別会計
（経常会計）
第27条　経常会計の収入は会費、協力金その他とし、これによってこの会の経常的運営の支出にあてる。
（特別会計）
第28条　特別会計の収入は連句グループ、会員、関係団体等よりの寄付金とし、これを基金として積み立てるものとする。
（経常会計の剰余金）
第29条　経常会計に剰余金があるときは、理事会の議決および総会の承認を経て、その一部もしくは全部を特別会計の基金へ繰り入れることができる。
（会計年度）
第30条　この会の会計年度は、毎年１月１日に始まり12月31日に終わる。

第８章　規約の変更

（規約の変更）
第31条　この規約は理事会において理事現在数の４分の３以上の議決を経、かつ総会において出席者の４分の３以上の議決を経なければ変更することができない。

第９章　解　　散

（解散）
第32条　この会の解散については前条に定める手続きを準用する。

この規約の制定、施行は昭和63年10月1日とする。
平成２年９月１日　一部改訂。
平成８年６月23日　一部改訂。

『連句協会』顧問・名誉会員・評議員及び役員名簿

（顧　　問）　大林杣平・國島十雨・東　明雅
（名誉会員）　小松崎爽青・草間時彦
（評 議 員）　秋元正江・江森峰雲・片山多迦夫・加藤耕子・関川竹四・松永静雨・真鍋天魚
（役　　員）
会　　長　上田渓水
副 会 長　宇咲冬男・近松寿子・土屋実郎
理 事 長　土屋実郎（兼）
常任理事　浅野黍穂・磯　直道・伊藤菽彦・小川廣男・川野蓼艸・小林しげと・白根順子・寺岡情雨・富田昌弘・中尾青脊・引地冬樹・宮下太郎
理　　事　池川蜩谷・井門可奈女・伊藤白雲・内田素舟・狩野康子・品川鈴子・中川　哲・西　幾多・二村文人・福田太ろを・八木紫暁・矢崎　藍・渡邉陽行
国民文化祭担当理事　伊藤稜志＜群馬＞・高橋昭三＜鳥取＞
会　　計　土屋実郎（兼）
監　　事　城戸崎丹花・藤井　治

『連句協会』規約

第1章　総　　則

（名称）

第1条　この会は連句協会という。

（事務所）

第2条　この会の事務所は会長の指定する場所に置く。

（支部）

第3条　この会は理事会の議決を経て必要の地に支部を置くことができる。

第2章　目的および事業

（目的）

第4条　この会は連句文芸の創造的発展とその普及ならびに連句実作者、連句愛好者の交流を図り、連句文芸の興隆に寄与することを目的とする。

（事業）

第5条　この会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 全国大会および地方大会の開催
2. 会報（隔月）の発行
3. 連句年鑑の出版
4. 連句協会賞の選定
5. 国民文化祭への参加
6. その他前条の目的を達成するために必要な事業

第3章　会　　員

（種別）

第6条　この会の会員は次のとおりとする。

1. 正会員
2. 賛助会員
3. 名誉会員

（入会）

第7条　正会員または賛助会員になろうとする者は入会金2千円と所定の会費を納入することにより入会できるものとする。

（会費）

第8条　この会の会費は次のとおりとする。

1. 正会員　　年額3千円
2. 賛助会員　年額1万円以上

名誉会員は会費を納めることを要しない。

（資格の喪失）

第9条　会員は次の事由によってその資格を喪失する。

1. 退会したとき
2. 理由なくして会費を1年以上滞納したとき

（退会）

第10条　会員が退会しようとするときは退会届を会長に提出しなければならない。

第4章　役　　員

（種別）

第11条　この会には次の役員を置く。

1. 理事　35名以内（うち会長1名、副会長5名以内、理事長1名、常任理事若干名）
2. 監事2名

（役員の選任）

第12条　理事および監事は会員のなかから総会でこれを選任する。会長、副会長、理事長および常任理事は理事会の互選でこれを定める。

（理事の職務）

第13条

1. 会長はこの会の業務を総理しこの会を代表する。
2. 副会長は会長を補佐し会長に事故あるときは、あらかじめ会長が指名した順序でその職務を代行する。
3. 理事長は会長、副会長を補佐してこの会の業務を掌理する。
4. 常任理事は会長、副会長および理事長を補佐し理事会の議決に基づき業務に従事する。
5. 理事は理事会を組織して業務を行う。

（監事の職務）

第14条　監事は会の会計を監査する。

（役員の任期）

第15条　この会の役員の任期は2年とする。ただし再任を妨げない。

第5章　名誉会長、顧問、名誉会員、評議員

（名誉会長）

第16条　この会に名誉会長を置くことができる。名誉会長は総会の議決を経て推戴する。

（顧問）

第17条　この会に顧問を置くことができる。顧問は理事会の議決を経て会長が委嘱する。顧問はこの会の業務について意見を述べ、また会長の諮問に応じる。

（名誉会員）

第18条　この会に名誉会員を置くことができる。名誉会員は理事会の議決を経て、会員の中から会長が委嘱する。名誉会員はこの会の業務について意見を述べ、また会長の諮問に応じる。

（評議員）

第19条　この会に評議員を置くことができる。評議員は理事会の議決を経て、会員の中から会長が委嘱する。評議員は理事会の諮問に応じる。

第6章　会　　議

連句協会規約

若笹連句会

笹川　圭子

連絡先982-0003仙台市太白区郡山2-9-11笹 川 圭 子(022-246-2892)会員10名

ワラハナ連句会

児玉　俊子

連絡先336-0012さいたま市岸町1-11-12児 玉 俊 子(048-831-6362)

水無月連句会

堀江　信男

連絡先310-0903水戸市堀町1147-18堀江信男(029-252-2634)会員12名

未来図連句会

鍵和田秞子

連絡先150-0001渋谷区神宮前4-23-23紅露ゆき子(03-3401-2023)会員13名

Web BBSめぎつね座

八木　聖子

連絡先470-0331豊田市平戸橋町平戸13-5八木聖子(0565-43-0092)会員7名＋α(不特定)

目黒連句会

渡邊　博

師系・宮下太郎　連絡先152-0001目黒区中央町2-25-1-204渡邊博(03-3713-6709)会員10名

メヌエット一若い現代連句の会

川端　秀夫

連絡先152-0035目黒区自由が丘2-15-9高橋ビル302メヌエットの会事務局(03-3724-4263)会員3名

木曜会

青野　竜斗

連絡先791-0204愛媛県温泉郡重信町志津川98-5青野竜斗(089-964-7168)会員7名

杜の会

喜多さかえ

連絡先516-0008伊勢市船江1-9-29喜多さかえ(0596-22-3317)会員15名

八千草連句会

山元志津香

師系・宇咲冬男　連絡先215-0006川崎市麻生区金程4-9-8(044-955-9886・FAX9882)会員10名

やまくに連句の会

水谷純一郎

連絡先871-0712大分県下毛郡山国町守実　水谷純一郎(0979-62-2009)会員33名

山利喜会

粒針(つぶはり)　修

連絡先364-0014北本市二ッ家2-51粒針修(0485-92-8951)会員4名

大和屋別荘連句の会

鈴木春山洞

連絡先791-8061松山市三津1-3-13鈴木春山洞(089-951-0064)

やみつくば会

下房　桃菴

連絡先690-0823松江市西川津町1060島根大学文学部内(0852-32-6206)会員6名

瑤沙連句会

土屋　実郎

師系・清水瓢左　連絡先233-0014横浜市港南区上永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059)会員15名

葉門連句会

井口　昌亮

師系・宇田零雨・木村蕖山・磯直道　連絡先156-0057世田谷区上北沢3-28-13内田たづ(03-3303-5457)会員11名

よみうり文化センター川口

磯　直道

師系・宇田　零雨　連絡先332-0023川口市飯塚4-4-7磯直道(048-251-3033)

よみうり文化センター京葉

引地　冬樹

師系・今泉　宇涯　連絡先274-0812船橋市三咲8-3-20引地冬樹(047-448-7260)会員10名

落柿舎連句会

奥西　保

連絡先616-8395京都市右京区嵯峨小倉山落柿舎(075-881-1953)会員9名

竜神連句会

長坂　節子

師系・矢崎　藍　連絡先471-0027豊田市喜多町4-53長坂節子会員15名

連句会遊子座

和田　忠勝

師系・清水瓢左　連絡先223-0052横浜市港北区綱島東5-22-4和田忠勝(045-531-7174)会員12名

連句会「遊」

小野寺妙子

連絡先980-0005仙台市青葉区梅田町4-28小野寺妙子(022-233-0693)会員5名

連句倶楽部

城　依子

師系・宇咲冬男　連絡先224-0006横浜市都築区荏田東3-13-23ろべりあハイツ401藤沼和ヱ(045-941-8910)会員10名

連句「笹」

伊藤　敬子

連絡先465-0083名古屋市名東区神丘町2-51-1伊藤敬子(052-701-5050)会員7名

連句研究会

小林　梁

師系・松根東洋城・野村喜舟・阿片瓢郎　連絡先214-0012川崎市多摩区中野島4-23-14小林梁(044-922-7868)

連句ななの会

土屋　実郎

連絡先233-0014横浜市港南区上永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059)

連句パワー

浅沼　璞

師系・眞鍋天魚　連絡先241-0825横浜市旭区中希望ヶ丘97-14浅沼　璞(045-362-2717)会員3名

連楽会

高畑　自遊

師系・阿片瓢郎　連絡先168-0063杉並区和泉4-26-15高畑自遊(03-3323-2454)会員6名

鹿吟舎

池　央耿

連絡先216-0005川崎市宮前区土橋6-15-1A214池央耿(044-855-8546)

若泉連句会

川田　章夫

師系・宇咲冬男　連絡先372-0842伊勢崎市馬見塚町1121-4川田章夫(0270-32-8410)会員8名

和光大学

深沢　眞二

連絡先406-0002山梨県東山梨郡春日居町別田520-3深沢眞二

東陽町1(058-387-2035)会員20名

八戸俳諧倶楽部

関川　竹四
連絡先031-0812八戸市湊町上の山55-2関川竹四(0178-33-3432)会員58名

花野連句会

小出きよみ
師系・根津芦丈・東明雅　連絡先390-0821松本市筑摩東2419小出きよみ(0263-25-5436)会員11名

はねだ連句会

内海　良太
師系・名古則子　連絡先216-0001川崎市宮前区野川3138-17山口和義(044-777-2460)会員16名

祓川（はらいがわ）

黒田　耕三
師系・鈴木春山洞　連絡先791-8083松山市新浜9-25黒田耕三(0899-51-2889)会員9名

芭流朱連句会（ばるしゅ）

鈴木春山洞
師系・松根東洋城　連絡先791-8061松山市三津1-3-13鈴木春山洞(089-951-0064)会員30名

B面

内田さち子
師系・名古則子　連絡先176-0023練馬区中村北4-23-4内田さち子(03-3970-2468)会員5名

燧連句会

植松　晴子(晴峰)
師系・鈴木春山洞　連絡先769-1613香川県三豊郡大野原町花稲907植松晴子(0875-52-2137)

日ノ出連句会

山根　於京
連絡先519-0600三重県度会郡二見町茶屋50-9山根於京(05964-3-2112)会員7名

東松山連句会

池川　蝸谷
師系・阿片瓢郎　連絡先791-0312愛媛県温泉郡川内町則之内乙1887池川蝸谷(0899-66-3608)会員30名

菱の実会

巌　涼江
師系・中尾青宵　連絡先210-0824川崎市川崎区日ノ出1-15-11プロビデンス202巌涼江(044-277-5143)

PC—VAN電脳連句

木原　幹雄
連絡先185-0014国分寺市東恋ケ窪2-29-3林義雄(0423-24-1831)会員24名

ひよどり連句会

品川　鈴子
師系・橋　閒石　連絡先651-1123神戸市北区ひよどり台1-17-1品川鈴子(078-741-4472)会員70名

連句会ひらめき

狩野　康子
連絡先981-0924仙台市青葉区双葉ヶ丘2-5-12(022-271-0005)会員8名

広野連句会

村木佐紀夫
連絡先520-0026大津市桜野町1-13-16村木佐紀夫(0775-22-5444)会員15名

風蘭社連句会

若尾よしえ
師系・東　明雅　連絡先155-0033世田谷区代田3-10-22若尾よしえ(03-3422-6874)会員8名

富士裾野連句会

森本　善雄
連絡先410-1114裾野市大畑113森本善雄(0559-92-3004)会員16名

北杜連句塾

狩野　康子
連絡先981-0924仙台市青葉区双葉ケ丘2-5-12狩野康子(022-271-0005)会員15名

匂玉の会

藤岡よし子
連絡先516-0028伊勢市中町302-37藤岡よし子(0596-25-3735)

松喜久会

藤井　治
師系・阿片瓢郎　連絡先173-0005板橋区仲宿58-8-603(03-3964-4372)会員3名

松山連句協会

渡部　伸居
連絡先791-0242松山市北梅本町甲781-8長井實平(089-976-6182)会員20名

松山連句教室

松永　静雨
師系・宇田零雨　連絡先790-0045松山市余戸中2-13-19井上弥生(089-973-6055)会員10名

摩天楼連句会

星野　石雀
師系・野村牛耳　連絡先262-0046千葉市花見川区花見川2-6-105星野石雀(043-286-0725)会員6名

窓連句会

小林　和恵
師系・名古則子　連絡先154-0004世田谷区太子堂3-5-13小林和恵　(03-3413-4431)会員18名

摩耶連句会

佐野　千遊
師系・橋　閒石　連絡先654-0075神戸市須磨区潮見台町3-2-30佐野千遊(078-731-0334)会員11名

丸亀連句会

廣谷　高士(青石)
連絡先763-0031丸亀市城南町75-8廣谷高士(0877-22-4201)会員6名

三重県連句協会

村田　治男
連絡先516-0008伊勢市船江1-9-29喜多さかえ(059-622-2317)

宮城県連句協会

狩野　康子
連絡先981-0924仙台市青葉区双葉ケ丘2-5-12狩野康子(022-271-0005)

三河連句会

斉藤　吾朗
師系・宮下太郎　連絡先445-0806西尾市伊藤町伊藤前15-1斉藤吾朗(0563-57-8332)会員12名

三豊連句会

植松　晴子
連絡先769-1613香川県三豊郡大野原町花稲907(0875-52-2137)

師系・今泉宇涯　連絡先929-0325石川県河北郡津幡町字加賀爪二3津幡町役場中田風来(0762-88-2121)会員36名

つらつら吟社

山岸れい子
師系・名古則子　連絡先516-0079伊勢市大世古3-8-24山岸れい子(0596-28-1395)会員7名

手児奈連句会

勝田みつ子
師系・今泉宇涯・上田渓水・下鉢清子　連絡先272-0015市川市鬼高3-13-6ルネ市川中山203勝田みつ子(047-370-8523)会員15名

電通連句会

逸見　篤
連絡先104-0045中央区築地1-11電通マーケッティング局逸見篤気付(03-3544-5468)会員20名

東京義仲寺連句会馬山人記念会

師系・野村牛耳・高藤馬山人　連絡先182-0035調布市上石原2-27-9川野蓼艸(0424-85-5480)会員10名

桃　雅　会

杉山　壽子
師系・東　明雅・式田和子　連絡先470-0116日進市東山2-602武村利子(05617-2-2392)会員10名

道後連句会

松永　静雨
師系・宇田零雨　連絡先790-0842松山市道後湯之町6-10-805渡部晃子(0899-21-5821)会員8名

桃夭榭唫聚

赤田玖實子
師系・三好龍肝　連絡先228-0802相模原市上鶴間395赤田玖實子(0427-45-0407)会員4名

徳島連句懇話会

高田　保二
連絡先770-0868徳島市福島1-10-16梅村光明(088-652-1989)会員56名

都心連句会

大林　杣平
連絡先233-0014横浜市港南区上永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059)会員40名

富山県連句協会

二村　文人
連絡先930-0123富山市呉羽富田町4143-18二村文人(076-436-2257)

とよあけ連句会

永坂　博美
師系・矢崎　藍　連絡先470-1152豊明市前後町仙人塚1736-144永坂博美(0562-92-1030)会員18名

どん・あ・くらぶ

豊島　呑烏
師系・鈴木春山洞　連絡先790-0844松山市道後一万11-13豊島正憲(089-926-2331)会員7名

長尾連句会

砂井斗志男
師系・渡邊陽行　連絡先769-2302香川県大川郡長尾町西683-10砂井敏夫(0879-52-4391)会員10名

渚の会

西岡　恭平
師系・長谷川ひさを　連絡先760-0011高松市浜ノ町60-25-705西岡恭平(087-851-9006)会員9名

夏炉の会

岩村　牙童
連絡先781-0252高知市瀬戸東町2-323岩村牙童(0888-42-7656)会員20名

習志野連句会

鵜田　秋甫
連絡先276-0046八千代市大和田新田122-18四十九院科峰(0474-50-9029)会員6名

南草連句会

田島　竹四
連絡先517-0506三重県志摩郡阿児町国府1120-69田島竹四(05994-3-1846)会員7名

にほんご連句会

岡本　康子
連絡先182-0006調布市西つつじが丘2-5-2岡本康子(03-3326-0496)会員10名

日本作家クラブ連句会

市村美就夫
連絡先150-0012渋谷区広尾3-17-4二村マンション205中島まさし(03-3407-5368)会員20名

猫　蓑　会

東　明雅
連絡先182-0003調布市若葉町2-21-16青木秀樹(03-3309-0953)会員160名

乃木坂散人連

古館　曹人
師系・宇田零雨・宇咲冬男　連絡先102-0082千代田区一番町20-10-202古館曹人(03-3262-9350)会員3名

俳諧工房

窪田　阿空
連絡先359-1152所沢市北野521-10窪田阿空(0429-48-6618)会員6名

俳諧接心

岡本　星女
師系・岡本松濱・阿波野青畝・岡本春人　連絡先555-0024大阪市西淀川区野里2-11-16メロディハイム塚本502岡本星女(06-6477-7445)会員オープン制

俳諧田園(協会主催)

連絡先227-0043横浜市青葉区藤が丘2-25-2中尾青宵(045-973-1760)(休止中)

白水台連句会

山口　博三
師系・宇田零雨・寺岡情雨　連絡先791-0113松山市白水台1-1-9山口博三(089-927-3231)会員4名

白塔歌仙会

佐藤俊一郎
連絡先350-0275坂戸市伊豆の山町17-30会員11名

芭蕉記念館連句会

宇咲　冬男
師系・藤井紫影・宇田零雨　連絡先135-0003江東区猿江1-2-2-501松澤晴美(03-3634-4094)会員30名

巴世里(ぱせり)連句会

大野　鷗士
師系・東明雅・國島十雨　連絡先501-6081岐阜県羽島郡笠松町

大西　貞子
連絡先510-0304三重県安芸郡河芸町上野1168-73大西貞子(0592-45-3606)会員10名

しらさぎ連句会
田中一火女
師系・寺岡情雨　連絡先799-1303東予市河原津484-1森川年(0898-66-5232)会員6名

白魚連句会
岡本　耕史
連絡先511-1112三重県桑名郡長島町大倉1-450岡本耕史(0594-42-1469)会員2名

泗楽連句会
西田　青沙
連絡先512-0921四日市市尾平町3768-188西田青沙(0593-32-8931)会員10名

城
中田　泰左
師系・名古則子　連絡先514-0034津市南丸之内9-11中田泰左(059-227-2437)会員7名

尋牛会
師系・矢崎藍　連絡先460-8445名古屋市中区栄4-16-36㈱電通中部支社内西脇智子(052-263-8324)会員8名

新月座
二上　貴夫
連絡先257-0024秦野市名古木117-1二上貴夫(0463-85-5537)会員11名

信州大学連句会
宮坂　静生
師系・根津芦丈・東　明雅　連絡先399-0025松本市寿台4-5-3宮坂静生(0263-57-2461)会員40名

新庄・氷室の会
永沢　安栄
師系・笹　白州　連絡先996-0082新庄市北町5-19永沢安栄会員6名

新庄北陽社
内田　　武
師系・春秋庵幹雄　連絡先996-0035新庄市鉄砲町3-71内田武(0233-22-1285)会員30名

深大寺連句会
名和　未知
連絡先182-0012調布市深大寺東町7-41-8名和未知(0424-85-1679)会員14名

篠
岡田　史乃
師系・鈴木香歩　連絡先107-0052港区赤坂6-9-4-301岡田史乃(03-3582-0081)

清流連句会
戒能　多喜
師系・宇田零雨・松永静雨　連絡先791-0312愛媛県温泉郡川内町大字則之内乙2590-3戒能多喜(0899-66-3096)会員7名

浅春連句会
谷敷　　寛
連絡先112-0003文京区春日2-25-2谷　敷寛(03-3811-8519)　会員8名

せんだい座
伊藤　直子
連絡先981-8003仙台市泉区南光台3-3-9伊藤直子(022-233-7732)会員9名

宗祇法師研究会
林　　茂樹
顧問・金子金治郎　連絡先521-1200滋賀県神崎郡能登川町泉台215-24林　茂樹(0748-42-2037)会員8名

草門会
川野　蓼艸
師系・野村牛耳　連絡先182-0035調布市上石原2-27-9川野蓼艸(0424-85-5480)会員10名

創の会
村田　治男
連絡先519-0503三重県度会郡小俣町元町1718村田治男(0596-24-1324)会員10名

啐啄会
森　　三郎
師系・石沢無腸　連絡先369-1203埼玉県大里郡寄居町寄居982森　三郎(0485-81-0077)会員10名

染井の会
蒲　　幾美
師系・中村俊定　連絡先215-0013川崎市麻生区王禅寺767-36蒲　幾美(044-955-8726)会員11名

大智院連句会
岡本　耕史
師系・名古則子　連絡先511-1112三重県桑名郡長島町大倉1-450岡本耕史(0594-42-1469)会員8名

第六天連句会
浅野　黍穂
師系・上甲平谷・清水瓢左・今泉忘機　連絡先272-0836市川市北国分1-2-19星野恵則(047-372-6448)会員30名

多度津連句会
渡邉　陽行
師系・鈴木春山洞　連絡先764-0003香川県仲多度郡多度津町青木169渡邉陽行(0877-33-0549)会員6名

多摩連句会
宮下　太郎
連絡先206-0014多摩市乞田875-1宮下太郎(0423-74-7002)

丹　　想
秋山　正明
連絡先661-0002尼崎市塚口町1-22-1-207秋山正明(06-421-1606)会員13名

ちばらき連句会
藤川　裕子
師系・今泉宇涯・藤咲ひろし　連絡先300-1636茨城県北相馬郡利根町羽根野800-55城依子(0297-68-4424)会員7名

中央連句会(協会主催)
連絡先230-0052横浜市鶴見区生麦3-16-16連句協会土屋実郎(045-501-4907)

土筆・有楽帖三吟会
連絡先214-0039川崎市多摩区栗谷1-4-16遠藤嘉章

筑波連句会
引地　冬樹
師系・今泉宇涯　連絡先272-0812船橋市三咲8-3-20引地冬樹(0474-48-7260)会員16名

津幡連句クラブ
中田　風来

0022中野区江古田4-18-2杏花村塾(03-3387-2321)

耕

加藤　耕子
連絡先467-0067名古屋市瑞穂区石田町1-36加藤耕子(052-841-5054)

興聖寺連句会

松永　静雨
師系・宇田零雨　連絡先790-0052松山市竹原町1-4-1岡本眸(0899-45-1154)会員15名

郡山連句会

佐藤　敏勝
連絡先969-1103福島県安達郡本宮町二井田下の原28-124堀越ふみ子TEL&FAX(0243-33-5786)会員5名

小瀬川連句会

永野　薫
連絡先739-0646広島県大竹市栗谷町大栗林739永野　薫(08275-6-0344)

ころも連句会

矢崎　藍
師系・東明雅　連絡先470-0335豊田市青木町1-71-9由川慶子T&F(0565-46-2236)会員22名

青宵俳諧柴庵

中尾　青宵
連絡先227-0043横浜市青葉区藤が丘2-25-2中尾青宵T&F(045-973-1760)

佐久良連句会

井門可奈女
師系・栗田樗堂・富田狸通・鈴木春山洞　連絡先790-8503松山市湊町4-6-6丸三書店内井門可奈女(089-931-8501)会員7名

さくら草連句会

小林しげと
連絡先334-0001鳩ヶ谷市桜町4-11-35-1小林しげと(048-281-8161)

里　の　会

菅谷　有里
師系・清水瓢左　連絡先248-0017鎌倉市佐助1-14-9菅谷有里(0467-22-8382)会員8名

三尺童

丹下　遙指
連絡先338-0012さいたま市大戸4-6-3丹下遙指(048-832-3727)会員6名

三川連句会

磯部　摂子
連絡先501-6242羽島市竹鼻町錦町35磯部摂子(058-391-2288)会員23名

三冊子（改め「高知癒しの連句桜蓼会」）

山崎　曙
師系・寺田寅彦　連絡先780-0010高知県高岡郡窪川町窪川1145-5山崎曙(08802-2-2097)会員15名

鹿　の　会

宮下　太郎
師系・松根東洋城・野村喜舟・阿片瓢郎　連絡先206-0014多摩市乞田875-1宮下太郎(0423-74-7002)会員40名

慈　眼　舎

赤田玖實子
師系・清水瓢左・三好龍肝　連絡先228-0802相模原市上鶴間395赤田玖實子(0427-45-0407)会員6名

鴫立庵連句会

草間　時彦
師系・山路閑古　連絡先249-0005逗子市桜山1-6-16草間時彦(0468-71-5935)会員4名

獅　子　門

國島　十雨
師系・各務支考　連絡先501-1131岐阜市黒野古市場193国島十雨(058-239-0037)会員100名

獅子門藜杖社

本屋　良子
師系・國島十雨　連絡先500-8157岐阜市五坪1450-86本屋良子(058-248-1772)会員25名

下町連句会

伊藤　哲子
連絡先136-0072江東区大島3-26-1-911伊藤哲子(03-3637-8990)会員7名

紫薇の会

澁谷　道
師系・橋　閒石　連絡先558-0002大阪市住吉区長居西1-9-2澁谷道(06-6691-1395)会員8名

紫明庵連句会

井上　鶴鳴
師系・東明雅　連絡先136-0074江東区東砂7-5-22アルス南砂サルーテ302井上鶴鳴(03-5632-0400)会員29名

樹氷連句会

犬島　正一
連絡先939-8083富山市西中野本町5-14犬島正一(0764-21-3494)会員6名

樹林連句会

師系・林空花　連絡先177-0041練馬区石神井町3-9-12-401草刈澄(03-3996-8530)会員15名

湘南吟社

小林　静司
師系・根津芦丈・清水瓢左　連絡先141-0031品川区西五反田6-23-8小林静司(03-3492-2983)会員10名

湘南連句うらら会

蒲原志げ子
師系・東明雅　連絡先248-0022鎌倉市常盤937-219蒲原志げ子(0467-31-7829)会員6名

正　　風

藤野　鶴山
師系・寺崎方堂　連絡先520-0822大津市秋葉台35-9正風発行所(0775-25-9159)会員100名

正風大府支部

久野　溪流
師系・寺崎方堂　連絡先470-1143豊明市阿野町上納91-6鈴置一花(0562-92-4521)会員25名

正風和気支部

桐山　北天
師系・寺崎方堂　連絡先709-0441岡山県和気郡和気町衣笠171桐山北天(0869-92-0807)会員10名

上毛連句会

伊藤　稜志
師系・宮下太郎　連絡先371-0811前橋市朝倉町3-5-37伊藤稜志(027-261-2297)会員15名

しらぎく

勝山連句会

井手　光子

師系・松根東洋城・佐伯巨星塔　連絡先790-0878松山市勝山町2-155-1-501井手光子(089-931-1427)会員10名

花　扇　会

宮　　県人

連絡先344-0116埼玉県北葛飾郡庄和町大衾600-4二宮方宮県人(0487-46-1443)会員5名

歌仙・集亭

野刈　　鴨

連絡先980-0802仙台市青葉区二日町10-15-1F喫茶室「集」内会員約20名

桂　の　会

若松　藍香

連絡先227-0047横浜市青葉区みたけ台2-20臼杵游児(045-971-3293)会員約12名

金石(かないわ)公民館俳諧研究会

松本　苔花

連絡先920-0337金沢市金石西4-5-32松本苔花(0762-67-1045)

かびれ連句会

小松崎爽青

師系・大竹孤悠　連絡先319-1225日立市名坂町1-31-12西幾多(0294-52-3671)会員19名

加納連句会

小瀬　渺美

師系・各務於菟　連絡先500-8472岐阜市加納清野町14小瀬渺美(058-273-1591)会員5名

兜　の　会

山下七志郎

連絡先923-0938小松市芦田町2-2松下京子(0761-21-3464)会員18名

からむし庵連句会

根津　芙紗

師系・根津芦丈・東明　雅　連絡先396-0000伊那市山寺区山本町3185根津芙紗(0265-78-4723)会員18名

歌林連句会

坂手　手留

連絡先185-0011国分寺市本多1-11-13小向敏江(042-321-0285)会員20名

歌留蓑連句会

金子　鳴陣

連絡先220-0061横浜市西区久保町48-14金子鳴陣会員18名

川内連句会

池川　蜩谷

師系・松根東洋城・阿片瓢郎　連絡先791-0311愛媛県温泉郡川内町則之内甲2153-1小倉静子(089-966-2781)会員8名

神田川連句会

岡部桂一郎

連絡先134-0085江戸川区南葛西7-1-6-201松井青堂(03-3680-0053)

神田義仲寺連句会

伊藤　秀峰

師系・斎藤石叟　連絡先101-0047千代田区内神田1-6-6伊藤秀峰(03-3292-0835)

観音寺連句会

野口　雅澄

連絡先768-0040観音寺市柞田町油井野口雅澄(0875-25-0979)会員8名

神田分教場連句会

川名　將義

師系・ねこみの　連絡先232-0076横浜市南区永田台48-16川名將義(045-713-1388)会員6名

きさらぎ連句会

小池　正博

連絡先594-0041和泉市いぶき野2-20-8小池正博(0725-56—2895)会員10名

義仲寺横浜戸塚連句会

八木　荘一

連絡先245-0067横浜市戸塚区深谷町671八木荘一(045-851-1655)会員17名

義仲寺連句会

師系・斎藤石叟　連絡先520-0802大津市馬場1-5-12義仲寺(0775-23-2811)会員15名

木　の　会

草間　時彦

連絡先240-0105横須賀市秋谷5237藤井弘美(0468-57-2764)会員限定

岐阜県連句協会

国島　十雨

連絡先503-0026大垣市室村町4-156伊藤白雲(0584-73-0774)会員80名

錦　心　会

渡部　伸居

師系・野村喜舟　連絡先791-0241松山市小野町15渡部伸居(0899-75-1532)会員10名

句華苑吟社

吉本　世紀

連絡先328-0036栃木市室町1-13吉本画廊内(0282-23-3665)会員7名

くさくき

磯　　直道

師系・藤井紫影・宇田零雨　連絡先332-0023川口市飯塚4-4-7磯　直道(048-251-3033)会員300名

くさくき北九州支部

木部八千代

師系・宇田零雨　連絡先803-0834北九州市小倉北区都2-7-12木部八千代(093-651-1393)会員25名

くさくき松山支部

寺岡　情雨

師系・宇田零雨　連絡先791-0113松山市白水台4-12-8寺岡情雨(089-923-6028)会員10名

草笛連句会

大西　素之

師系・寺岡情雨　連絡先791-0113松山市白水台4-12-12大西素之(089-923-3993)会員7名

くのいち連句会

内山　秀子

師系・暉峻桐雨　連絡先101-0047千代田区内神田2-12-5内山回漕店方内山秀子(03-3252-2941)会員8名

熊谷緑化センター連句会

宇咲　冬男

師系・藤井紫影・宇田零雨　連絡先360-0000熊谷市上之1342-4中　和枝(0485-23-7039)会員20名

雲　の　会

村野　夏生

師系・野村牛耳　連絡先165-

伊勢原連句会

近藤　蕉肝

連絡先259-1141伊勢原市上粕屋1766大津博山(0463-94-3402)会員13名

五十鈴吟社

高山　孝子

師系・清水瓢左・名古則子　連絡先516-0805三重県度合郡御園村高向656高山孝子(0596-28-9936)会員10名

いさよひの会

鈴木美智子

連絡先177-0032練馬区谷原5-20-14鈴木美智子(03-3925-5930)会員4名

石手寺連句会

松永　静雨

師系・宇田零雨　連絡先790-0052松山市竹原町1-4-1岡本眸(0899-45-1154)会員7名

伊豆芭蕉堂連句会

石渡　蒼水

師系・斎藤石叟　連絡先414-0014伊東市弥生町3-2石渡蒼水(0557-37-1831)会員10名

市川俳諧教室

師系・藤井紫影・宇田零雨・今泉宇涯　連絡先272-0021市川市八幡2-8-20伊藤薮彦(047-334-5606)会員12名

一　粋　会

浜本　青海

師系・高藤馬山人　連絡先338-0801さいたま市大原1-2-7大久保風子(048-833-3335)会員16名

いなみ連句の会

山本　秀夫

師系・東　明雅・二村文人　連絡先932-0231富山県東砺波郡井波町山見1400井波町総合文化センター内いなみ連句の会(0763-82-5885)会員31名

茨　の　会

近松　寿子

連絡先567-0048茨木市北春日丘2-13-7近松寿子(0726-23-8817)会員25名

岩手県連句協会

小原　啄葉

連絡先020-0132盛岡市西青山2-4-41沼宮内凌子　会員40名

上野連句会

宇咲　冬男

師系・藤井紫影・宇田零雨　連絡先336-0931さいたま市原山2-33-22桜井つばな(048-882-6943)会員15名

宇宙連句会

松永　静雨

師系・宇田零雨　連絡先790-0001松山市一番町1-14-10井手ビル1Fヴェルデュールアン大月西女(089-931-0506)会員13名

ＮＨＫ文化センター青山

上田　渓水

師系・大竹孤悠・小松崎爽青　連絡先271-0092松戸市松戸1407上田渓水(047-362-3822)会員12名

桜花学園大学連句研究会

矢崎　藍

連絡先471-0057豊田市大平町七曲12-1比較文化学科424研究室(0565-35-3131)

丘の上連句会

中田　青宵

連絡先166-0001杉並区阿佐谷北5-33-9大城里水(03-3338-1353)会員15名

奥美濃連句会

水野　隆

連絡先501-4226岐阜県郡上郡八幡町新町929おもだか家(05756-5-3332)会員13名

樋川連句会

福田太ろを

師系・宇咲冬男　連絡先363-0025桶川市下日出谷375-1福田太ろを(048-787-4477)会員9名

小郡(おごおり)連句会

河野　玄磨(しず)

師系・松根東洋城・阿片瓢郎・鈴木春山洞　連絡先754-0000山口県吉敷郡小郡町津市上河野玄磨(08397-2-0599)会員5名

小野連句会

長井　實平

師系・松根東洋城・阿片瓢郎　連絡先791-0242松山市北梅本町甲781-8長井實平(089-976-6182)会員10名

おぼろ連句会

高橋　昌民

師系・鈴木春山洞　連絡先791-8013松山市山越2-6-46高橋昌民(089-925-5214)会員8名

貝　の　会

戸田　貝江

師系・阿片瓢郎　連絡先183-0055府中市府中2-31-9戸田貝江(0422-68-6063)会員6名

海市の会

鈴木　漠

連絡先650-0046神戸市中央区港島中町3-1-47-202鈴木漠(078-302-2230)会員4名

解　　纜

小原　洋一

師系・野村牛耳・林　空花　連絡先155-0032世田谷区代沢1-3-7小原洋一(03-3413-6670)

香川県連句協会

会長・渡邉陽行，副会長・植松晴子・鎌田孝義・広谷高士，事務局　渡邉陽行764-0033香川県仲多度郡多度津町青木169(0877-33-0549)会員60名

香川連句会

渡邉　陽行

師系・鈴木春山洞　連絡先764-0033香川県仲多度郡多度津町青木169渡邉陽行(0877-33-0549)会員7名

雅　秀　会

小川　邦明

連絡先999-5201山形県最上郡鮭川村京塚3430(0233-55-2401)

風の香連句会

笹　　貞子

連絡先996-0051新庄市松本348

風　の　巷

守口津夜子

師系・松根東洋城・阿片瓢郎・鈴木春山洞　連絡先799-1341東予市壬生川191-7守口津夜子(0898-64-2634)会員10名

河童連句会

矢崎　硯水

師系・宇田零雨　連絡先392-0004諏訪市諏訪2-10-22矢崎硯水(0266-52-0251)会員15名

全国連句グループ概況

①グループ名　②代表者氏名　③師系
④連絡先（住所・電話番号）⑤会員数

（五十音順）

亜　の　会

前田圭衛子
連絡先663-8156西宮市甲子園網引町8-21-403前田圭衛子(0798-46-3713)会員15名

あ あ の 会

村野　夏生
師系・野村牛耳　連絡先165-0022中野区江古田4-18-2杏花村塾(03-3387-2321)

青葉連句会

八島美枝子
師系・宇田零雨　連絡先145-0061大田区石川町2-32-8八島美枝子(03-3728-0712)会員９名

愛染連句会

高橋　昭三
連絡先731-0223広島市安佐北区可部南4-5-47高橋昭三(082-815-1914)

青葉城連句会

小野寺妙子
連絡先980-0005仙台市青葉区梅田町4-28小野寺妙子(022-233-0693)会員５名

茜 連 句 会

陶山　泰子
師系・品川鈴子　連絡先769-1601香川県三豊郡豊浜町姫浜1358-1陶山泰子(0875-52-5131)会員12名

茜(あこね)

竹内　茂翁
連絡先511-0036伊勢市岡本1-4-27竹内茂翁(0596-25-4711)

紫　　陽

藤田　　明
連絡先514-0114津市一身田町285藤田　明(0592-32-6438)会員６名

あした連句会

宇咲　冬男
師系・藤井紫影・宇田零雨　連絡先364-0035北本市西高尾7-83川岸冨貴(0485-91-5208)会員50名

あした連句会えびね支部

宇咲　冬男
師系・藤井紫影・宇田零雨　連絡先194-0041町田市玉川学園8-7-1大平美代子(042-724-3800)会員15名

あしべ俳諧塾

片山多迦夫
師系・清水瓢左・吉岡梅游　連絡先666-0013川西市美園町1-3-406号片山多迦夫(0727-58-3198)会員10名

梓川連句会

金井　教子
師系・根津芦丈・宮坂静生　連絡先390-1700長野県南安曇郡梓川村杏金井教子(026378-3808)会員25名

天霧連句会

高森　秋義
師系・鈴木春山洞・渡邊陽行　連絡先764-0027香川県仲多度郡多度津町道福寺200-13高森秋義(0877-33-2475)

天の川連句会

福田　真久
師系・三好龍肝　連絡先952-0206新潟県佐渡郡畑野町畑野772本間昭雄(0259-66-2079)会員28名

天の川連句会東京支部

福田　真久
師系・三好龍肝　連絡先215-0031川崎市麻生区栗平1-3-2福田真久(044-987-4442)会員13名

彩(あや)連句会

渡辺　梅子
師系・宇田零雨　連絡先201-0014狛江市東和泉1-34-14渡辺梅子(03-3480-2575)会員７名

鮎連句会

高橋　昭三
連絡先731-0223広島市安佐北区可部南4-5-47高橋昭三(082-815-1914)

鮎可部連句会

久保　俊子
連絡先731-0202広島市阿佐北区大林町315久保俊子(082-818-2719)

鮎倉橋島連句会

奥田恵以子
連絡先737-2100広島県安芸郡倉橋町鹿老渡奥田恵以子(0823-54-1296)

鮎須川連句会

藤本　幸子
連絡先737-2100広島県安芸郡倉橋町須川藤木幸子(0823-53-1255)

鮎ふれ愛連句会

高橋八重子
連絡先731-0223広島市阿佐北区可部南4-5-47高橋八重子(082-815-1914)

鮎連句同好会

高橋　昭三
連絡先731-0223広島市阿佐北区可部南4-5-47高橋昭三(082-815-1914)会員35名

あらくさ連句会

草間　時彦
連絡先249-0006逗子市逗子2-4-5北沢義弘(0468-71-5393)会員限定

あるふあ会

高津明生子
連絡先241-0833横浜市旭区南本宿町72-14(045-351-5806)

伊賀連句会

山村　俊夫
師系・清水瓢左・名古則子・村田治男　連絡先518-0878三重県上野市西大手町3687-9(0595-21-5068)会員25名

全国連句グループ概況

▣編集後記▣

＊平成十三年度の連句年鑑をお届けします。

＊前年度はご希望のグループには、初校をお願いしたのでしたが、今回はその方式を中止しました。その理由は主として

（一）校正の返却が非常に遅い方があったこと。

（二）作品を全面的に変更された方があったこと。

です。

ただし、論文・エッセイは従来通り初校ゲラの著者校正をお願いしております。

＊当方でお願いする作品数は、前年度年鑑の購入数が五冊について、一作品としております。ただし、購入数がそれ以下でも各グループ（あるいは新グループ）には、一作品をお願いしております。依頼した作品数以上が送られてきた場合は一度お返しいたします。また、新グループは前年度中に協会に届けていただいたグループに限ります。

これらの点、宜しくお含みおき下さい。

＊また毎年のことですが、作品出稿料を当方に送られるグループがあります。作品依頼の際に原稿用紙と共にお送りした振替用紙で協会あてにご送金下さい。

〈磯　直道〉

＊二四七巻の作品を掲載した新世紀第一号の連句年鑑をお届け致します。今年度も作品形態は色々ありましたが、歌仙（約六七％）と半歌仙（約二〇％）を合わせると、投稿作品の八八％になります。この他に八巻の短歌行を含めると、この三形態で本年鑑作品の約九割を占めました。

＊作品の添え書きから、作品形態あるいは座の形態について、本年度作品にも様々な試みがなされていることが分ります。気の遠くなるほど永い地球の歴史のある時期に、生命の種類が爆発的増加し、奇妙な生きものたちが誕生したそうです。その甲斐あって、やがて現在に続く生物達が生まれたとされています。本年度の年鑑作品を見るに、我々の連句にあっては、善くも悪くも、意外に早く落ち着きつつあると感じるのは編集子だけでしょうか。

＊本年度も巻頭論文およびエッセイには力作を戴くことが出来ました。森山昌枝氏の評論では、幾多の異なる時代を隔てて、なおもそれを貫く人の心を文藝の中に積極的に見い出すためには、探究の深さは勿論ですが、いかに人間愛と学問の前の謙虚さに根ざした視点が大切かを知りました。

＊三つのエッセイは、今年も連句協会会員の方々にお願い致しました。三者それぞれ、まったく異なる視点と内容を持つエッセイとなりました。一座したときの、あるいは何かの折の話題として、皆様にさらに論じていただけたら幸甚です。

＊昨年度版の編集後記にも記したことですが、掲載作品は基本的には皆様から戴いた原稿通りです。したがって、可能な限り責任ある原稿をお願いすることになる訳ですが、それで困ることは、地方的原因で投稿者が正しいと思い込んでいる場合です。この場合は当方が幾ら頭を絞っても正解が見つかりません。電話をかけて直接照会することもありますが、時間の関係もあって全てにそうすることも叶いません。本連句年鑑は、卒業論文の資料として学生達が活用するとも聞いております。ご投稿前に複数の方で見て戴ければと思います。

＊国民文化祭を始めとして、全国では毎月のように連句大会が開催されるようになりました。ご同慶の至りですが、一座して楽しむことと、作品を残すべく切磋琢磨することとを同時にこなす日々とは、なんとも忙しないことです。皆様のご健勝とご健吟を祈念致します。

〈小川廣男〉

平成十三年九月　二十日　印刷
平成十三年九月二十五日　発行

平成十三年版　連句年鑑

定価　二、五〇〇円

編集人代表　磯　直道

発行所　230-0052 横浜市鶴見区生麦三ノ一六ノ六
新盛油槽船㈱内　土屋実郎
連句協会
電話〇四五―五〇一―四九〇七
FAX〇四五―五〇一―四九〇八

印刷所　114-0003 東京都北区豊島四ノ二ノ四
㈶印刷朝陽会
電話〇三―三九一三―五五二八
FAX〇三―三九一三―五五三〇

★ご注文の方は〇〇一九〇―三―九〇〇二四番（連句協会）宛
郵便振替で送金して下さい。